村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ!①

鬼畜のススメ

世の中を下品のどん底に叩き堕とせ!!



村崎百郎

「人は誰でも狂気を呑んでいる。
正常だの普通だのなんてものはない。
歪んでいない人間なんかいないのだ。」
京極夏彦

住所、氏名、年令、電話番号のたぐいは、水道や電気などの各種請求書やダイレクトメールのゴミで簡単にわかる。銀行やコンビニなどの各種レシートからは、口座番号や預金残高、場合によっては月々の収入額と勤務先もわかる。給与明細を破りもせずに捨てる若者は多く、そこからは会社名や部署や業種も判別がついてしまう。宅急便の受け取り状や宛名書きからは実家の住所や電話番号、ときにはその家の商売までもがわかってしまう。

それだけならばまだよいのだが、**不倫や堕胎**など、他人には絶対に知られたくないような個人のプライバシーでさえも、無造作に捨てられた日記や手紙の書き損じなどから簡単に露見してしまうのである。他にもあげればきりがないが、**借金の督促状**から経済状態もわかるし、病院の診察カードや調合薬の袋、診断書などからは、その人間の持病もわかってしまう――。個人の秘密がゴミから漁り放題なのはおわかりいただけただろう。そして、女性ならば、話はさらに違ったものになってくる。

この世には、女性の捨てる下着や使用済み生理用品のゴミを漁って、それをオカズに持ち主の裸体や局部を想い浮かべながら**夜ごと激しくオ●ニー**をしている変態も、わずかではあるが確実にいるのである。何よりこの俺がそのひとりだ。

自分の知らないところで自分の下着ゴミを漁られ、パンティに付いたシミの位置から女●器の形状とその位置（上ツキとか下ツキとか）までも妄想されて、さらに使用済みのナプキンやタンポンの匂いを勝手に嗅がれて**「うわあ！　このオンナ、とんでもなくクセエ**

や！」なとどやられて、「よかったわ」とか「うれしいな」とか思う女がどのくらいいるだろう？　これらは決してフィクションではない。

この俺、村崎百郎はそうした下品なゴミ漁りの実践者であり、16年に及ぶゴミ漁りの最中に、都内及び近郊の様々な場所で実に多くの同業者（というか同志）の姿を、それこそ府中競馬場の馬糞の数ほど見てきているのである。

ああそうだ。

どの街にも、どの夜にも、どの時間にもダストハンターは必ずいる。

あなたのゴミは常に狙われているのだ。

徹底的に利己的であれ

本書は他人のことなんかどうでもいい鬼畜な俺の、生涯最初で最期の親切だ。

スカシどもに言う。お前らはこのままでは十中八九どころか十中ファ●ク、つまらん見栄と体裁を気にしながら品行方正な自分を取りつくろって一生自分を偽りながら、無駄に年をとって死んじまうのが関の山だろう（そういう名前の相撲取りになるか、お前ら？）。

そんなくだらない人生を送らないためにここで俺が鬼畜として主張したいのはただひとつ、

◆免責事項

本書は１９９６年7月に株式会社データハウスから出版された『鬼畜のススメ（村崎百郎著）』を当時の内容で電子書籍化したものです。

本書の内容を不正に使用した場合、次の法律に抵触する可能性があります。

本書で得た知識を不正な目的で使用されないようお願い致します。

・ストーカー規制法　違反
・迷惑行為防止条例　違反
・業務妨害罪

●本書の内容を使用して起こるいかなる損害や損失に対し、著者および弊社は一切の責任を負いません

●本書に掲載された内容は著者および編集部により確認を行いました。これら内容に対し、記述の範囲を超える質問に著者および弊社は質問に応じません。

●本書に掲載された内容は１９９６年時点の情報に一部原稿を加筆した内容となります。本書に掲載された各種内容は、条例や法律の規制変更などにより変更されている可能性があります。

●本書の文字のミスや質問等は以下よりお知らせください。
nekomurasakineko+100@gmail.com

●本書のサポートサイトは以下の＜鬼畜☆告知＞中の「データ版鬼畜のススメ　サポートコーナー」になります。
http://murasaki100.com/a0900.html

■商標について
本書に掲載されている各種名称などは、その発売元の商標、または登録商標です。

本書を制作する目的のみ、それら商品名、団体名、組織名を記載しており、著者、および出版社は、その商標権などを侵害する意思や目的はありません。



鬼畜のススメ

世の中を下品のどん底に叩き落とせ!!
みんなで楽しいゴミ漁り

村崎百郎

前口上

ゴミからわかる個人情報

はじめに怖い話をしよう。

無造作にゴミを捨てるのは危険だ。いますぐやめろ。

上京以来16年、夜ごとひたすら他人様のゴミを漁り、趣味で多くの人間のプライバシーを勝手に暴き続けてきた俺が言うんだから間違いない。

なぜなら**ゴミは捨てた人間の情報であり、物語でもあるからだ。**

日常生活で使用され、不要になったものや汚れたもの、使い古したものやいらなくなったものは、みんな無造作にゴミ箱に放り込まれゴミとして捨てられる。そして、たいていの人間はゴミ箱にモノを捨てた瞬間に、安心しきって捨てたもののことをキレイさっぱり忘れてしまう。どうやらゴミ箱は忘却箱の役目も担っているらしい。

しかし、物質としてのゴミの存在は断じてそこで消えるわけではない。清掃局に回収され、廃棄物処理所で焼却処分されるまでは、確実に多くの意味や情報を持ったままこの世に存在しているのだ。それを漁られた場合に流出する情報を考えてみるがいい。

たとえば見知らぬ他人をひとり特定して、その人間の出すゴミを漁り続けたとしょう。3カ月もあればその人物の生活や人生のおおかたがゴミを通して明らかになるだろう。


鬼畜のススメ
世の中を下品のどん底に叩き堕とせ!!
みんなで楽しいゴミ漁り
村崎百郎
腐りきった世の中をひたすら手前勝手に
下品にゲスに生き抜くテクニック＆思想
20世紀末最高最悪の
ゲス本がついにお目見え!!
『危ない1号』の
看板鬼畜ライター、
待望の単行本第1弾

鬼畜のススメ

世の中を下品のどん底に叩き堕とせ!!

みんなで楽しいゴミ漁り

村崎百郎

問題は「やりたいことをやれ」と言われても、自分が本当に何をやりたいのかよくわからない連中だ。おそらくこれを読んでいる若い連中の大部分がそういう奴らだろう。

そういう奴らはとりあえず消去法でモノを考えてみるといい。

自分のやりたくないこと、嫌なことは何か？

自分が何をやりたいのか、何をめざせばいいのかわからない連中でも、キライなことや嫌なことぐらいはあるだろうし、そういうモノには敏感だろう。それを紙にひとつずつ書いてみるがいい。いくらでもあるだろう。若者らしく「暴力、不正、腐敗」などと書く奴もいるだろうし、「愛、友情、信頼」などと書くヒネたやつもいるだろう。何でもいい。時間なんかいくらかかったってかまわない、これは学校のテストじゃないんだからな。

ひととおり書きあがったと思ったら、紙に書いたことをひとつひとつ読み返しながら、思いきりそれを憎め。本気で憎悪しろ。憎んで憎んで憎んで紙が燃えるぐらい憎んで、そしてそれを自分の現実の生活の中に書きうつせ。嫌なことやりたくないことを極力やらないというのも、いつか本当にやりたいことをやるための布石となるだろう。

やりたくないことは、命をかけてもやらない。

そんな生き方ができるなら、それだけでもたいしたもんだ。人はそういう生き方でも充分救われる。

そして、やりたくないことを極力やらないで強く生きながら、自分のやりたいことをゆっくり探すがいい。簡単に見つからなくてもあせることなどない。俺にしても「鬼畜」

鬼畜的思考のススメ

普通に考えればゴミ漁りなどは「ホームレスの連中が生活のためにやる単純なゲス行為」としか思えないだろう。しかしそれは大きな間違いだ。

ゴミ漁りというのは、やり方によっては漁る相手のこれまでの人生や秘密の個人情報を大量に引き抜けるロウファイなハッカー行為であり、漁った品物やその情況からゴミを捨てた人間の内面世界にまで深く迫れる「イマジネーションゲーム」でもあるのだ。

これだけは保証しよう。想像力や妄想力を働かせながら**漁ったゴミと対話**を続ければ、あんたらは必ず深い**「他者理解」**や**「人間理解」**が得られるだろう。俺がゴミ漁りをこんなにしつこく紹介するのもそれがいちばんの理由なのだ。

話は「本当にやりたいことをめざす」というテーマに戻るが、これを読んでいるあんたらが人間である限り、あんたらの「やりたいこと」に「人間」がかかわってくるのは絶対に間違いない。だから何をやるにしても「人間」を理解することは共通の基本テーマであるはずだ。やりたいことを貫きたい人間はまず、「人間」を深く学ばねばならない。

誤解しないで欲しいが「ゴミ漁り＝鬼畜な生き方」ではない。

俺は俺のゴミ漁りを通して「鬼畜的な思考」というものをみんなに感じて欲しいのだ。「ゴミ漁り」という、通常の人間が最低の行為とみなしている行為に手を染め、聖なるホームレスとして直夜中の街を徘徊しよう。最も低い位置から自分の住んでいる街や社会

本当に自分のやりたいことをやりなよ。

ということだ。もちろん、社会のことなんかまるで気にしないでだ。

徹底的に己の欲望に正直にさし向かい、本当に自分がやりたいのは何なのか、よく考えてみるがいい。殺人か？　強姦か？　世界征服か？　まあ、何でもいい。ここで自分のやりたいことを即答できる奴は、すでに救われていると言っても過言ではない。

命と引きかえにしてもやりたいことがある奴は、それの実現に向かってまっしぐらに進めばいいだけだ。周囲の迷惑なんか考えるな。倫理や良識に潰されるようなら、それまでのものだったということだろう。よきにつけ悪しきにつけ、歴史を動かした奴らや人類の進歩に貢献した研究や画期的な発明をした連中は、どいつもこいつも、みんな自分の本当にやりたいことを周囲の迷惑も返り見ずに好き放題にやった鬼畜な連中ばかりだ。

人は人としてこの世に生まれた限り、好きなことを好きなようにやるべきだ。

歴史の教科書を読めば気がつくだろう。この世は決して最終的に「正義」が勝つのではない。勝った奴が偉そうに「正義」を主張するだけだ。負けた奴らの正当性なんか後世の歴史家に評価されたって8年前の屁のようなものである（誰も思い出せねえよ）。この世界に存在する限り、みじめな負け犬になりたくないなら俺達は勝ち続けるしかねえわけだ。

まあ、とにかく、やりたいことがハッキリしているならそれをめざして戦え、勝ち取れ、つっ走れ。自分が何をしたいのかわかっている奴はもう充分救われているんだ。

を眺めれば、見えなかったことも見えてくるし、現実生活で自分とは何の関係もない赤の他人ですら、ゴミ漁りを通して近親感を持てたりするものなのだ。

「たかがゴミ漁り」からどれだけのことが学べるか。

それが本書のテーマである。

としての使命に気がついたのはつい最近のことだ。俺の仲間にも、そんなことを30年以上もさんざん悩んでもがいて苦しんだあげく「自分はほんとうは何もやりたくなかったんだ」ということに気づいて、惰眠を貪るのを至上の快楽と位置づけ、常にそういう生活を送れることを夢見て日々黙々と仕事を続けている奴がいる。それもまた夢のある素晴らしい人生だ。

何をやりたいのかなんて、とりあえずわからなくてもいい。まずは自分の中の、外に向かって取りつくろっているウソを一枚ずつ引きはがして潰していけ。そうやって少しずつ身軽になって人生を楽しめ。楽しくなけりゃあ人生なんてウソだからな。

己の欲望に忠実に、徹底的に利己的であれ。

この本はそんな鬼畜的生き方の入門書として、俺の趣味のひとつである「楽しいゴミ漁り」を解説したものだ。

鬼畜のススメ　目次

第７章　ゴミ漁りを滞りなく進めるために

犬と警官対策

第８章　百郎ゴミ日誌

夜の果てへの旅

自律神経失調女の引っ越しゴミ
燃えないゴミの日前夜
深夜の路上写真展
世田谷区&目黒区への出張ゴミ漁り
パンティの降る夜
今宵の不思議な偶然
ホームレスのゴミ漁り
俺にはゲームで遊んでいるヒマなどない
パンティをはいて出かけたら
自転車がパンクした
外人ギャルの下着ゴミを待ちながら
今日拾わなかったゴミ
フィリピ●ナの下着
ウチの近所にャホ●がいる
留学生の捨てたウォークマン
自転車が壊れるまでゴミを運ぶ
ゴミ友達とゴミュニケーション
TV局OLのゴミ

Ｗ大生の下着姿の全身写真
百郎怒りの小便制裁
おたく少女のゴミ
裏ビデオを大量入荷
フォークギターと松葉杖
おまわりさんにシカトされた？
深夜に犬の散歩をする謎の夫婦
持ち帰ったら男物！
村崎が紫色のジャンパーを拾う
見落としがちなゴミ漁りのアナ場、コンビニ前
２階のマゾがエロ本を処分
２階のマゾが引っ越していっちまった
公園にホームレスが入居
小さな失敗
月光に輝く便器
ゴミ漁り指導
ホームレスが消えた
猫のムクロに小便儀礼

ダストライフ・イン・トウキョウ
拾ったゴミで豊かな生活 鬼畜のヒト 村崎百郎の一日
他人にゴミを漁られても個人情報が漏れにくい
ゴミの捨て方　模範例
縁起が悪い できれば拾わない方がいい 危ないゴミ
漁ってＤＡＮＣＥ！　夜を徘徊する奴ら
上級者篇 霊的ゴミ漁り
電波のヴィジョンから――村崎百郎のスカベンジャー修業（妄想）

警告&注

１・「ゴミを拾う」という行為そのものは法的に問題ありませんが、それを公開するなど、プライバシー保護の原則に触れるようなことをすると民法及び刑法上の不正行為になってしまいますので、心してください。よい子のみなさん、法に抵触する行為は絶対にしてはいけませんよ。したがって本書で取り上げられた「ゴミ情報（文章・図版）」は、その点を考慮し、特定の個人や団体、場所に関わる記述は全て変えてあります。ぜんぶ妄想だよ、妄想！

2・ゴミ漁りは地球にやさしいリサイクル。マナーを守って清く正しく。

3・随所に引用されている『ダスト・テスタメント』（ゴミ聖書）は、村崎百郎がゴミ漁り中に受信した電波や念波をまとめたもので、実在するものではありません。普段は村崎の脳内にあり、発信源はこの宇宙の記憶が全て集まっている「アカシックレコード」とのことです。キ●ガイのたわごとだと思って、軽く読み流していただければ幸いです。

ゴミ漁りは地球にやさしいリサイクル

第1章　ゴミで拾えるお宝

ゴミ漁りは
地球にやさしいリサイクル

第1章

ゴミで拾える お宝

きるようになるんじゃないか?

衛生的か非衛生的かなんてのも大部分が主観的なもんだろう。口の中なんてドブの中と変わらないくらい雑菌やバイ菌がいっぱいなんだという話をどこかで読んだことがある。だとすればディープキスなんかは異なる下水道同士の汚水の交換のようなものだよな。しょせん、人間なんて生きている限り糞をひり出し続ける糞尿製造器だ。口の中を通ったものがみんな糞になるんだったら、初めから糞を喰おうが飯を食おうが、結果的に糞が出てくるのならたいした違いはないではないか。そう考えれば残飯を漁るぐらい何でもないことだ。

**●お宝ゴミ
マンガ**

ゴミ漁りで得られるお宝の基本アイテムのひとつ。ゴミ漁りの初心者はまず、『少年ジャンプ』や『少年マガジン』などの週刊のマンガ雑誌を路上のゴミ集積所から調達することを目標に夜の街を徘徊してみるとよいだろう。ゴミ漁り巡回コースを作ってマメに回っていれば、必ず同じ種類のマンガが定期的に捨てられるゴミ集積所を発見できる。そこから雑誌を拾い続ければ、ゴミ集積所を通した定期購読ができるというわけだ。俺はおかげで少年誌から青年誌のメジャーなところはほぼ押さえている。主なゴミ購読マンガ雑誌は『スピリッツ』『少年ジャンプ』『ヤングマガジン』『少年マガジン』『少年サン

●お宝ゴミ
食い物

俺自身そこまで困っているわけじゃないが、まだ食えるものもゴミとして落ちていることはよくあるので、一応ここに記しておこう。特に引っ越しゴミの場合は引っ越し先に持っていくのがおっくうで、台所や冷蔵庫の中身を全て捨ててしまうという場合もよく見かける。醤油や砂糖、塩、コショウなどは状態を見て使ってもなら大丈夫そうなものならきっと大丈夫だろう（鬼畜特有の無責任発言）。

俺はかつて80年代のはじめに女と同棲中、勤務先を変わった関係で（例によって工場の主任をブン殴ってクビ）、新しい勤務先の給料日まで15日間を2人で7千5百円で過ごしたことがあった。そのときはスーパーの特売で買った古々米が5キロはあったし、運よく引っ越しゴミでインスタントラーメンやらお茶漬けの素やチャーハンの素だのという乾物類を拾い、なんとか元気に生き抜くことができた。近所には思いっきり回し蹴りをかませば返却口から小銭の出てくる優しい自動販売機もあったし、いよいよ困ったらノックアウト強盗の2、3件でもやりゃあ何とかなるさと心に余裕があったのが幸いしたのだろう。不思議と「赤貧」感覚はなかった。みじめだなどと思わずにリサイクル感覚で食い物ゴミを漁れば、結構楽しいサバイバルゲーム気分を味わえるのではないだろうか。ゴミ漁りはまさに我々の血の奥底に潜む、かつて人類が狩猟民族だった頃のたくましい記憶を呼びさませてくれる行為なのだ。……などと、偉そうに考えれば諸君たちも平気で拾い食いがで

ある。たとえば駅の改札を抜けた駅前近くのジュースの自動販売機や公衆電話の周辺に無造作に置かれていたり、放置自転車のカゴの中に放り込まれていたり、またコンビニの前にあるゴミ箱に突っ込まれていたりもする。とりあえず、自分の住む駅前を丹念に物色してみるといいだろう。そういう視点で街を見ると、また違った風景が見えてきて面白いかもね。

あとは「レディスコミック」というのがあったな。えげつない性描写で男性誌顔負けのエロい話が満載のマンガ雑誌だ。コレはねえ、さすがにゴミで出てくるときは紙袋に密封してまとめて捨てているケースが多いな。この手の雑誌を読んでいることがバレると「愛とセックスに飢えている女」って見られちゃうと思ってコソコソ捨てるんだろうな。現実はそうでもないと思うけどね。俺のアパートには30過ぎの独身の美容師がいて（容姿は皆さんの御想像通り）、こいつが超過激なやつを定期的にある程度まとめて捨ててくれるので助かっている。いつも世話になっているのでお礼に俺専用の「セ●クス優待券」でもドアに挟んで贈りたいぐらいだよ（なんか社会福祉って気もするけどな）。その女の捨てたレディスコミックは、鼻を近づけて手の位置あたりのページのニオイをかぐと微妙にマ●汁臭くていいぜ。たぶん気のせいなんだろうけどさあ……。

●お宝ゴミ
女性誌

ここでいう女性誌というのは主に若いオンナが読む『ａｎａｎ』とか『流行通信』とか『ＥＬＬＥ』なんかのことだ。下品工員の俺が何で女性誌を？　と不思議に思うかもしれないが、実は俺は女性誌も頻繁に拾い続けている。近所に住んでいる友人にファッション関係の仕事をしている奴がいて、そいつのために拾ってあげているのだ。近頃は雑誌一冊だってバカにならない金額だ（7百円なんてのは貧乏工員の一回分の昼飯代以上だぜ）。

さて、住宅地の夜のゴミ漁りでは女性誌の方がズリネタになるようなスケベな男性雑誌よりもはるかに簡単に見つかるし拾いやすい。ただ、『ＭＯＲＥ』とか『ｗｉｔｈ』などの女性誌は一冊あたりがやたらと重くて、束を見つけてしまうとそれだけで一度家に帰らねばならなくなるのがやっかいだ。話は飛ぶが俺の長年の観察では『ＥＬＬＥ』とか『マリクレール』なんかの趣味のよい雑誌を捨てている女のコたちは、捨てる下着も上品でオシャレでわりと新品に近いものを惜しげもなく捨てている気がする。金銭的にも余裕があるってことだろうな。

当然なんだけど『ａｎａｎ』やら『キューティ』を捨てる女は、一緒に服を捨てている場合、そういう雑誌で取り上げられている傾向の服だったりする。下着やパンストのニオイは、別に『ａｎａｎ』読んでる女も『ｗｉｔｈ』読んでいる女もそうたいした違いはないんだけどさ。クサい奴はクサいし、クサくない奴はクサくないしね。

女性誌もマンガ雑誌と同じで紐でくくられて束になって捨てられるか、紙袋に入れてっていうパターンが多い。そして、捨てられる時期のポイントとして月の満ち欠けに非常に

デー』『ヤングジャンプ』『モーニング』『少年チャンピオン』『ヤングサンデー』『ビッグコミック』『スペリオール』『アクション』『アクションピザッツ』『ビッグコミックオリジナル』『コミックガイズ』『ヤングチャンピオン』『ヤングアニマル』『スーパージャンプ』『ビジネスジャンプ』『ミスターマガジン』……これに月刊誌や増刊号を加えると、年間にしてマンガ雑誌だけでも軽く20万円以上は拾って読んでいることになる。すると15年で3百万円ぐらいになる計算だ。そう考えるとずいぶん儲けたような気もするが、よくよく考えてみると、マンガなんて別に読まなくても死ぬわけでも何でもないどーでもよいものだ。それに費やした時間を考えてみると複雑な気分になる。

従来は「マンガは駅のゴミ箱で拾うもの」という感が強かったが、地下鉄サリン事件以降、駅のゴミ箱が閉鎖されたり少なくなったりで、買ったマンガ雑誌を家に持ち帰る連中が増えて、そのぶん住宅地で捨てられるマンガゴミも確実に増えてきた。

マンガ雑誌はたいていビニール紐である程度まとめて捨てられるか、紙袋に新聞と一緒に入れて捨てられるか、単独で無造作に置かれているかで、外から見て落ちているのが非常にわかりやすい物件である。それだけに拾うにあたっては落ち着いて号数を確かめて拾おう。すでに読んでしまった雑誌を持ち帰って、あとでそれに気がつくと、金を払ったわけでもないのに同じ本を2度買ったような、つまらない損をした気になってしまうから精神衛生上よろしくない。

オマケで書いておくとマンガ雑誌は駅のゴミ箱やゴミ集積所以外にも拾えるポイントが

関係が深いのが特徴だ。俺が大量に女性誌を拾う夜はなぜか決まって満月の前後あたりなんだ。夜の路上で大量の女性誌を拾ってふと空を見上げるとぽっかりと大きなお月さんが笑っている――。そんな体験があまりにも多すぎて、考え出すとキリがないんだけど別に俺はインテリじゃないんで悩むことなどない。ホントはその理由は何となくわかっているんだが今はヒミツだ。みんなもゴミを漁り続ければその うちわかるぞ。

●お宝ゴミ
一般書籍／コミックス／文庫本

このへんのお宝がゴミとして出る場合は、紐でくくった束か、紙袋にきれいに詰め込んで出される場合が圧倒的に多く、初心者でもわりに探しやすいだろう。

本類のゴミの天敵は言うまでもなく「雨」である。しかし多少の雨ならあきらめずにゴミを漁りに行くことをすすめる。紐でくくったものは駄目だろうが、ゴミ袋の中にすっぽり入った本なら少々の雨に降られても救出できる可能性が充分あるからだ。

また、これらのお宝はキレイで新しいものだったら、自分で読んで楽しむだけではなく、古本屋などに売りに行けばいくばくかのお金に替わるのでとても便利である。ある程度数を揃えておいてフリーマーケットなどで売るのもいいだろう。そうした店を出している奴の話を聞くと、彼らも結構ゴミ漁りをやって品物を仕入れているということだ。それも当然の話で、今は雑誌だけでなく使用に耐える本が実に多くゴミとして出されているの

である。
まとめて拾った本をズラッと並べて眺めてみると読んだ奴の趣味趣向がわかるので面白い。それでもゴミで出やすい単行本というのは、やっぱり数多く売れているベストセラーが中心だ。今でも吉本ばななの『キッチン』や村上春樹の『ノルウェイの森』などはたまにゴミ集積所で見かけるが、このあたりの「過去のベストセラー」となると古本屋に持って行っても嫌な顔をされるだけなので、さすがの俺でも持ち帰りはしない。
コミックスのゴミは、大量に出る場合も多く、ダンボール箱で捨てられたりもするので持ち帰るのもひと苦労だ。自分で読んで面白いのはとっておくが、つまらないものはみんな中野にある漫画専門古書店へ売りに行くことにしている。
文庫本では人気作家の同じ作品を何冊も拾う。村上龍や村上春樹に至っては、別にその気はなかったのだが文庫化されたものがゴミでほぼ揃ってしまい、もとから持っていた単校本（ほとんどがゴミで拾ったものだが）はみんな人にやったりして処分した。おかげでほんの少し部屋が広くなった。「買い替えはゴミ漁りで」ってわけだ。
つい先日はトマス・ピンチョンの『スロー・ラーナー』の文庫を拾った。何の偶然だか知らないが「小量の雨」の中を「低地」のゴミ集積所で「秘密裡に」拾ったのだ（たぶん「エントロピー」が高まっていたんだろうな）。
本のゴミ漁りで面白いのは、「自分で本屋へ行ったときには絶対に手に取らないような本をタダで入手できる」という点だろう。工員の俺が人文関係の専門書に関心を持つよう

になったのも今から15年ほど前に工作舎の『遊』というハイソな雑誌を拾ったのがきっかけだった。アレを拾わなければ俺は今でもＳＭ誌しか読んでいなかっただろう。そんなふうに「ゴミから始まる新しい読書世界」ってのもあるわけだ。拾ってきた本を部屋でチェックする感覚は福袋をあける楽しみにも似ている。たとえば昨日は「従軍慰安婦問題」のハードなやつを拾った。鬼畜な俺が本屋に一億年通いつめても絶対に手に取らない代物だ。そんな本でもゴミで拾えばつい読んでしまうから不思議なものである。

いつか俺は、自分のこの本をゴミ集積所で拾うことだろう。ゴミ袋からこの本が出てきたらキスをして記念にサインをしてやるつもりだ。「○月×日深夜、○○○丁目のゴミ集積所にて」って書き添えてね。

●お宝ゴミ

小銭

昭和30年代生まれの俺にはどうにも信じられないんだが、あきれたことに若い連中にとっては一円玉や五円玉はゴミ扱いらしい。文房具類系のゴミ袋の底にはよくそんな小銭を見つけることがある。何でだろうか？　今から10年以上前に、はじめて小銭をゴミ袋の中から拾ったときには本当に驚いたし、「いやあ、さすが東京だなあ」なんてカルチャーショックを受けたものだ。これはバブルの頃から目立ちはじめた現象なんだけど、バブルがはじけて不況になっても一向に変わらなかった。大学生やミュージシャンの引っ越しゴ

ミの中から、ＯＬや独身サラリーマンの燃えないゴミの中から、フリーターたちの無分別ゴミの中から、額はたいしたことないんだけど一円玉や五円玉は気前よく現われた。そして、昨年夏とうとう拾ったゴミ袋の底から百円玉が３個も出てきてさすがの俺もびっくりした。いやあ、こんなことで驚くなんて、俺も根っからの貧乏人なんだねえって自分で自分が少し嫌になったけどな。ゴミ袋には一緒にファミコンのソフトの外箱だの小学校からの連絡帳だのがあったので、これが子供のゴミだったことは間違いない。拾った３百円はどうにも使う気がしなくて、いつもの偽善事業でコンビニの募金箱に入れてきた。これが３万円だったら即駅前のピンサロへ走ったろうけどな。

今のガキどもにしてみれば百円玉の価値なんて、たかだかゲーセンのゲーム一回分のチップでしかないんだろう。コメ粒一つ粗末にしてはいけないと教育された俺とは金銭感覚が根本から違うはずだ。正しいとか正しくないとかいう視点で語られるべき問題ではないんだろうな。

追い討ちをかけるように、去年の秋には中国からの留学生（同時に出されたゴミの内容から判明）の引っ越しゴミの中から、ブリキの貯金箱にぎっしりつまった一円玉と五円玉をゲット。留学生って捨てるほど金持ってるのかねえ？　俺が拾うぐらいだから、東京じゅうで捨てられている小銭の額は相当なもんだろな。夢の島にはずいぶん多くの小銭が運ばれていて眠ってるんだろう。小銭がゴミ扱いの豊かな時代――まあ、どうでもいいや。

小銭を見つけるポイントは、若い連中の文房具がいっぱいつまった引っ越しゴミだ。そのほかに、ゴミ袋の底を触って見つけるという方法もある。ゲーセンのメダルも時々入っていることもあるので円形の感触があっても確認するまでぬか喜びしないように。

●お宝ゴミ
エロ本

拾うとうれしいエロ本だが、これには「密封の法則」があてはまる。とにかく紙袋でもゴミ袋でも、ガムテープで密封したものは要チェックだ。長年ゴミを漁り続けていると、紙袋にギッシリつまった全ページカラー印刷のエロ本の重さってのが分かるようになってくる。カラーグラビアが10数ページしかない安物のエロ本がつまった紙袋と、豪華なカラー写真でいっぱいの紙袋の重さでは、持ったときの量感ばかりか質感が全然違うのだ。特に俺の大好きなSMの分野の良質な専門誌を大量に拾うとホントにうれしくて、まるで救世主の降誕に立ち会った素朴で無知で善良な人間どものようにおごそかで晴れやかな気分になれるから大変なもんだ。この感動は女性諸君や、エロ本をオカズにせんずりをしない上品な（？）男性諸君にはわからないだろうが、ホントに心が踊って宇宙の果てまで飛んで行きそうに舞い上がるものなんだ。コレハ！　と思い、紙袋を拾ってチラリと中身を見て、SM専門誌が10冊以上入っているのを確かめて、抱きしめるようにして持ち帰るときのワクワクと待ち遠しさは56億7千万年さ。気分は弥勒菩薩って感じかナ。どんどんア

タマが悪くなっちゃうのが実感できて楽しいぜェ。もお、世界は支離滅裂にバラ色、さあ、これでどんなオナニーしようかなって期待に胸と股間をふくらませて猛スピードで帰宅するってワケよ。

でも、そこでゴミ漁りを中断してオナニーにふけるような自堕落なことは俺はしない。同じ日に同じようなゴミを続けて拾うという「友引きの法則」もあるので、本を玄関に置いて、少し中身を確かめてから再びゴミ漁りに出撃する。そして、そういうときはたいてい周辺で似たような本の束を見つけたりするものだ。

●お宝ゴミ テレビ

燃えないゴミの日に前日に路上に捨てられるテレビも、東京の場合、情況は明らかに変わってきた。80年代初頭から中期にかけては壊れたテレビが捨てられていたのだが、バブル以降の最近は使用に耐えられるテレビ（特に小型のもの）が数多く捨てられるようになっている。

10年ほど前、俺の部屋には4台の拾ったテレビがあった。どれも大きさはまちまちで、1台は画面が映らず声だけがクリアで、1台は画面がモノクロで映るが音声が不良、もう1台は部分的にカラーで見える映像不良&音声不良のもの、そしてもう1台は、ゴミ捨て場で雨に濡れてしまったせいかスイッチをひねると中で火花がジジジとはぜ、いつ火を吹

き出すかわからない代物だった。俺はこれら4台を部屋のまん中に積み上げて同時にスイッチを入れて各種ワイドショーを観賞していたものだ。何も映らないテレビの立てるノイジーな音が臨場感をアオる効果音になって、リッチでおシャレな廃墟感あふれるデッドテックな雰囲気を部屋に漂わせてくれた。いま考えると貧乏ったらしいだけだったけどな。

テレビは夜半過ぎにひっそりと捨てられる。電化製品の大きいものや高価なものを、ガシャーンと大きな音を立てて放り出して捨てるようなワイルドな奴はいない。電化製品を捨てる人間はたいていゴミ集積所の地面に音を立てないように静かに置いていく。「こっそり捨てて」いくんだから当然なんだろうが、拾う側にしてみればありがたい話である。俺の経験では使えるテレビや電化製品ほど丁寧に捨てられているように思われる。

最近のテレビゴミの動向としては、横型ワイドテレビとの買い替えムーブメントが起こりつつあるせいか、旧タイプの大画面のテレビなどがどんどん路上に放置されるようになってきた。今後もますますこの傾向に拍車がかかり、まだ使える大型テレビの不法投棄が増えることだろう。テレビに限らず電化製品を拾うときは、周辺の燃えないゴミの袋を物色して、その電化製品のリモコンやＡＣアダプタも拾い漏れないよう注意しよう。

俺は部屋が狭いので小型のテレビを使っているが、近いうちに拾い替えようかとも考えている。

●お宝ゴミ
カセットテープ（録音済みのもの）

燃えないゴミの日や引っ越しゴミの日に拾える録音済みのカセットテープはいろいろと遊べて愉快だ。そういうテープにどういうものが吹き込まれているのかといえば、たいていはミスチルやドリカムなどのＣＤやレコードを個人用に録音した音楽ものである。ちょっと変わったところでは、お気に入りのラジオの深夜放送の録音、学校の授業の録音、ＮＨＫラジオ講座の録音、海外からの留学生の日本語の発音練習テープ（妙ちきりんな日本語会話が延々と録音されている）などがある。しかし９割以上はＣＤから録音された音楽テープだ。

若い女のコが捨てたテープを並べて見ていると複数の相手（男）からもらった痕跡がラベルの筆跡で分かるので面白い。また、選曲やミュージシャンの傾向で「あ〜、この野郎はヘビメタ、こいつはテクノ」などと男の音楽の好みの分野もわかったりする。

こういうテープは紙袋に詰められてか、ゴミ袋にでたらめに入れてまとめて捨てられている場合が多いので、一回拾うとしばらくは家での音楽生活がリッチになる。これも書籍の場合と同じで、録音した人間の趣味趣向が反映されたセレクトになっており、とにかく普通に暮らしていたら決して自分では聴かない音楽を耳にする機会ができるのは興味深いことである。

更に楽しめるのが、若い男が、自分の好きな女の子に自分の好みの曲を選曲して録音し

てプレゼントした通称ナンパテープ。読者諸君も作ったり贈られたりしたおぼえがあるのではないだろうか？　なにせこれは他人が作ったものだから次に何が出てくるかわからない。スカもあればアタリもある。多いのがユーミンとサザンをとりまぜたものだが、これはトレンディドラマの影響が大きいのではないだろうか。かくいうこの俺も、10年以上前にはガーゼやギズムや奇形児などの、当時工員にも大人気だったインディーズバンドのライヴテープ・セレクション・ナンパテープを作ったり、マイク・オールドフィールドの「ムーンライト・シャドウ」のロングヴァージョンだとかキング・クリムゾンの「ＮＩＧＨＴ　ＷＡＴＣＨ」だとか原マスミの「青い夜」や「ピアノ」なんかをセレクトして「夜の中で聴いてくれ！」なんてメッセージをつけて女に贈ったことのある恥知らず野郎である。今考えると「ああ、こっぱずかしい」限りだが、拾った他人のナンパテープは、そういう青春の甘くほろ苦い郷愁を思い起こさせてくれていいものである。

●お宝ゴミ
ビデオテープ

俺にとっての「燃えないゴミの日」のゴミの中では一番の花形スター。とにかく良質の裏ビデオをタダで拾ったときのうれしさは、とても言葉で言い表わせるもんじゃないね。普通にレンタルされている市販のアダルトビデオでも充分うれしいけどさ。

ビデオテープを拾う場合に注意しなければいけないのは、湿気でカビが生えたテープは

使い物にならないばかりか、気付かずに再生するとデッキのヘッドまで汚して傷めてしまうという点だ。ビデオテープが大量に落ちているのを見つけたら、ランダムに2、3本引き抜いて街灯の下でテープがカビていないかを必ずチェックしよう。そんなものを家まで待ち帰ってしまうと処分が面倒くさい。

いままで面白いビデオテープはいくつもあったが、一番心に残っているのは、どこの誰とも知らない奴の、そのまた友人の結婚式の二次会の謝恩会のビデオテープである。内容は、友人代表の挨拶と新郎新婦のスピーチが終わったあと延々とくだらないゲームやカラオケが続くというものだ。そんなテープをぼんやりと1時間以上も見続けるうちに、「自分は一体何をやっているんだろう」と自らの存在を根源的に問い直したくなってしまったから情けない。そうした無意味な行為をしてわかったことは「どうやらこの世には自分に何の関係もない連中がいて、しかもそいつらにもなにがしかの生活があり友人がいてたまに結婚式で馬鹿もやる」というツマラナイことだけだった。

最近は宅配裏ビデオも豊富になってきて、裏ビデオを拾う機会が増えてきた。ビデオテープを拾う楽しみはますます倍増である。家の2階のマゾ野郎（第8章参照）も時々インディーズレーベルの女王様ビデオを捨ててくれるので、なんとなく見ているがこちらはあんまり面白くない。まあ、俺も人の趣味をとやかく言えるほどの人間じゃないけどな。

●お宝ゴミ

若い女の下着

この項目自体、女性から「どこが宝なのよ！」と抗議がきそうだが、精●があふれそうな抜き盛りの若い男性や、俺のような気合いの入った最低のド変態からすれば、誰に何と言われても「立派なお宝」である。すでに10歳にして女の下着を盗み、それをオカズにせ●ずりをぶっこいていたフェティッシュ・エリートの俺にとっては「このお宝を拾うために夜ごとゴミを漁っている」と言い切っても過言ではないくらいなのだ。そういうわけで、本来ならばこんなことを公開するのは、ライバルたちに塩を贈るようで気が進まないのだが、ここは広い心で特別に公開してやろう。心して読むがいい。

さて、よく「女性は下着を捨てるときに、ハサミで細かく切り刻んでゴミ袋に入れる」などと言われるが、俺の16年に及ぶゴミ漁りの経験では、そんな模範的な下着の捨て方を実践している若いオンナなんて、ただの一人もいなかった。考えてみれば、回収日の前夜に路上にゴミを出すようなルール無視の連中が、そんな気の利いたゴミの捨て方をするわけもないから、これは当り前といえば当り前なのかもしれない。おかげで俺は上京以来、下着ドロボーをしたりブルセラショップに行かなくても若い女の下着に不自由しなかった。ゴミ漁りにこんな防犯効果があろうとは、おまわりさんでも考えるまい。

書くと信じられないような話だが、便利というか親切というか、ゴミ漁りでは下着と一緒に、それを捨てた女の履歴書や写真まで拾ってしまうことも少なくない。そうなると「路上の無料放置ブルセラショップ」も同じで、これを利用しない手はないだろう。

俺の経験では若いムスメが下着ゴミを出すのは以下の2パターンがほとんどだ。

パターン1　他の衣類と一緒にまとめて出す

概して衣類のゴミというのは、食べ物の残りカスのような普通の生活ゴミと混ぜられたりしないで、単独で捨てられることが多い。こういうゴミは季節の変わり目に多く出るものだが、ひとり暮らしの若い男女や、夫婦ものなど、家族構成によって少しずつパターンが違ってくるのでそれらはあとで細かく説明しよう。素晴らしいことに、現在の東京は半透明のゴミ袋でゴミを出すことが義務づけられているため、衣類のゴミは外から見ただけで簡単に判別がつくのでとても便利である。「下着ゴミに優しい東京のゴミ事情」ってやつだ。

パターン2　汚れたりボロボロになった下着を単独で生活ゴミの中にまぜて捨てる

コンビニのポリ袋をそのままゴミ袋にして、空き缶やカップ麺のカラなどを入れて捨てる輩は住宅街を中心に若い奴らに多いが、そうした「生活ゴミ」の中からは、伝線したストッキングなどに混じって、まれにすり切れたパンティが出てくる場合がある。こういうパンティは、間違いなく洗濯前の大●便オ●モノ付きのスグレモノが多く汚穢主義者には何よりのお宝である。ただ他のゴミの匂いまで付いていて、えも言われぬ腐臭を放っていることも多く、初心者には少々臭すぎるかもしれない。

数ある生活ゴミの中から目当てのお宝を見つけるのは正直、至難の技である。が、ここでもゲットするポイントは、外から見て肌色や黒のパンストらしきものがあるかないかということだ。たとえパンティが拾えなくても、洗濯もしないで捨てられるパンストはオンナの汗や分泌物を吸っていて大変にかぐわしく、ナカナカ素敵なお宝である。股間の部分が鼻に当たるように頭から被って楽しむもよし、足の部分のクサイ水虫系のニオイを楽しむもよし、寒い日はズボンの下に履いてモモヒキ代わりに寒さをしのぐもよしである。特に一日中履いて楽しむとパンストの持ち主と自分の股間の匂いが融合して、変態精神的には「体臭の結婚」という感じで胸がすくような思いになれる。まさかパンストを捨てたオンナも、自分のニオイに見ず知らずの変態の股間のすえたニオイが無理矢理こすりつけられてひとつにされているとは考えないだろう。げに恐ろしきは変態である。

若い女が衣類をまとめて出す場合は、半透明のゴミ袋ばかりでなく、ＤＣブランドの大きな紙袋に入れて捨てることも多い。とにかく若い女の衣類ゴミと判別のつく物を見つけたら、その周辺にある同種のゴミ袋なども一緒に持ち帰ることだ（ゴミ袋の結び目などで捨てたのが同一人物と特定できる）。そうすれば組み合わせて捨てた人間の顔写真や住所、電話番号などまで分かったりする。特に紙袋の場合は衣類を詰めてガムテープなどで密封したものを見たら要注意だ。人は「恥ずかしい」と思うものを捨てるとき、必ずといっていいほどそのゴミを「密封」するものである。俺も「密封」された衣類ゴミに注目

するようになってから下着ゴミの回収率がグンとアップした。

このたぐいの衣類ゴミは主に季節の変わり目、引っ越しのシーズンなどに捨てられる。ブラやパンティなどの下着はゴミ袋の下の方に恥かしそうに固めて入れられている場合が多い。この場合ゲットできる下着はほぼ間違いなく洗濯済みのものがほとんどだが、そこはソレ、オンナなんてオトコ以上にうす汚い、汗やらオ●モノやらの分泌物排泄マシーンともいうべき存在だから、長年愛用したブラやパンティには、とても洗濯などではヌグッてもヌグイきれないそのオンナ特有の甘いニオイが染みついている。コレが実にコタエられねえぐらいイインだよなあ。ひと嗅ぎしただけで持ち主の恥知らずで淫らでいやらしいカラダが頭のテッペンからけつの穴まで、全身の毛穴のひとつひとつまで克明に妄想できそうなホノカな香りが鼻孔をくすぐるンだ。特に、ガキを何人かひり出して少しくたびれた年増女のむせかえるようなすえた匂い――汚穢じかけの甘い香りは、ションベン臭いブルセラの小娘なんか千人タバになってもメじゃないぜえええええええ！

●お宝ゴミ 家族ものの出す下着

これはさらに「若夫婦もの」と「子供のいる家族」「老人夫婦」などに細分化できるが、拾ってうれしい下着ゴミが期待できるのは「若夫婦」と「子供のいる家族」の場合である。いずれも家族ものの衣類ゴミは、一度に何個かまとめて多数出されるのが特徴だ。

発見しても一度に全部持ち帰れない状況の場合は、その中から「女の下着ゴミ」の入っている可能性の一番高そうなものを選ばなくてはならない。そのポイントは次の通りだ。
何個かいっぺんに出されるような衣類ゴミは、よく見るとオーバーやジャケットなどの上着類ものと、パジャマやＴシャツやももひき、くつ下などをまとめたものとに別れていることが多い。見た感じとゴミ袋を触った感触で、ゴワゴワした上着類の入っているものを後回しにして、見た目にもＴシャツや肌着などが多そうな白っぽい感じの衣類ゴミを一番最初に持ち帰るのが、下着ゴミを手に入れるコツである。俺の経験ではこういったゴミの場合、ジャケットやオーバーの入っている中にパンティなどの下着をまぜて捨てている奴はほとんどなかった。
面白いことに「若夫婦」ゴミでは、雑誌の通販で売られているような派手なペアのブリーフとパンティのセットが出てくるのをたまに目にする。「捨てるときも夫婦一緒」ってわけでなんだか微笑ましい。俺はこういうものを見つけると、何となく男のブリーフも持ち帰って「夫のブリーフの目の前で」奥さんのパンティをオカズにせ●ずりをする。すると安いエロ小説によくある「夫の目の前で凌●される妻！」という設定の妄想が楽しめて大変楽しい。ハタから見るとまるで馬鹿だが……。

●お宝ゴミ
若い男の出す下着

家族ものや若い女のものと違って、服をたたみもしないでゴミ袋に雑然と放り込んでいる場合が多く、半透明のゴミ袋なら、外からでもわりと簡単にわかる。袋一杯にパンパンに詰め込んで、しかも中がメチャクチャそうならまず単独の若い男物。まれに几帳面なやつがいて、女のコのようにきちんとたたんで出したりしていて、この俺でさえ間違えて持ち帰ることもあるがな。

男モノの衣類の場合は、下着ではなくズボンやジャケットなど上に着るモノの方が再利用できるので重宝である。ナニか悪いことをコッソリするときの変装用に、普段の自分が絶対に着たりしないタイプの服を拾ってキープしておくということも当然アリだろう。

だから俺は自分の服を捨てるときは、絶対に再利用不可能なくらいバラバラにして捨てている。万が一、俺の捨てた服を他人が拾って、そいつがそれを着て銀行強盗や強姦をしないとも限らないからだ。自分の捨てたものがどうなるかにも思いを巡らせなければよい鬼畜やダストハンターにはなれないぞ（考えすぎか）。

以上が下着ゴミを中心とした衣類ゴミの解説だが、いずれにしても回収のポイントは中身が女物か男物かを路上で素早く判断することである。その判別は、外から見てゴミ袋の中にピンクや赤など、女のコの好みそうな色が多かったり、中にパンストが入っているのを確認できればまず間違いなく女モノが混じっている証拠なので、そういうものはとりあえずゲット。また、後に捨てた女がブスだと分かった場合でも博愛精神と闇鍋根性でとり

あえず一回はオカズにして抜いてあげよう。それが拾った下着ゴミに対しての最低限の礼儀である。

●お宝ゴミ
生理ゴミ

汚穢好きの変態の皆さんがこぞって喜ぶステキな物件。生理不順の女と妊婦以外はほぼ月イチで出てくるものなので拾うのはわりとたやすい。ただ、俺も筋金入りの汚穢主義者だが、このゴミだけはあまりにもクセェんでよほど好きな女のモノでもない限り、家に持ち帰ってとっておくなどというマネはしていない。いつまでもとっておいたら部屋に匂いが移ってしまうから、このゴミは「必要になったときに必要な分だけ持ち帰る」ことをすすめる。

生理ゴミはオンナの●のように奥が深く、特定の女のモノを拾い続けて研究すると、拾ったナプキンに付いた血の出具合と個数で逆算してその女の生理日を特定することも充分可能である。それが特定できれば「順調にいけば彼女の来月の生理は23日」などという予測も立てられる。

俺はいつか気が向いたら、家の前の通りの真ん中にある「杉並区民の掲示板」に、「ご町内の美女13人の来月の生理開始日予測一覧表」を張り付けてやろうかと考えている。そうすれば「まあ、あの人と私はだいたい同じ周期だわ！」などという共通の話題ができ

て、都会では薄くなりがちな「ご近所の親交」も深まり町内親善に役立つのではないかと思うのだが、どんなもんだろう。

生理ゴミを探すポイントは簡単だ。ちり紙の多くつまっているゴミ袋の口をあけて匂いをかいでみればいい。イカ臭かったら野郎のセ●ズリゴミだし、鉄臭い血の匂いがしたなら女の生理ゴミである。白っぽいカタマリが中に入ってるようなゴミ袋を見たら要チェックだ。

これは俺の所見なのだが、ちょっと昔はナプキンでもタンポンでも、使用済みの生理用品はひとつずつちり紙でくるんで、小さな紙袋の中にまとめて入れて捨てられていたものだ。それが最近では人目にふれるのもはばからず、血のついたナプキンをたたみもしないで血のついた面を表に出したまま平気で捨てる若い女が増えてきた。俺も最初は、「これは不要なちり紙をなるべく使わないで、熱帯雨林の伐採やゴミの量を減らそうという『地球にやさしいエコロジカルな発想』からきている現象なのかも」と思ったりもしたが、どうもそうではないらしい。何人かの女性にそのことを聞いてみると、口を揃えて「それはただ単にダラシナイだけよ。会社や公衆便所の汚物入れなんかでもそういうのが増えてきていて、そういうの見ると捨てた奴をひっぱたいてやりたくなるわ。全く今の若い女ときたら……」ということだから、単に恥知らずのバカ女が増えているだけのことらしい。結構なことである。

捨てられているのはタンポンよりはナプキンの方が圧倒的に多く、先に述べた女性誌同

様、このゴミもポイントは「空にかかる月」で、満月の後、数日したあたりで多く見かけるような気がする。最近は、オ●モノ汚れの防止用にナプキンよりもさらに薄い「パンティ・ライナー」などの新しい種類のゴミも見かけるようになったが、こちらの方がほんのりと小便臭くて、血のべったり付いたナプキンよりも可愛いといえば可愛い気がする。いずれにしても若い女性の股間に密着していたモノを所有するという意義は素晴らしいが、生理ゴミはあまりにもクサくてそのへんが微妙なところである。血だらけの生ぐさい生理ゴミをしみじみ見ながら俺は考える。「どんなキレイな女でもこういうクセエものを月イチで排泄しているわけだ。糞だって毎日のようにするし、俺達はみんな基本的にどこかしら汚物なんだよなあ……」。

このように女への過度な幻想を打ち砕いてくれるので、男にとっての生理ゴミというのは実に学ぶところの多いゴミとも言えるだろう。ただ、別に女性だけが汚いと言っているわけではない。男のイカ臭い●液のニオイにだって耐えがたいものがあるし、本当に我々はみんなある部分で汚穢製造器なのだ。

●お宝ゴミ

女の体の一部

といっても、切断された腕や尻や頭がひんぱんに落ちているというスプラッタな話ではない（ときどき美容師の卵の連中が使うカットの練習用のマネキンの頭部が路上に転がっ

ているのを見かけるが、あれは夜道で見ると、心臓に悪いくらい不気味だぞ〜）。

ここでいう体の一部というのは、切った爪や髪の毛のことである。これらは生活ゴミを漁っていれば、わりと簡単に拾うことが可能である。髪の毛は粘着テープのロールタイプのカーペットクリーナーのゴミからいくらでも採取できるし、爪はゴミ袋の底を漁ったり、たたまれたティッシュをひらいて見れば中から出てくることもある。煎じて飲めば彼女との一体感がリアルに妄想できてグーだし、髪の毛は長ければ自分のパンツの中に入れたりペ●スに巻き付けたりして遊ぶと彼女の頭にペ●スをすりつけているようで楽しいぞ。

お宝ゴミのジャンルについて

ひと口にゴミといってもその種類は千差万別であるが、漁っているうちに出来上がった俺なりの特別な分類というのがある。それを簡単に紹介しよう。

引っ越しゴミ

字の通り、人が引っ越ししていくときに最後に出していくゴミ。2月の終わりから4月の初めの卒業、入学、就職シーズンに住宅街で大量に出る。捨てていく方も、この街ではこれが最後とばかりに、清掃局や地域住民の迷惑なんかお構いなしで燃えるものも燃えないものも一切関係なく、鬼のように大量に捨てていく（別名鬼畜ゴミ）。

引っ越しゴミは捨てた人間の過去の精算という感じで、拾っているとひとりの人間のたどってきた過去が読み取れてとても興味深い。ゴミの中身も、まだ使えるラジカセやビデオなどの家電類があったり、女性なら着古した服や下着などをまとめて捨てていくなど、豪華なお宝が出ることが多いので要注意である。

引っ越しゴミ探しのポイントは文房具などの使いさしが入っているゴミ袋だ。俺はこいつを見つけたら、まるごと家に持ち帰って広げてみることにしている。ちびた鉛筆や消しゴムに混じって本人のスナップ写真や証明写真、書き損じの履歴書や情念ノートなどが出てきたりするからだ。こういう情報ゴミをひとつひとつ検証して相手の趣味や目指してきたものや、歩んできた人生の物語を読み取るのである。運が良ければ日記なども出てくるだろう。

そして、はなはだ悪趣味ではあるが、引っ越しゴミの醍醐味は、捨てた人間の破れた夢のかけらが見える瞬間である。俺はこれまでに多くの挫折した連中の引っ越しゴミを拾ってきた。膨大なテキストの山や夢を綴った情念ノート（第5章参照）、模試の山、講義テープ……アニメーターを目指して挫折した奴のゴミ、司法試験の受験を諦めた奴のゴミ、美術のアーチストを夢見ていたがかなえられず田舎に帰った奴のゴミ、目当ての大学に入ったはいいが精神に異常をきたして帰郷した奴のゴミ（親が処分した）……。実現する夢ばかりではないのがこの世の常である。ゴミを漁っていると「ドリーム・カムズ・トゥルー」なんてホントにまれで幸運な例なんだってことが実感できる。それでも俺は奴

らを馬鹿にするつもりはない。破れても壊れても夢はステキなものだからな。

卒業ゴミ

自宅に住む学生などが、中学校や高校から卒業して、それまでの学生時代のノートや教科書、参考書、思い出の品物などを精算するゴミ。やはり3月や4月にかけて住宅街で多く出る。人によっては、ほとんど引っ越しゴミに近い感覚で過去の精算をするコもいたりして楽しめる。そしてなぜかこの種のゴミを出すのは、男のコよりも女のコの方が断然多い。女のコの方が、過去の精算を思いっきりやるのが好きなのだろうか？

中には恋人同士の交換日記だとか、友人からの年賀状、卒業式の寄せ書きノートを捨てていく奴もいる。恋人への熱い想いを書き綴ったノートが捨てられるというのは、その恋が終わった証拠だろう。そういうゴミを数多く見てくると「永遠の愛」なんてちゃんちゃら可笑しくってたまらない。ノートを埋める美しい愛の言葉も、ゴミの中から出てくると茶番でしかない。「永遠におまえを愛する」「あなただけが好きなんです」「この愛は永遠よね」……たわ言は星の数、いや、星のカスと言ったほうがよいだろう。別に俺はムキになって「永遠の愛」を否定するわけじゃない。少なくともそんなものは街角のゴミ集積所には見当たらねえよってことだ。まあ、人が捨てるゴミの中に「真実の愛」なんかあってもらっちゃ、こっちがたまんねえよ。破れた恋とオンナの下着なら歓迎だが、「真実の愛」なんか絶対に拾いたくも見たくもないね。もしも、そんなもんが出てきたら、俺は金

輪際ゴミ漁りをやめるぞ。「たとえ失っても愛さなかったよりマシだ」なんて加藤諦三的なお安い言葉は便所のクソにくれてやるよ。

破局ゴミ

恋人同士の別れや夫婦の離婚などで生じる引っ越しゴミの一種。ふたりで撮った観光地での記念写真がズタズタに破られていたりするのですぐわかる。近年はふたりのスナップ写真をテレホンカードにしたものを未使用のまま捨ててしまう連中も結構いて、こういうのは何だか妙な情念が付いていそうだが、テレカとして使えるので俺は重宝している。ゴミ漁りをする俺が言うのもなんだが、こういう記念テレカを作るのはハタからみるとかなりの「悪趣味」だ。相手と結婚して添い遂げる自信のない奴は作らない方が賢明だと思う今日この頃である。

しかし、さらに輪をかけて悪趣味な俺は、こういう奴らの写真を拾ったら、終わった「恋」の追悼を兼ねてふたりのセ●クスをこと細かにまんべんなく妄想してやることにしている。「ほほう、この男がこの顔で、この女のここにアレをこうしてまぐわっていたわけか……。くっくっくっ、この顔からするとこの女のアソコの色、形、ニオイ、味はこうなっていて、●圧は高くてよくしまり、汁の出具合いはこんなだろう。すると、男の方も当然女のここをこうしてやっているわけで、そのときこの女はその顔をこのように歪めてよがるわけか……あきれちゃうね。この恥知らずども！」などと頼まれてもいないのに彼

ダストライフ・イン・トウキョウ

漁ったゴミで豊かな生活

鬼畜のヒト「村崎百郎の一日」

＊目がさめて

俺の日常をゴミに沿って解説しよう。工員村崎の朝は早い。遅刻しないように目覚まし時計を3つ、時間差でセットしているが、そのうち2つは引っ越しゴミで拾ったものだ。起きたら6時45分から俺の大好きなテレビ朝日の番組「やじうまワイド」を見るために2年前に拾った東芝の20インチＴＶのスイッチを入れる。ついでに3年前に拾ったシャープのビデオで8時から始まるワイドショーの録画もセット。これで今日のゲス情報はバッチリだ。朝のシャワーも先日ＯＬの引っ越しゴミでゲットした使いさしの弱酸性の高級シャンプー&コンディショナーで爽快だ。石鹸も同様に近所の学生が銀行の景品を使わずに捨てたものを使用。朝の通勤電車で過激な痴女にいきなりチ●ポコをしゃぶられるという可能性も、北大平洋上で2匹のハエが正面衝突するのと同じぐらいの確率で起こることが予想されるので、そのとき失礼がないようにカリ裏まで念入りに洗わねばならない。ハブラシは隣の美人ＯＬの捨てたものを毎日間接キスするつもりで歯に当てているし、タオルも近所の18歳の予備校生（とても可愛いコ）の捨てたバスタオルを使用。女のコが身体

らのことを思ってやるのだ。俺という奴はつくづく何て親切な奴なんだろう。
　以前、こういう破局ゴミで、結婚式の記念アルバムがまるごと捨てられているのを手にして驚いたことがある。純白のウェディングドレスを着てヴァージンロードを歩く写真なんて一生モンの思い出だろうが、関係が終わってしまえば全ては嫌な過去になってしまうというわけか。これは誰にとっても言えることだが、結局、現在の自分にとって有害でしかない不要な過去は、輝かしい未来の為に切り捨てるしかないんだよな。

死者のゴミ

　人が死んで、その人間が愛用していたものが不要になって捨てられるゴミ。こういうのもたまにはある。他のゴミを漁るのはいいが、こういうゴミはたたられそうで嫌だなどというヤワな奴は芥川龍之介の『羅生門』でも読んで反省しろ！（字の読めない奴は石川賢のマンガでもいい）
　死んだ人間だろうと生きた人間だろうと、ゴミはゴミである。むしろ死んだ人間のゴミこそ有効に活用してやるのが、残された生者たる我々の勤めである。それが供養ってモンだろう？　死んだ女のパンティはあの世のニオイにつつまれてとってもかぐわしく、人の死を感じながらのオナ●ーはとてつもなくエロティックだ。

を拭いたものなら全然汚いなんて思えないぜ。
朝飯のトーストを焼くオーブントースターも3年ぐらい前に拾ったものだ。めったに使わないけどアイロンもある。さすがにパンに塗るバターは買ったものだが、台所にあるコーヒーカップやグラス類はみんな新品状態で捨てられていたのを拾ってきたものだ。

＊通勤

某私鉄とＪＲを乗り継いで工場のある町へ行く。途中、駅のゴミ箱と電車の網棚から日刊スポーツとサンケイスポーツ、報知新聞、朝日新聞、日経新聞などを拾う（スポーツニッポンは工場で取っているので読めるし、中日スポーツはＦ１好きのＭさんがいつも買ってくるので拾う必要がない）。電車に乗ったからには電車代の3倍は何か拾わないとモトがとれた気がしないというのは俺の貧乏性だな。漫画雑誌も曜日によって愛読誌を狙って拾う。たまには文庫のエロ小説やエロ本も拾えるのでうれしい。駅のゴミ箱に捨てられる雑誌の拾得は、首都圏ではそれを駅前で一冊１００円で売る商売が盛んになっており年々競争が激しくなってきているが、それでも早い者勝ちなので適当にガンバル。こういうのは同僚へのお土産にもなるから楽しい。こうやって帰りも合わせたら、新聞や雑誌でだいたい日に平均2千円近くは拾っていると思う。その大部分が別に読まなくても知らなくてもいいものばかりなんだけど、つまらん自我をマヒさせるにはこの程度がちょうどいいんだろう。

工場へ着いたら作業服に着替えるのだが、粉まみれで汗がたくさん出るので下着の着替えはいくらあっても足りないくらいだ。こんなときに拾ったTシャツやジャージが役に立つ。どうせ大量の汗と粉で汚れるのだからキレイなものなんか必要ないのだ。冬のジャンパー類も（工場の中は暖房がなく寒い）拾った服なら汚れても惜しくなくて便利だ。

＊仕事が終わって

ウチの工場は、仕事はキツイが終業時間だけは早くて助かる。残業しなければ通常5時半には解放されるのだ。今日は出版社の編集者と打ち合わせがあるので渋谷へ向かう。途中駅のゴミ箱から日刊ゲンダイと夕刊フジ、東京スポーツを拾う。すでに習慣になっているのでコレを読まなけりゃ仕事が終わった気がしないんだよなあ。ホントは内外タイムスが拾いたい夕刊紙のベスト1なんだけど、残念ながらあんまり落ちていない。

渋谷の駅から出版社に電話。使ったテレホンカードも、もちろん拾い物である。恋人同士のスナップ写真で作られた記念テレカが未使用のまま捨てられていることがよくあるので文房具類のゴミは見逃せない。

待ち合わせの喫茶店で編集者が来るまで昨日拾った『従軍慰安婦110番』とかいう重そうな本に目を通すが、退屈で2分ともたなかった。捨てられるものにはそれなりの理由があるものだと納得。気分を変えてやはり昨日拾った漫画『スプリガン』第7巻を読み出す。悪いがこちらの方がずっと面白い。しばらくして編集者が来て原稿のフロッピーを渡

ので発狂しそうになってテープを取り出し壁に叩きつける。全くどいつもこいつもサザンやユーミンばかり録音しやがって他にＣＤはないのかと憤りを感じるが拾い物なんだから仕方がない。いくつか拾い物のカセットテープを入れ替えて聞いてみたらイーグルスの「ホテル・カリフォルニア」が流れてきた。同じ通俗音楽でもこっちの方がナンボかマシな気がして聞き入っていたら、そのあとに竹内まりやの曲が入っていて、こいつはどーゆーセンスしてんだとまたまた発狂モード。４年前に拾った５キロのダンベルでテープを念入りに叩き潰してやった。

　そのあとは拾った『ナイタイ』や『ＭＡＮＺＯＫＵ』などの風俗情報誌を読みながら人気風俗嬢の身体を隅々まで克明に妄想したり、拾った女の服を下着から上着まで着て（パンストもはいて）拾った化粧品（主に試供品セットなど。口紅やネイルカラーもある）で化粧をしたりして遊んでから、遅い晩飯を喰おうと焼きそばを作る。もちろんフライパンもサラダ油も拾いモノだ。メシを喰ったあとは、洗濯物がたまっていたので近所の無人コインランドリーへ行く。こういう所は床を探せば洗濯機の下から百円玉を何個か拾えることもあるので便利である。まあ、風呂上がりにはくブリーフがなくなっても、俺には拾った女のパンティがあるのであまり困らない。野郎のブリーフもたまに拾う機会があるが、さすがにそういうのは使う気にはなれないな。

　その後少々ゴミ漁りをして家に帰る。寝るときはオシャレのつもりで、全裸フル●ンに拾ったピンクのネグリジェを着て寝ることもたまにあるが、最近は服を着たまま床から１

し、ついでに仕事の資料用にと近所で拾った海外のTATTOO雑誌を7、8冊渡す。ゴミ漁りもけっこう役に立つもんですなあと談笑しながら次の原稿の打ち合わせをメモるがノートもボールペンもマーカーも、近所の学生が捨てたものだ。ゴミ漁りをしていれば文房具には困らない。途中、編集者の煙草が切れたのでこの前道で拾ったキャスターマイルド（未開封）を進呈して、「これはいたれりつくせりですねえ、はっはっはっはっ」と感謝される。ゴミ漁りっていいもんだとしみじみ思う。

＊帰宅して

とりあえず今日拾った雑誌などに目を通してからひと休み。拾ったエロビデオ（洋モノ）を見ながら日課のオナ●ーを楽しもうとするが、登場する連中の恥知らずにでかい●器とケダモノじみたま●わいを見ていたら何だか気分が悪くなってきて、これまた拾った和モノのエロビデオに変更。やっぱり日本女性はアソコも上品でええなあと納得しながらチ●ポコをていねいにしごく。読者諸君は信じないかもしれないが、現在俺がオ●ニーで使用しているペペローションも2年前に未開封の新品のまま何本も捨てられていたものだ。まあ、他にも未使用の簡易ビデやイチジク浣腸を拾ったりするぐらいだから、ローション程度が捨てられていても別に珍しいことではないのかもしれない。

射精後は軽い音楽でも聞きこうと、1年前に拾ったCDラジカセに先日拾ってきたカセットテープ（録音済み）を適当に選んで入れたら、いきなりサザンの曲が聞こえてきた

メートルぐらい積み上がったエロ雑誌や女の服の上でそのまま寝てしまうことが多い。ダンボールの上に寝たことのある人なら分かると思うが、紙の上というのはそんなにひどい寝心地ではないし、服についた若い女のニオイをかぎながら眠るというのもなかなか豪勢で大名気分なのだ。ついでに書くと、今部屋にあるフトンや毛布も引っ越しゴミの中から拾ってきたものだ。その後、Ｍａｃに向かって原稿書きを少々。ついでに数日前に道で拾ったＣＤ―ＲＯＭを開けて見てみるがつまらんデモソフトばかりでお目当てのエッチ画像はほとんどなかった。

この夜は目がさえてなかなか寝つけなかったので、眠くなるように3年前に拾ったエンヤのＣＤ『ウォーター・マーク』をかけながらスチールの本棚（5年前に拾った物）から2カ月前に拾った登山家の『ラインホルト・メスナー自伝』を取り出して眠くなるまで読んだ。

こんなのがゴミを中心にした俺の日常だ。それなりに楽しくて飽きないもんだよ。

身も心も一気に腐る！

第2章　卑伝　ゴミ漁りのコツ

身も心も一気に腐る！

第2章

卑伝
ゴミ漁りのコツ

服装

目立たない格好をすること・ただし迷彩服はやめとけ

さて、ちょっとまどろっこしいが、話がどんどん深くなっていく前に、これからゴミに手を出そうという奇特な連中に向けて、ゴミ漁りの実践的〝いろは〟を手ほどきしておこうか。

ゴミ漁りをするときの服装は、目立たなくて動きやすいモノがいい。だけど、気張って凝るんじゃねえぞ。迷彩服着て、顔をススで黒く塗るようなマネはかえって人目を引くだけだからヤメとけ。夜の闇に溶け込むようにと、全身黒づくめの格好というのも感心しない。他人が見て「こいつはアヤシイ」と思わないような格好を心掛けるべきだ（当たり前だな）。

自分の歳や背格好を考慮したうえで、それに見合った格好をしよう。それが「目立たない」コツだ。たとえば、おっさんなのに妙に若ぶった服装をしたり、頭が長髪でボサボサしてるのにパリッとしたスーツを着ていたりしたら、すれ違った通行人の記憶に残ってしまう。そう考えると、服は人の印象に残るようなロゴやらマークなどの入っていない無地の地味目な感じのものが無難だろう。街と夜に自然になじみ、そこに溶け込むような格好を心掛けるのだ。

また安上がりな変装の手段として、俺のように「ゴミ漁り用の服」というのをゴミの中から調達しておく方法もある。自分が絶対に買ったり着たりしないような服を拾っておい

て、ゴミ漁りのユニフォームにするのだ。俺の住んでいるあたりは、場所がら学生たちが着る大学のロゴマークの入ったトレーナーなどもよくゴミで落ちている。ロゴ入りトレーナーを着て歩けば、うす汚い工員の俺も一瞬で「早稲田大学」の学生サマだ。昔、そんなふうに拾ったトレーナーを着て、早稲田大学の構内を散歩したことがあった。いかにも頭の悪い工員にありがちな発想だろ？　んなことをしても何も変わらないのにさ。だから、そうやって歩いていたら自分がとってても惨めでよかったぜェ。あまりの惨めさでアタマがクラクラして●起しちまったぐらいだよ。笑っちまうよな。そんなふうに人が捨てた服を着て歩くのは、何だか別人になったような、ちょっとした「変身」気分を味わえるから面白い。まあ、そんな話さ。くっくっくっ、自分の大学に誇りを持っている学生諸君は、大学やサークルのロゴ入のトレーナーを捨てるときは、たかが工員フゼイに拾われて着られないようにジャキジャキに切り刻んで捨てるんだな。

　ん？　誰が着たかわからないようなものを着てキモチ悪くないかって？　オイオイ、俺は常々自分が世の中で一番汚い人間だと思っているんだぜ。なら、俺以外の人間は俺よりキレイだろう。そう考えれば他人の服なんてゼンゼンどうってことねえよ。皆の衆も、一体自分がどれほどキレイなモンなのか暇なときにゆっくり考えてみろよ。人間なんて皮一枚下は血や脂肪や内臓のつまった糞袋じゃねえか。んな糞袋がエラそうにスカしてどーすんだ。そういう高慢ちきな意識を持っていちゃあ、「よりよいゴミ漁り」はできねえぜ。

自分もまた、汚物であることを自覚すること
それがゴミたちを理解する唯一の足がかりであり
真のダストハンターへの第一歩なのだ
『ダスト・テスタメント』「狩人の章」より

靴はスニーカーがいいだろう。夜の路上を革靴でコツコツ足音を立てて歩くのはなかなか気分のよいものだが、ゴミ漁りのときはひかえたほうがいい。人家のすぐそばのゴミ収集所から大量に引っ越しゴミを持ち帰るというような場合もある。そこの家の奴が靴音で起きてしまい騒がれてもつまらない。蛇足だが、俺の母親は音に対して異様に敏感なうえに睡眠が浅くて、夜中に家のまわりでどんな小さな物音がしてもぱっと目をさますような「嫁から見たら一緒に住む姑としてはおそらく最悪」の体質の人間だった（おかげで俺は家の中でのせ●ずりには苦労した。たぶん半分以上はバレバレだった気がする）。世の中にはそういう人間もいるんだから、注意してもしすぎることはない。「音に敏感なうえに、警察へ通報するのが好き」というタイプの善良な市民だって多数存在する。このように書くと「何と臆病な！」と思う奴もいるだろう。だが、何と言われても、ゴルゴ13ではないが「人よりも何倍も臆病な奴だけが生き残れる」のが生物界の常識であり、それはゴミ業界でも同じなのだ。

いつ、いかなる場合であろうとも、
常に最悪の情況と、そこからの脱出方法を
瞬時に想定できるように訓練せよ
それが諸君らを「栄光の夜」へと導く鍵である
『ダスト・テスタメント』「詐欺の章」より

七つ道具

泥棒の七つ道具とたいして変わらないゴミ漁りの七つ道具

別に、手ブラでもゴミ漁りは充分できるんだけど、ここはプロっぽく「七つ道具」というのを考えてみた。どれも一応、役に立つものであることはゴミ漁り歴16年のこの俺が保証しよう。

1　豆カッター

手の中にすっぽりと入ってしまう小型のカッター。俺はゴミ袋を切り裂くのに便利なのでたまに持ち歩く。ゴミ袋は手で引っ張っても穴ぐらい開くが、ゴミ集積所ではなるべく音を立てない方が望ましいので、そういう意味でカッターは便利なのだ。ただ、大型のカッターは警官の不審訊問にあったときに出てくると非常に気まずい雰囲気をかもし出す作用があるので持ち歩かない方がよいだろう。当然だが、ゴミ袋の中身を確認するための

穴は最小限の小さなものにするべきだ。

また、カッターは緊急の攻撃用のアイテムとしても役に立つ。今は日本人みんなが平和ボケしてしまっているが、ホントのところは夜に露地裏を歩いていて、曲がり角から物取りが襲って来ても全く不思議はないのである。魅惑の夜は、当然そんな危険性もはらんでいるのである。それでも夜がこの俺を引きつけてやまないのは、夜の闇に身を置いていると、あの闇の奥の、夜の中の夜の中の夜の中の夜の果てのそのまた果てに、人の心の深い闇へと続く暗い何かがありそうな、そんな気分になるからだ。ああ、もっと深い夜が見たい。もっと腐った夜に逢いたい！　そんな安っぽい芝居じみた台詞が臆面もなく出てしまうのも、夜なればこそ、である。

2　ガムテープ

カッターで開けたゴミ袋の穴を塞ぐために携帯する——。こう言うと「鬼畜のくせに、何てお行儀のよいことを？」と思う奴もいるかも知れないが、これは決して漁った者の「当然のマナー」として持ち歩くのではない。鬼畜が意識すべきマナーなど何ひとつないのだから。全てをてめえの思惑で無理やり押し通すのがまっとうな鬼畜ってモンだ。しかし、後で詳しく述べるが、ダストハンターがゴミ集積所を汚すのは長期的に見ると不利益しかもたらさないのである。長期的な利益を考えての行動なのだ。

ガムテープもまんま一個持ち歩くとかさばるので、適当な量を巻き取って携帯するとい

い。当然だが、警官に不審訊問されたときに出てくると気まずいのはカッターと同様である。その際、あわてて、警官に「これは女を強●するときに目や口を塞いだり縛ったりするために持ち歩いているんじゃありません！」などと口走ってはヤブヘビなので注意しよう。

3 ライター

言うまでもなく、タバコに火をつけるライターのこと。本類のゴミの中には、ビニール紐で強く縛って出されるものも少なくない。そうした雑誌や本を結わいたビニールの紐を切るのに便利だから持ち歩くのもいいぞ、という程度のアイテムだ。別にカッターでもいいのだが、タバコを吸う人ならカッターよりも、持ち歩いていて怪しくない代物である。俺は自転車でタバコを吸いながらゴミ漁りをしている手前、風にも強いターボライターを愛用している。これだとガスは食うがビニール紐を切るスピードは早いし、残った本を再度縛るときに紐が少々短くても、紐を溶かして結ぶことができるので便利である。

ついでに言うと、マッチはよろしくない。炎が弱く、燃えかすが現場に残ってしまうばかりか、ゴミ漁りに疲れて公園で休憩しているときに、つい「マッチ売りの少女」ごっこをして暗い気持ちに落ちいらないとも限らないからである。ここだけの話だが、夜のとばりの中で擦ったマッチの炎からは、微弱ながら自殺誘発電波が出ることがある。死を誘う電波に耳を傾けないためにもマッチはやめといた方がいいってわけだ。

4　小型ライト

文房具屋で売っている2百円程度のもので充分。ゴミ集積所というのは、たいがい街灯の下や近くにあるものなので、実際のところ、ゴミ漁りをしていても小型ライトの必要性というのはほとんど感じない。しかし街灯が壊れていたり、どの街灯の明かりからも照らされることなく、ポッカリとそこだけ漆黒の空間が出来上がっている一角というのも、都市の露地裏には多数存在する。そうした所のお宝を見逃さないためにも小型ライトは持っておいて損はない小道具ではある。

そして、また当然のことだが、この小型ライトも警官の不審訊問で所持が確認されると、あらぬ疑いが倍増しそうな危険なアイテムである。とっさに「最近つきあい始めたボクの彼女はク●ニが好きで、微妙な舌遣いをしなければ満足してくれないんです。ボクはそんなに経験豊富な方じゃないし、ペンライトで照らさなけりゃ、あんなグチャグチャした所なんてどこが何だかわかんないスよね。それに、彼女の方も、暗闇であそこだけ小さく照らされてジロジロ眺められるってのがまんざらイヤでもないらしくて、コレを使うと濡れ方が全然違うんですよ！　おまわりさんの奥さんはどうなんですか？」などと話を作って矢継ぎ早にまくしたてれば、警官も「ああ、わかった、わかった。もういい！　聞きたくない！　とっとと帰れ、馬鹿！」という気分になって放免してくれるはずはないが、頭の回転に自信のない奴は何らかの物語、言いわけをいくつか考えてからゴミ漁りに

出かけるといい。とにかく「言いわけ回路」は発達させとけよ。

5 手袋

これは軍手でも何でもいい。夏は薄手のものがいいし、寒い季節は手の保護以外にも、防寒のためにも厚手のものが望ましい。ゴミは生きた猛獣ではないから危険は少ないのだが、本や雑誌などを掴んだ拍子に紙で手を切ってしまうことはよくある。また、燃えないゴミの日の前夜、家具や電化製品などを拾って運ぶ場合などには欠かせないアイテムでもある。手袋は現場に指紋を残さない役割も果たすが、まあ、前科者でなければ、指紋についてはそれほど気にする必要もないだろう。

しかし、考えてみるといままであげたカッターからこの手袋までは、泥棒や放火の七つ道具と言っても充分通る代物である。警官の不審訊問時にセットで見つかると、気まずいどころの騒ぎではない。ヘタをすると、付近で起きた放火や強盗の未解決事件の容疑が全てかぶさってくるのでくれぐれも注意が必要だ。もっとも、あんたがキリストのような気持ちで「みんなの罪を全て引き受けてもいい」というなら、別に俺も止めないけどな。

6 紙袋またはポリ袋

拾ったゴミを入れて持ち帰るためのもの。が、俺のように年季の入ったダストハンターは、わざわざ自宅から紙袋を用意してゴミを漁りに行ったりはしない。ゴミ漁りの最中に

ゴミ集積所から調達して利用するのがプロの技ってモンだ（威張るほどのことじゃねえけどな）。

俺の場合は、紙袋は主に拾った本や雑誌類を持ち帰るのに使っている。ゴミ集積所には紙袋の中に沢山の紙袋を畳んで捨てていく奴も結構多いし、本や雑誌類をはじめからしっかりとした紙袋の中に入れて捨てる奴も少なくないので、手ブラでゴミ漁りに出かけても紙袋に困ることはまずない。

コンビニで買い物をしたときにもらう大きめのポリの袋も畳めば小さくなるし、少し雑誌を拾ってカンジュースなどと一緒にポリ袋に入れて下げて歩けば、警官とすれ違っても「コンビニ帰り」と思われて不審を抱かれないので、そういう意味でも便利なアイテムである。

蛇足だが、嫌な奴へのプレゼント用に夜の路上に散在する犬のウンチを拾い集めるのにもポリ袋は非常に便利である。ス●トロ攻撃は卑怯で卑劣なこの俺の、最も得意とする「基本的嫌がらせ技」の初歩の初歩なのだ。

7　自転車かクルマ

上京したての頃はこつこつと徒歩でゴミ漁りをしていた俺だが、なにせ夜は短いしゴミ集積所は無限に多い（ホントは有限だけどな）。効率よくゴミを漁るには、自転車やクルマなどの機動力を利用しない手はない。ただ、バイクは音が大きいし、暴走族に間違われ

やすいので住宅地のゴミ漁りには向かない。自転車も警官の不審訊問の対象になるので注意が必要だ。警官は無灯火運転じゃなくても「こいつは怪しい！」と思えば呼び止めるものなので、そこで「ライトつけてたのに何で止めるんだよう」などと生意気に抗議してはいけない。警官対策に関してはまた後で述べるが、「絶対におまわりさんに逆らってはいけない」ということだけは、よく肝に銘じておこう。自転車に乗っているときでも免許を携帯して、呼び止められたら提示するぐらいの用意はしておいた方がよいだろう。

クルマは大げさ過ぎる気もするかもしれないが、ワゴン車が用意できる奴は、ステレオや家具などの粗大ゴミ狙いで高級住宅地を徘徊するのも悪くない。実際、俺もそういう連中をたまに見かけることがある。

個人的におすすめは何の変哲もない婦人用の通称「オバチャリ」である。できれば自転車の前の部分についているカゴが大きめのものがいい。オバチャリがいいのは目立たないことと、スポーツタイプの山チャリなどよりも大量に物を運ぶのに適しているからだ。運べるお宝は多い方がいいに決まってる。言い忘れたが、盗んだ自転車など論外だぞ。夜中に自転車に乗って街を徘徊する限り、警官の不審訊問は絶対に避けられないものと心しておけ。自転車泥棒程度でいちいち調書を取られて貴重な時間を失なっていては夜がいくら長くても足りやしねえ。

言いわけを語るのにプライドはいらない。

うんと見苦しく、なりふりかまわず嘘をつけ。
そして言ったそばからそれを心底信じ込め。
『ダスト・テスタメント』より

＊建前の良心＊
東京のゴミはメチャクチャ

東京の場合、ゴミは本来なら回収日の朝の8時までに所定の集積所に出すべき代物なんだが、これが厳密に守られているのはハイソな紳士淑女ばかりが住んでいるような高級住宅地か、町内会の結束が異様に強いキビシイ地区だけである。地方から上京したての学生やわけのわからんプータロー、YAKUZAなヒトたちや外国人たちがゴチャゴチャと住んでいるような都心にわりと近い住宅地では、もう何が何だかわからないくらいメチャクチャにゴミが出されているのが現状だ。

回収日の目安の「朝の8時」というのが、まっとうなサラリーマンたちの出勤タイムに合わせて設定されていることは言うまでもないのだが、現在の東京では、昔のようにみんなが同じ事情で同じ時間帯に働いているわけではない。俺のアパートにも、夕方働きに行って翌朝の10時頃帰ってくるような出勤形態をとっているおっさんがいる。若い学生連中の多くは、夜遅くまで起きて明け方近くに眠り込み、昼近くに眠い目をこすりながらコ

ンビニへ本日発売の週刊マンガを立ち読みに行くのだ。こんな情況では全ての人間に規則正しく「朝の8時頃にゴミを出せ」というのは無理かもしれない。

でも、まあ考えてみれば、俺のようなダストハンターは、みんながルールを無視してゴミ回収日の前夜にゴミを出してくれるからこそ、エロ本だとか女の下着とかという、お宝の数々を手にすることができるわけだ。だから連中のマナー違反を非難する資格などないし、それらについて文句を言うつもりもない。

ただ、ひとつ、清掃局の皆さんの苦労はゴミ漁りをしていて充分過ぎるくらいわかる。東京のゴミというのは可燃物と非可燃物に分けて捨てなければならないのに、回収日の前夜にゴミを出す連中のゴミ袋の中は、もう、とんでもないの一言に尽きるのだ。

鬼畜な俺が情けなくなってあきれるぐらい、ゴミの選別がムチャクチャ——。俺は昔、それに気づいて秘かに焦ったものだ。これは「マナーが悪くて選別していない」、というのでもなさそうだぞ。こいつらにそんな悪意があれば、世の中はもっと堕落していてもいいはずだ。ひょっとして、燃えるモノと燃えないモノの区別がつかないくらいアタマの足りない馬鹿ばかりが揃って住んでいるんじゃ？　冗談じゃねえぞ。街ぐるみで精●者揃いかァ？　養護施設じゃあるめぇに。ゴミの選別もできない馬鹿どもばかりでは、いつまでたっても日本はおろか、東京さえも下品のドン底に叩き落とせねえぞ。やれやれ、日本下品化計画を実行する前に、こいつらのＩＱを一人アタマ平均１００上げなけりゃならねえのか？　そんなメンドくさいことできるかよ。そう考えると憂鬱になってオ●ニーさえも

する気力が失せたものだが、とにかくそれぐらいゴミの選別というのはいいかげんにされているのだ。

清掃局の奴らを怒らせたらとんでもない事になるぞ。奴らがゴミの回収を止めたら東京は1カ月で汚穢都市だ。俺はそれでもいいんだがな。

時間別ゴミ漁りの手引き
ゴミ漁りの基本は早いもの勝ち

むかし、ある本で悲惨な話を一つ読んだ。それは実話で、畑のコヤシにもこと欠く貧しい農村で、若い娘が他人の家のこえだめから大小便を盗み、それが発覚して責められ、罪を恥じて首を吊って死んでしまうという話だった。他人の糞小便を盗んで、それを責められて自殺する人生――。ナカナカのものである。

ゴミ漁りは、勝者か敗者か、そして早いもの勝ちの世界だ。ゴミ漁りに仁義もナワバリも同情もへったくれもない。先に見つけて拾った者の勝ちである。俺はいままで16年間ゴミを漁ってきて、ナワバリがどうのと因縁をつけられたことなど一度もない。同時に俺は自分のナワバリなんて下らないものも主張しない。誰でもいい、俺の出すゴミを漁れるものなら漁ってみろ！　そのかわり、おもいっきりクサイぜえええええええ！

宵の口

午後7時から10時過ぎぐらいまでのゴミ漁り

この時間帯は、住宅地も人通りが絶えず、ゴミ漁りの初心者諸君は人目が気になって、早々と集積所に出ているお宝ゴミを見つけても拾いあぐねてしまうことだろう。

前述したように、東京は実にさまざまな人が住んでいるので厳密に「ゴミが集積所に出される時間帯」などというものは確定していない。しかし、一部のワイルドな連中を除いて、平均的な多くの連中は夜の闇があたりを包んで「暗くなって」からゴミを捨てている。だからこの時間帯は「ゴミが出されはじめる時間」なのだ。

「早いもの勝ち」の原則はこういうときに最大限に生きてくる。この時間帯なら無理なく散歩を装ってゴミを物色できるという利点もある。自宅近くから始めてゆっくりと深まりゆく夜を楽しみながらゴミを求めて彷徨い歩こう。

燃えないゴミの日の前夜は、特に早い時間にステレオやテレビやビデオデッキなどの良質の出物が期待できる。気の早い奴は7時から8時ぐらいに堂々とでかいステレオセットなどを出すものだ。

俺はめったにこの時間はゴミ漁りに出向かないのだが、たまに家の近所を歩いていて、グラビアの多いエロ雑誌の束を発見すると急いで家にもどり、自転車で乗りつけて持てるだけ持って帰る。捨てられたエロ雑誌を夜露で濡れる前に回収できるというのはとても素晴らしいことだ。捨てられてすぐのエロ雑誌と、夜露に濡れたエロ雑誌とでは、あとでオ

ナ●ーをするときのページのめくれ具合いが全然違う。スムーズにページがめくれることは、よいオ●ニーの成功条件の重要な一因である。オカズのエロ本やエロ雑誌は乾いていたほうが断然いい。濡れていいのは女のアソコだけだ。

というわけで、この時間帯は人目さえ気にならなければゴミ漁りのライバルもほとんどいない独占回収タイムである。とにかく早め早めにお宝を拾おうと思ったら「宵の口から」である。

深夜
午後2時過ぎから午前3時過ぎまでのゴミ漁り

この深夜という時間帯も、更に細分化すると午前1時前後をはさんで分けることができる。

住宅地の人通りが本当に減るのは、最寄りの駅の終電が全部終わってからと、風呂屋の（東京はたいてい午前1時まで営業している）閉まったあたりの午前1時過ぎぐらいである。それでも新宿や渋谷などから近い地区の住宅街は、わけのわからない連中が駅前をいつまでもたむろしており賑やかなものだ。

まず、午後10時過ぎから午前1時ぐらいまでは、宵の口とそれほど情況は変わらない。違うのはこの時間帯というのは、警察官が自転車で巡回して無灯火の自転車の不審訊問などを行うことが多いという点だ。俺も経験上、この時間帯に自転車で走っていて警官に呼

だから、お宝の拾い漏らしがあまりない。初心者は勉強になるので、ホームレスがゴミを漁っている現場を見つけたら、よおく観察しておくといい。プロの仕事を見るのはよい勉強になる。

明け方
午前3時過ぎから午前5時過ぎまでのゴミ漁り

明け方は午前3時過ぎには動き出す牛乳配達（今でもあるのだ）の車や、チラシの折り込みに忙しい新聞配達の皆さんのあわただしい動きが目立つ。夏なら午前4時をまわると空が白みはじめ、ゴミ袋もよく見えてくるので便利といえば便利だが、日の出前が一番寒くなるので風邪をひかないように注意しよう。

この時間帯には新たなゴミが出るということはほとんどない。朝の早いお爺ちゃんやお婆あちゃん達の出すゴミにはウメボシの種と古くなった入れ歯やゲートボールのクラブ（って言うのかな?）以外、期待すべきものなど何もないので、ここはひたすら自転車をこいでライバルたちが拾い残したお宝を探し回ろう。明るくなってはきているが、初心者が気になる人目は、爺さんや婆さんがほとんどなので大丈夫。歳も歳だし、10年以内に向こう側の住人になってるさ。

早朝

やオバちゃんににらまれても決して動ぜず、堂々としていよう。笑顔で相手の目を見据えて「おはようございます、気持ちのよい朝ですね」などと挨拶をすればキミの勝ちである。突然の礼儀正しい挨拶に相手は当惑して二の句がつげなくなるだろう。間違っても視線をそらせたり、オバちゃんをにらみ返したりしてはいけない。そんなことをしても相手の不信感を募らせるだけだ。明るく笑顔で挨拶すれば、オバちゃんはとりあえずは「怪しいけど挨拶をしてくれたから、きっといい人だ」と錯覚してくれるだろう。明るくなってしまった朝のゴミ漁りは、とにかく堂々とやるのがコツである。

朝から日中
午前8時過ぎからゴミ回収車がやってくるまでのゴミ漁り

東京の場合、朝のゴミ回収は早いところでは午前8時過ぎから始まる。しかし、どの地区も一斉に同じ時間で回収が終わるわけではない。回収車が巡回していく順路というのもあって、その日のゴミの量にもよるが、遅い所では昼の12時近くまでかかるところもある。午前中にそういうゴミ集積所を回ると、けっこう意外な「掘り出し物」を拾えることがある。つまりゴミ漁りは、朝の8時どころか回収車がやってくるその直前までが勝負なのだ。しかし、この時間になると、さすがに勤め先を持っている人間にはじっくりゴミを漁ることなどできはしない。こういう時間帯は、授業をフケ放題の気楽な学生か、定年後のジイさんバアさん、ホームレスなどのプロ向きなのである。

び止められたことが多い。そういう微妙な時間帯なので、自転車での徘徊には注意が必要だが、何もそれほど悪いことをしているわけでもない。堂々と普通に行くべきである。

そしてゴミ漁りのゴールデンタイム、深夜１時の鐘が鳴る。実際、午前１時あたりというのは、マナーを守らない若い連中の中でも比較的朝の早い連中が寝る前にゴミを出す、まさに「回収日前夜のゴミが出そろう時間帯」なのだ。ゴミ漁りをスタートさせるなら、この「午前１時」が最も適しているだろう。夜も深まり、月は冴え、少し傾いて優しい光を投げかけてくれる。いい雰囲気だ。これからが本当の夜の始まりだ。特に良質のゴミの出る住宅街は、終電も終わり人影もまばら。これなら初心者でもゆっくりとゴミを物色できるだろう。別に人の目なんか気にする必要もないのだが、あやしい人間を見かけたらマメに警察に通報する善良な市民も少なくないので、なるべく人目にはつかない方がいい。

ダストハンターのライバル――新聞や雑誌の束を狙って廃品回収業の軽トラックが住宅地を徘徊し始めるのもこの時間帯からだ。しかし、彼らの通った後は新聞紙一枚残らないのかといえばそんなこともない。彼らの狙いはあくまでも「ある程度まとまった新聞や雑誌の束」なので、ゴミ袋の中の小量のヌード写真集や下着ゴミ、プライバシーゴミなどは手付かずで残っている。強力なライバルは、むしろ新宿や渋谷に近い住宅街でゴミ漁りをしているようなホームレスたちだろう。彼らにとってのゴミ漁りは生活がかかった真剣な行動だし、ホームレスだってヘアグラビアを見ながらオナ●ーぐらいするだろうからあなどれない。彼らはゆっくりと時間をかけて集積所のゴミを一個一個ていねいに見て回る。

当然、ライバルたちの活動も盛んである。よいゴミを見つけても、それだけでは安心できない。ステレオを見つけてスピーカーを先に運んで戻ってきたら、アンプやチューナー類が他人に拾われてなかったというようなこともよくある。「持ち帰れないほどのお宝を目にしたときは一番欲しいものから持ち帰る」という鉄則を覚えておこう。

このように春はゴミ漁りの初心者でも容易にお宝を手にできる季節だが、決して調子に乗って　はいけない。人の出入りの激しい4月をまわると警官の深夜巡回も一時的に厳しくなるので地元　警察の夜の巡回コースと時間ぐらいは把握して不審訊問に備えておこう。

油断は禁物、チ●ポはイチモツ

『ダスト・テスタメント』「鬼畜の心得」の章より

夏

雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ、ゴミヲ漁レヤ夜明ケマデ

ゴミ漁りにとっての天敵は雨だ。どんなお宝も雨でびしょ濡れになってはおしまいなので、6月から7月にかけての雨の多い梅雨時期は要注意である。しかし、ダストハンターたるもの、雨ぐらいでメゲてはいけない。雨中でも片手でカサをさして、自転車で地元の最良ポイントぐらいは見てまわる根性は必要だ。紙袋や紐でくくった雑誌類は雨で濡れて

午前6時過ぎから午前8時までのゴミ漁り

世の中規則正しい人間たちというのはいるもので、朝になってから捨てられるゴミというのも当然ある。そして、早朝からゴミ漁りを始める連中もいる。老人は朝が早いせいか、この時間帯にゴミを物色する連中はそのほとんどが高齢のジィさんだ。俺は総称して「朝まわりの爺さんたち」と呼んでいるが、こいつらは古くてゴツイ自転車の荷台にダンボール箱をくくり付けてやってきて、堂々と集積所のゴミを物色している。それも見ていると、俺の好物のエロ本には目もくれず、故障した置き時計だの木材の破片だのと、俺の目から見るとずいぶんつまらないものを拾っていく奴らが多い。おそらく、こういう奴らが役所に届けも出さずに勝手に家をメチャクチャに増築したり、自分の家の庭に拾ってきたゴミをディスプレイして、ご近所に愛と不安をまき散らかすんだろう。

——などと、老い先の短い連中と競ってもしかたがないので、俺はこういうジィさんたちを温かい目で見守ってやることにしている。また、工夫次第で彼らの利用価値というのもあるもので、自分のカンと予知能力を鍛えるために、どのジジイがいつ死ぬかの予想を立ててカレンダーに記入し、毎朝家の窓から「今日はまだ生きているようだな」などと観察するのはナカナカ楽しくてオツなもんだ。

この時間はすでに外も明るいので、人目も気になるところだ。ゴミを漁るにしても自転車がなければ家の近所ぐらいで止めておくのがよいだろう。使えそうなゴミが近所の集積所に出されていたら、即ゲットするのは当然として、そのとき近くの家の庭からバアさん

れは説明するよりも、そのゴミの山を見れば一目瞭然なのだが、キ●ガイがヤケクソになって路上に憎悪を叩きつけながら捨てたという感じのゴミの山は見る者を圧倒せずにはおかない。こういうゴミの山は、退屈な美術展よりもはるかに見ごたえのあるもので、眺めているだけで楽しいものだ。「何も拾って持ち帰るだけがゴミの楽しみ方ではない」ということもぜひ憶えておいてほしい。

秋

継続は力なり……派手さはないがハズレの少ない季節

長く蒸し暑い夏も終わり、人々がやっと落ち着きを取り戻し、部屋の中を整理する気になる季　節がやってきた。熱にうかされたように燃え上がった夏の日の恋も過ぎてしまえばよい思い出。しかし、それは秋の訪れとともに始まった新しい恋には必要のないものだ。こうして捨てられる海水浴場でのスナップ写真や水着、観光地からの手紙やキーホルダーなどの「夏の思い出ゴミ」はなかなか情緒のあるものなので、秋の旬のゴミとして見逃せない。涼しくなった夜の魅力を満喫しながらじっくりとゴミを漁ろう。

季節の変わり目にはいつもシーズンの終わった服がまとめて捨てられたりする。秋にはその前の夏物の服が捨てられるので、躍動するギャルの若さと汗をたくさん吸ったTシャツや短パン、水着、ミニスカートなどの肌に密着するタイプの服の好きなフェティッシュな連中にはハラショーな季節と言えよう。考えてみれば、俺は一年を通してこの時期に一

春夏秋冬のゴミ漁り
日本のゴミ――四季折々のポイントと対策

春
桜の季節は豊かな引越しゴミシーズン！

３月から４月にかけての引越しシーズンは一年を通してのゴミ漁り最良期間だ。気の早い連中は２月に入った時点で引越しの下準備のゴミを出しはじめる。ゴミ集積所に本や雑誌、ビデオテープ、カセットなどの「文化的消耗品」が数多く出されはじめるといよいよ本格的な引越しゴミシーズンの到来だ。更に３、４月は新入学、卒業、就職シーズンが重なり、引越しはしなくても自分の人生を精算する連中が大幅に増える。年間を通して情念ノート（第５章参照）や手紙、日記などが一番多く捨てられるのもこの季節の特徴だ。

まじめなダストハンターにとって、この時期の忙しさはボーナス時期の風俗嬢なみと言っても過言ではないだろう。路上のゴミ集積所はどこも一杯で、学生の多い住宅地なら、最盛期には一晩で10件近くも引越しゴミが発見できる。これを一人で拾って持ち帰るのはエラい労働量である（バイトを雇いたいぐらいのものだ）。持ち帰ってもチェックをするのは後回しにして、すぐまた拾いに出かけないととても見つけたゴミ全ては拾えない状態だ。まったく、夜がいくらあっても足りやしない。

して、身が裂けるような寒さをその身体に刻み「この寒さこそが都会の厳しさと世間の冷たさだ。泣いても叫んでも誰も助けてはくれない。ここでヘタをうって負け犬になったら、一生みじめに落ちぶれて寒い中を彷徨わなければならないんだ」などと、自分に言い聞かせて、世間一般への憎悪と「おれはビッグになってやる」に代表される永チャン的成り上がり根性を燃え上がらせる。鬼畜の基本的姿勢である「攻撃的人生」を送るための闘争心を冬の夜のゴミ漁りで鍛えるのだ。お宝は集まるし、性格は悪くなる。よいことづくめである。

季節のゴミとしては、12月のボーナスシーズンの前後と、暮れの大掃除シーズンは、いつにも増して電化製品、家具などのナイスなお宝の多数出る時期なので、ここがダストハンターにとってのゴールドラッシュ、「目指せ！　カリフォルニア」といったところだろう。寒さにめげずに漁り続けた奴だけが栄光のお宝を掴めるのだ。

東京では暮れから正月にかけて1週間ほどゴミ回収もお休みになる。この休みの終わる頃はどこでも集積所には大きなゴミのお山が出来上がるが、このときのゴミに限ってはリサイクルできない生ゴミや生活ゴミがほとんどなので漁るだけ無駄。それらの正月ゴミが全部片付いてからゴミを漁りを始めよう。つまり、ダストハンターの「ゴミの漁りぞめ」は1月の8〜9日前後あたりからなのだ。初荷でいいモノを仕入れたら1年間よいゴミに恵まれそうな気がするのでここは頑張りたいところだ。

また、食い物系のゴミ漁りをやるなら、モノが腐りにくいこの時期からやって胃袋を慣

ダメになっても、ポリ袋の中のものなら素早く持ち帰ればまだまだ充分利用可能な場合だってある。また、全てのゴミ集積所が雨ざらしの路上にあるわけではない。小さな小屋形式のマンションのゴミ置き場や、ひさしのついたゴミ置き場など、捨てられたゴミが容易に雨に濡れない環境はしつこくチェックすべきだ。

俺の経験では、梅雨の雨は夜半にはわりと上がってしまうことが多い。それから先に路上に出されたゴミは、案外濡れていないものなので、あきらめずにしっかり漁ろう。

梅雨を過ぎた夏の暑い盛りはそれほどよいゴミも出ないものだが（暑くて部屋を片付ける気にもならねえんだろうな）、いつ、どこで何が出るかわからないのがゴミ漁りの魅力。鬼畜たるもの蒸し暑さにめげることなく、コツコツ漁り続けることが大切だ。また、この時期は痴漢や変質者の多数出没する時期なので、くれぐれも服装には注意しよう。クソ暑い熱帯夜などは全裸でゴミ漁りができればどんなに気持ちがよいだろうかとも思うのだが、それは残念ながら、日本の街中では今のところ実現不可能なユートピア思想である。

夏のゴミ漁りの狙い目は6、7月のボーナス時期に前後して増えてくる旧型の電化製品ゴミ。これはサラリーマン諸君にボーナスが入り、新型の製品の買い替えが進むからなんだろう。そこを狙えばテレビやステレオやビデオ、ミニコンポなども楽に揃う。

とんでもなく蒸し暑い夜。長年ゴミを漁っていると、あまりの暑さに脳の回路が完全に焼きキレてしまった馬鹿がとんでもないゴミの捨て方をするという暴挙をたまに見る。こ

い。本屋などがたまに出版社からのプレミア品を捨てていることもあるが、これもジャリタレの大判ポスターとかカレンダーとかで、あまり拾う気になれない。どうしても漁りたいのなら、商店街の表通りから一本裏の道のゴミ捨て場を探すといいだろう。そこなら店の業務から外れた、住宅地のゴミにいくらか近い出物があるかもしれない。

＊オフィス街

当たり外れが激しく、徒歩では持ち帰るのが困難な机や椅子の立派なものが出たり、企業で購読されていたような雑誌や本が大量に捨てられていたりするのがオフォス街の特徴だ。オフィス街に限らず、机や棚といった大型のゴミはワゴン車や2トントラックなどのクルマが用意できるなら挑戦も可。知人からの伝聞だが、都内にはそうやって高級住宅街を車で徘徊し、商品を仕入れる古道具屋もあるという。

オフィス街はその街の特徴によって出てくるゴミもまちまちで、たとえば電化製品やパソコンの店の多い秋葉原の裏通りでは型の古い電化製品や、まだ使えるパソコンのキーボードなどが落ちていたりするし、青山通りのオシャレなオフィス街では『ヴォーグ』などの海外のファッション雑誌が数年分まとめて拾えたりする。印刷所や製本所の多い文京区の水道橋付近では、その昔、できそこないのビニ本を大量に拾ったりもした。下着フェチの俺としては、機会があれば南青山のワ〇ールや、新宿の〇愛付近を物色するようにしているが、さすがにそんなものは夜中に落ちてはいない。ちゃんとした会社ほどゴミ管理

番多く女の下着ゴミを拾っている。「汗を多くかく夏は下着の消耗も激しく、しょっちゅう洗濯をしたりするので必然的に下着の傷みも早まり、秋にはすり切れたパンティを捨ててしまう」といったところだろうか。いずれにしても結構な話である。

この時期は日本人の生活習慣上、引越しだの大晦日だのという大きなイベントは特にないのだが（区内の秋祭りなどのあとのゴミはカスカス。漁ってもムダ）、夜が長いせいかゴミは安定して捨てられる。読書シーズンのせいか書籍類やエロ雑誌のゴミも多数出るので読書好きやオナ●ー好きにも楽しい季節だ。

あくまで俺の経験だが、非科学的なゴミ漁りの秘儀をひとつだけ公開しよう。ポイントは「月の大きな夜」だ。理由は知らないが、満月の前後には若いムスメの「過去の精算ゴミ」が数多く出る。夜空にかかる満月を見つめてメッセージがきたような気がしたら外に出て足の向くままゴミ集積所に向かうがいい。運がよければお宝があんたを待っているだろう。

冬

モノが腐りにくいこの時期に鬼畜としての根性を腐らせろ！

この時期のゴミ漁りは、決して楽で楽しいものではない。しかし、見方を変えて「都会の冷たさをハダで実感できる季節」と考えれば、夜の寒さもまんざら捨てたものでもない。この季節をゴミ漁りで乗り切って、フヤけた身体と精神を引き締めよう。戸外を徘徊

こともあるが、手を洗えばいいだけのことだ。恥と潔癖さを捨てた者だけがタダで晴報をつかめるというわけだ。ひとつアドバイスを付け加えておくと、駅で雑誌類を拾えるのはゴミ箱ばかりじゃない。階段の手すりに挟んで捨てていく奴、自動販売機の上に置いていく奴、通勤定期の申込み所に無造作に置いていく奴、そして便所の中にエロ写真集やホモ雑誌を捨てていく奴もいる。駅のゴミ漁りではあらゆる所に気を配り、なおかつ自分のサイフをスリ取られないように注意するのがポイントである。俺は電車に乗ったら運賃の約3倍の額の新聞や雑誌を拾うことを心掛けている。駅こそ、まさに情報ステーションなのだ。

拾える雑誌も、駅によって様々である。漫画週刊誌やスポーツ新聞はどこの駅でもまんべんなく拾えるが、人の何倍もスケベな俺はJRなら神田駅やお茶の水駅、地下鉄なら神保町駅などのオヤジ臭い駅のゴミ箱に注目する。そういうところではサラリーマンの親父たちが家に持ち帰れないような豪華で過激なエロ写真集を捨てて行ったりするからである。「芳賀書店」などの店名入り茶封筒を見つけたら即ゲットだ！　中身が入ったまま捨てられているケースもままあり、たまにホモ雑誌だったりもするが、『S＆Mスナイパー』や『お尻倶楽部』などのステキな専門誌が入っている可能性は高い。

＊住宅街

お宝の宝庫はなんといっても住宅街である。それも、ゴミをきちんと回収日の朝に出す

らすといいだろう。友達と残飯を喰って腹を壊すか壊さないかを競う「ゴミ漁りロシアンルーレット」を楽しむのも一興だ。

地域別ゴミ傾向
最上の出物を求めて――狙い目はチ●カス若人どもが住まう低級住宅地

一口にゴミといっても、地域によって出されるゴミの傾向は明確に違うものだ。ここでは地域をフランク・ザッパではなく大ザッパにオフィス街、商店街、駅、住宅街と4つに分けて考えてみた。厳密にいえば更に細分化できるがだいたいの傾向はこれでわかる。

＊商店街

総合的に見て一番期待できないのは住宅地に隣接する商店街のゴミである。これは意外かもしれないが、商売人というのは何でもきっちり無駄なく使い尽くすという、よい意味で「ケチ」なタイプが多いようで、飯屋の残飯以外は期待しないほうがいい。

俺の近所にも立派な商店街があるが、再利用できそうなゴミはほとんど出ない。せいぜい喫茶店などに置いてあった手垢でボロボロになった週刊誌ぐらいだ（そんなもん手に取る気にもならねえけどな）。

たまに10年以上前の古い帳簿や、選挙の時に商店街の応援する候補の後援会の運動ノートなどというヤバ目の情報ゴミも出るが、俺はそんなものには何の関心もないので拾わな

オナ●ーや妄想にも拍車がかかるというものだ。

　このように、ゴミ漁りを楽しむなら若者の多い住宅街に住むのが一番だが、どうせ住むならゴミ回収日の違う区と区の境界近くに住むことをおすすめしたい。そうすれば土曜の夜以外（日曜日に回収する所はほとんどない）ほぼ毎晩、区をまたぎながらゴミ漁りが楽しめるのだから。

も行き届いていて、夜中に路上に出したりはしないものなのだ。
さて、変な例だが、以前、友人のニコラス・N・啓司から、某オフィス街でゲットしたという大○省○○局勤務のOL（省の名前入りの封筒から判明）が捨てたラブレターの束をもらったことがある。これは関西方面の支局に飛ばされた年下の恋人からの手紙で、文面には相手の名前を連呼しながい音引きを引き伸ばして便箋を埋めるという、お役人らしい「手抜き」テクもあって非常に楽しめた。オフィス街の情報ゴミからはそういうハイソな連中の情報ゴミも出てくる。そこから、俺のような下町の工員とは通勤電車でもナカナカすれ違わないようなステキなホワイトカラーの連中の生活や恋愛がうかがえたりするのだ。いままでオフィス街で俺が拾ってきた情報ゴミ（不倫恋愛の約束メモなど）から判断すると、連中の生活はやたらと複雑そうでかったるくて、負け惜しみじゃないけど「あんまりうらやましくないぜ」って感じなんだけど、たぶんそれは俺のひがみ根性からくる思い込みなんだろうな、きっと――。

＊駅

駅構内のゴミ箱は新聞や雑誌の宝庫である。東京の場合、新宿や渋谷などの主要駅を中心に、拾った雑誌を百円均一で路上販売する人達がいて、雑誌の拾得競争は年々熾烈なものになってきているが、先に述べた通りゴミ漁りは縄張りのない早いもの勝ちの世界なので、初心者でも簡に戦いに参加できる。ときどきツバやタン付きの雑誌をつかんだりする

ゴミでまぐ●ったご近所のオンナたち

第3章　女体ファイル

ような上品な奴らが住んでいる高級住宅街ではなく、地域社会のルールを無視して好き放題にゴミを捨てるクソ学生やチ●カス独身サラリーマンがたくさん住んでいそうな低級住宅街がいい。そういう地域は、住んでいる連中のモラル意識も低く、回収日の前夜に出されるゴミの量もけた外れに多くていろいろなものが拾えるのだ。

実際、住宅街はゴミのデパートである。若いのも年寄りも、様々な人間が数多く住んでいるので、情報ゴミやら引っ越しゴミやらほとんどの種類のゴミが拾えるのでうれしい。いつ、何が拾えるか全くわからないというのが住宅地のゴミ漁りの醍醐味とも言えよう。たとえば、企業や会社の機密書類なども、オフィス街よりも住宅街の個人の家からひょっこり出たりするものである。そうして俺は、住宅地のゴミ袋の中からマル秘の赤いハンコを押した書類が出てくるのを見るたびに、情報管理と機密保持の難しさを感じるのだ。

当然だが、女性の下着ゴミも住宅地がいちばん出物が多く、コレが産地直送野菜のように新鮮でステキな匂いにあふれてムンムンなのだ！　若い女から熟しきった人妻、アガリ目前のく●ババアまで、使用済みのタンポンやナプキンなどの生理ゴミも「釣り」でいえば入れ食い状態の大判振舞い、ホントの出血大サービス状態なのが住宅街の夜のゴミだ。その量たるや、汚穢好きのオレですら馬鹿ばかしくていちいち在庫を確保する気にならないんだから、どれだけそういうゴミが出ているか想像がつくだろう。同じ街に住んでいれば、そのナプキンや下着を着用していた女の顔もしっかり確認できたりするので、後々の

●女体ファイル1

杉並1号（山本繁美・仮名）34歳



□昭和○年○月○日生まれ
□身長約162センチ　やせ型　しかし胸は大きい
□顔は若いころのいしだあゆみ似
□神奈川県茅ケ崎市出身　某有名女子短大卒業後、○○へ就職、見合いで今のご主人と知り合い結婚した模様。初夜のフィニッシュは騎乗位だった（妄想電波の調べによる）。
□いつも出すゴミ　生活ゴミの他は『with』と『女性自身』を愛読
□ゲットした下着　ベージュのガードル　ピンクのパンティ2枚　ブラジャー2枚　ダンナのステテコ
□生理の周期平均28～34日　ナプキン派　ロリエを愛用
□趣味テニス&水泳（学生時代からやっていた）
□子供は○○保育園に通っていて○時頃迎えに行く（下着泥棒をするならそのときだ）。

地域別ゴミ早わかりチャート

地域	規模	総合	雑誌、本	電化製品	家具類	服、下着	プライバシー系
オフィス街	大型	大きい会社ほど、ゴミも管理されていて駄目だ	ボチボチでんな	ボチボチでんな	あまり目にしないが、出ると凄いものがある	ほとんどねえだろ	機密書類はむしろ住宅地からのほうが出やすい
	小型	ときどき、変な出物がある。暇なら挑戦しろ	捨てられるときはまとめて捨てられるのでよい	旧型のＴＶぐらいしか出ない	机や椅子、マネキン人形なんかが狙い目かな	たまにオフィス・ラブのあとみたいなのが出る	せいぜい手紙ぐらいなもんですね
商店街	大型	商人は無駄なくきっちりモノを使うのでダメ	大したことなし。喫茶店の雑誌程度しか出ない	電気屋の前のゴミはぜんぜんダメだ	あまり目にしないが、出てもカスばかりだ	俺は今まで拾ったことがないぞ	がめついヤツはプライバシーもがめつくてダメ
	小型	がめつい連中が多いのか、ろくなものなし	上に同じ。あまり期待できない	落ちていても使えないものが多いので無視	上に同じ。期待しないほうがいい	たまにあるけど、バアサンのじゃ抜けねえよ	たまに帳簿類の古いのがあるがどうでもいい
住宅街	高級	よい出物もあるが、前夜にゴミを出さない	雑誌も医療関係の専門誌とかハイソなのが多い	まだ使用できるものが捨てられるのでうれしい	一番期待できる地区。車で回りたくなるぞ	捨てる下着も高級品。拾うとうれしいね	生活の格差を実感できる情報ゴミが拾えるぞ
	並	お宝の宝庫。毎日でも回って漁るとよい	新しいものばかりでなく古本・珍本も多く出る	量だけは一番期待できるが使えない物も多い	安い本棚とかカラーボックスがよく出るね	一番期待できる地区。まめに回るのがコツ	一番期待できる地区。人生の深さが学べるぞ
駅	大	朝夕漁れば新聞や雑誌が豊富だが競争が激しい	売店で買うのが馬鹿らしいくらい大量に出る	壊れたウォークマンとか拾ったことあるけど	ねえよ	便所でウンコ付きのブリーフとかあるけどね	ときどきヤバイ書類とかが捨てられている
	小	量は少ないが帰宅時は新聞・雑誌がわりと豊富	字の多い雑誌は帰宅時の沿線の駅でゲットだ	ほとんど期待できない	ねえだろ	ほとんどねえだろ。女子便所は男は入れない	家のゴミを捨てているヤツがいるぞ。期待薄

りまぐ●ってできたガキを誇らしげに連れ歩く下品さといったらないぜ。
　実際、あそこの黒さはともかく、いいカラダしてんだもんよ。学生時代はテニスと水泳で鳴らしたんだってな。学生時代の友人からの暑中見舞いを破りもせずに捨てるからバレバレだぜ。短大通ってた頃は六本木でブイブイいわせてたそうじゃねえか。あそこがすり切れるまで必死で男を勉強したんだなあ。そのかいあってか旦那は今じゃあ某一流保険会社の課長だもんな。よかったじゃねえか。俺なんか逆立ちしても一緒に道を歩けないくらいの身分のハイソなお方だな。

　俺が奥さんを妄想電波で●すのは奇数月の隔週水曜日と決めている。妄想世界の中で俺は米屋になったり、三河屋になったり、保険の外交員になったり、または区会議員の○原になったりしながら、奥さんの家の玄関で、居間で、駅近くの安ラブホテルで、そして選挙事務所のロッカールームでケダモノのようにあんたを四つん這いにして●しまくるんだけど、頼むからそんなに恥知らずによがらないでくれよ。愛しい旦那がいるってのにこの乱れようはどうしたわけだ？　こうしてまた俺の女性不信はつのるばかり――というのは大きな嘘で、俺ははじめから女どもにそんな期待なんかしてねーよ、馬鹿。

第3章

ゴミでまぐわった
ご近所のオンナたち

女体ファイル

からって、手持ちのビルを手放したのはてめえの商才がなかったからじゃねえか。欲しいものをいろいろ買ってもらったからとはいえ、奥さんあんたはそんなコトに責任感じる必要はなかったんだよ。あんたのダンナは、あんたが家計を心配するあまり風俗で働き出したことを責めて離婚を決めたようだが、何ていう薄情なやつなんだろう。いったい誰のために奥さんがフロに身を沈めたか考えてみろってんだ。ダンナのためにカラダ売る女なんてかわいーだけじゃねえかよ。そんな女をいじめるなよ。

長身で髪が長くてブランドファッションに身をつつんで街を歩いていた奥さんはいつも美しくて、いかにも「青年事業家の若奥様」って感じでステキだったよ。いつもうす汚いカッコしてる俺の姿なんか、街ですれ違っても道端の馬糞程度にしか見えなかったろうな。でも俺はそんな奥さんの後姿の尻のあたりになめくじのように視線を走らせてギラギラ欲情しちゃって、すいぶん前から家もつきとめて、秘かに月イチぐらいでせ●ずりのオカズにしていたんだ。パンストだってベージュのやつを今でも持ってるしな。

奥さん、今は○○県の実家に帰っているようだけど、あんたが一生懸命書いてダンナ宛てに出した「私が悪かったんです。もう一度やり直しましょう」という手紙は、無慈悲にも真っ二つに引き裂かれて燃えないゴミの日に奥さんの日用品と一緒に捨てられていたよ。奥さんが風俗で働いていることを知って逆上したダンナはあんたを叩き出したあとで、あんたの服や下着をみんなまとめて捨てちまっていたぜ。ひどい奴だよなあ。まあ、夫婦間の問題だから、ダンナにはダンナの考えがあってのことかも知れない。だから俺が

くっくっくっ、山本○○の奥さん、知ってるんだぜ。上品で貞淑そうなツラこいちゃってさ、あんたがツーショットダイヤルのバイトやってるのみんな知ってるんだぜ。だけど、おカネもらえるだけマシってもんだよ。フーゾクやってる女の友人が言ってたけど、テレクラだのツーショットだののバイトは意外とトラブルが多くて、カネもらうの大変らしいな。まーそんなコトはどうでもいいけど、あんたがその賢そうな顔をゆがめてあられもない痴態をさらして電話に向かってアハンウフン悶えているなんてとっても想像ができないなあ。これは奥さんの汚れたパンティを拾った俺の妄想なんだけど、マ●コの色があんなにどす黒くちゃあ、女としてはもう終わってるな。ダンナもあんまり明るいところではク●ニしてくれないだろう。言っちゃあナンだがアレじゃあ無理もねえよ。

いつも踏切で電車を見るとウーウー言いながら手を振って喜ぶガキのマサト君（２歳３カ月）の世話も大変だよな。俺は赤ん坊や子供が大好きでよォ、日曜日に旦那とガキを連れて外出する奥さんを見る度に、ああ、奥さんは旦那さんとあんなこともこんなことも、そして四つん這いになって気高く美しい顔をおもいっきり歪めてベッドをギシギシいわせながら自分でもヒイヒイいって汗みずくでガキをこさえたんだなあああ、って思うと、その姿がぜんぶ見えちゃってよお、ああ、たまんねえ。ちったあ恥を知れよと言いたいところだが、俺ははっきり言って恥知らずなメス犬じみた奥さんのことが大、大、大好きだぜえええええ。もーほんとうにたまらねええなあああああああ。そうして旦那さんとしっぽ

●女体ファイル3
練馬3号（大泉よしこ・仮名）現在25歳



□身長175センチ　足のプロポーションは最高！
□大柄でブラジャーは85のＣ！　顔は十人並だが日本人離れしたナイスバディ
□都内○区出身　某美術大学卒業　95年春から絵の勉強でニューヨークへ
□ゲットした下着　パンティ3枚　ブラジャー1枚　他に、水着と日記と見合い写真

よしこちゃん、元気ですか？　ニューヨークは怖くないですか？　渡米してもうかれこれ1年近くなりますね。あなたがニューヨークへ行く前に捨てていった引越しゴミから入手したワンピースの派手な水着は今でも大切にとっておいてます。あなたは大柄だったので、ボクでも少々無理をすればこの水着を着れないこともありません。でも、さすがにこれを着て区営プールに行ったらキ●ガイと思われますよね。
一緒に捨てていった豪華なカラーの見合い写真も大切にしています。引越しの直前まで

●女体ファイル2
杉並2号（杉山加奈・仮名）　当時26歳



□昭和○年○月○日生まれ
□身長約162センチ　足のプロポーションは最高！
□顔はおっとりして目鼻立ちの整った日本的な美人
□○○県○○市出身学歴不明　20前後に青年実業家と結婚
□ゲットした下着　パンテイ&ブラジャーセットで20枚余り　他、多数

○○家の若奥さん、あんた偉いよ。オレはマジで感動しちゃったぜ（ウソ）。
あんたとダンナの破局はとても不幸なことだ。離婚なんてどこにでもある話だけど、あんたの場合は悲惨すぎるぜ。
それにしてもあんたのダンナはけしからん奴だな。バブルがはじけて景気が悪くなった

そう思います。ボクなら前戯で軽くスクリュー・クン●を2時間。その後、平均よりやや太目のペ●スでじんわりとあなたの深そうな膣をかき回してヨガらせる自信はあります。後戯も含めてク●ニを合計3時間、ア●メは最低3回は保障します。なんなら未開発のア●スもシベリア鉄道のようにしっかりと道をつけて開発いたしましょう。だからニューヨークから凱旋したら僕と一発キメませんか？　あなたは体格がよくて身長もかなりあるから、きっとニューヨークではモテモテですね。今も電波を飛ばして海の向こうのあなたのことを調べると、股関節が外れるくらいガタイのよいガイジンさんにハメ●われて、女優どころか街娼気分でイキまくっているあなたのみだらな姿がよく見えます。ボクは間違ってもあなたのことを「おまえは日本の恥だ！」なんて思いませんから、しっかりと穴を拡げて男の味を覚えて帰ってきて下さい。それまでチ●ポをしごいて舌技を鍛えて、俺は待ってるぜえええええええええ！

とやかく言うべき問題でもないんだけどさ、俺は奥さんをオカズにセン●リこいてたもんで、まんざら人ごととは思えないんだよな。

こんなのも、バブルが生んだ悲しくてお安い物語のひとつなんだろう。それなりに高級な暮らしもしたようだから、儲けもんだと思わなきゃって考え方もあるだろうけど、一度上にノボッてよい暮らしを覚えてしまったあんたたちには、もうこれ以上生活レベルを落とすのは大変だろう。すると、俺は貧乏なりに幸せなのかもな。あんたたち夫婦を見ているとそう思うぜ。

俺は鬼畜なので「おま●こは全てタダがいい！」という立場で売春には反対なんだが、金に余裕があれば奥さんの勤めていたソープに行きたかったよ。俺は風俗誌のバックナンバーで奥さんのセミヌードを見たとき、「ああ、このハナシは本当のことだったたんだな」って初めて実感できたんだ。だって、いかにも昼メロにありそうな、哀しいくらいに安い話なんだもの。

んだからな。知らない奴が見たら、アパートで店開いてウリやってんじゃねえかって疑うぞ。俺はお前のゴミ漁ってるから、お前が新宿の某デパートのDCブランドのショップに勤めてるって知ってるからいいけどな。

それにしてもお前、失礼な女だよな。確かに俺はいつも小汚ねえカッコしてるさえない工員だけど、お前を襲うほど飢えてもいないんだからアパートの入り口で会う度にまるで強姦犯人を見るような目で俺を見るのはやめろよ。ハウスマヌカンだか何だか知らねえけど、偉そうに気取ってンじゃねえよ。人が作った服売ってるだけじゃねえか！　だいたいお前、字ィ読めんのかァ？　俺はお前のゴミをチェックするようになって2年半になるけど、お前、本はおろかファッション雑誌だって捨てたことがないじゃねえかよ。それってちょっと変だぜ？　そのかわり服はよく捨てるよなあ。ワンシーズンに平均3回は大量処分してるもんな。おまけに、お前の捨てる服はみんなどこも破れてないし、まだ充分着られるものばかりじゃねえか。気前がいいというか何というか——お前、もしかしたら服しか買ってねえんじゃねえか？　メシはハメさせた男にオゴらせて、ってか？　全くいい暮らしだよなあ。

俺はよォ、お前の捨てる下着なんか拾っても面白くも何ともねーんだよ。ブラジャーは70のAで、小さい胸は俺の好みだし、パンティは生乾きの白いオリ●ノ付きを洗わずに捨ててくれるからとおーってもありがたいんだけど、いつも人を小馬鹿にしたような偉そうな目つきがどーにも気にくわなくて、こちとらセン●リをする気も失せちまって、チ●ポ

あなたが履いていた黒い大きなパンティは汚れの部分にカビが生えてしまいました。もうこうなってはニオイを楽しめません。これはあきらめて洗ってからブリーフ代わりにすり切れるまで僕が使ってあげますから安心して下さい。女物のパンティ類ははき心地がよくてとても好きです。それにしてもあなたは大胆な人ですね。見合い写真と下着と水着を一緒のゴミ袋に入れて捨ててくれるような親切な女のコは今どき珍しいですよ。お礼に僕でできることなら、セッ●クスを中心にク●ニからま●ぐり返しまで何でもしてあげたい気分です。だから早くニューヨークから帰ってきてください。

「会社に勤めるような平凡な人間になりたくない」と、あなたは美術学校を卒業しても就職をしませんでしたね。風呂もついていない西日の強烈な木造アパートに住んで、週３回、夜にスナックでバイトをして絵の勉強を続けるなんて、安定志向の普通の女のコには、なかなかできないことですよ。あなたが大学ノートにつけていた家計簿をしみじみ読むと食費や光熱費を切り詰めてギリギリのところで生活していた様子がよくわかります。芸術やるってのもタイヘンですねえ。それでニューヨークに行くと何かいいことでもあるんですか？

　そうそう、ところであのセ●クスのヘタな彼氏とは別れたんでしょうか？　あなたは日記でずいぶんと嘆いておられましたね。前戯もろくにしないでやたらと入れたがるなんて男として最低ですよ。「フ●ラなんてするほうはちっとも気持ちよくないし、入れるとすぐイッちゃう。女優気分にでもならなければやってられない」って書いていたけどボクも

●女体ファイル5

杉並5号（山田みどり・仮名）45歳



□身長約162センチ　ややグラマー　体重は50キロ台でしょう

□キレ長の目元に笑うと小ジワ　若い頃はキレイだったであろうキツネ顔系　現在は服装も地味で生活臭がプンプンのくたびれたオバン

□見た目が温厚そうな52歳のダンナはK大卒で某都市銀行に勤務。ときどき立派な同窓会の通知が来ていてさすがは有名大学って感じ。若い頃は柔道をやっていたらしい。

□ガキは一人息子が京都の某大学に入学したため昨年から旦那と二人暮らし。

□ゲットした下着　ブラジャーは80のC　パンティ3枚　拾ったのは形も色も地味なベージュや薄いピンクのものだったが、この家の物干しの奥の方には時々20代の女性が着るような派手な下着が干される。いくつになってもオンナはオンナ――なんですかねえ。パンストに付いたニオイを嗅ぐと「さすが熟女！」という感じでイイもんだ。

□性格は気が強く、普段は愛想がいい。やかましいシキリ屋さんタイプ。

●女体ファイル４
杉並４号（渡辺エリカ・少し仮名）24歳



□不良品
□身長１４６センチ　小柄で細身　体重は30キロ台かも
□ブラジャーは70のＡ！　目がパッチリ、顔だけはタヌキ顔系のかわいい女
□山○県出身　新宿の○○デパートのＤＣブランド店に勤務
□ゲットした下着　パンティ８枚　ブラジャー２枚　他に服は多数ゲット。しかし、あまりうれしくない。
□性格は絶対に悪いはず。すぐに人を見下す目をするのが特徴のヤな女。

オイオイ、ワタナベ～お前、ええかげんにしとけよ！　ちょっと小柄で可愛い顔してるからって派手にやりすぎてねえか？　お前に関しては、いったい何人男がいるんだかさすがの俺もちょっとわからねえぜ。なにしろ見る度に違う男とアパートの部屋に入って行く

んだろう？　白昼堂々とひとの家にきてそんなコトを大声で言われちゃあ、奥さんだってたまんねえよな。逆上して罵り合いになることぐらい想像がつかないのかねえ。
だいたい、ご近所に引っ越してきて、半年もたっていないのに、イキナリそんな恥知らずな文句つけに来られたんじゃあ、おさまる話もおさまらねえよ。モノには順序ってモンがあるだろう。この場合は、まずご近所として山田の奥さんと親しく交際してうちとけて、それから「ホホホホ、ところでお宅っていつも激しいのね、うらやましいわ。毎晩お宅の二階から奥さんの艶っぽい声が漏れ聞こえてくると、ウチの主人ったら私のフトモモに手を伸ばして『子供たちは寝たか？』なんて言うのよ！　ウフフッ」なんてふざけ半分に言えば、「あら、どうしましょう！　いやだわ、私、恥ずかしいわ。そんなに大きな声かしら？」なんて言って、声を出すのを少し控えるようになるってのが望ましいコトのナリユキってもんだろうが！
ちなみに言い争いの一部を再現するとこんな感じだ（一部電波）。「キーッ！　こんなこと言われたの初めてだわ！　何なのよあなたは！　越してきていくらもたたないのに私に意見するなんて常識じゃ考えられないわ！」「なによ、あなたに常識がないからあんな大声立ててるんでしょうが。少しは恥を知ったらどうなの？　きっと、ここいらじゃあ、他の家の人たちだってみんなガマンしてたのよ！　それもわからず自分だけ大声あげてよがっちゃってバカじゃないの？」
「このくそアマ、礼儀知らず、気に入らないならとっとと出て行きなさいよ！」

は萎えなえだよ。どーしてくれんだ！　お前の下着は「チルアウト生下着」ってわけかァ？　しかたねえから、パンティの持ち主をむりやり角のコンビニでバイトをしている女子大生のユリエちゃんのものと思い込んで一本抜こうとするんだけど、目つきの悪いお前の呪いのような視線がちらついて、いまいちしっくりこねえ。強●するよりも、ひたすらブン殴りたくなるようなオンナっているんだよなあ。そういう意味じゃあ、お前は新鮮な女だぜ！　そう思っていたのは俺ばかりではなかったようで、先ごろワタナベ、お前は深夜2時にどこかのホテルで男とハメ●ってから帰宅したときに、アパートの入り口で誰かに襲われそうになって大変だったようだな。俺は家の中にいてヘッドホンでパンテラの狂暴な音楽を聴き入っていたので、悲鳴なんかさっぱり聞こえなかったが、おまわりさんが何人か来て現場検証をしてったようだもんな。俺は翌日大家から通達があってそのことを知ったのだが、おそらくアパートのみんなも、お前の複雑な男関係が原因で起きた犯行だと思っているだろう。因果応報はこの世の常、才能のない奴が男心をもてあそんではイケナイってことだ。身の程を知れよ、淫らで性悪のワタナベさんよォ。

（この後、両者つかみ合いのひっかき合い。双方のダンナ、止めに入る。遠巻きに見守る付近住民のやじ馬連中は俺も含めてそれを見てニヤニヤ。向かいの木造アパートの窓からもおっさんが顔を出して笑っていた）

俺はこんな喧嘩の方がよっぽどガキの教育に悪い気がした。赤塚家のガキが将来グレるのは、まず間違いないだろう。

山田家の奥さん、昨日は凄かったな。オレは部屋にいたけど隣の若奥さんと罵り合う声は全部聞こえていたよ。アレこそ「昼下がりの決闘」ってやつだな。ああ、オレはモチロン山田の奥さん、あんたの味方だ。

奥さんは昔っからのご近所サマで、生理のナプキンはちゃんとひとつずつチリ紙にくるんでつつましく捨てているし、安目の香水のニオイが染みついたパンストや、オリ●ノ付きパンティもゴミでときどき頂いている。それにひきかえ、あんな趣味の悪い建て売り住宅を買ってやってきた若いだけの新参者の新妻が何だってンだよ！　ここだけの話だけど、あの家の出すゴミは、燃えるものと燃えないものの選別もなっちゃいないし、あきれたことに、引っ越して来てから半年近くになるっていうのに、いまだに下着ゴミを一枚も出してねえんだ。これは「俺に対して何の挨拶もしていない」ってのと同じことだぞ！　知らない街にやってきたら、その土地の変態さんに挨拶も兼ねてエロいパンティのひとつもゴミで出すぐらい常識じゃねえか？（あんただけの妄想だと思う：編集部注）とにかく、あんな礼儀知らずのクソ野郎一家なんかどうでもいい。俺はもう、全面的に奥さんの味方、山田家支持だね！　しかし、スゲエ喧嘩だったなあ。きっかけは新参の赤塚家（やや仮名）の若妻（といっても30近い）が、「夜毎、山田さんの家の二階から漏れる夫婦のアノ声（特に奥さんの方）が大きすぎてウチの子（4歳男子&1歳2カ月女子）の教育にとっても悪い。お願いだからいますぐ止めてちょうだい」ってな文句を言ってきたからな

マキコさん、あんたがこの街から引っ越して行っちゃったんで、俺は夜のコンビニに行く楽しみがまたひとつ減っちゃったよ。長身の美人でステキな（この町内、こういうタイプが目につくんだよな）お嬢さんタイプのあんたはそそったぜえええええええ。

引っ越し最後のゴミで、あんたのことがずいぶんとわかったよ。どうせならちゃんとお話しして知り合いたかったけど、工員と法律事務所勤務の才媛じゃあ、接点なんかなーんにもないからゴミを通して以外には交際なんか何年たっても無理だったよな。今からじゃあもう遅いけど、仲よくなりたかったなあ――。

あんたはファッション誌のグラビアに載ってるモデルみたいに完璧にキレイだったけど、ホントはもう10年近くも慢性の自律神経失調症でさんざん苦しんでいたんだね。引っ越しのゴミの中から、○○病院の診断書と、故郷の札幌の病院から始まって都内の病院を点々として作った合計11枚の診療カードで分かっちゃったよ。原因はストレスなのかい？法律の勉強って工員の俺から考えても、ものすごくかったるそうだし、覚えなきゃならない条文の量なんか、考えただけで胃が痛くなりそうだもんな。

あんたのゴミから厳重に包装された白いビニール袋を見つけてさ、中を破ったら洗面器一杯分はあろうかと思われる薬のカプセルが大量に出てきたのには驚いたなあ。あんたの心の闇を見た思いだったよ。あれは精神安定剤だよな。あれだけの量を飲まずに我慢して不安に耐えて法律の勉強してたのか？　女で2浪するなんてよほどの覚悟がいるんだろうね。よく知らねえけどC大学の法学部卒ってのは凄いんだってな。

「いやよ、ここは私たちの土地と家なんですからね。冗談じゃないわよ、何の権利があってそんなこと言えるんですか？　出ていくならあなたよ、あなた。子供の教育に悪いったらありゃしない。いい大人があんなに大声出して恥かしくないの？」
「なンですってェ？　あんたたちだってやってることでしょうが！　自分のこと棚にあげてよく言えるわね……」

「うるさい！　私はあなたみたいに、あんなに恥知らずで下品な大声立てないわよ」
「言ったわねェ……何よ、聞き耳たてちゃって、イヤラシイったらありゃしない！　あんたたちこそやることやってないから人のことばっかり気になるんでしょう‼」

「んまあ……何て失礼な！　嘘だと思ったらご近所じゅうに聞いてみればいいわ！　毎晩あんな声出してみんなに好かれてるとでも思ってんの？　私あんまり頭にきてこないだ表に出て調べてみたけど、そこの角曲がってもまだ聞こえてたわよ、あなたの声！」
「そんなことあんたたちに言われる筋合いじゃないわ！」
「筋もくそも実際うるさいんだからやめてよ！」
「もう何てナマイキな女なの！　年長者に対する礼儀がなってないわ。チャチな建て売り買ったくらいで偉そうに住人面しないでよ、文句があるならローン払い終わってから言ってちょうだい！」

●女体ファイル7

杉並7号（スーチー・仮名）年令不明（20代にはなっていると思う）



□身長約152センチ　小柄だがグラマラスなナイスバディ

□顔は目が大きくて印象的な、南国によくいる美人タイプ

□国籍はミャンマー　ときどき故郷から小包郵便が届くが、向こうの住所は何書いてるかぜんぜん読めない。その小包にはかなりでたらめなローマ字でこちらの住所が書いてあるのだが、あんな宛名でちゃんと届くとは、日本の郵便局は優秀である。

□ミャンマーの、便所紙のような粗末な雑誌を定期的に捨てている。

□ゲットした下着　ピンクや紫や黒やオレンジなど、商売用のド派手なパンティとブラジャーのセットを10組ほどゲット（ブラジャーはDカップ‼）。洗濯済みのものなのだが体臭がしっかり残っていてかぐわしい。その他に普段着用のおとなしい形の汚れたパンティも3枚ゲット。商売用と生活の下着とははっきり区別して着用しているようだ。

□たまに携帯用の●洗浄ビデを捨てている。この前は未使用のものを拾ったので、そのうちア●ルオナ●ーのときに浣腸代わりに使ってみようと思う。

●女体ファイル6
杉並6号（長田マキコ・仮名）27歳



□北海道札幌市出身　2浪した後C大法学部卒　卒業後某法律事務所に就職
□身長約170センチ　骨格のしっかりしていそうなナイスバディ
□キャスターの長田渚左似の美人　髪が長い
□いつもやや派手目なスーツを着こなしていた。後ろ姿はキャバクラ嬢みたい。
□ナプキン派　オリ●ノが多いのか神経質なのかパンティ・ライナーも使っている。
□ゲットした下着　引っ越しゴミからブラジャー80のB2枚（ピンクと白）　パンティ4枚（うち一枚が白のTバック！）　ガードル1枚　スリップ1枚　他、パンスト多数
□性格は、いかにも神経質っぽい顔をしていたので神経質なんだろう。いつも眉間にシワを寄せているようなところがあった。
□この春、武○野市へ引っ越して行った

激しくののしりながら子供や老人を蹴り殺し、あんたらミャンマー人の横っ面を何遍もひっぱたいて、無理やりマタを拡げて街中で強●と殺●を繰り返すのさ。そのとき俺のペ●スは無数に別れて無限に伸びて、婆さんから幼女まで、その国の性●可能な婦女子を全て●しまくるんだ（しつこいようですが、このパラグラフ全て妄想です：編集部注）。そうやって俺ははじめて自分がアジアいち嫌われ者の醜い日本人だって自覚できるんだよ。ああそうだ。俺は最低の最低の最低の最低の最低の最低の最低の最低の最低の最低の最低の最低のゲス野郎、アジアの民衆の憎悪を一身に受けて劫火の中で射●するのさ。絶頂の瞬間に「日本人でよかったなあ！」って叫びながらね。

そんな醜悪なセンズ●だけど後味の悪さなんかちーっとも感じないね。俺はカネであんたのカラダを買う日本人にも劣る最低最悪の鬼畜なんだしな。耳をすますとあんたの声が聞こえるようだよ。「日本には二種類のチン●ス野郎がいる。あたしのカラダを買うチ●カス野郎とあたしのカラダを買わないチンカ●野郎だ。どちらも最低だけど金を払ってくれるだけ、あたしを買う●ンカス野郎の方がマシよ」。

そういうあけで、買っても買わなくても俺は彼女にとっては最低のチン●ス野郎なんだ。結局この女ともゴミを通してしか友人に慣れないな——そう思って、俺は今夜もあんたのゴミを漁るだけさ。

恋人の運転免許証のコピーを捨ててたな。あと、あんたが捨ててたスナップ写真から彼が同じ大学の同級生だったこともわかったよ。彼の方は現役で2歳年下だったのかぁ——。彼の住所はこの近くだったけど、あんたが彼の写真を捨て、遠く離れたところに引っ越していくことを考えてみると、別れてしまったってことなのかな？　あんたが、こんなにまでカラダをボロボロにしながら、目指していたのは何だったんだい？　やっぱり司法試験ってやつなのか？　勤勉もいいけどカラダも大切にしなよ。

そうそう、マキコさんよォ、今後も法律をやるならぜひとも一度、深夜のゴミ漁りをしてみなよ。釈迦に説法だろうけど、法律だけを知っていてもよい法律家にはなれないと思うぜ。あんたがいつも付き合っているような教養の高い知的なエリート連中ばかりじゃなくてさ、クズでゲスでどうしようもなく下品な人間の弱さや汚さや醜さもとことん見といてくれよ。「法律に情なんかいらない」ってのはわかるけど、それでも「深い人間理解」は必要だろう。あんたが好きでよく観に行ってた絵画やなんかの美術作品も素晴らしいんだろうけど、そうした美しいものとは対極にある、人間のくだらなさ、つまらなさも結構味わい深くて奥が深いんだぜ。たぶん無理だろうけど、またいつか深い夜の闇の底で、ゴミ漁りの最中にあんたに会えたらうれしいな。

オナ●ーのオカズでお世話になってるんだけど、ひなこちゃんはちょっと小さすぎるからまだまだだね～。でも大丈夫だよ～。お兄ちゃんは昔から女は成熟した年増ごのみで、ロリータとかコギャルとか小便臭いのはほとんど興味なんかないんだからね～。だけど世の中にはひなこちゃんみたいな小さいコにイタズラする、悪いロリ●ン野郎もいっぱいいるから注意しなくちゃ駄目だよ～。

　この前、ひなこちゃんの赤ちゃんだった頃に着ていたウブ着やおむつカバーをたくさん拾ったよ。マクラなんて小さくてフワフワで可愛いねえ。服はみーんな乳臭くて少し吐き気がしたけど、赤ちゃんなんてみんなこうだよねえ。せっかくこんなに拾ったから何とかしてひなこちゃんをオカズにして抜いてみたいもんだけど、何度も書くけど俺はロリじゃないんでちょっとソレは難しいかな。赤ちゃんや子供は無条件に可愛いからなあ。ははは。

　しかし、とりあえず俺は性欲がすごく旺盛なので、何が何でも抜かせてもらうとしよう。こんなときにおトクなのが、俺の「電波系」体質だ。俺は妄想神をひなこちゃんに集中させて、この時空間に歪みを生じさせ、毛穴から伸びる妄想神経を２０２８年の未来へ飛ばした。今から32年後だから、ひなこちゃんも34歳。女としての脂が乗りきった女盛りの入口だ。くっくっくっ、たまんねえな、ひなこさんよ。いいカラダになったじゃねえかよ、見違えちゃったね。生活に疲れて少しタレ気味の乳も廃墟感あふれて頽廃的でグーだぜ！　腰のセンも年季の入った淫らなセ●クスでだらしなく崩れちゃってさ、最高だね。

あんたの本名はさっぱりわかんねえから、スーチーさんって呼ばせてもらうぜ（すまねえな。ミャンマー人の名前なんて、新聞で話題になるスーチー女史以外誰も知らねえんだよ。確か昔、ビルマって呼んでたとこだろう。水島上等兵は元気かね？）。

海を渡ってはるばる日本へようこそ。あんたがどこで何やってんだかは、あんたがよくゴミ箱に捨ててる派手な衣裳や下着を見たら、一目瞭然だから俺もあれこれ詮索しねえよ。つまりは身体張って生きてんだよな。肉体労働者って意味では俺とおんなじだよなあ――。

俺の工場にもアセアンパブで働くフィリピーナとねんごろになって、マジで恋愛して結婚しちゃった先輩やら、恋愛中の後輩なんかもいるんだけど、みんな「日本人のくそナマイキな若いオンナよりも彼女たちの方が何倍もマシ」って言ってるよ。

確かにそれはそうかもな。でもそういう日本のメス連中を、コギャルだ何だっておだてて増長させたのは俺も含めてこの国の男の側の責任なんだからしゃあねえじゃねえか。そんでもってココロの隙間を埋めようと情熱的な愛をアジアの国から直輸入ってわけだ。

スーチーさん。あんたの下着のニオイをかいで下品なセ●ズリをするとき、俺は妄想の中で日本を代表する一流の商社マンになって、パリッとしたスーツに身をつつみ、見たこともないアジアの国々のうす汚い空港に颯爽と降り立つんだ。そこで日本円のブ厚い札束を両手に持って「この貧乏人どもォ！　何で生きてやがる！　これでも食らえェ」なんて

●特別付録男体ファイル1

杉並9号（真田ヒデキ・仮名）17歳

□若い頃の京本政樹に少し似ている　カワイイ
□見た目は内向的で神経質そう
□ゲットした下着　青いブリーフ1枚



さっそくだがヒデキ君、ボクは決して積極的な同性愛主義者ではないんだが、街でキミのことを見かけるたびに、下半身に妙なウズキを感じてタマラネエんだよ。これはどうしたものかねえ。キミのことを考えてせ●ずりをしたことも二度や三度ではないし、妄想界ではボクとキミとはとうの昔から他人じゃないんだぜ。ホントによかったなあ。

模試や学校のプリントに混じって、キミのゴミから出てきた細かくマーカーでチェック済みの古書市の目録を見たよ。キミはマンディアルグやノヴァーリスの高価な希覯本に印をつけていたね。幻想文学が好きなのかい？　部活動もしていないようだし、付き合って

●女体ファイル8

杉並8号（戸田ひなこ・仮名）2歳4カ月



□目がクリクリ、ヨダレたらしまくり髪の毛はポヨポヨのひょこ頭。
□すぐ、むずがる　神経質そう　ママの側を離れない
□ゲットした下着　赤ちゃん用ウブ着4着　ボウシ　フワフワまくら　おむつカバー3点
全て乳臭くてグー！
□まだ、何だかよくわかんない年頃　おむつが取れないけどあんよは上手
□俺と目が合うと不思議そうな顔をしてジ～ッとこっちを見ている。

ひなこちゃん、ひなこちゃん、可愛いね～、小さいね～、まだ、何だかよくわかんないんだろーね～。ボクがこのへんで一番最低のド変態やってる村崎百郎兄ちゃんですよ～。知ってるかナ～？　ひなこちゃんのおかあさんのトリ子さん（27歳／仮名）にはときどき

ヒデキ君、キミは色白で唇が紅くて可愛いから、これまでもずいぶんと礼儀知らずのホ●から熱っぽい目で見られたり、満員電車で股間をニギられたり、耳元に熱い息を吹きかけられて嫌な思いをしてきたんだろうな。その辛さ、とてもよくわかるよ。これまで何度、心の中で「うるせえ！　俺はホ●じゃねえ！　そばに寄るンじゃねええええええ！」って絶叫したことだろう。俺もそうだったよ。全く、冗談じゃねえよな。

でもね、ヒデキ君。人間の性的嗜好なんて歳をとればどんどん変わってくるもんなんだよ。俺なんか今でこそ汚穢主義者だけど、ハタチ前なんか、ホ●以前に「ス●トロ野郎」なんて聞いたら、会っても会わなくても皆ゴロしにしてやりたかったもんな。それが今では「清楚で潔癖な奴がいる」って聞いたら、その場で脱糞してでも顔にクソを塗りたくなっちゃうから、ヒトの嗜好なんてあてにならないものさ。ヒデキ君、今は近寄ってくるホ●に嫌悪感しか感じていないかもしれない。でも、もしも歳をとって自らの変態度が練れてきて、そういうホ●にも可愛さを感じるようになったら、そのときは自分をごまかさずに素直になって奴らにけつの穴を貸してやりなよ。実際、ア●ルはいいぜえええ、アナ●はよおおおおおおお。

しかし、ヒデキ君、そんなに可愛いけりゃあ変態になる前に、暗がりで殴り倒されて寄ってたかってホ●たちに乱暴されるのは時間の問題かもな。そうなったら、覚悟を決めて口を大きく開いて、奴らの勃●をノドの奥で深々と受けとめろ。抵抗をやめて全身の力を抜いて、けつの穴が切れないように肛門活約筋を開放して奴らの怒張を直腸内にやさし

ド●メ色の大●唇と小陰●なんか見ているだけでこっちも腐りそうだよ。ずいぶんと素晴らしく腐った年増にお成りだねええええ。ああああああたまんねえ、チ●ポがつっぱるぜええええ、もおおおお辛抱できねえぞ。さあてじっくりとご賞味させて頂くかねえええええ。

ウッ、うおおおお！　何てクサイ●なんだあああ！　ムムムッ、貴様それでも人類かあああああ！　おのれ、人間の尊厳が少しでもあるなら今すぐ自害せんかあ！　そのまえに、俺がこの太くて臭いち●ぽこでその腐った●穴を成敗してくれるううう！　どうだあああ、これでもかあああ、まだイカンかあああ、この腐れお●このインラン年増女めええええ！　いままでどういう恥知らずなオ●ンコこいてきたんだあああ？　この腐りかけた甘い肉は何だ？　まったく、おれはコエダメとサカッているようなドブ臭い気分だぜ。お前はホントに廃墟だなあ。左手首のためらい傷、盲腸の手術痕、化粧の下のシミとソバカス、白髪まじりの剛毛がびっしりと生えきった股間から拡がる恥丘のドテの高いこと！　これが「２０２８年のモリ●ン」ってやつかい？　ずいぶん遠くまできちゃったなあ。でもいいさ、未来の日本にこんなに臭くて腐り切ったオンナがいるって確認できただけでも俺は満足だよ。

ウッ、はあっ、はああああ！　……ハアアア、畜生め、イッチまったぜ馬鹿野郎。無垢なる幼子のひなこちゃん、今日は未来のキミでずいぶんいいオ●ニーができたよ。今は乳臭いウブ着だけど、32年後には立派に匂い立つ腐れお●こを持った腐れオンナになれるんだから安心しなよ、キミの未来は真っ黒黒のトドメ色さ！

第４章　彼女ができるゴミ漁り

街で見かけるステキな彼女と知り合うには——実践ゴミ漁り講座

いる女のコもいないみたいだけど、同性愛指向ってわけでもないよね（そういえば稲垣足穂の本はノーマークだったな）。道で俺と目が合うと、憔然としてあっち向いちゃうところはなかなかスルドイよ。キミのカラダを狙っている俺の視●視線に気がついてるんだな。フフフフ、今の俺ってそんなにホ●臭い目つきをしてるか？「ホ●もいいかもしんない」なんていう猥雑な考えもキミが相手だからこそなんだけどね。

キミの気持ちはよくわかるよ。何を隠そうこの俺だって、今から16年以上前の、今のキミと同じ年の頃は、すでに目つきは凶悪だったけど、わりとホ●好きのするセンの細い紅顔の美少年タイプだったんだよ（やや誇張あり）。その頃は今のようにひとつの工場でじっくり腰を据えて働いていたんじゃなくて、たびたび主任や同僚をブン殴って傷害事件を起こしては工場や工事現場を点々としていたんだけど、そのうちの何度かは、職場にいた古参の●モに色目を使われたり、すれ違い様に尻を撫でられたりして、頭にきて発作的に鉄パイプを振りおろしたものさ。そんな奴は殴られて当然だよな。

あの頃はやたらとホ●に嫌悪感があったなあ。襲われるのか怖くてたまらなかっただけじゃなくて（考えてみりゃあ、この世のホ●が全て、美少年を見たら必ず襲うってわけじゃないんだけどさ）、本当は女だろうと男だろうと、自分以外の他人にマジで愛されるのが怖かっただけなのかもしれないな。俺はついつい先手を打ってやりすぎちゃうタイプでさ。俺に色目を使ったり、愁波を送ってくるホ●野郎は残らずブチのめして皆ゴロしにしてやろうと思っていたよ。いま考えると、若かったよなあ。

気分はもう犬や猫（畜生）

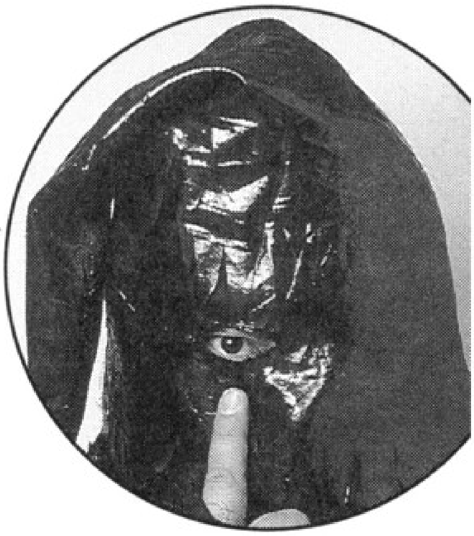
ゴミ漁りで盛り上がるご町内恋愛

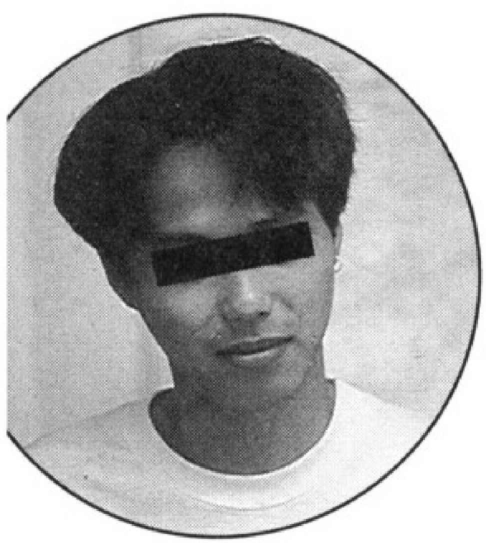
説教対話
彼女ができるゴミ漁り

講師：村崎百郎（34歳）

生徒：尾川イサオ（18歳）

（構成　編集部）





なあに、心配することはない。多くのホ●たちがくぐってきた試練なんだ。怖れずに身をまかせてしまえ。ほうら、絶頂はスグそこ。キミのよがる声が聞こえるようだ。

「……はああ……みんなこういう気持ちで、ホ●になっちゃったんだろうなあ……」。

読者のみんなには、講座をはじめる前に、このイサオという男の人となりがよくわかるエピソードをひとつ紹介しよう。
俺はイサオの住んでいる北千住という街が非常に気になったので、「お前、大学は神田とかお茶の水の方だろう？　何でまたこんな〇〇〇〇な所へアパートを決めたんだ？」と、住む街を決めた理由を聞いてみた。すると奴はこれまたマジに目を輝かせて「オザキの逝った街なんスよ！」というサイコーにピュアな返事をカマシてくれた。……なるほど、なるほど、コレじゃあ話にならねえな。やれやれ。

ステップ1　基本はご町内恋愛

百郎：まず、好きな女は近所に作れ、近所の女に恋をしろ。
イサオ：はあ？　何ですかそれは？　ムチャ言わないで下さいよ。恋愛ってそういうものではないでしょう？
百郎：そういうもんだよ！　犬や猫を見てみりゃわかるだろ。オスとメスを近くにつないどきゃ勝手につがったり盛ったりするだろうがあ！　アレでいいんだよ。人間の恋愛だって同じだ。近くにいりゃあそれで上手く行くんだ。
イサオ：でも人間は犬や猫と違うでしょう……。
百郎：うるせえ！（ビンタ）　そうやってウダウダ考えるからテメエはいつまでたっても

第4章

街で見かけるステキな彼女と知り合うには——
実践ゴミ漁り講座

彼女ができる ゴミ漁り

百郎：そして大切なのは、女の価値はアソコのシマリとかフ●ラが上手いとか、そういう性技のよし悪しばかりじゃないってことだ。確かにつきあう女のコが風俗嬢のような素晴らしいフェ●テクを持っていれば男はうれしいもんだけどな。でも、それだけでも駄目なんだ。たとえヘタでもいい、自分の快楽は二の次にしても彼氏には精一杯気持ちよくなってもらおうと、健気に一生懸命サオはもちろんタマ袋からアリの戸渡り、ア●ルのヒダの奥までいやがらずにねちっこく丹念に舌を這わせてくれる女、そういう女の献身的な姿勢自体が尊いと、俺はここで声を大にしてみんなに言いたいわけだ！

イサオ：いや、あの、ブスとかテクとか、僕はそんなこと、ひとことも聞いてないんですけど……

百郎：やァかましい！（往復ビンタ）　ひとの話は真面目に聞いとけ！　だいたい貴様は……（この後、村崎の支離滅裂な説教が35分続く。くどいので省略）。

イサオ：（腫れぎみの頬をさすりながら涙ぐんで）……で、なんで家の近所の女のコでなければいけないんですか？

百郎：毎日のゴミが漁りやすいからだよ！　そんなこともわかんねえのか！

イサオ：……はい。

百郎：好きになった女のゴミを漁って、その女の情報を集めるんだ。彼女の生活環境や習慣、趣味趣向を調べて計画を練り、そのうえで愛の告白をする――。これならお前でもバッチリだろう。こんなポパイでホットドックで、ちょっとスコラな方法だったら、たち

尾川イサオは俺の勤める工場へバイトにきている18歳の勤労学生だ。こいつは東北地方の農村から昨年上京してきた純朴で新鮮なナイス・ポテトガイなんだが、素直で顔もルックスもまあまあなのに口ベタで引っ込みじあんな性格が災いしてか、いまだに恋人はおろか女友達のひとりもできない。本人は「田舎に将来を誓った安室奈美恵似の彼女がいる」と強がっているがアヤシイもんだ。仮に本当にいたとしても、たぶん下北のサル似の間違いだろう。

彼女がいないばかりか、アダルトビデオの鑑賞以外たいした趣味もなくバイトで金が余っているイサオはセ●クスに自信をつけようと、たまに池袋のフーゾクに通っているようだ。しかし、いくらフ●ラ慣れしようが肝心の恋人ができなけりゃ何の意味もない。

クリスマスが来てもバレンタインデーが過ぎても、奴にはいっこうに恋人ができる気配がなかった。あせった奴は、よせばいいのに、とうとうこの俺に「恋人の作り方を教えて下さい」と相談を持ちかけてきた。しかも、目がマジなんだからやりきれない。やれやれ。女相手ならいくらでも子供の作り方を実地指導できる俺だが、マトモな恋愛となれば話は別だ。俺は、いままで巫女系のキ●ガイ女としかつきあったことがないし、鬼畜な方法しか指導できないぜと言うと、「結構です、コンパに参加したり、テニスのサークルに入ったりとか、いろいろやったんですがせんぜんダメなんです、彼女ができるなら悪魔に魂を半分ぐらい売ってもいいです」とまで答えたので、その根性が気に入って俺は柄にもなく親切心を出して、百郎秘伝「彼女のできるゴミ漁り」を伝授してやることにした。

まち彼女の心はお前のものだ。俺と知り合いでホントによかったなあ。汝、迷える小亀の尾川イサオよ、心して聞くがいい。半年後のお前は新しくできた恋人のねっとりとタマシイまで引き抜かれるようなフ●ラテクに足を引きつらせて悶絶しながら、目とチ●ポから涙とカ●パーを流して脱糞せんばかりの勢いでこの俺に感謝しているであろう。

イサオ：ホントですね！　信じていいんですね！（マジかよお前：編集部注）

百郎：ドロ縄、ドロ船、いや、大船に乗った気分で安心して俺について来い。

イサオ：……はあ（やっぱり不安は隠しきれない）。

ステップ2　住所と名前をつきとめろ

百郎：そうだな、好きになる女は、自分の家の近所のコンビニで探すといいぞ。コンビニで顔を合わせる女ならそこから歩いて5分以内ぐらいの場所に住んでいるだろうから、お前の家からも近くてゴミも頻繁にチェックできるからな。ただし、男連れは論外だぞ。夫婦者や恋人持ちはあとあとめんどくせえからな。相手の男を闇討ちで半殺しにしてタマを潰して入院させて、そのすきに告白するのもひとつの手だけど、お前、人の殴りかげんがわからねえだろ？　コロしちまったらシャレにならねえからそういうのはやめとけよ。目をつけた女の買い物カゴをそれとなく見ておいて、一人分のメシを買ってるかどうか確かめてから決めろよ。一緒に実家で畑の麦踏みを手伝ってくれそうな素朴な感じの女がいい

タダでハメる相手ができねえんだ。運命だとか赤い糸がどうだとか言って、自分の恋愛にことさら意味や意義をつけたがる連中も多いけど、そんなのは単なる妄想だ。男と女ってのはだいたい上手く行くようになってんだよ。意にそぐわない見合いで結婚しても、毎晩ち●ことま●こでハメ合って一緒に暮らしてりゃあ情も移るし、そのうちにガキでもできりゃあ「人生っていいもんだわねえ」って気分になるんだよ！　人間って奴は。個性がどーだ性格が何だっていっても、人間なんてどいつもこいつもそんなに大きな違いなんかねえんだよ。……そう考えると何か腹立つけどな。だけど自分の周りをよく見てみろ。運命や前世からの宿命で一緒になったような、劇的な恋愛やってきた連中ばっかりが結婚して夫婦やってるか？

イサオ：……いいえ。

百郎：だから犬や猫でいいんだよ。風俗誌やら男性雑誌のエログラビアを熟視するのもいいけど、冷静になって、身近な女に注目してよく見てみろ。結構イイ娘がいるはずだぞ。いいか、お前は誰々がブスだ美人だって騒ぐけど美醜なんて皮一枚なんだからな。人間なんて皮一枚下は血と内臓と脂肪の詰まった糞袋なんだから、そこんとこを忘れるなよ。そもそも汚物の分際で、よその汚物の表面の皮にこだわるなんて笑わせるぜ。イヌになれ、ネコでいいんだ。なりふりかまわず目ェむいて、お前の身の周り女のコの魅力に気付けよな。

イサオ：……はあ。

んじゃないか？

イサオ：でも、僕のいきつけのコンビニにはロクなのがいないんですけど。

百郎：じゃあ、時間帯を変えて行ってみろ。お前、タダでさえ運が悪そうだしな。たぶん今のままの生活をくり返していては駄目だぞ。探す場所もレンタルビデオ屋とか、弁当屋とか多少工夫しろよ。朝の通勤タイムもいいぞ。駅前で出勤する女を物色するって方法もあるからな。あわてて走ってくる女もいれば、きっちり化粧してやってくる女もいる。出勤時の姿を観察していると、ある程度その女の性格もわかってくるから面白いぞ。

イサオ：そうやって、気に入った女のコを見つけたら、その後はどうするんですか？

百郎：まず、住所をつき止めなけりゃあゴミは漁れない。しかしあせって露骨に後をつけて気付かれてもいけない。尾行は慎重にやって、何度目かで家をつきとめるぐらいでいいんだ。一回目は店を出て最初の角を曲がるまでとかな。次にコンビニで見かけたら、何も買わずに先回りしてその角を曲がったあたりの見通しのよい場所でゆっくり歩きながら彼女が来るのを待って行き先を横目で確認する。カンのいい女はそれでも尾行に気付いたりするから、くれぐれも注意が必要だぞ。若くてブスほど自意識過剰でひとの視線とか尾行に気が付きやすいから腹が立つよな。クレバーな美人ほど結構おっとりしてるもんだぞ。運がよければ3日目ぐらいでアパートを特定できるだろう。

イサオ：ずいぶん慎重ですね。

百郎：当たり前だ。とにかくこの件に関しては全てを目立たないようにこなさなけりゃな

らない。目当ての彼女がアパートとかマンションに入ったなら、すぐにその家の窓が面している方に回り込め。夜なら灯りがつくからどの部屋が彼女の部屋なのかわかる。まれに一日中部屋の灯りをつけている若い女もいるけど、普通はそんなやついないから、部屋は特定できる。次に名前なんだけど。

イサオ：それは表札や郵便受けの名前を見ればわかるでしょう？

百郎：オイオイ、ちったあ考えろよ。ここは東京なんだぜ。女の一人暮らしで、バカ正直に表札に名前書くような奴はひとりもいねえよ。何も書かないのが常識だぞ。表札にフルネームで自分の名前を書いている女がいたら正体は妖怪だと思って間違いない。そんな女と寝たら夜中に頭から喰われちまうぞォ〜、怖いぞォ〜！

イサオ：ええっ、そういうもんスかあ？　知らなかったなあ。

百郎：そりゃそーだよ。アパートとかマンションってのは新聞の拡張員やら各種セールスやら、そのほかにも怪しい連中がたくさん訪ねて来るからな。俺の家の周りでも、女の一人暮らしはせいぜい名字どまりだな。フィリピンやタイやミャンマーの人達の表札はフルネームで書かれているんだけど、ああいうのは男だか女だか全然わかんねえからいいんだろう。

イサオ：それなら郵便受けを開けて中身を見ちゃえばいいんじゃないですか？

百郎：私立探偵とかTVのワイドショーのスタッフなんかは、わりと平気でそういうコトするみたいだよな。でも、近頃はコーポあたりでも鍵のついた郵便受けがあって、全てが

開けてのぞけるわけじゃない。それに万一郵便受けを開けている所を他人に見られたらどーする？　ゴミ漁りを見られるのとは格段の違いでマズイぞ。自分が近所に住んでいる人間だということを考えればここは慎重すぎるぐらい慎重にやらなけりゃ駄目だ。

イサオ：じゃあ、どうすればいいんですか？

百郎：宗教の布教を装って訪ねて行って、チ●ポ出して「モロ身の塔ですが」って言うギャグもあるけど、警察呼ばれるだけだからやめときな。部屋ナンバーを調べてゴミを漁ればイィんだよ。若い女なら服のバーゲン告知のダイレクトメールのハガキとかを破りもしないで捨ててるから、名前はわりと簡単にわかるだろうな。

イサオ：そういうのを上手く拾えますかね。

百郎：実はそこんとこにちょっとしたコツがあるんだ。マンションなら専門のゴミ集積所があって、住人はそこにゴミを捨てたりするんだけど、コーポやアパートに住んでいる連中というのは、なぜか、自分のところからひとつ離れたゴミ集積所へ捨てて行くんだよ。特に回収日の前夜にゴミを出すような連中は、たいてい駅の方に向かってひとつ向こうのゴミ集積所に捨てていくね。

イサオ：何でですかね？

百郎：俺にもよくわからん。でも、これは実際に16年間東京でゴミを漁っている俺が何度も目撃したり漁っていて気がついたことだからな。それでいて、そういうゴミ袋の中を見ると給与明細とか破りもせずに平気で捨ててるんだぜ。要するに、気分の問題なんだろう

ね。自分の家のそばのゴミ集積所には自分のゴミは捨てたくないんだろう。だから目当ての女のゴミを見つけるには、その女の家から一番近いゴミ集積所ではなく、むしろその周辺を集中的に漁るんだ。彼女がゴミを捨てる場所をつきとめたら、後はそこを集中的に漁ればいい。言っておくけど彼女がゴミを捨てる場所をつきとめるのに一晩中彼女のアパートの前に張り込んだりするのはやめとけよ。探偵とか刑事さんならともかく、シロートが慣れないコトやっても付近の住人に気づかれて不審がられて、警察に通報されるのがオチだからな。

イサオ：けっこう大変そうですね。

百郎：お前の実家で作ってるコメとおんなじだよ。手間ヒマかけてこそよい情報が得られるってもんだ。あと、言い忘れたけど、スカを引かないために、コンビニで彼女が何を買っているかよおく観察しときな。そして、ノート一冊用意しといて、それに彼女の情報日記をつけるんだ。彼女とコンビニで遭遇した時間、彼女の服装、持っていたもの、買ったもの、漁ったゴミの記録。3カ月もやれば彼女の実家から趣味趣向までわかるようになるさ。

イサオ：はあ……そこまでやるんですか……。

百郎：あたり前だ。やる気あるんだろ？　やりてえんだろ、素人の女とよお！

ステップ3　彼女の好きなものを探れ

百郎：電話料金の請求書や領収書、宅急便の送り状からも電話番号が分かったりするけど、お前の場合はむしろ、目当ての彼女の趣味や趣向を探る方が大切だな。

イサオ：そうですかね。

百郎：『Ｈａｎａｋｏ』や『Ｃａｚ』なんかの情報誌も、彼女のゴミから出てきたら中は要チェックだ。興味のある所にマーカーしている場合もある。彼女がマーキングしている番組や映画はとりあえず押さえとけよ。それらを全部観ておけば、いずれ彼女と話すときに話題にこと欠かないからな。コンビニで彼女が立ち読む雑誌はお前もあとで立ち読みしとけよ。購読する女性誌の種類でも相当に傾向が違うからな。彼女の性格や趣味趣向をよく調べておくことは、後々必ず役に立つ。たとえば、彼女が捨てた女性誌からは占いのページをチェックするんだ。女性誌には必ず星座や血液型、心理テストなどのページがあって、心理テストのページの回答に書き込みをしている女はよくいるぞ。その回答部分も、彼女の性格を知るうえで非常に参考になる。生年月日が分かればこっちのもんだ。たまに、ゲーセンなんかにあるタロットや心理テストゲームの結果の打ち出しをそのまま捨てているコもいて、そういうのは片想いの彼の生年月日までバッチリさ。とにかく彼女の生年月日が判明したら、それをもとにホロスコープのバースチャートぐらい作っておけよな。わかんなきゃ俺の持ってる心理占星術の基本書『魂の西洋占星術』（鏡リュウジ著／学習研究社）と『占星学』（リズ・グリーン著／青土社刊）を貸してやるからハナクソや

チ●ポ汁つけるんじゃねえぞ。

イサオ：ああ、ありがとうございます。それで自分との相性を調べるんですね。

百郎：その通りだ。一見、馬鹿ばかしい気もするが、恋愛なんてものは本来馬鹿ばかしいモンだから、非科学的なコトやってもいいんだよ。占いってモンも完全に根拠がないわけでもなく、過去の経験からあれこれ言っている部分もあるし、たとえば彼女の購読している雑誌の星占いコーナーで、彼女の該当する星座に「近く素敵な男性と運命的な出会いがあります」なんていう占いが掲載されたら、チャンスじゃねえか。そこに書いている彼女の幸運日に告白するんだよ。そのくらいの姑息な手段はとらなきゃな。

イサオ：わあ、先輩って結構、あざといんですね。

百郎：やかましい！（ビンタ）　お前のためにやってやってるんだよ。俺はそんなめんどくせえことはしねえぞ。目があってピンときたら押し倒す！　どっかのフェミニストが「全ての性●は強●だ」って言ってるけど、女どもがそういうつもりなら、こっちもその期待に応えてやらなきゃな。とは言っても、歳のせいか最近ムスコの元気もイマイチなんだけどよ。

イサオ：ボクはヤル気充分でビンビンなんですけど……。

百郎：たりめーだろ！（往復ビンタ）　俺がお前の歳の頃は、年間に軽く一千回以上は射●してたぞ。そういうパワーをちゃんと性●に向けろよ。そうだ、彼女と一発キメるときのために舌技をしっかり鍛えておけよ。浅いコップの底に舌を伸ばして強くナメる練習を

するとか、厚手の名刺を舌でナメて穴を開けられるようにするとか、ク●ニの為の鍛練は常識だぞ。どこをどうナメるといいかは、エロ雑誌のセ●クス講座を読んで念入りに研究しろ。これもゴミ漁りをしていれば湯水のように拾えるから便利だぞォ。

イサオ：うんうん、なるほど。ゴミ漁りはいろんなことに応用が利きますね。

百郎：老婆心で言っておくけど、セ●クスはテクだけじゃないからな。どれだけ相手のコトを思いやり、いつくしめるかにかかっているんだ。だから彼女に対する気持ちを思いきり燃え上がらせろ。大仁田状態になるんだ。彼女の下着やストッキングを拾ったら、徹底的に彼女のことを想って、うんといやらしい妄想をしながらオナ●ーしろ。そうやってサイキックな部分から彼女へ愛をぶつけるんだ。効果はあるぞ、テキメンにな。

イサオ：……（この人、大丈夫なんだろうか？　という不安な顔）。

ステップ4　生理日を調べて愛を告白しよう

イサオ：そうやって念入りに彼女のことを調べて舌技を鍛えたら、いよいよ愛の告白ですね。

百郎：ちっちっ、それだけじゃあ駄目だ。まだ教えてなかったけど、女のゴミで漁るべき肝心なアイテムが抜けてるんだ。何だと思う？

イサオ：さあ……。

百郎：そんなこともわかんないのかよ。彼女の生理ゴミだよ、生理ゴミ。

イサオ：ええっ……。村崎先輩、さっきから思ってたんですけど、そんなコトまでしたらそれって「タダの変態」じゃないんですか……。

百郎：なんだと、馬鹿野郎～‼（ビンタ×4、ケリ×2、顔面正拳突き）ダレに向かって言ってんだ？　んなコトしてもしなくても、俺に相談した時点でお前は終わってんだよ！

イサオ：（ベソをかきながら）許して下さい、許して下さい！　もう言いません！

百郎：今度そんな生意気なこと言ったら、お前のシリの処●をいただくぞ！　おれの極太チ●ポでリキまなくてもウンコの出る便利なカラダになりたいかァ？

イサオ：……勘弁して下さい、なりたくないですぅ……。

百郎：なら黙って話を聞け。使用済みの生理用品なんて、女のゴミを漁り続けていれば、生理不順の不健康女でもない限り、月に一度は必ずに出てくるモノなんだ。だから怖がるんじゃない！　生理が何だか知ってるよな？　俺だって知りたくもねえけど、実際あるんだからしかたがねえんだ。通常は28日周期で、このとき出る血は鉄分を多く含んだ固まりにくいもので、ニオイに何ともいえない特徴があって生臭さがとってもグーなんだ。1週間ぐらい続くんだけど、2日目あたりに出る血の量が一番多いようだな。この血がま●こからたれ流しになって服や床を汚さないようにするのにタンポンとナプキンがあるんだが、俺が拾ってきた生理ゴミではナプキン派の方が断然多かったなあ。お前、姉や妹はい

るのか？

イサオ：いません。弟だけです。

百郎：そうか。じゃあ、あんまり事情がわかんないかもな。生理の血のニオイってのは結構キツイんで、一回の生理が終るまで使用済みの生理用品を溜め込んだりする女のコはあんまりいないみたいなんだ。ゴミの日があれば溜まった分だけ捨てるというムスメが多い。そこで、拾った生理用品の個数やそれらに付着している血の量で、生理の始まった日はほぼ特定できるってワケだ。自分のカレンダーに彼女の生理ゴミを記録し続ければ、その子の生理の周期もバッチリ判明するんだ。俺なんか、それでアパートの隣の女のコの生理不順を知っていつも心配してるんだぜ。

イサオ：……はあ？　でも、いったい、そんなコト知ってどーするんですか？

百郎：わかんねえ野郎だなあ。いいか、彼女の生理日がわかれば、彼女の体の調子がどういうものかわかるだろうが！　それで愛の告白のタイミングを決めるんだよ。

イサオ：（恐るおそる）それで、相手の生理と、愛の告白のタイミングと、どういう関係があるんですか？

百郎：……あのさあ、お前、歯が痛いときに人と会って楽しいか？　生理って個人差はあるけど、ブルーデーって言うぐらいだから、あんまり気持ちのいいもんじゃないんだぞ。むしろ不快なはずだ。だから愛の告白はこの時期を外して、生理の終った直後の、彼女が身も心もサッパリして、気分のよくなったあたりに行えばバッチリってことなんだよ！

イサオ：ああ、そうか！　なるほど！
百郎：愛の告白をしても彼女が生理中なら、仮に彼女がつきあいをＯＫしてくれても、すぐにオ●ンコできねえんじゃ失礼だろうが！　まあ、俺は相手がハタ日だろうとキレ痔だろうとハメたいときにはきっちりハメさせて頂くけどな。
イサオ：告白してすぐにセ●クスなんて普通はしませんよ。
百郎：そんなことでは真剣さを疑われるぞ。それと、生理の始まる3日ぐらい前から直前までは充分注意しとけよな。この時期のオンナは一時的に性欲が高まる場合もあるらしいが、油断しちゃいけねえ。思い返してみると、俺が今まで女に刺されたり切られたりしたときってのは、たいてい生理前だったしな。普段ならビンタ1発程度でおさまるモメごとが5倍増しぐらいに大きくなって包丁がポンポン飛んでくるんだから実際たまんねえよ。
イサオ：はあ、そんなもんスかねえ……。
百郎：告白はさわやかながら真剣に、それでいて押しつけがましくなくやんなよ。なあに大丈夫。お前のひたむきさが相手に伝われば愛は成就するさ。
イサオ：はい、なんか自信が出てきました！（ホントかよ：編集部注）　うまくやれそうな気がします。ありがとうございました。がんばって好きな女を作ってゴミを漁ります！
百郎：よおし！　思いっきり行けェ！　ゴミをつかんで女のチチもつかむんだァ！

愛が成就したら証拠を隠滅

最後にイサオを含め読者のみんなにも言っておくが、愛の告白をして彼女が付き合いを承諾してくれたら、それまで集めた彼女の資料や、ゴミ漁りノートは一気に全部破棄しろ。自分のゴミが長期間漁られて調べられて、自分の捨てた下着がせ●ずりのオカズになっていたなんてことを知って喜ぶ女は滅多にいないからな。

まあ、実のところ、こんなことやってイサオに恋人ができるだなんて、俺だってマトモに考えちゃいない。しかし、こうした努力をすることでイサオがいろいろな経験を積み、想像力を育めば、日々の退屈な生活も輝かしいものになり、人生も充実したものになるだろう。それこそ我々がゴミ漁りで拾える最大の収穫なのだ。イサオの未来に幸あれ！

恋をしたら彼女のゴミを漁るがいい
彼女の汚穢に向き合え
彼女の汚穢を受けとめろ
彼女のゴミを愛せたら
君は誰よりも彼女を強く愛せるだろう
ただ、彼女が君を愛してくれるかは
また、別の物語である
『ダスト・テスタメント』「遥かな愛の章」より

状は特に念入りに燃やすべき。性別などの判断もつくコンビニのレシートも焼却が必要だ。

女性が下着ゴミを変質者に漁られないためには、パンティなどをハサミで1センチ単位でジャキジャキに切るのがよい。それでも俺みたいな高レベルの変態ならパンティの破片を1枚1枚しゃぶって味やニオイを楽しむだろうから、気になるなら部屋で焼き捨てるしかないだろうな。

当然だが、なるべく人に漁られないためには「ゴミは回収日の朝に出す」のは基本中の基本である。俺が言うのも何だが、住民たるもの地域社会のルールは絶対に守るべきなのだ。人は自分一人だけで生きているんじゃない。みんなの迷惑も考えずに前夜にルールを破ってゴミを捨てるようなダラシナイ奴は、他人にゴミを漁られて文句をいう筋合いなんてどこにもない。（たまには思ってもいない正論を吐くのも気分がいいもんだねえ）

あとは小手先の技が多いが、憶えていて損のないテクニックに、

ゴミ袋の種類とゴミ袋のくくり方は毎回変える

というのがある。ゴミ袋の口の結び方は個人の特徴が必ずあるので、アパートなどの場

他人にゴミを漁られても個人情報が漏れにくいゴミの捨て方模範例

ここまで語れば「他人に自分の情報を知られないゴミの捨て方というのは、おおよそ判断が付くだろう。基本はひとつ、

自分の名前の付いたものや電話番号のついたものは決してゴミとして捨てないこと

これ以上の防衛方法はない。自分宛にきた郵便物の封筒は名前の部分を切り取って捨てる。切り取った部分はガスや水道や電気、電話の請求書、領収書と同様、注意深く灰皿で燃やす。このときの火の始末は当然だが厳重にすること。

通販もののダイレクトメールの中には注文書に自分の名前、住所、電話番号があらかじめ印刷されているものもあるのでその始末も注意すべきである。自分の勤務先の名前の入った封筒なども名前の部分はカットだ。給与明細、銀行の伝票類、それに宅急便の送り

合、一度誰のものか見抜かれたら、その後ゴミ袋の中に名前を特定できるものが入ってなくてもゴミ袋の種類とその結び方で捨てた人間が充分特定できるので要注意だ。ゴミ袋を何種類も買っておいて、日によって別な種類の袋をガムテープで止めたり、紐でくくったり、ゆるく結んだりと毎回気まぐれに変えてゴミを出すとわかりにくい。

 やや高度な偽装方法としては、

他人の名前が入ったものを自分のゴミに混ぜて捨てる

というのもある。これは近所のゴミを漁って他人の名前の入ったダイレクトメールや請求書類を入手し、それを自分のゴミに混ぜてその人間が捨てたゴミのように見せるというテクニックだ。これはヤバいゴミを捨てるときや、ひとのゴミを覗く近所の詮索好きのオバンには有効な技である。

蛇足だが、もともとこの技は、「わざとメチャクチャに無分別なゴミ袋をこさえてその罪を他人になすりつける」という「同じアパートの特定の人物の評判を落とすため」に考案した陰湿な鬼畜技のひとつなのだが、さすがに俺もそこまでやってはいない。

自分のゴミが露骨に近所の詮索好きのババアにチェックされていることに気づいている

奴は、ゴミ袋の口を開けたところにカレンダーなどの大きな紙にマジックで、漁っているババア宛てに手紙を書いてやるといい。こっそり開けたゴミ袋に自分宛ての手紙なんかあったらババアさん驚いて心臓マヒで死んじまうかもな。それはそれで楽しいね。

手紙の文面は「○○さん、ひとのゴミ覗きとはいいシュミですね」とか「町内のみんなはあんたの趣味を知ってるぜ。恥を知りなよ」とか「おばさん、いちいちひとのゴミを漁らないでね。品性の下劣さを証明しているようなものですよ」とか「いつもご苦労様。実は俺は霊媒なんですけど、○○さん、あんたの顔には死相が出ているよ。あんたはもうじき死ぬんだあ！」など、相手が一読して気分を害するようなものにしてやるといい。ただし「○○さん、そんなにオレが気になるンなら、お●んこの一発ぐらいめぐんでやろうか？　オレのチ●ポはデカくて太いぜえええええ。今なら特別サービス価格で1時間5千円だ（ただしク●ニはなしよ！）」などというオチャメで挑発的なものは、欲求不満のババアに本気にされておま●こを迫られるとあとが面倒なので自重すべきだろう。

最後にもうひとつ高度なテクニックを紹介しておこう。他人の名前入りのものを入れるなどして偽装を続けるのはいいが、「全くゴミを出さない人物がいる」というのも不自然で怪しすぎる。ときどきはホントに害にも毒にもならないどこへ出しても恥ずかしくないゴミに、それとなく自分の名前の入ったダイレクトメールを入れて捨てるのもよい偽装工作になるということだ。当局だの私立探偵だのに見張られている人間には、そういう工作

も必要だろう（そんなやついるか～?：編集部注）。
何度も書くがこの国では「まわりの連中には少し抜けたバカと思われていた方が何かと得」だ。適当にバカを演じながら同時に「それでも精一杯カッコつけている」ように見せるのが高度なテクというものなので、そこを考えて行動するように。

情報ゴミの極北　パルプ・ノンフィクション

第5章　情念ノート

若い連中の捨てるゴミを漁っていると、コンビニで百円ぐらいで売ってる安いノートに自作の詩だの家計簿だの希望だの、ラブレターの下書きだの、カラオケ用の歌詞だのその他モロモロをたらたら書き綴ったノートが出てくることがよくある。それらは内容のわりに無造作に捨てられていることが多くて驚きだ。不思議なことに、この種のノートは破られて捨てられることがほとんどない。捨てる奴らは何を考えて破りもせずに捨てるんだろう？　ホントは誰かに読んでもらいたいのだろうか？

俺は日記も含めてこれらを総称して「情念ノート」と呼んでいる。どれもこれも内容が濃くて、読むとそいつらの情念がかぶさってくるようでちょっとヘヴィなんだが、世界に一冊しかない本であることは確か。今日は東京一怪しい非公認非売書店「汚穢ブック・ムラサキ」の最新入荷物件から、選りすぐりの情念ノートを6冊紹介しよう。ホットで超クッサイ情念ノートのごきげんなナンバーを楽しんでくれ！　一応名前は全部仮名なので深く詮索しないように。

は新宿の〇〇〇デパート。それからも何本かハメ●いながらやっと見つけた同棲相手のオサムは年下の男で、そいつのガキを堕ろしたのが数年前。それでも日記では結婚を誓い合っていたのに、この日記を拾ったところから出てきたこの女の現在の名字は、本名ともその男の名字とも全く別のものになっていた。世の中なんてそんなもんだ。まあ、結婚相手に満足しているから、こうした日記も捨てることができるのだろう。

百郎評価額　金1，980円也

コメント

中学生から8年間という長期間にわたり書かれていたこと、少女の崩壊過程が克明に描かれているところが高ポイントです。だけどしょせんどーでもいい連中のとことん安い話なんで、20年前の特売のジーパンの値段ぐらいが適当なんじゃないでしょうか？

第5章

情報ゴミの極北
パルプ・ノンフィクション

情念ノート

7月7日(日) たなばた様に☆

人間は男と女しかいな

いんだよ

私ーー ぜんぜんもてないで.

私は、考えすぎでしょうか?

『草井あそ子の青春一本道』

草井あそ子・著

ジャンル／日記

拾って初めて開いたページに書かれていたのは「2日前、私は赤ちゃんを●しました」という絶望的に重いコトバ。うわあああああ、こんな辛気臭い日記拾うんじゃなかったあああああ。と思ってももう遅い。相手の男の仮名は太宰治にちなんで堕胎治（だたい・おさむ）にしようかね。まあ、よくある不幸がテンコ盛り状態なんだ。

本書は東京郊外の住宅地の小さな商店に生まれ育ったヤンキー娘あそ子の中学3年から23歳までの発作的かつ断片的に書かれた日記だ。内容はほとんど、次々と好きになった男の話がコロコロ変わりながら情熱的に書かれている。なにせ中学生の頃からの日記なので、ただの女のコがだんだんすれていく過程がわかって面白い。やはり非行は誰でも長くむし暑い夏休みに進むようだ。このコは感心にも高校1年生の頃から夜中にせっせと新宿のスナックで同級生とアルバイトをしていて、そこで男関係が乱れたようだ。酒が入ってどうでもいい男と簡単に寝てしまうことを反省している旨を書き綴っているが、性懲りもなく同じ過ちを何度もくり返してしまうところが人間らしくて好感がもてた。人間なんてアタマで考えるほど簡単に変われるものではありまっしぇん。そんなあそ子が高校をやっとこさ卒業して（一緒にスナックのバイトをしていた親友のハメ子さんは落第）勤めた先

『ゆみかとマサキの純愛交換日記』

ゆみかとマサキ・著

ジャンル／交換日記

これは80年代の後期に、横須賀地区の別々の高校に通う16歳の初々しいカップルの2冊目の純愛交換日記。

ふたりは中学からの同級生で、中三の頃から恋人として付き合いはじめたが、学力の違いがふたりを分かち、高校は別々の学校へ通うことになってしまったという、学歴社会ならではの悲恋物語である。それでも家の近いふたりは、通学する朝は必ずどちらかの家の近くで落ち合って、この日記を交換していたようだ。

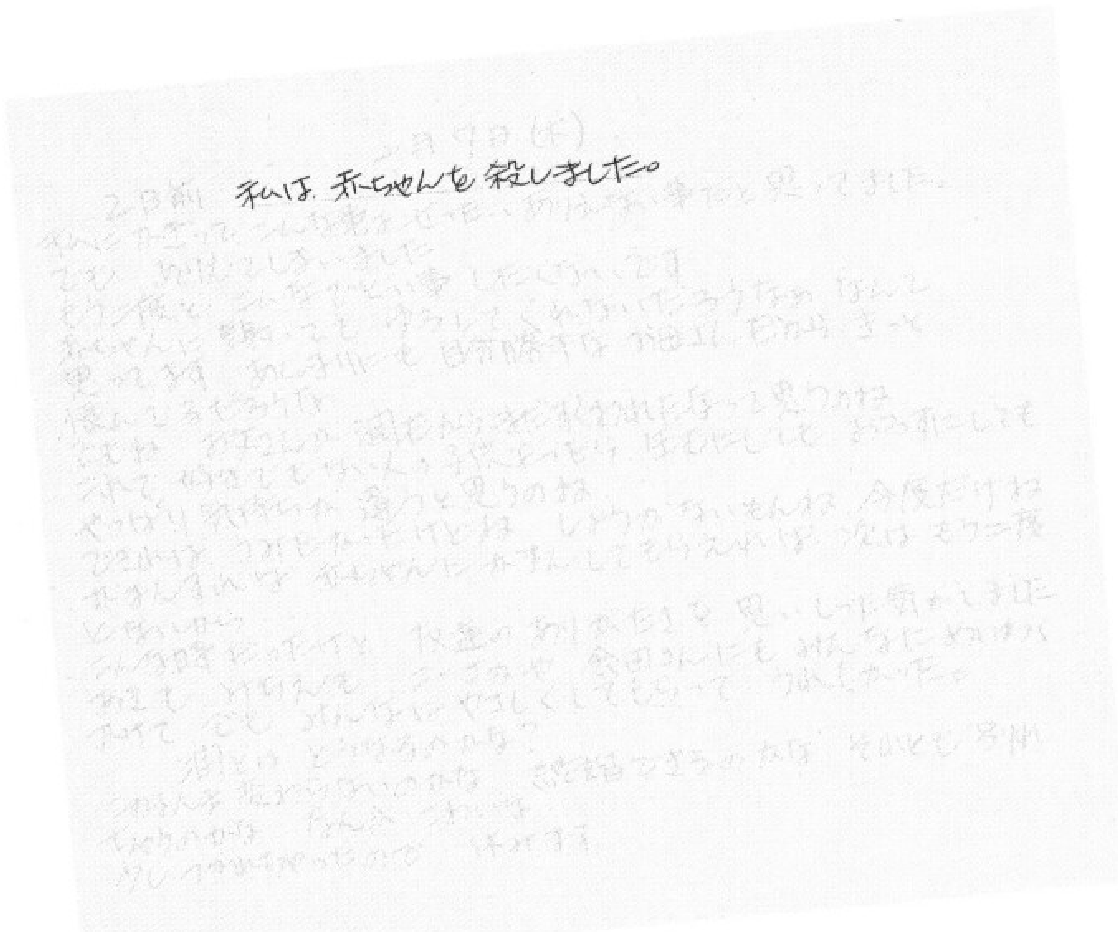
内容は、幼い恋のあまりの純粋さとガラス細工のような繊細な魂に、鬼畜な俺でさえ人間だった頃のことを思い出して、頭がクラクラして思わずイメクラへ行って「初恋プレイ」がしたくなるぐらい、甘く切ないカルピス・ウォーターの味がするものだった。とにかく、まだ、お互いどころか自分の感情さえも信じきれない幼い恋なのである。泣き虫のゆみかはすでに結婚したつもりになって、日記の中ではマサキのことは「パパ」としか呼ばないアツアツぶりだ。しかし、ふたりはそれでもしょっちゅう小さなつまらないことで喧嘩をしては離婚だ何だと騒いでしまう。日記の半分は、そんなふたりがお互いに「パパごめんね」「ごめんよゆみか」と昨日の喧嘩を謝り合うというパターンである。読んでい

失恋記念日デス　私の一生の中でものすごくふかくな日記

ません。　神さま でも私 友達を裏切ってもアンぱんはあきらめられ

神さま 罪深い私をどーかゆるしてください。

すところなく表現されていて、安い青春映画のように素敵なので、評価額も封切り映画２人分（大人料金）ってとこでしょう。



私は、赤ちゃんを殺しました。

毎年 夏には よみうりランドへ いこうよ
そして 何年かしたら 二人のはずが
3人で …

約束 10ヶ条＋α
女の子とは 絶対しゃべりません。
悲しませるようなことはしません。

♥もう パパから離れません♥

ると、「うぬぬ、おのれら、謝り合うぐらいなら初めから喧嘩すんな！」と言いたくもなるのだが、若いふたりには「ゴメンネ」もまた大切な「愛の言葉」なんだろう。

ふたりは日記の中で何度も「自分の高校の異性とは絶対に話をしない」と誓い合う。鬼畜オジサンの俺から見りゃあ、そんなことはふたりの恋愛とは何の関係もなさそうに思えるんだが、とにかくこれは純粋で厳密な恋愛らしくて、他の異性と会話するだけでも相手に対する裏切り行為になるようなのだ。若い奴らは潔癖だねえ。俺は鬼畜らしく、マサキが何度となく「俺はゆみかを一生愛する、生まれ変わっても絶対だ」と書くチカラ強い愛のコトバを読んで、「この女と10年暮らして、飽きるほどセ●クスして、そのうえで同じことが言えるんだったら言ってみろ」とオヤジくさくて現実的で夢のない感想を持ったが、そもそもこういう日記が捨てられたこと自体、こいつらの愛が終わった証拠だよな。マサキは「ゆみかを絶対にニューヨークへ連れて行くよ」と書いていたが、それは実現したんだろうか？　実際、ソープランドに入浴じゃあシャレになんねーぜ。

百郎評価額　金3，600円也

コメント

かつては誰しも経験したであろう、甘くほろ苦い青春の1ページ。若いふたりの純粋さが読む者の腐った心をスルドクえぐります。「純愛」の持つ美しさと馬鹿ばかしさがあま

の無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァ！　したがって評価額は、時間を無駄にするのに丁度よい駅売りの新聞一部の値段が適当ですね。

泣く時は、オレの胸で！っていう約束、最近
守ってくれてるね.

お腹が 大きく 膨らみ始めたよ

『風俗嬢Kの告白』

風俗嬢K・著

ジャンル／詩・エッセイ

これは近所に住んでいた19才の風俗嬢のなんでもノート。誤字脱字だらけで現在付き合ってるカレシとの出会いをヘタクソに記述したり、カラオケ用の歌の歌詞を書いた部分があったりと盛りだくさんだが、圧巻は小さい頃から兄にいたずらされ続け、中学生の頃に家で●された体験などがメンメンと綴られている部分だ。彼女の姉も彼女同様、兄に●されていて、助けを呼ぶ姉の声が一階から聞こえてきても、二階にいて何もできない自分が情けなかったと書いている。こういう文章は、文法が変だったり記述がたどたどしくても、エロ小説を読むのとは段違いのリアリティが感じられて、妄想にも拍車がかかってイイんだよな。う〜ん、オレんちからホンの百メートルも離れていない所に二見文庫のエロ小説ばりの悲劇があったんだからねえ。兄妹の近親強●！　姉妹のいない俺にはうらやましすぎるハナシだぜ。

この風俗嬢はノートの中で、そうした体験から、自分のカラダがとことん汚れきっていることを寂しそうに恥じていた。くっくっくっ、安い、あまりにも安い妄想だ。だけど「汚れているのはこの都市だって、俺だって、そこらじゅうの連中もみんな同じだ」なんて言葉は、こんなシビアな現実をかかえた女のコには気休めにもならねえよな。悲劇だろ

『こどもにっき』

えりかちゃん・著

ジャンル／日記

近所の女子高校生エリカちゃんの、小学１年生のときの二学期以降の日記。先生の赤字添削＆コメント付き。

わたしは、このにっきをひろってても、あんまりうれしくなかったです。なぜかっていうと、わたしはロリ●ンじゃないからです。かいていることも、がっこうからかえってきてだれとあそんだとか、なにをたべたとか、せいてきなことがなにひとつかいていないのでとてもたいくつでした。えりかちゃんがおとうさんといっしょにおふろにはいって、おとうさんのせなかをながしたところだけいんしょうにのこりました。おとうさんのち●ぽがどんなかたちをして、えりかちゃんがそれをみてどうおもったかが、ちゃんとかかれていると、もっとおもしろかったのになあとおもいました。

百郎評価額　金１２０円也

コメント

ああ、つまんねえ、つまんねえ、つまんねえ。こんなんじゃ抜けないし、拾うだけ時間

『爆裂少女R・ひと夏の体験日記』

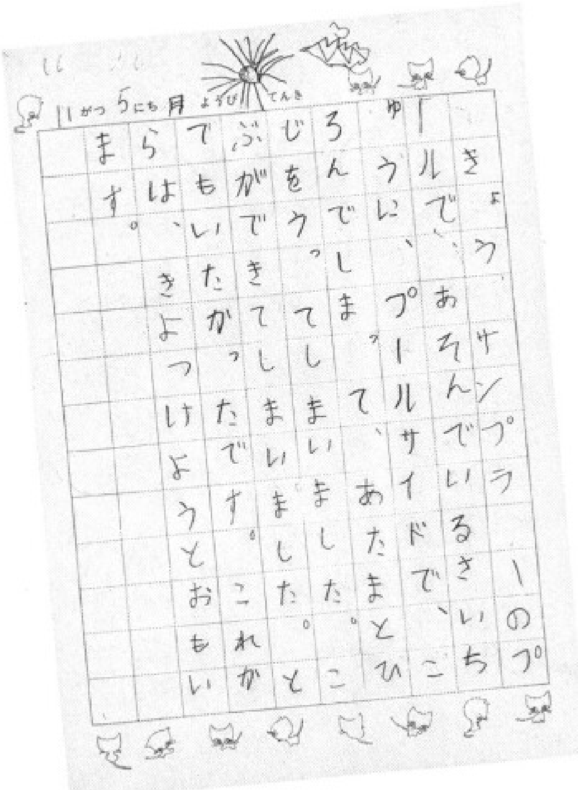
女子高校生リョーコちゃん・著

ジャンル／日記

内容は近所の女子高校3年生のリョーコちゃんの高校2年の1月から、3年の10月までの10カ月間の日記。

まさに「決戦は夏休み」っちゅう感じ。それまでは友達とユーミンのコンサートへ行ったり、お母さんと高円寺の西友にお買い物に行ったり、ハンバーガー屋でバイトしたりと平凡な女子高校生日記なんだけど、高校生活最後の夏休みに入ったとたんに突然、「爆発する少女の青春・十代の青い性！」っていうババア向けの週刊誌のショッキング・レポートに変貌してしまう安易さが素晴らしい。8月に入って友達の女のコたちと湘南の海へ行ってからが本領発揮。そこでナンパされて酒飲んでドライブに行って即席恋愛。海辺で一発キメられて気がついてみたら男は彼女の電話番号も聞かずにとっとと逃げてしまう。「結局、男って、女のコとやれればそれで満足なのよね」っていうありがたい真理を授かって、メデタシ、メデタシだ。こうして少女は少しずつ女になってゆくんだな。

そっから先もどんどん違う男にナンパされて、どいつもこいつも「電話するね」とか「東京で逢おうよ」なんていうわりには一夜限りの一発限りが多かったようで（別にセ●クスは回数じゃないけど、俺はつきあって最初のセ●クスぐらい最低でも一晩に3回は保



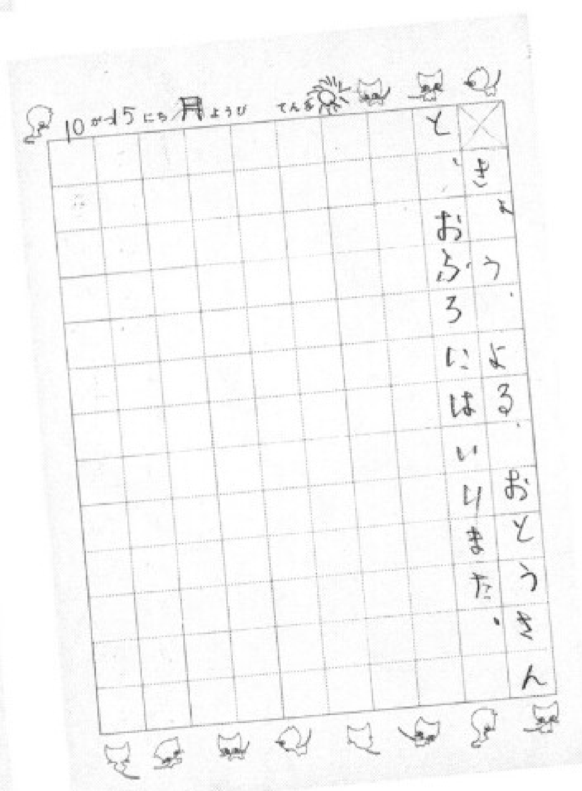
11がつ 5にち 月ようび てんき

きょう、サンプラーのプールで、あそんでいるさいちゆうに、プールサイドでころんでしまって、あたまとひじをうってしまいました。こぶができてしまいました。とでもいたかったです。これからは、きよつけようとおもいます。



9がつ22にち 土ようび てんき

きょう、がっこうから、かえて、ぶざーをおしてみたら、だれもでてこないから、おばあちゃんちへいきました。そうしたら、だなしのおじさんがいました。そのしとは、まへ、にゅういんしていました。それで、ばうずにしていました。



10がつ15にち 月ようび てんき

きょう、よる、おとうきんと、おふろにはいりました。

表現でグッドですよ。これだけ書けりゃあ避妊薬の注意書きぐらい読めるよな？　評価額は「友人の堕胎のための一人頭のカンパ費用」で充分だろう。

うが喜劇だろうが、抱えて生きる「思い出」のある奴は幸せだよ。心が腐った鬼畜な俺はこんな話を読んでも同情も共感もできねえんだよ。ただただ興奮して勃●して、こいつら姉妹の惨めな凌辱シーンを夢想してサルみたいに楽しそうにオ●ニーするだけさ。そのうちカネに余裕が出来たら彼女の店に行こうかな。俺のケダモノ臭い精●を、彼女の口の中から心の闇に向かって噴きちらかすのも面白いだろう。そんな思い出づくりも悪くない。
俺は汚いものや穢れたものが大好きだ。そういう「穢れ」に敏感な俺にとっては、「自分が汚れていると信じている女」なんて可愛いもんで、とても「穢れ」ているなんて思えない。少なくとも「自分がキレイなものだと信じて疑わない勘違いの腐れタカビー上品バカ女」の何十倍もキレイってもんだぜ、Kさんよ。

百郎評価額　金18，000円也

コメント

いいじゃん、いーじゃん、哀しいくらいにシビアで切実でシンコクだよ。俺はこんな情念がクルクル渦巻いたハードでヘヴィな安い悲劇がずっと読みたかったんだ。だからこれは評価できる。俺が拾った情念ノートの中では今のところこれがベスト・オブ・パルプノンフィクションかな。評価額はあんたの店の70分プレイ料金でどうだ？

なんか 男の人ってみんな同じくらいにやさしいけど そのやさしいのは ホントなのかウソなのか…

結局 男って遊んでれば満足なのよね

証するぜ！）、夏休みの終わり頃にはリョーコちゃんは「男のひとってよくわかんない」ってすっかり男性不信だよ。この夏休みの総まとめをB４の紙いっぱいに書いて、日記に折り畳んで貼り込んでたのが「特別付録」って感じでよかったね。

「少し大人になったのか、それとも一層遊び好きになっただけなのか、とにかくすてきな夏休みでした。一生忘れない。やがて秋、かえらない夏の日　二度と会えないだろう移ろいゆく人生」って書いているとこがポエムですねえ〜、青春ですねえ〜、安い貞操ですね〜。まあ、いいじゃない。何だって「お試し期間」ってのは必要だよ。どうしてこんな美しい日記を捨ててしまったんでしょう？　やっぱり今度結婚するからですかね？（ゴミで確認済み）

日記の最後の方で目立つのは、新学期が始まっても遊びぐせがぬけず、盛り場を徘徊してナンパされるのを待つ９月の後半部分。あとはどこまでも心地好くころがって行くだけなんだろうねえ。それもまた人生ですな。

百郎評価額　金１０，０００円也

コメント

「ひと夏の転落」というのは好感の持てるテーマです。ひとつの青春の終わりに激しく燃えんとするおんなの情念が感じられます。文章も、ひと昔前の青春映画のト書きみたいな

『24人の同級生ギャルたち』
伊集院リカ・編
ジャンル／調査ノート

某有名女子高校をこの春卒業したリカちゃんが、小学校卒業時にクラスの女のコ21人にそれぞれ1ページずつアンケートに答えてもらったもの。あらかじめフォーマットの印刷されたノートがファンシーグッズとして売られているとは俺も知らなかった。各ページに住所、氏名、電話、家族構成、血液型、誕生日、星座、ペット、好きなもの、嫌いなもの、好きなタイプ、嫌いなタイプ、自分を動物にたとえたら、部活動、所属クラブ、大事なもの、愛読書、10年後に何をしているか?、おこづかいの金額、父母の職業、将来の予想、性格チェックなどの記入欄があり、それが女のコ21人分ほぼ埋まった状態で捨てられているんだから、これはじっくり楽しめるノートである。みんなリカちゃんを信頼して書いたノートなんだろうけど、こうして6年後に破りもせずに捨てるんだから、こういうノートには不用意に書かないほうが賢いってことだよね。

以下はその回答の傑作選だ。

「好きなもの」はほぼみんな食い物をあげているが一人だけ「お金」と書いている奴がいた。この女は「ペット」の項目にも「うちの弟」と書いていて将来の鬼畜候補。

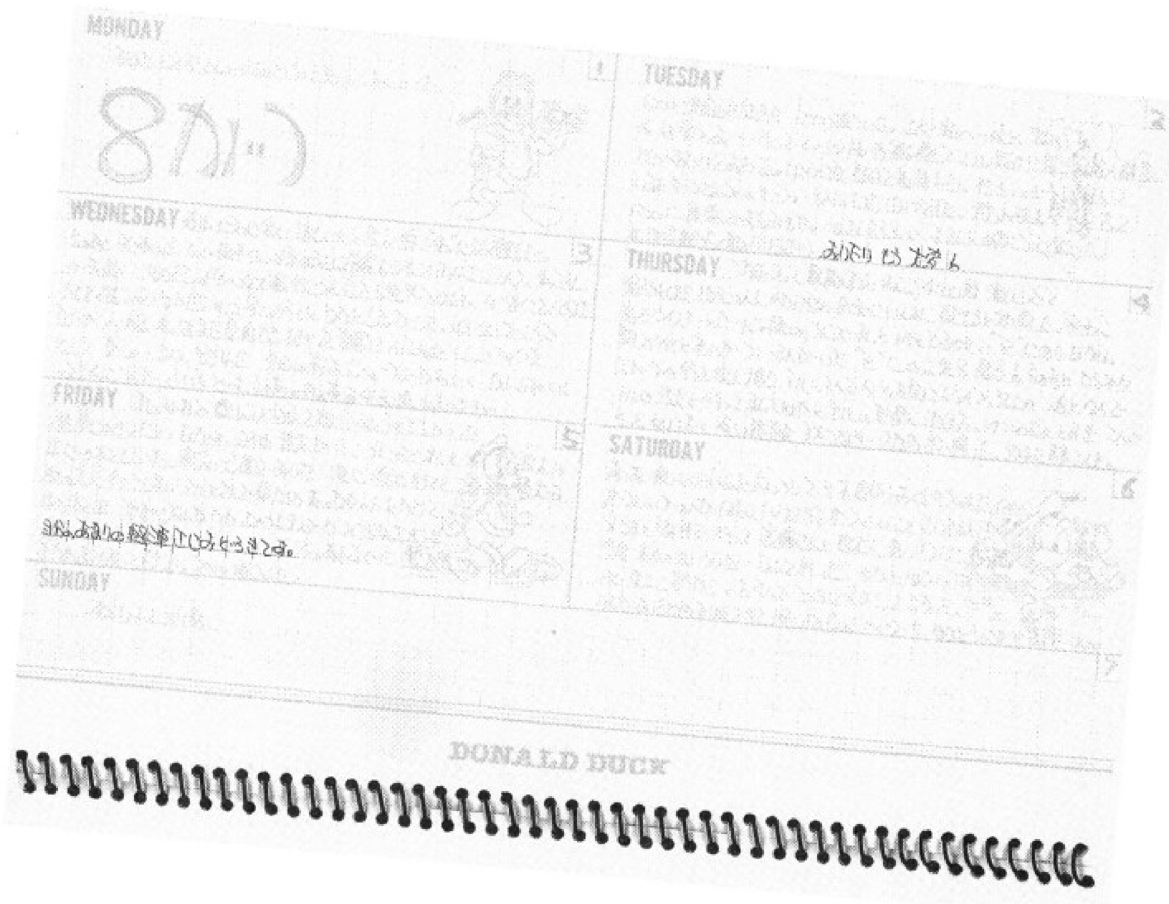
「キライなもの」はハ虫類と野菜類（ピーマンが断トツ）が多かった。

ぜんぶウソなのかなって思うとすごくかなしい

でも高校生活最後の夏休み　1つも　くいは　ありません。　男の人って　よくわかんないけど

コメント

高校を卒業してしまえば、これから先のオマ●コ人生に怖いものなし！　ってわけで「おじいちゃんのかたみ」なんて辛気臭いものは即ゴミ箱送り。小学生時代の友情も卒業ってワケですね。いやあ、それにつけても妙齢の女21人分の情報というのは貴重ですな。生ツバもんなので一人頭1000円ぐらい出しましょう。


MONDAY
1
8がつ
TUESDAY
2
WEDNESDAY
3
THURSDAY
4
FRIDAY
5
SATURDAY
6
SUNDAY
7
DONALD DUCK

がイカ臭いので、イカが好きな奴は拾っていくのもいイカも。ただ、俺はダッ●ワイフはあくまでも「人形」だから拾わないだけであって、「他人の使ったダッチ●イフだから」というのは理由ではない。野郎のはいたブリーフははく気がしないが、それとこれとはニュアンスが異なる。だいたい、これを読んでいる読者諸兄だって、現実のナマ身の女については他人のチ●ポが何度も入った女の●に平気でチ●ポを入れてるだろうが。しっかり洗いさえすれば、ダ●チワイフは無口なのと糞をしない分、そのへんの生きた生意気な女なんかよりも数十倍マシではないか。それに、いつでもやらせてくれるしな。世の中はピンクロ●ター以下の男が多いのと同じように、ダッ●ワイフ以下の女も少なくない。実に嘆かわしいことだ。

　また、引っ越しシーズンにはゲーセンのクレーンゲームの商品の小さなぬいぐるみがゴミ袋の中に大量に放り込まれて捨てられているのをよく見かけるが、ああいうのも見ているとやりきれなくなる。それはああいうぬいぐるみに限った話ではないのだが、どうにも使い用がなくて、はじめから捨てられるために作られたようなものはやっぱり哀しいではないか。

チャカ――論外。しかし、「こんど東京に関東大震災クラスの大地震が起きたときに、どさくさにまぎれて殺そうと思っている憎い連中を射殺するため」に、拾っておくというのもひとつの選択ではある。ついでに書いておくが、いま述べたことは冗談でも何でもな

「好きなタイプ」は小学生ながら「お金を持っている人」と書いている奴が結構いたけど「好きになったらその人がタイプ」と書くオトナびたコもいた。ちなみにそう書いた女のコのこづかいは月額4万円！（最高額）　隣のページを書いていた女の子なんか「6百円から8百円」だぞ。これは先進国と開発途上国のガキが一緒に机を並べているようなもんじゃねえか？　こんなに貧富の差があってよいものだろうか？

「愛読書」では「家にあるマンガ」とか「特にない」という奴が多かった。書名をあげているのでは『窓際のトットちゃん』、『ロミオとジュリエット』ぐらいのもの。

「こづかい」は「6年生だから600円」という奴をはじめ「1000円前後」の連中がほどんど。まれに「基本5000円、あとは家の手伝い時給1000円（家はレストラン）」というのがいるぐらい。通して見ると「4万円」というのがいかに突出しているかよくわかる。

——などなど、彼女たちのカワイイ絵や丸っこい字を見ていると気分がホンワカ、ホンワカしてくるから困ったもんだ。ちなみに、これを捨てたリカはレターケースいっぱいの手紙も一緒に捨てていて、その古ぼけたレターケースには、裏にマジックで「おじいちゃんのかたみ」って書いてあったぞ！　オー・マイ・ゴ〜〜〜ット！

百郎評価額　金21，000円也

医療関係の雑誌で分かるのだが、あまりよい気分はしない。つい先日もそういうゴミで「日本大腸肛門学会」の研究発表をまとめた会報を拾った。タイトルから妄想すると、偉いセンセイ方がぎょーさん集まって真剣に「け●の穴」についてあーでもないこーでもないと討論している様子が目に浮かんできてとても面白いのだが、中身を見ると怖い病気の症例の図版がカラー写真で入っていたりしてなかなか不気味である。こういう物件なら拾っても病気が移ることはなさそうだから安心して拾えるだろう。しかし、怖いのはメスや手術用品である。産婦人科医の使う堕胎用の手術用品を拾った話などをよく聞くが、そんな怨念のどっぷり染みついていそうなものを手元に置いておくのは霊的にも精神衛生上もよくないと思うのですすめられない。

ただ、それにしても開業医の出すゴミは気前のよい場合が多く、まだ充分使える電化製品や家具をおしげもなく放出してくれるのでとても重宝ではある。家を見つけたら粗大ゴミは欠かさずチェックしよう。

カラの財布——ターミナル駅近くのゴミ箱に捨てられているサイフは、スリがスリ取って中身を抜いて捨てたサイフのような気がするので、これも不用意に拾わない方がいい。カネが入っていることはまれである。また、拾って中を確かめるだけにしても、自分の指紋が付着して、のちのちあらぬ疑いをかけられてもつまらないので、素手で拾ったりしないこと。うっかり素手で拾ってしまったら、駅の事務室に届けに行った方が賢明かも。

縁起が悪い

できれば拾わない方がいい　危ないゴミ

一見何でも拾えて楽しそうなゴミ漁りだが、それなりにリスクはある。それをこれから説明しよう

鏡――非科学的には、「使っていた女の念がこもる」と言われている。確かに人のさんざん使った鏡をあえて拾ってまでは使おうとは思わない。拾わない方が無難だと、この俺は思う。

人形――これも鏡と同様、念がこもり、さらに意志まで持ってしまいそうで怖いモノだ。特に古びた市松人形などは、捨ててあるのを確認したときに目が合っただけでも何かよくないことが起きそうなので拾うのはやめておいた方がよかろう。

もちろん、それを逆手に取って、いやな奴に「これは老中田沼意次が吉原の花魁に贈った由緒正しい人形だ。手元に置いておくと福がさずかるそうだから」とプレゼント用に拾っておくという手もあるが、一瞬たりとも自分の家には持ち帰りたくない代物である。

ダ●チワイフなども、ごくごくまれに小さくたたまれて密閉して捨てられているが、こういうのは念ばかりでなく持ち主の淫波も強く持っていそうで嫌だ。もちろん、ほとんど

い。

パチンコ攻略講座の通信教育セット――先日、近くに住む●国人のゴミの中から、まっさらで封も切られていないパチンコ攻略の通信講座のセットがまるごと出てきた。中を開けてみると入会証と料金の振込み用紙まで入っていて、３万円弱の料金を振り込んだ形跡がまるでない。モノだけもらってトンズラというのもワイルドな話だが、これはそのセットの中身を開いた形跡さえないのだ。クギの見方だとかパチンコ家計簿だとかいたれりつくせりの教材なのに、どうして見もしないで捨ててしまったのだろう？　などと思った瞬間にアタマの中に電波がきて、情況が全てわかった（つもり）。このセットを買ったＲは（名字は漢字一文字でした）つい最近日本に入国してきてパチンコで儲けようと「パチンコ攻略の通信講座」の教材を申し込んだが、それが届く前にパチンコのプリペイドカードの偽造団に入ってしまい、教材を使う必要が全くなくなってしまったというわけなのだ。したがってカネを払うのも馬鹿ばかしくなってまるごと捨てたのだろう。アレはひたすら偽造カードでパチンコ玉を買い続けて換金するだけなので、パチンコ台の攻略方法なんてまるで必要ないもんな。これでは教材会社が可哀相だが、料金の取り立てはまず不可能だろう。その後、３日も経たないうちにＲは安アパートをひきはらってどこかへ引っ越していっちまったしな。カードの偽造団ってのは、儲かるらしいから、いまごろは立派なマンションに住んで、日本の女でも買って窓から新宿の夜景でも見ながらチ●ポコしゃぶって

い。そういうことを本気で考えている奴は意外に多い。他人の怨みを数多く買っている連中はせいぜい気をつけるんだな。ああ、もちろんだ。おれは絶対にやるぜえええええ！

パスポート――男物のセカンドバックが路上にぽつんと落ちていたので拾ってみると中から日本国籍のパスポートが2通出てきた。それは中年オヤジと20代の若い男のもので、ふたりは生まれも名字もバラバラで顔もぜんぜん似ていなかった。むむむ何と怪しいシチュエーションだろう。偽造パスポートや不法入国の臭いがプンプンとするではないか。さもなくばこいつらはどこかの犯罪組織の構成員同士で、組織の掟に逆らって芽生えた道ならぬホモの恋を成就させるために逃避行を重ねてここまできて、追っ手の目をごまかすためにパスポートを置いて行ったのかもしれない。そんなしょうもない妄想が瞬間に数百種類頭の中にわいたが、馬鹿馬鹿しいのでその数が4ケタになる前に止めた。幸いなことに薄い手袋をしてバッグを開けていたので、俺は指紋を気にせずに元の場所に放り出して帰った。こういうのは高値で売れるんだそうだが俺は特に興味はない。

病院関係――さすがの俺もあまりやらないのが病院のゴミ漁りだ。まさかポリバケツに胎児なんて入ってないだろうが、院内感染なんかも問題になってるし、衛生面から考えても漁らない方が賢明だと思う。しかし、住宅地でゴミを漁っているとつい小さな開業医のゴミなどはイキオイで拾ってしまうものだ。それはゴミの中から出てくる医師会の会報やら

の路上でコーンフレークの箱いっぱいに血染めの手ぬぐいを詰めて捨てていたものを見つけたことがあったが、何のためにそういう捨て方がされていたのか考えれば考えるほど謎めいている。見つけてもあまり気持ちのいいもんじゃないし、その血が流された過程がさあっと電波になってやってきて人が刺される瞬間が見えることもあるんだが、もちろん、そんなものは妄想だよ、妄想。

タネを明かそう。これはおそらく自宅で小動物をさばいて喰った連中が、服についた血に困り、服ごと捨てたに違いない。タヌキ狩りでもしたんだろう。上着の胸や腹の部分に何かを刺したような穴が空いてたりするけど、きっと動物のツノで刺されそうになったに違いない。さもなきゃ動物に服をかぶせてメッタ刺しにしたんだな。服の内側の方においただしい血がついているのもこれで説明がつく。それでも納得がいかない人には「映画の撮影の小道具」ということでカンベンしてもらおう。最近の学生はリアリズムにこだわるから、血糊なんか使わないで自分たちの血を流して撮影に使うことぐらいあるさ。まあ、とにかく、俺の知らないところで何が行われていようと俺の知ったこっちゃないってわけさ。

血染め系のゴミも、驚いたのは最初の2件目ぐらいまでだな。とにかく3回目以降からは「あー、ハイハイ、またキミね。コリャあきつね狩りだな。さもなきゃニワトリでも締めたんだろう。ストレスたまってる奴らは多いしね」と、悩まなくなった。そして、どんなに好意的に見てもシャレんならないほど大量な血の付着物を見つけたときは、「空手家

置き引き系――ゴミ漁りを長くやっていると、駅から少し離れた駐車場の脇のゴミ集積所近くなどで、会社の書類や文房具がいっぱい詰まったビジネスマンのカバンがまるごと捨てられているのを見つけることがある。これが落とし物にしても絶対におかしいのは、たいていカバンの中にサイフが入っていて、カード類はそのままで現金だけが抜かれていることだ。ひどいときには保険証などもそのまま入っていたりする。こういう物件はどう考えても置き引きかひったくりにあって金だけ抜いて捨てられたものとしか考えられない。これをそのままガメては単なる窃盗になるので、拾わないほうが賢明である。

こういうものは拾ってしまったら、その後始末がめんどくさい。警察に届けたらあれこれ聞かれるし（趣味でゴミ漁りをしているんですが〜なんて言ったら、間違いなくその地区の「不審人物リスト」に掲載されてしまう）、住所を調べて直接そいつの家に届けるのもかったるい。拾わないのが一番だ。ちなみに、例をあげたこのカバンの場合は、いちおう私はそれを警察に拾得物として届けました。「犯罪行為を見つけたときに警察に通報するのは市民としてあたりまえの義務」ですからね。

もちろん、これは駐車場に限った話だけではない。ゴミ集積所に妙に新しいハンドバッグやカバンが捨て置かれているのを見つけたときは要注意である。とにかくヤバそうなゴミを見つけたら、不用意に素手で触らないこと。ゴミ漁りは、その行為自体が非常に怪しいので、つまらない疑いがかけられないように、いくら慎重にしてもし過ぎることはな

できたらしかった。とりあえず病院に行こうとさそったが、それは大丈夫なんですと彼女は激しく嫌がった。生理中だったのかも知れないが、おそらくは●されたことを人に知られるのが嫌だったんだろう。何があったんですかなんてとても聞けなかったが、どうやら複数の男に車に連れ込まれて別の場所でやられてここへ放置されたようだった。俺は、じゃあ、家に帰らなくちゃね、と言って、彼女にスカートや腕についたほこりを払わせて、大通りの方まで連れて行って、タクシーの通るのを待った。タクシーが通りかかるまで10分ぐらい間があって、俺はその間の沈黙が重苦しくて、ついつい「童謡は何が好きなんですか？」などという見当違いのくだらない質問をしてしまった。女は確か、あなたがさっき歌った歌はどれも寂しくて好きじゃないですと言ったように記憶している。失礼な奴だとも思ったが不思議と腹は立たなかった。むしろ、そういうことを言う元気があるならこの女は大丈夫なんだろうと安心した。俺も、そうだよな、さびしい歌はよくないなと相槌を打って笑った。そして、女がカネを持っていないようだったので、どこまで行くかを聞いて距離を確かめ、「返さなくてもいいよ、あんたは俺の歌を聞いてくれたから」などと陳腐で安いセリフを吐きながらタクシー代を3千円渡した。

俺はタクシーに乗って去ってゆく彼女を見送り、なんとなく「月の砂漠」を歌いながら家へ帰った。「体位は？　持続時間は？　で、あんたは結局イッたのか？」というドゲスな質問を最後までできなかったことを悔やみながら。

読者諸兄には「鬼畜のくせにカッコつけやがって」と思われるかも知れないが、元は

もらってるんだろうな。いやあ、世の中イロイロだ。

近所に裏ビデオ製作所？——これはやはり近所のマンションの集積所であった話だが、ある日、3本とか5本とか、まとめてセットで売っているビデオテープの包装セロハンがものすごく大量に捨てられていて俺は驚いた。ビデオテープの包装セロハンなんてゴミにしてもほんの少しの量にしかならないはずなのに、これが大きめのゴミ袋がパンパンになるまで詰め込まれて、しかも、それが3袋もあったんだから、少なく見積ってもビデオテープの数は千本は軽く越えていたろうと思われる。これは、個人が「セーラームーン」や「クレヨンしんちゃん」を録画するには大量すぎるし、娘の成長を撮影して親戚に配るにしても多すぎるテープの量である。となれば考えられるのはマンション内に秘かに作られた「裏ビデオのダビング所&倉庫」である。うぬぬぬ、畜生、カネさえあれば直接買いにいくのだが……。

血染め系——といっても、生理用品のゴミではない。血が付着した布や服などが紙袋に幾重にもくるまれて捨てられていたりするタイプのゴミのことだ。生理の血とはニオイも全然違うし、乾いて固まっているので見ればすぐに判断がつく。

この種のゴミも密封された状態で出てくる場合が多いのだが、その密閉のされ方も、スケベ系のゴミとはずいぶん違った工夫が凝らされている。たとえば前に一度、都内〇〇区

踊り漁ろう、夜明けまで！　ハキダメからのラブレター

第6章　断章　物語ゴミ

がウシでも殺したんだろう」と思うことにしている。深い詮索は無用である。
だけど、身に憶えのある奴は安心していいぜ。俺は人が趣味でやった犯罪をわざわざほじくり出して警察に通報するほど無粋じゃないし、親切でもない。だいたい死体の一部を見つけたって「ゴミ漁りやってて見つけました」なんて、どの面下げて警察に行くんだよ。真っ先に疑われるのは目に見えているしな。まあ、今までそんなことはなかったんだけど、もし仮に人間の手だの足だののを見つけてしまったら、俺は自分の指紋がついたものに関しては責任を持って誰にも見つからないように処分してしまうだろう。焼いたり、細かく刻んで川に流したり、方法はいろいろある。いずれにしても、これはあくまでも仮定の話だからな。

●された女——もう、15年以上経ったから書いてもいいよな。場所は午前3時の中央線某所のガード下の駐車場の暗がり。俺はそこでうずくまってしゃくり上げていた女を拾った。最初は酔っ払いかとも思ったが着衣の乱れ（というか破れ）が尋常じゃないので、すぐにアノ後なんだなとピンときた。よほど怖かったのだろう、震えているばかりで近寄るとノラネコのようにウーウーわめいてもうケダモノ状態。女の気持ちを落ち着かせるためにその場でいきなり童謡を歌うこと10数分、俺の歌がよかったとは思えないが「月の砂漠」を歌い終わってから「大丈夫？」と声をかけたら首を激しく横に振って、それからなんとか話す状態にもっていけた。ようやく俺を「レ●プの順番待ちの男」ではないと認識

フリーランス・ダストハンター

俺のやっていることは、どんなに偉そうなウンチクをたれようが、世間一般の常識に照らし合わせて考えれば、しょせんはゲスで下品で悪趣味な「たかがゴミ漁り」でしかない。んなこたあ言われなくても承知しているし、俺は常にそのつもりでゴミを漁っている。

そして、もちろん自分はダストハンターとしては、喰うためにやっているプロの連中に比べれば、「あくまでもアマチュア」であることも充分自覚しているつもりだ。プロとは根性が違うし、張り合う気持ちもさらさらない。俺のゴミ漁りはあくまでも趣味でやるお気楽なものだ。いつやってもいいし、いつ止めてもいい。時間やノルマに追われないという点で、俺はとても自由な「ゴミ漁り野郎」なのだ。俺がこれから記述するお安い物語の数々はどれも、そうした「フリーのダストハンター」でなければ感じたり楽しめたりできない種類の安っぽい物語である。読者諸君、願わくば、以下のページは便意を催したときに、自分が一番安心して脱糞の楽しめるアンビエントな便所へ行って、便器に股がったり腰掛けたりして、クソをしながらそして自分のクソの匂いを楽しみながら読んで欲しい。なぜなら、これから俺が記述する馬鹿ばかしくも情けない物語群は、どれも「人糞」という時代遅れの肥料のような、クセエばかりで収穫の増大はあまり望めそうもない、まるで非生産的な物語だからだ。

しっかり取ったつもりだ。考えてもみろ、「●された直後の女」なんて見せ物は、見ようったってめったに見られるもんじゃねえし、あんなクセェ台詞を現実の生活でしゃあしゃあと吐ける機会に恵まれるなら5千円ぐらい払ってもバチは当たんねーよ。今でもあの情景を思いだすと興奮で股間が膨れるぜええええええ！

　そして、今もときどき「月の砂漠」を聞くと「ああ、今夜も人知れず●されている女がいるんだろうなあ」と、しみじみ思う。あんなやっかいなゴミはもうごめんだけどな。

世界は広く、
夜のなかで行われる秘め事は多い。
それら全てを妄想せよ。
『ダスト・テスタメント』「夜の章」より

残飯が詰まった生ゴミの袋は完全無視だったが、文房具類の詰まっているゴミ袋なども見つけると中を物色して使えそうなものは全部持ち帰った。何せ根が貧乏性なもんで、まだ使えるノートやサインペンなんかを見つけるともったいなくて拾わずにはおられなかったのだ。

そうそう、当時、小学生のゴミの中から24色のクレヨンセットを拾ったときは妙にうれしかったなあ。もうガキじゃないんだし、「おそらくこんなモンは、生涯二度と自分用には買うことのないものだろう」と思うと感慨深いものがあったよ。黄銅色のクレヨンが欠けていたけど、あとはほとんど新品同様でさ。俺はアパートに戻ってから以前拾った白いノートを引っ張りだして何か絵を描こうとしたんだけど、適当なものが浮かばなくてさんざん迷ったあげく、結局自分の工場にある愛用の製粉機の絵を描いた。笑わないでくれよ、これでも俺は小学校1年生の頃には校内写生大会で金賞をもらったことがあるんだぜ（今でも口内射●大会があるなら、結構いいセン行けると思うんだけどな……）。そのあと描いたのは当時パートで工場の事務員をしていた近所の人妻、あきよさん（32歳）のヒザの上から首の下までの身体の想像図だった。実際はダンナにさんざん吸われてもっと黒ずんでいたろうけど、これは俺の絵ってことで乳首やアソコは茶色を塗らずにキレイなピンク色をていねいに塗ってやった。小学校の頃、図工の時間に先生も言ってたっけな、「ありのままを描くことだけが絵画ではない」ってさ。そのあと何となく絵を前にオ●ニーをしたんだけどこういうオナ●ーもたまにはナカナカよいもんだぜ、「印象派の●ナ

踊り漁ろう、夜明けまで！
ハキダメからのラブレター

第6章

断章
物語ゴミ

パンティをひきおろして前戯もほどほどに、臭い仮性●茎チ●ポをおっ立たせて、10年後はブカブカで入ったンだか抜けてるンだか判断がつかなくなるが今はまだよく締まる彼女のみずみずしいアソコに入れクルい、いつも平均2分50秒であえなくイッちまっていたのが、この優しそうなモヤシ男かよおおおおおお。ふうううううん、いいなあ、いいなあ、これがナウくておシャレな大学生の青春ってやつかよおおお、畜生百姓！　うらやましいなあ。しかし、こいつはいいものを拾ったぜえええええ。これは、さっそく家に持ち帰り、ブラジャーのニオイが少しでも消えないうちに燃えるようなぜ●ずりをこかなくてはたまらんなあああああ！」と瞬間的に感じた俺は、急いでウィスキーの空箱の入ったゴミ袋ごとわしづかみにして自分のアパートへ持ち帰り、女の写真を穴があくほど凝視して女の身体のすみずみまでくまなく綿密に妄想しながら、鼻にあてがった女のブラジャーをスーハースーハー深呼吸してニオイを楽しみつつ（過呼吸で精神がハイになってたと思う）、摩擦で火が起きそうなぐらいにチ●ポを激しくしごきまくったものだ。

そんな嵐のようなオ●ニーのあと、精を出し尽くし落ち着きを取り戻した俺は、何か他に使えそうなものはないかと、拾ってきたゴミ袋を物色した。すると書き損じた手紙や、友人からきた暑中見舞い、大学のサークルの名簿（女のメンバーの家の電話番号もしっかり記入されている！）、などがぞろぞろ出てきたのだ。

書き損じた手紙には親友に宛てた自分の恋愛の相談が連綿と書かれていた。名簿や手紙の内容から判断して、彼女はW大学の2年生らしく、写真に写っていた彼氏は大学のテニ

モノガタリを拾うゴミ漁り

以前、夜の中でしみじみと考えたことがある。

俺のゴミ漁りが他の連中と違うのは、それは「モノだけではなく、モノガタリを拾うゴミ漁り」というところなんだろう、と。（……しかし可笑しいよな。「モノガタリを拾うゴミ漁り」などと書くと、さも高尚そうな芸術行為であるかのような錯覚を起こしてしまいがちだが、ゴミ漁りは何をどーやっても、あくまでも「ゴミ漁り」でしかない）。

俺も初めはエロ本や雑誌をタダで拾って読めるのが楽しくて、そればかりを目的に、夜な夜な学生や若い連中が住んでいそうなアパートの多い住宅地を徘徊した。幸運なことに、俺が上京した80年代初頭というのは、女のコの陰●や●器が、薄いパンティごしに透けて見える「ビニ本」が空前のブームだったし、アダルトビデオも今ほど普及していなかったせいかゴミ漁りに出かけると毎晩最低10数冊はエロ雑誌やビニ本が拾えたという幸せな時代だったのだ。

「そうさなあボウズ、ピンク映画にしてもエロ本にしても、あの頃の男の性欲にはロマンがあったよ、フォッフォッフォッ」

——もう、10年もすればそんなたわけたセリフがしゃあしゃあと吐ける懐古趣味親父になれるかもしれないが、今はとりあえず話を進めよう。

ゴミを漁るうちに、「衣類を詰めたゴミ袋の中には若い女の下着が入っていることもある」ということに気がついた俺は、本類以外のゴミにも注目するようになった。さすがに

はその日から）、同じことをくり返すことができるとしても、やはり愛と欲情ははかないものである。

そうやって、しみじみ愛の難しさを痛感しながら（ウソ）、俺は彼女のゴミをチェックし続けた。サークルの新入生名簿を開いてみると、一人1ページずつ、名前、住所、電話番号、趣味特技、好きな映画や音楽、理想の異性のタイプなどが手書きで書かれたものが36人分コピーされて並んでいた。この中には36人分以上の愛と、欲望とセ●クスがうず巻いているのだ。俺は1ページずつ読みながら、夜明けまでゆっくりと一人一人のこれまでの「人生と●ックス」と、これからの「人生とセ●クス」を、きっちりまんべんなく妄想してやった。「人に歴史とセッ●ス有り」とは俺の迷言である。これは、余計なお世話かもしれないが、どんなツマラナイ奴やくだらない奴らにも「これまで辿った人生とセック●がある」ということだ。それらをきっちり想像したり妄想してやることこそ、深い人間理解という「大いなるひまつぶし」につながるものだと俺は考えている。36人分の人生とセッ●スを妄想しながら「そうか、ゴミは情報なんだな」と、そのときはじめて気がついた。

人間嫌いにとっての「夜」

自分ではそうでもないと思っているのだが、俺は人に言わせると、「とても暴力的な人」なんだそうだ。何のことはない、小さい頃、舌が短かかったせいか（これは後年ク●

ニー」って感じで。
おっと、油断をするとついつい話が脱線してしまうな……いかんいかん、話を戻そう。
とにかくそんなゴミ漁りを続けていたある夜、俺は新宿の若松町付近の公園の近くで、なぜかウィスキーの空箱に入った若い女のブラジャーと写真を拾ったのだ。

ゴミと人生とセックス

確かウィスキーの銘柄はサントリーのリザーブで、箱は贈答用の箱だったと思う。中に入っていたのは使い込んで少しヨレた80Ｂのベージュのブラジャーだった。それは洗濯済みのものだったが、そっと鼻を寄せて匂いを嗅ぐとほのかに甘酸っぱい若い女の匂いが残っていた。これだけでも充分たいしたお宝なのだが、それに加えて持ち主のものと思われる貴重な写真が付いていたのである。サービスサイズの写真が2葉。いずれも恋人とおぼしき男と一緒に浜辺に立っているスナップだ。おそらく場所は湘南だろう。写真にはハマトラ（死語）ファッションに身をつつんだ倉田まり子（死後、じゃなくて死語）似の女のコが、大学生によくいそうな、ナヨナヨしたうらなりみたいな笑顔のまぶしいチン●ス野郎と一緒に仲良く写っている。男の右手には、なぜかサザンのレコードがあった（湘南↓サザン↓ハマトラ↓恋人　嵐のような青春ワンパターン！）こんな物件を手に取ってしまうとすぐに頭の中に妄想電波がやってくる。
「ほおおおお、こいつがこのブラジャーの持ち主で、こいつのチチをモンだり吸ったり

ているコンビニや喫茶店でも注文時と支払い時以外は言葉を交わす必要はほとんどない。黙っていれば餓死するまで放っておいてくれるステキな街――俺にとって東京はまさに理想的な世界なのだ。勤めている工場の中でも、わりと重労働である「製粉機への仕込み」ばかりを好んでしているのは、それをやっていれば他の連中や工場長たちと話をする機会が格段に減って気分的には楽だからだった。

夜が更けて住宅街の路上に立ち、闇の深さと静けさをしみじみ心地好く味わうとき、俺は自分が「人間嫌い」であることを自覚し、人間どもの姿をほとんど見なくて済む夜の景色を心の底から美しいと感じる。その魅力を語り尽くそうとすれば、この本一冊ではとても足りないだろう。

俺は夜と夜の闇が大好きだ。闇の中に浸り込み、夜の街をひとりで徘徊することは、俺にとってはある意味でセ●クス以上の快楽なのだ。他人のゴミを漁るのはあくまでもその行為のオマケである。でなければ、16年間もゴミ漁りを続けたりはしなかったろう。なぜなら俺は、そもそも他人のプライバシーに興味を持つほど、人間のことなんか愛しちゃいないのだから。

美談なんか糞でもくらえ

そして、俺は人間どもがときどきひまつぶしで紡ぎ出す、お涙頂戴の「美談」や「イイ話」が大嫌いだ。そんなものを聞くと吐き気がするばかりか、頭痛がして無性に人をブン

スのサークルの先輩で、昨年の夏の合宿に告白されてから交際を続けていたという。ところが、現在商学部3年のこの男は、嫉妬深いうえにあきれたマザコン野郎で、付き合えば付き合うほど彼の粘着質な性格が彼女の気に障りはじめ、交際を続けていくかどうかで悩んでいるという。マザコンも程度によるが、セ●クスの射●時に「ママァ〜!」と気持ちよさそうに叫ぶような奴は救いようがないような気がするし、こんなことを手紙に書かれるぐらいなんだから相当なものなのだろうな。

　こんな奴では捨てられてもしかたがないなと思いつつ、俺は手紙を読みながら、「どこで誰に自分のことがどう書かれているかわかったものではない」とも思い、苦笑した。そして、こんな恥くさいことを手紙に書きながら破りもせずに、下着と自分の写真をつけて無造作に捨ててしまうこの女にも「馬鹿じゃねえのか」と少々あきれてしまった。ゴミの中から出てきた尾瀬のキーホルダーや横浜土産の小さなボトルシップの置物は、彼氏と行った旅行やデートの記念の品だろう。愛の終わりにはこうしてふたりの思い出も全て精算されてしまうのだ。

　好きで好きでたまらなかった相手への燃えるような激しい想いも、天を貫ぬかんばかりに雄々しく屹立したペ●スの怒張も、初めて彼女をハメ倒したときに流したうれし涙も、何度かくり返した性●で流した汗も、噴き出したカウ●ーもスペ●マも、みんな雨のように流れて、どこかの下水道から暗い東京湾の果てへと行ってしまう。

　やがて時が満ち、傷ついた心が癒されれば、また恥知らずに欲情し（立ち直りの早い奴

鹿にされて腹を立てるほど自分のことが好きでも大事でもないからだ。

実際、俺はかなりの部分で「何でもどうだっていいや」と思っている。だからこそ、ときどき相手を選んで途方もなく長い間憎んだりつけ狙ったりもできるのだ。これは、感覚的にはほとんどゲームに近いものがある。こんなことを書くと、読者諸君は「たかがゲームでいちいち命をつけ狙われちゃあ、たまんねえよ」と思うだろう。しかし、何せ世間は広いしいろんな人間がいるものだ。諸君の想像を越えたキ●ガイがいても別に不思議はないのである。そして、そういう奴らはこの今の東京にはあまたいる。

俺はときどき夜の闇の向こうに、自分よりももっともっと頭のネジのブチ切れた奴の深くて暗い咆哮を感じることがある。同じように昼間に街を歩いていても、数年間に一度ぐらいの割合いで、自分以上に「人を人とも思わない冷たくて不気味な魂」の存在を身近に感じて鳥肌が立つことがあるのだ。これは決して妄想などではない。この都市の闇の向こうには、ひまつぶしで犯罪や人ゴロしをやるようなハイホーな野郎が、確実に何人かは住んでいるのだ。そんな邪悪さを秘めた闇だからこそ俺は夜に魅かれるのだろう。

さて、話がどんどん横滑りして論旨があやふやになっているが、何が言いたかったかというと、「生まれつき感情の希薄な俺だが、感情の希薄な分だけ、ことさら人がむせび泣くような美談やイイ話を聞くのは不愉快である。基本的に何でもどうでもいい俺だが、物語を受け取るなら、なるべくヒドイ話、悲惨な話、あきれた話、とんでもない話、けしからん話などを受け取りたい」ということだ。

ニ強化の為にコップの底をナメるなどの猛特訓をしたせいで、現在は少し長く伸びた気がする）流暢にしゃべるのが苦手で、言い争いになると言い返すのがおっくうで「とりあえず一発」という感じで、言葉で言い返す代わりに拳を用いていただけのことである。俺にとっての暴力なんて、昔も今も「説得力の一部」ぐらいのことでしかない。

当然ながら、こういう生き方をしていると友人が極端に少なくなってくる。というか、「誰一人いなくなる」と言った方が正確か。気がついたら「あいつは乱暴だから」という理由で、まわりじゅうの人間に嫌われてしまっていた。しかし、それは俺の望むところだった。俺はそれでなくても、自分以外の人間のことはやたらにうざったくて嫌いだったのだ。イナカの方なら、気に入らない奴は片っ端から殴ってしまえばそれで済んだが、この東京ではそうもいかない。滅多やたらに殴ったりしてはすぐに警察のお世話になってしまう。そこで俺はなるべく他人から遠ざかることを心がけた。幸いなことに、東京は広くて人が多い分だけイナカと違って、ご近所付き合いのような面倒なものを一切しなくても済む俺向きの場所だったのである。

人間はやたらと多いけど、みんな俺とは無関係の赤の他人ばかり——要は「形のある幽霊」みたいなもんだ。自分をとりまく多くの赤の他人たちは、確かにそこにいるのだけど、こちらから話しかけたりして関係が生じない限り、自分とは無関係の「形のある幽霊」のままでいてくれる。たまに道を聞いても「知りませんよ」とつれない返事で人を無視してさっさと行ってしまう忙しそうな連中。そういうそっけなさが俺はとても気に入っ

恨みを残して死んだ死者たちの声とは明らかに違う、捨てられたゴミの声や呼びかけを説明したり表したりするのに適当な言葉を俺は知らない。ただ、どのゴミも微弱ながら似たようなことをつぶやいているものだ。

「……なぜ捨てる……俺はまだ……」

「あさこさん……あさ……こさん……あさ……」（おそらくは捨てた持ち主の名前を連呼）

「……ココニイル……ココダ……ココニイル……」

「……お願いだァ……拾ってくれよう……」

やだよ、馬鹿。

風の強い夜などは、はるか遠くの風上に置き去られたゴミの声が、風の音に混じって聞こえてくることとさえある。これらの声は昔から俺の頭の中に直接響いてくる「電波」とも多少違った聞こえ方がするものだ。多分、非科学的に考えれば、「人が長い間使用したモノにこもった念」を感知しているだけなんだろう。呼び声の中で気になるものを選んで、呼ばれるままにゴミ収集所へ向かい、深い物語が付いているモノを拾うことは、この16年間に何度もあったので、俺も今では別に驚かない。実際、「声」なんてどこにでもある

殴ってやりたくなる。小学生の頃、「道徳」の教科書を開く度に、載っている美談を読んで意味もなく狂暴化して、それを抑えるのに大変だった。国語の教科書にも、ときどきそれに近い「とんでもないイイ話」が載っていてやっかいだった。初めて『走れメロス』を読んだときなどは、顔から火が吹き出るぐらい頭にきてひきつけを起こし、「こんな話を書いた奴は絶対に俺がコロしてやる！」と即座に決めたが、作者の太宰治がとうに死んでいることを知り、悔しくて歯ぐきから血が出るまで歯ぎしりをして「俺が死んで地獄に行ったら、この野郎を見つけ出して八ツ裂きにしてやる！　すでに地獄の責め苦で八ツ裂きになっていたら、俺が十六裂きにして地獄の底のこの世でいちばん臭いこえ溜めの底の底まで叩き落としてやる！」と怒りまくった——というのは、やや誇張したウソ八百で、俺はそもそもそんなに感情の起伏の激しい人間ではない。「こいつは殺っちゃおう」と決めたら、あとは淡々と怒りを顔に出さずに10年でも20年でも30年でも、時には相手に媚びへつらい、親友や手下子分になってでも貼り付いて復讐の時を静かに待つという立派なキ●ガイである。

詳しく書くと長くなるので端折るが、俺は電波系で幼い頃からいろんな声だの電波だのを受信し過ぎて、感情が希薄なサイコパスになっているのだ。だから人前で見せる感情のほとんどは社交用の演技で、腹が立ったり怒ったりというのも、実はほとんど皆無なのだ。知らない連中に馬鹿にされたりするのも、面白くはないがそれほど腹は立たない。こちらも相手を同格の人間とは認めず「形のある幽霊」としか思っていないし、いちいち馬

ゴミがモノガタル暗い過去

つい、うだうだとつまらない能書きばかりが長くなってしまった。さてと本題、ディープな「物語ゴミ」を紹介していくとしようか。

あまりにたくさん拾いすぎて、いちいち年代順に並べるのもメンド臭いんで、思いつくままに代表的なものを羅列しよう。

あれは数年前、場所は杉並区の高円寺の方だったと思う。そのゴミは女子高校生の卒業&引っ越しゴミだった。文房具やノートがたくさん入ったゴミ袋をまるごと持ち帰った俺は、ゴミ袋の中から出てきたくつ下やパンストや、イチゴ模様の小さなシミ付き木綿のパンティ（いかにも若い女のコって感じで微笑ましいねえ。女も歳くってくるにしたがって、素材は絹やポリエステルや科学繊維のものが多くなり、形もTバックやヒモパンみたいに毒々しいのをはくようになる。木綿のパンティってのは青春の象徴かね？）に満足して、若い女は趣味じゃないが、ここは木綿という素材に免じて一本抜いてやろうかと、俺はやや太いち●ぼこ（当社比）をしごくのだった。全裸になり、皮膚を鋭敏にしてしばしの瞑想後、ニオイのしみついたパンストを頭から被って鼻のあたりに股間の部分をあてがい、深呼吸をすれば、向こう側の世界も見えてくる。ああクセエ、若いのに何てクセエんだ！　このニオイと味からして、この女は生理中だったに違いない。初めて拾ったゴミがハタ日のものかよ！　こんなことでこの娘の将来は大丈夫なんだろかと、俺は少し心配に

すまんなあ、俺は何せアタマが悪いんで、的を射た話ってやつができねえんだよ。

この東京の夜に散らばる物語が美談だけなら、俺は決して「モノガタリ」を拾い漁ったりはしなかったろう。ゴミから拾える「モノガタリ」は、どれも捨てられるだけあって、ロクなものではない。本書の「情念ノート」や「女体ファイル」を見ても分かる通り、普通の人間なら「こんなもの拾うんじゃなかった！」と後悔する「モノガタリ」の方が圧倒的に多いのだ。それでこそ、この鬼畜たる村崎百郎が拾うに足りる「モノガタリ」というものだ。人間なんかそれほど興味もないけど、奴らが捨てたもの——人が必要としなくなったものなら、人でないものとしていくらか興味が持てるのだ。「人が捨てたモノやモノガタリ」を人間性をとうに捨てた鬼畜が拾う——実にあざとくてチンケでお安い構造ではないか！

暗闇からの呼び声

不思議なもので、奥の深い「物語ゴミ」ほど探そうとしても見つかるものではない。逆に「物語のほうから呼ばれた」といっても過言ではないくらい、向こうの方からやってくるものなのだ。と、これは学術論文とは何の関係もないゲス文書だから、いくら非科学的なことを書いても許されるだろう。何を隠そう、業の深い「物語ゴミ」は、それを読んでくれる者を求めて深夜の路上からダストハンターたちにか細い声で呼びかけるのだ。

「……拾ってくれェい……拾ってくれよう……」

だった。そのときふと、ノートの表紙に書かれていた女の名前が目についた。何ということだ！　中学2年の英語のノートと高校1年の国語のノートに書かれている名字が違っている！

――なるほど。この期間に、両親が離婚したんだな。

不思議なことに、この女のコのゴミの中からは、他に父親宛ての平成2年度の杉並区の住民税の滞納についての支払い勧告通知が入っていた。平成2年というとバブルがはじけた後である。このコの家もバブル破産で一家離散のパターンなのかもしれない（この手の情報ゴミや物語ゴミって実際多いんだよ）。その通知を見て、現在の彼女が親父の名字でなくなっているところから、彼女が母方に引き取られているのは間違いなかった。多感な年頃の女のコだし、男親では荷が重かろう。それでも彼女は、学校からの通知や予備校のパンフや模試類などの残りの情報ゴミを見る限りグレた様子もなく、テニス部の合宿に出たり、予備校の夏期講習を受けたりと、平均的な学生生活を送っていたようである。

あと、まるでオマケのように杉並第○中学校時代の生徒手帳3年分が出てきて、そこに記入されている先生のハンコ入り通信欄を見て面白いことに気がついた。彼女は1年と2年のときにはケガや病気以外の理由で体育の授業を休んでいないのだが、3年になると「生理の為、体育の授業を見学します」というのが何度かあったのだ（6月以降）。なるほど、すると彼女の初潮は中学3年の春から初夏にかけてだったというわけだ。

こんなふうにゴミ同士の要素を繋ぎ合わせて、捨てた人間の人生についての情報が紡ぎ

し、電波なんて俺の人生の中じゃあ、珍しくも何ともないものだ。
かといって「俺に拾われるゴミは全て、この宇宙のはじまりからすでに、この時間と空間の中で俺に拾われることが定められていたんだ」などとご大層に「運命」を感じることもない。常識を超えた神秘的なモノやコトはそこらじゅうにいくらでもある。このゲスで下品な「ゴミ漁り」という行為の中にさえ「超偶然の一致」や「数億分の確率で俺の手元に届く不思議」など、限りなく神秘的な現象が宿るというのは、この世がそもそもいいかげんなものだというよい証拠である。だから俺は金輪際、不思議なことを「神秘」なんていう偉そうな言葉で表現するのはやめてやる。神もいないこの世に「神秘」などとは笑止千万、神秘というより「珍秘」と呼ぶのが適当だろう。蛇足ながら、この世界にはびこる「聖なるもの」は、全てだいたい「性なるもの」の恩寵であり、チ●コとマ●コがなけりゃあ何も始まらないのがこの世の常であり、そもそもこの世界がゲスで下品であるよい証拠でもある。だから、オメエらいいかげんにスカしてんじゃねえ！（ちなみにウチの近所のハッテンバ公園ではチ●コとア●スだけで夜毎全てがはじまって朝までにキッチリ終わっているようである。先日、朝の散歩で公園に散乱するペ●スサイズの魚肉ソーセージと、ベンチで白目を剥いて痙攣していた赤いシャツを着た遠藤みちろう似の下半身全裸野郎を見たとき、俺はこの街全体の発展を確信した。ホ●人口が街の四割を超える前に、色白で唇が赤くてキメのこまかい肌の持ち主のウブな少年がいたら、殴り倒してけつの穴にぶち込んでやってもいいかな、とも思う今日この頃である）

て、まじめに買ったテレカで夜な夜な海を隔てた遠い故郷の家族に電話をしているわけだ……なんか悲しいねえ。俺は正義もモラルもねえから、リボンをきちんと結んで可愛く揃えて捨てられているテレカの束を見る度に、「もう、いいかげんに誰か彼女に偽造テレカの入手方法を教えてやれよ！」って無責任に叫びたくなるんだけど、彼女は敬虔なクリスチャンだから教えても偽造テレカを使わないかもしれないし、実際に俺がやってることといえば、そうしたテレカの束の中からまだ使える5度や10度の未使用部分を残したテレカをセコセコ拾って、自分の日常生活で使ってるぐらいのモンだ。これも広い意味では「搾取」だよなあ。俺は彼女たちフィリピーナの身体を食い物にしている連中とまったく同等の存在なんだ。そう思うと自分の鬼レベルがまた少し上がった気がしてうれしいよ。

カタログ1枚の夢

ある夜、俺は何となくゴミの呼びかけを感じてふらりと自転車に乗って、家から数百メートル離れた露地裏のゴミ集積所に立ち寄った。そこには掟破りの無結束でパチンコ雑誌が数十冊、山と積まれて放置され、夜風に吹かれてカサカサとかすかな音を立てていた。

何だこりゃあ、全くのスカじゃねーかよと、なにげに雑誌の山を蹴り崩したら、フェンダー社のエレキギターのカタログが出てきた。それも4年も前の古いものだ。ははあ、こいつが俺を呼んでいたのか、それにしてはつまらん話だ――と、思いながらカタログの裏

なった。こういう間の悪いオンナは、往々にしてクリスマスイブと生理がぶつかって、「ホワイトクリスマス」ならぬ「レッドクリスマス」という具合で、いつもかんじんなときに生理になってしまい、怒った恋人にブン殴られて代わりに無理矢理ア●スを犯されたりするものだ（しねえよ馬鹿、おめえだけだ：編集部注）。メチャクチャにエキセントリックでロマンティークな俺も、どこかのパラレルワールドで、恋人にクリスマスに生理になられてしまい、怒ってタコ殴りにしたうえで「早く終われ」と言わんばかりにあそこに掃除機をぶち込んで経血を吸い上げるという暴挙に出た記憶がありそうで怖い（あるわきゃないだろ、この馬鹿！：編集部注）。

冗談にしてもイヤな話が続くが、鬼畜な本なんだからしかたがない。俺は女性の生理については気にならないといえばウソになるが、生理中に無理矢理●にぶち込まなければ気が済まないというタイプの心の狭い男ではない（あそこは太いし）。衛生面から考えても生理中は●でのセックスはお休みにしておいて、その期間にこそア●ルの開発やねっとりしたフェ●チオによる口内発射を楽しむべきだろう。これは全くのデタラメなのだが、本来女性の生理はそういう楽しみのためのシステムという気がしてならない。

さて、何度目になるかわからないが、また話を戻そう。女子高校生のゴミで一本抜いた俺は、落ち着きを取り戻し、残りのゴミをチェックした。学校の授業のノート類が10数冊出てきたので、こういうところに授業ノートにカモフラージュした秘密の日記類があるかもと、入念にページを開いて確かめてみたが、何てことのない英語や国語の普通のノート

の東京で、髪の毛をキンキンの金髪に染めた山形にはチラシかポケットティッシュ配りのバイトぐらいしかあろうはずもなく、いくつかのバイトを流れ流れて気がついたら、4年の歳月がたち、彼はパチプロになって高田馬場駅前の宇○会館の常連として、毎朝10時には開けきらないシャッターをくぐって颯爽と台の確保にダッシュするナイスガイになっていたのだ。友達もほとんどがパチプロ仲間で、好きなロックの話ができる奴は一人もいない。もう充分だ、もういいだろう。明日の見えないパチプロ暮らしをしているこの生活自体がオレにとっては充分ロックだ。会社に入り、飼い慣らされちまったおまえらクソ大衆どもにオレの熱い魂がわかるか！　おれはロックに生きているんだ！　とばかり、自分を誤魔化しているんだか本当にそうなのかは誰にも分からないし俺にも判断できないが、とにかくもうギターのカタログはいらない。山形はカタログを捨て、ギターの代わりに抱きしめるようにパチンコ台にかぶりついて今日もパチンコ屋でロックンロールを生きている。それはこの世に数多く存在する『歌にならない歌』のひとつなのだ。

　これを挫折というのか成功というのかは俺にも判断がつかないが、俺の興味はもっぱら自分の未来の●交についてなので、この男の話はこれまでだ。東京のゴミ集積所には、夜毎多くの若者の、挫折したり終わってしまった夢のかけらが一山ナンボで並んでいる。そこから物語を読み取るのも読み取らないのも自由なんだが、ふと振り返り「自分は何がやりたかったのだろう？」と考えてみるのもひまつぶしとしては面白いかもしれない。まあ、ひまつぶしして読みとられる夢の方もたまらないだろうけどな。

だせるゴミを、俺は「物語ゴミ」と呼んでいる。
それにしても、この女のコにすりゃあたまんねえだろう。なにせ見ず知らずの変態男に両親の離婚はともかく、初潮の時期まで勝手に妄想されるんだからな。日々、無造作に出される膨大な量のゴミの中には、そんな物語がたくさん潜んでいるんだ。そう考えるとゴミは怖いねえ。

望郷テレカの束

近所に住むフィリピーナは、なんとなく泣かせる物語ゴミを出す。派手すぎる下着とかステージ衣裳みたいなものを拾う度に俺はズリネタが手に入ってうれしいんだけど、その一方で、自分の中のある部分ではそういうゴミを見る度に、確実にまた少し、自分やこの国が嫌いになったりもするものだ。そんな中で印象的だったのは、彼女が使用済みのテレホンカードを百数十枚重ねて、オレンジ色のリボンをかけて捨てていたことだ。彼女はいつもそんなふうにしてテレカの束を捨てるのだ。そのテレカが故郷の家族との国際電話に使われていたのは明らかだった。何故ならテレカの半分近くが10度数か5度の未使用部分を残したまま捨てられていたからだ（国際電話だと5度や10度はモノの数じゃないんだろう）。逆に言うと国内で電話をかける友人なんて誰もいないんだろうな。ついでに書いておくと、これらのテレカはみーんなＮＴＴの正規のカードで、ウラに磁気テープを貼り付けた偽造テレカは1枚も入っていなかった。彼女は毎晩身体を張って特殊な肉体労働をし

上をダンプカーで3回引き潰したような凄まじく乱れた字ばかりで、内容も「〇月×日きょうはセンターのろうかを三おうふくした。階段を四階までのぼれた」なんていうメガトン級の重くド退屈な記述のくり返しだからな。それも一行書くのに10分以上かけたのではないかと思われるぐらい、もの凄い筆圧で書かれているんだから読む方も疲れちまうぜ。

俺は単純に「歌」だと思った。こんな壮絶な歌を聞いたのは久しぶりだ。

書くべきことも、描くべき絵も何も持たなかった障害者A、お前の20年はどんなふうだったんだ？　画用紙の様に単純に白紙だったわけではあるまい。一日に廊下を三往復する以外に楽しいことはあったのか？　身体を折り曲げて這いずってのぼった福祉センターの4階からは何が見えた？　これから先の20年、お前はどこを何メートル歩くんだ？　お前はゴミ漁りなんてしたことがないんだろうな。好きなだけ生きて生きて、死んだら電波になって俺のところへ遊びに来いよ、俺のアタマへ入ってこい。そしたら冴えた月夜のゴミ漁りの楽しみを教えてやるよ。頬を撫でる夜風はいつだって冷たくて気持ちがいいんだぜ。そこで朝まで俺と一緒に女の下着を踊り漁ろう。素人女の普段着のパンティを探そう。お前はロリ好みか？　俺は腐りかけた30代の年増女が大好きさ。ブラジャーは何色が見たいんだ？　うまく洗っていない臭いのキツイのが見つかるといいよな。生理ゴミはクセエだけだからそれほど大したことないよ。それより洗濯済みのパンティにほのかに残った女の体臭ってカワイイぜ。パンストの股に残った素人女のあそこの臭いを気の済むまで

を返して驚いた。取扱い店の項目に押されていた楽器店のハンコの住所は「山形県某市」という聞いたこともないド田舎のものだったからだ。

「今から4年も前に東北のド田舎で配られたエレキギターのカタログが、東京の住宅街のゴミ集積所、それもパチンコ雑誌の山の中から出てくる理由とは？」——素直に考えれば導き出される物語はこんなものだろう。

分をわきまえて他の大多数の青年団のみんなと同じように矢沢のエーチャンの熱狂的なファンにでもなっていれば、いまごろは帽子いらずの超リーゼントひさしアタマで田んぼのあぜ道をのし歩いて、ビッグでグレイトになった錯覚を起こして、農協のねえちゃんを口説きまくりハメ●い、それなりに楽しい青春を送ることができたろうに、何を間違ったんだか——おそらく街一番の大きな本屋に毎月2冊だけ入荷する『ロッキンオン』でも読んでいたんだろう。ヘタをすると阿木譲の『イコノスタシス』や『ＥＧＯ』を読んでいた可能性もあるが、それならば捨てられていたカタログはおそらくシンセサイザーだったろう——洋楽ロックにかぶれて本格的なミュージシャンを志した青年、山形大助（仮名）は高校卒業と同時に進学や就職というありふれた平和に背を向けて、田舎街のメインストリートにある楽器屋（レコード屋を兼ねる）に置かれていたフェンダー社のギターのカタログを手に取り、「俺もストラトキャスターを買って超ビッグなギタリストになってやる！」と大志を抱き、状況もろくに確かめずに明るく能天気に上京するのだった。しかし、バブルブームはとうに過ぎ、バブルもはじけて経済の不況もオウムの布教もまっ盛り

マーヤはそれを見てもわけがわからないんだけど、恋人同士が互いに相手を静かに想いやっているのを深く感じて満足する——という部分があった。

「ニンゲンのいちばん美しい姿」って何だろね？　もしも俺がかげろうで、マーヤに「ニンゲンのいちばん汚い姿を見たい」と言われたら、俺は迷わずマーヤを夜露に濡れた夢の島へ連れて行き、夜明けまでゴミを漁りながら、そこから得られる汚穢にまみれた下らない物語を見せ続けるだろう。そして、「ニンゲンのいちばん美しい姿」を見せてくれと頼まれても、同様に夢の島へ連れていくと思う。なぜならあそこは汚いものや醜いものばかりではなく、善なるものや美しいものも、その全てが揃っている気がするからだ。

それにしても、奴はギターを買えたのだろうか？

白紙の紙が語るもの

またある夜、俺は住宅街を包むように流れる川のそばでノート類の入ったゴミを見つけた。これは情念ノートかもしれないと思って家に持ち帰り、中を広げると少し破られた小さめのノートが出てきた。他に入っていた病院からの書類のコピーや福祉センターの用紙に書かれていた文書など、様々な情報ゴミを合わせ見て、拾ったのが身体障害者のゴミであることはすぐにわかった。なかなかハードでヘヴィなゴミである。久々のヒットかもしれないと俺は少し緊張しながら一つ一つのゴミを検証していった。

このとき、俺はなぜか破られた日記よりも、一緒に入っていた何も描かれていないまっさらなお絵書き帳と、赤茶けて古ぼけた原稿用紙の方に気を引かれた。お絵書き帳は今から20年以上前にＴＶ放送していた古いアニメのキャラクター商品で、原稿用紙の方も、紙の色褪せ具合から考 えて20年以上前の品であることは間違いなかった。

こういうときは白紙の紙の方が饒舌に物語る。つまり、こいつは20年以上前に人からもらった原稿用紙やお絵書き帳に、書くべきことも描くべき絵も何ひとつ持ち得なかった奴なのだ。それらをゴミで捨てたのは、これから先のあるかないかの20年も同様に何も書けないと考えたからではないだろうか？

無理もない。日記に書かれていた文字は、どれもミミズを紙の上にのたくらせて、その

いった噂が一部で飛び交っているようだが、そのどれもが『Xファイル』や矢追のUFO番組の見過ぎによる妄想である。「馬鹿が多いな、あのトラックの正体は全部プラズマなんだよ」と、思わず親切で言ってみたくなる気もするが、俺の言ってることがわからない奴らはそういうトラックを見たら一杯のお水とお線香をあげてお経を読んであげるといい。要は供養する気持ちが大切なのよねとギボさんなら言うんだろうな。最近は古紙も安くなっていると見えて、新聞でなければ持っていかないような業者も多いようである。

彼らの狙いはあくまでもまとまって束になった新聞紙やダンボール箱なので、俺が探している物語ゴミやプライバシーゴミ、下着ゴミなどは見過ごされる。だから彼らが通ったあとでもあきらめずに漁ること。

俺もいつか、彼らとゆっくり話でもしたいと思っているのだが、彼らはいつも忙しそうに人目を避けながら車を走らせているのでその機会はなかなかやってこない。

＊ダストハンター（お仲間）

最近とみに増えている気がするのが、若い連中による新参のダストハンターだ。これは長引く不況と俺が雑誌『ＧＯＮ！』（ミリオン出版）でやっている連載の影響かもしれないといったらフカシ過ぎだろうが、とにかくうれしいことだ。若い男女がゴミ集積所でしゃがみこんで雑誌の束を前に「これもう読んだよ」「こっちはまだだね」なんて言いながら楽しく物色している姿は微笑ましいし、大学生ふうの男性ふたりがエロ本の山を紙袋

思いっきりかいでから帰ってゆけよ、空の果てに輝く夜明けの光芒の中へ。

夜の物語たち

あれこれウダウダ書いてきたが、基本的にはどれもこれも字にすればどうってことのないお安い話ばかりだ。しょせんは人の捨てる物語、ロクなものがあろうはずもない。ゴミから出てくる物語に期待するほうがどうかしているんだろう。

それでも俺は夜の路上に無数に転がるお安い話が大好きだ。

いくらでもどうにでも解釈できるし、俺が読み取ってやらないとそのまま「夢の島」へ行っちまうだけだからな。「夢の島」とはよく言ったものだ。まさに文字通り、多くの人間の破れた夢や、捨てた夢が流れ着く場所なんだから笑っちゃうよ。

昔、子供用の絵本で「みつばちマーヤ」を読んだとき、こんな話が載っていたように記憶している。いちいち本を見て確かめるヒマはないので間違っていたら許してくれ。

みつばちマーヤがかげろうを助けたら、かげろうは「お礼にあなたの願いをひとつだけかなえてあげましょう」と言うんだ。そこでマーヤはかねて興味のあったニンゲンについて「ニンゲンのいちばん美しい姿を見てみたい」というようなことを願い（このへんアヤフヤ）、かげろうはマーヤを夜の公園に連れて行って、街灯の下のベンチに寄り添う恋人同士を物陰から覗かせるんだ。その恋人同士は別にキスをしているわけでもなく、並んでベンチに座り、お互いの手を片方だけ重ねてわずかにうつ向いているだけだったと思う。

コンビニの普及で消えゆく職業のひとつではないかとも思うのだが、まだまだそんなことはなさそうな気配だ。午前3時を過ぎるとチャリンチャリンと牛乳ビンの揺れる音を立てながら軽トラックが住宅地の中を配達に回りはじめる。朝一番早いのはこの人たちだろう。俺は彼らの配達の姿を見かけたのをもって「一番鶏が鳴いた」と判断している。

＊新聞配達

午前3時半ぐらいには販売所でチラシの折り込みが始まる。そして早い連中は4時過ぎには配達を始める。そういう時間にゴミ漁りをすると彼らとひんぱんに道ですれ違うが、彼らの存在は朝の風景のようなもので、それほど気にかける必要はない。向こうも配達作業に忙しくて他人のことなんかそれほど見ている余裕はないはずだ。

＊猫のひと

いわゆる猫のこと。俺が猫のことを「猫のひと」などと擬人化して呼ぶのは、何も「猫が可愛くて大好きだから」という理由では決してない。その逆だ。俺以外の他の人間なんて、俺にとっちゃあ犬猫も同じじってわけだ。だから猫を人間扱いして、他の人間どもを動物と同じレベルに落として考えているんだ。この悪意がおわかりかな？　お前ら赤の他人の生死なんて、俺には近所の犬猫程度にしか感じねえって言ってんだよ！

漁ってDANCE!
夜を徘徊する奴ら

ダストハンティングをやっていると、当然だが興味深い連中たちにめぐり合う。そういう連中について、夜とゴミ漁りを理解するための教材としてここに記そう。

*廃品回収業者

2トン車、あるいは4トントラックで燃えるゴミの日の回収日前夜に住宅地を回って、まとめて捨てられている古新聞や古雑誌の束を拾っていく業者。ゴミ漁りをしていると、だいたい夜の12時頃から午前2時半ぐらいによく遭遇する。彼らはチリ紙交換と違って、トイレットペーパーを渡す相手がいないので、その分いい商売と言える。めぼしいゴミ集積所の前に止まっては捨ててある新聞紙や本の束を荷台に放り込んでいく。俺も機動力では到底こいつらにはかなわない。

彼らの姿は雑誌の取材やビデオの撮影などで都内各所をゴミ漁りで回ったときも必ずといっていいほど見かけたので、その活動範囲はほぼ都内全域にまたがっていると考えて間違いない。運転手は皆、なぜか帽子を深々とかぶり目立たない格好をしている奴が多く、そのせいか「あれはＵＦＯの搭乗員が化けている」だの、「フリーメーソンの東京占領計画の活動」だの、「ＵＦＯ情報を隠匿しようとＣＩＡとブラックメンが暗躍している」と

もう15年も前の話だが、新宿の歌舞伎町の交差点などで布教をしていた年老いたジイさんの宣教師がいた。ジイさんはいつも白いヒゲがぼうぼうで壊れかけた黒ぶちの眼鏡をかけて粗末なコートを着て、小型の拡声器をつけた手押し車から「キリストはいつも私たちをご覧になっています。悔い改める者に天国の扉は開かれます……」などというありがたいお言葉をテープで流しながら、下手な絵が描かれた小冊子を通行人に配り歩いていた。俺も何度か冊子を渡されて読んだが、中はしょうもないキリスト教の教義の解説だった。鬼畜な俺に信仰心など芽生えるわけもないのだが、「しょぼくれた」というより「死にそうな」という言葉がよく似合うジイさんの後ろ姿が何となく印象に残り、人の顔などめったに憶えない俺だがついつい顔を憶えてしまった。

そして当時新宿に住んでいた俺は、ある夜ゴミ漁りでフラフラ歩いていて、近所の仕出し弁当屋の前で、この宣教師のジイさんの隠れた姿を見てしまったのだ。ジイさんは弁当屋の前のポリバケツのフタをあけて一心不乱に残飯を食っていた。うわあああああ、お前何食ってんだあああああと俺は驚いて思わずその場に立ちすくんでしまった。

ジイさんは俺の姿を見ると残飯漁りの手を止め、ほんの一瞬気まずそうな顔をしたが、ポリバケツから手を放すことなくまたすぐに残飯をむさぼり続けた。おお、これが本当に「食い改める」ということなのだなと納得した俺は静かにその場を後にした。次にジイさんを見かけたのはそれからほどなく近所の交差点で信号待ちをしているときだった。ジイさんは相変らず黙って俺に「裁きの日は近い」「主はいつでもあなたを見ている」とタイ

に詰め込んでいる姿には清々しい友情を感じるね。きっと半分に分けてオカズに使ったらまた回し合うんだぜ。ダストハンティングは2人か3人組ぐらいのパーティが丁度いいかもしれない。大人数でやると大げさすぎて近隣住民に警察へ通報されかねないし、「お宝の分け前が減る」からな。

前にも述べた通り、俺はこういう連中を自分の巡回コースで見かけても「ショバ荒らしだ」なんて全然思わない。なんだか同じゴミ漁り仲間って感じがしてうれしいんだ。「君たち、この辺だったら、二丁向こうのマンションの前がオイシイぞ」なんて先輩風ふかせてアドバイスしたくなるんだから俺もいよいよオヤジだよな。

俺の仲間や友達もどんどん日常的にゴミ漁りをやる連中が増えている。すでに「ゴミをやる」というのがひとつのコトバとして流通しはじめてるんだから楽しいよ（俺の妄想かもな）。

＊ホームレスの連中

住宅地ではあまり見かけない。繁華街の方が食うものには困らないから、活動は主に駅や駅周辺の商店街なんだろう。俺は商店街のゴミにはあまり興味がないのでそれほど彼らと接点はない。

＊牛乳配達

ているジミ目のワゴン車を見たら「只今営業中」と思って間違いない。俺が徘徊している杉並区はアパートのポストに日替わりで宅配裏ビデオのチラシが入っているような恵まれた環境なので、深夜、マンション前のゴミを漁っていると突然ワゴン車がやってきて、中から若いあんちゃんがビデオを持ってあわただしくマンションの階段を上っていくということも珍しくない。

そして、たまにそういうワゴン車の中から日焼け&茶髪のケバい焼豚系ネエちゃんが肩から大きめのバッグを下げて出てきたりもするのだ。宅配ヘルスか宅配DC（デートクラブ）――畜生、カネに余裕のある奴ァいいねえ、などと思いつつゴミを漁る俺である。この手の人々もお仕事中なので忙しくて他人のことなんかかまっていられない。出会ってもあわてずに自分のゴミ漁りに専念しよう。こういうワゴンがよく止っているマンションの「燃えないゴミの日」は要チェックだ。ときどき大量に裏ビデオが落ちていることがあるからな。

＊ブレードランナー

深夜の住宅街、人影のない広い道のどまん中を自転車で悠々と走るのはなかなかの快感だ。そういうところで突然前からローラーブレードで楽しそうに疾走する金髪碧眼の体格のよい外人さんたちに出くわして「ハ～イ！」なんて挨拶されると、ミッドウェー海戦の屈辱も、ヒロシマ&ナガサキの怨念も、東京大空襲の恨みも、無条件降伏の恥辱も全て忘

＊おまわりさん（刑事）

張り込み捜査の仕事をしている刑事さんの邪魔をしてはいけない。気がついても知らないふりをして通り過ぎよう。あらぬ疑いをかけられてもつまらない。時間の無駄は徹底して避けるべきだ。快楽に耽ろう。

その他は、第7章の警官対策の項を参照されたい。

＊真夜中のギターボーイ

深夜2時半の住宅地、川沿いの道を自転車でブラブラ流していると、ジーンズに長髪の昔のヒッピー風の若い男がふたり、坂道の上の方からフォークギターをかき鳴らしながら横一線に並んで　♪こんなァ〜夜に〜ごぉ〜めんねぇ〜♪　などと歌いながら歩いてくるではないか。しまった！　いつからミュージカルの舞台に迷い込んでしまったのだろう。俺もすかさず、♪もしもしィ〜、そこ行くゥ〜おふたりさ〜ん、あなたたちィ〜は、どおゆう馬ァ鹿なのですゥ〜かァ〜♪　などと切り返さねばと思ったが、悲しいことにギターがないので歌えなかった。タヌキが化けているにしては人間並みにヘタクソな歌だったし、そのくせ酒を飲んでいるようにも見えなかった。都会の夜は人を吟遊詩人にしてしまうのかもしれない。

＊限りなくホームレスに近い宣教師

母親の体質を受け継いでか俺も物音には非常に敏感で、住んでいるアパートのゴミ置き場に誰かがゴミを置いたら部屋にいてもたちどころにそれが分かるぐらいである。昨年の夏頃、そういう俺が朝方の5時半頃にゴミ置き場の妙な足音で起きてしまうことがよくあった。俺のアパートにはそんな時間にゴミを出すような連中はいない。朝にゴミ漁りをしているジイさんかなとも思ったがそれにしても早すぎる時間だ。しかも朝になって出勤前にゴミ置き場を覗いても漁った形跡がないときたもんだ。これはいよいよ警察が俺のゴミ漁りをかぎつけて調べているのかなとも考えたが、たかがゴミ漁りの捜査に何日もかけるわけがない。そこで俺はその足音の主のツラを見てやろうと、ある日足音の聞こえてくるいつもの時間の少し前に家を出て、近くの駐車場で柔軟体操をして、場合によっては格闘シーンも辞さない覚悟で足音の主が来るのを待った。すると、やって来たのは自転車の荷台に何やらいっぱいモノをつめこんだショッピングバック・レディのような小汚いおばさんだった。これは殴る必要もないなと思いながら近寄ってみると、おばさんは新聞の折り込みチラシ広告をていねいに折って折り紙の箱を作って、その中にキャットフードを入れて置いていったのである。俺はそれで初めて、ああ、そうか、これが噂の「猫おばさん」ってやつなんだと納得した。「猫おばさん」とは、どこの街にもひとりぐらいはいると言われている猫好きのおばさんのことで、彼女たちは、毎日ノラ猫が飢えないように街の各所で猫に餌を配るという慈善事業を黙々と続けているのだ。俺は少しうれしくなって「おはようございます」と笑顔で挨拶をしてしまった。おばさんは少し驚いていたが、す

トルの入った小冊子を差し出した。受け取らないと差し出した手をいつまでも引かないので、仕方なく受け取ってやったが、鬼畜の俺に渡してどうするんだ。無駄だよ、ジイさん。あんたはそうやって神の愛を説いているんだろうが、俺はこの世に憎悪と悪意をふりまいている人間なんだ。あんたがゴミ漁ってまでひとに説き続ける「神の愛」なんて、俺は見たくも知りたくもねぇんだからさっさと向こうへ行っちまえよ！

ジイさんは通行人にうとまれながらもせっせと冊子を配り続け、神の愛を説くテープを流していた。俺はこんなあざといジジイに共感する心などみじんも持ち合わせていない。キリスト教徒なんて野郎はどいつもこいつも大嫌いだ。俺の好きなキリスト教徒は、聖書の言葉通り右の頬をブン殴っても左の頬を差し出してもう一発殴らせてくれるナイスな奴だ。

それにしても前から疑問に思っていたんだけど、そういうキリスト教徒ってのは、強姦魔にヴァ●ナを犯されたら、隣のけつの穴も差し出してくれるのか？

あれからおよそ15年。順調にいってりゃあジイさんも仕事が終わって神の国に迎えられているはずだ。乞食宣教師のホームレス爺さん、あんたの魂は今どこにある？　そこに残飯のつまったポリバケツはあるのか？

＊宅配裏ビデオ&出張ヘルスのワゴン車

深夜、都内の住宅地を徘徊。フロント以外のウインドーを黒いフィルムでマスキングし

らしいが、タカビーな人間にのさばられるよりも、猫にのさばられた方がずっとマシなんだから俺は「猫おばさん」を支持するぜ。

れて「イエ~イ！」などと手を振ってしまう能天気な俺が情けない。ゴメンよ、英霊のおジイちゃん。普段他人から挨拶なんてめったにされないもんで、ついつい律儀に答えてしまったよ。鬼畜の分際で妙に礼儀正しい俺を許してくれ。

＊若い女

深夜、人通りのない道で若い女と出くわすときほど腹の立つこともない。女の方もイヤなのはわかるが、過度な反応は相手を怒らせるだけだということを知っておいてほしい。だいたいきまって下を向いて足早に通り過ぎ、中には失礼なことに、擦れ違うとダッシュして走りだす女までいやがる。俺が後ろから「うす汚ねえ期待すんじゃねえ！」「俺は人間しか襲わないぞ！」「バッカ野郎！　おれはホ●だ~！」などと怒鳴る（黙読で）のもおわかりいただけるだろう。そんな失礼な女なんか●す値打ちもない。できれば、とっつかまえて顔の形が原型をとどめなくなるまでブン殴ってやりたいが、それで美人にでもなられたらよけいに腹が立つので実行していない。何とかよい方法はないものかと真剣に「女装をしてのゴミ漁り」を考えたこともあったが、俺が痴漢に襲われても面倒なのでこれも実行するには至っていない。そういうわけで、とにかく深夜の路上で出くわす女どもはうっとうしくて嫌いだ。

＊猫おばさん

ゴミ漁りを滞りなく進めるために――

第7章　犬と警官対策

ゴミ漁りを滞りなく進めるために——

第7章

犬と警官対策

意外に思うかもしれないが、俺は犬は嫌いだが警察は昔から「尊敬する職業№1」というぐらい大好きなナイスな鬼畜野郎である。

俺も4、5歳ぐらいの小さな頃は、道で1円拾ってもバカ正直に村の派出所に届けたものだ。その当時派出所にいた若いおまわりさんというのが実にイイ奴で、ガキ相手にめんどうくさがらずに、一円玉を持ってきた俺の頭を撫でながら「君は正直なよい子だね」なんて言うもんだから、俺の潜在意識の奥ではいまだにおまわりさんに対して好印象が刷り込まれたままなのだ。そのときのおまわりさんの笑顔や言葉を思い出すと、こんな鬼畜になっちゃって本当にゴメンナサイなんだが、これも世の無常というか、なりゆきなのだろう。

今ではすっかり警官とは仲のよい関係ではなくなってしまったが、完全に対立しているというわけでもない。ともあれ、この項ではゴミ漁りを滞りなく進めるための、犬と警官の対策について記してみようと思う。

いぬ　たかが畜生
うるさい犬を黙らせる法

まずは犬から語ってみよう。俺はなぜか初対面の犬にはたいてい激しく吠えられてしまう。奴らは敏感だから、俺の邪悪な正体がわかるのだろう。畜生の分際で本当にうっとう

しい限りである。現在住んでいるアパートの正面の家にも黒い犬が飼われていて、通りかかるとよく吠えられたものだ。引っ越してきた当初、これはご近所の皆様にもご迷惑だし、日々のゴミ漁りにも支障があると考えた俺は単純に「シ●ちゃおう」と考えて昼間の人通りのとだえた時間に金槌を持って犬小屋へ向かったが、気配を察したのかあまりに犬が激しく吠えたので、窓が開いてそこの家のババアに姿を見られてしまった。俺は「これは失敗した」と思い、金槌を持ったまま優しく微笑んだが、ババアは露骨に不審そうな顔をして俺をにらんだ。「こうなってはもうコ●すわけにはいかない。この犬が変死したら俺が疑われる」そう考えて俺は犬を始末するのをあきらめた。しかも、このままでは、ご近所に俺の悪い評判が立つかもしれない。そうなっては「少し頭の悪そうな気のいい平均的小市民」を演じようとしていた俺の計画がおじゃんだ。そこで不本意ながら、俺はその犬を可愛がることにした。●ロせないんだったら、愛するしかない。

　可愛がるにはとりあえず名前が必要だ。犬の顔がなんだか「五郎」という感じだったので（いいかげん）、俺はその犬を「五郎」と呼ぶことに決めた。それから毎日のように俺は外出時にはその犬に「おお、五郎、五郎！　元気か？　俺だよ、俺、百郎だぞ」と近寄って挨拶をするようになった。あたりに人影が見えないときは思いきり犬小屋を蹴飛ばしたり小便をひっかけたりして愛情を示した。犬はいつも恐怖に引きつったような声で激しく吠えていたが、そんなものは完全無視である。それからずっと飼い主のババアがいる前でも無視して「五郎、五郎」と呼び続けてかわいがったが、ババアはひどく嫌な顔をし

ていた。自分の犬が可愛がられているというのに、全く失礼なババアである。こういう因業なババアに飼われたおかげで五郎も根性が腐って、俺のようなナイスガイに吠えかかるような命知らずに育ったのだろう。哀れなものだ。

ここの家のジジイは、そんな因業ババアの頭にさらにクソを上塗りしたような救いようのない野ツボ野郎だった。このジジイはアパートの前で会うたびに、眉間にシワを寄せて人の顔をひどくうさん臭そうにジロジロ見やがるのだ。その目は「何だこの男は、ここはお前みたいな低能工員ふぜいが住んでいい場所じゃないぞ」と語っていた（俺の被害妄想っぽいけどな。でもどうせ近いことを思ってるさ）。くっくっくっ、ジジイよ、人を見てくれで勝手に決めつける、お前のその下卑た目をできれば鏡で見せてやりたかったよ。全く近頃のババアやジジイどもは、そういう失礼な視線がどれだけナイーヴな若者の暴力を誘発するものかを知らないんだから困ったもんだぜ。それは、道を歩いている人間に横から突然腐ったゾーキンをぶつけるような、人としての最低限の配慮に欠けた失礼な行為なんだぞ。ブン殴る以上に人を傷つける行為というのはままある。それがわからないうちは偉そうに年をくったようなツラをするんじゃねえ、このチ●カス野郎が！

呪殺と犬対策

あまりに失礼なジジイの所業に俺の無意識が本気で怒ったのか何だか知らないが、このジジイをタコ殴りにして殺す夢を度々見た昨年春、ジジイはコロリとおっ死んだ。病死で

ある。こういう偶然は俺の身のまわりには割とよくあることなので最近は気にもかけないが、嫌な奴が死ぬのは本当に清々しいものだ。

そして俺の毎日の愛情に満ちた挨拶の努力が実ったのか、うるさい犬の五郎も今年の初めにやっと死んでくれた。犬小屋には花束が飾られ、ババアが通行人へむけて、「長年かわいがって下さった方々に感謝します」と張り紙をしていた。ババアにとっての犬の名前は「平太郎」だったらしい。何ちゅうセンスのねえ名前なんだ。

さて、俺は何もここで公然と「呪殺は可能だ」とか「犬とジジイを呪殺した」などと威張るつもりは全くない。そんなことはどうでもいいことだ。ここで大切なのは、「呪殺だろうが偶然だろうが、ともかく自分の嫌なジジイと犬がくたばってくれた」という喜ばしい事実だけである。その事実を素直に受けとめ、この世界の神秘に感謝を捧げよう。それは罰当たりの俺が「神様って、いるんだなあ」と感じられる数少ない瞬間なのだ。

というのは、あくまで特異体質ゆえの俺個人のことである。具体的な犬対策は以下の通りだ。

［呪殺と犬対策①］犬と仲良くする

これは懐柔策。畜生のあさましさで、飼い主には忠実だが食い物には滅法弱いのが犬の弱点だ。深夜、飼い主に見られないように、自分の唾をたっぷりつけたエサ（肉とかドッグフードとか）を与える。これを毎晩のように続ければ、近づいても吠えられないどころ

か鼻を鳴らしてすり寄ってくるようになるだろう。相手がオスなら、ついでにチ●ポコをやさしくさすってあげよう、可愛い声でなくからなかなか楽しいぞ。ただし、この方法は飼い主のしつけが厳しくて、他人からのエサを受け取らない犬には逆効果なので、犬の種類と顔をよく見て、卑しそうな顔をした犬だったらやってみるといい。

［呪殺と犬対策②］徹底的に吠えられる

これは不毛な消耗戦。実行するのは、別に夜でなくてもかまわない。吠える犬のいる家のそばに行って、絶対に犬の来れない場所に立ち、徹底的に大声で犬に吠えてもらおう。長時間犬が吠え続ければ御近所は大迷惑。あなたが黙って立っているだけで、犬の立場はどんどん悪くなる。飼い主が出てきて「何ですか？」といわれても、動じることはない。視点の定まらない目をして黙っているか、「人を待ってるんです」などと言って後は完全無視である。とにかく犬の気が済むまで徹底的に吠えさせるのだ。もちろん、その前に飼い主が怒って吠えるのを止めさせるだろう。そうやって犬も飼い主もとことん消耗させるのがこの作戦の狙いだ。飼い主が犬を容易に吠えないようにしつけてくれたら万々歳である。

［呪殺と犬対策③］消えてもらう

残念だが、これについては倫理上詳しくは書けない。要は犬がそこからいなくなればいい

いのである。具体的な方法は……書かなくてもわかるだろうけど、察しの悪いウブなボーヤのためにヒントだけ書いてやる。ありがたく思えよな。

俺の家には、もう14年以上使っている軽くて丈夫な金属バット「天国1号」というのがあって、ニギリの部分にはホームランを打ったときの記念マーキングが12匹、いや、12球分ある。それだけだ。

おまわりさん　いつもホントに御苦労さん

愛すべき警官との接し方

ゴミ漁りの最中に警官から不審訊問を受けて貴重な時間を潰すなどはもってのほかである。それは、単に時間が惜しいばかりか、無意味な足止めを食らっている間に「夜の路上に放置された〝俺の〟お宝が刻一刻と他のライバルたちの手によって拾われてしまう」という被害妄想がぐんぐん肥大し、精神衛生上もよくないからである。

では、どうすれば警官の不審訊問を受けずに済むか?

警官対策についてはいくつかの法則性と、切り抜けるための小手先の技があるので、思いつくままに挙げて説明していこう。

[愛すべき警官との接し方①]　徒歩よりも自転車に乗っている方が呼び止められる可能性

が高い

特に無灯火、カギの壊れている自転車に乗っていると呼び止められることが多い。当然だがこれは自転車のチェックを名目にした人物チェックであることは言うまでもない。呼び止められてからの警官との会話がポイントになるので、警官がどんなに横柄な態度をとろうと、徹底的に礼儀正しく紳士的に受け答えすること。「どこへ行くんだ」という質問には、東京なら「遅くまで起きていたらハラが減っちゃって、駅前の牛丼屋かコンビニに」というパターンが自然である。もしも、そういうコースから外れた場所で訊問を受けた場合でも、「いつも行ってるコンビニの弁当に飽きて、こちらの方に何か別なコンビニはないかと思って」とか、「ハラは減ってるんですけど、今食べてしまうと太っちゃうだろうし1食べるべきか食べないべきか迷って自転車を走らせているうちに、ここへきてしまいました」など、返答はいろいろ考えられる。とにかく、あらかじめ自分のゴミ漁り巡回コースの中で、自分のキャラクターに合わせて物語を作っておき、「ここで止められたらこんな回答」というパターンを決めておくといいだろう。また、同じ地域に長く住んでいれば警官が自転車チェックをする場所と時間というのもだいたいわかってくるから、そこは避けて回るのが無難である。

あとは時期的なものだが、地域住民の入れ替えが多い4月の新入学入社シーズンは一時的に警官の夜の巡回と不審訊問が増えるような気がするし、東京の場合は各国首脳が来日する先進国首脳会議などの開催される期間中も警官の巡回とチェックがいつもよりも厳重

なものになる。ダストハンターたるものは、日頃からそうした社会や政治の動きもきちんとチェックしておくべきだろう。もちろん新聞は駅で拾い読みが基本。

【愛すべき警官との接し方②】怪しそうな奴が呼び止められる

これは第2章の「服装」のところで説明したが、怪しい格好をして歩いていれば呼び止められるのは当然である。

いつの時代でも、その時代を代表する「不良の格好」というのがある。現在なら渋谷あたりにたむろするチーマーのような格好だろうか、とにかく警官が見て、「ああ、これはグレた連中の格好だ」と判断しないタイプの格好をすればいい。いろいろ異論もあろうが、ゴミ漁りをするときにカッコつけても始まらないので、そこはあっさり割り切ろう。俺もたまに女子高校生のセーラー服を拾ったりすると、別にロリ●ンでもコギャル好きでもないんだがそれを着てゴミを漁りに行きたいという強い衝動にかられる。しかし、それをやってはオシマイだ。「守らなくてもいいけど世間一般の常識を理解・利用すること」は鬼畜たるものの基本的了解事項である。「世間一般の良識」にしたがって「怪しくない」格好で出歩くこと。そうすれば警官に呼び止められる機会は確実に減る。

これは髪型も同じで、時代遅れのパンチパーマが論外であることは言うまでもないが、まだまだ高円寺界隈などに生息しているヘビメタ長髪や原色髪染めお化粧バンド系の人達は、格好が派手でもエレキギターさえ背負っていれば警官も「ああ、バンドマンね」と怪

しまないので便利といえば便利である。

【愛すべき警官との接し方③】コンビニ帰りを装えば怪しまれない

昔のコマーシャルにもあったが、「夜の一人歩きはコンビニの買い物袋を下げていれば怪しまれない」というのは本当だ。

80年代初頭、俺は髪型を青いアフロヘアにしていたことがあって、そのときは目つきも最悪だったので街をブラブラしていると、しょっちゅう警官に「お前、何やってんだァ」と声をかけられた。そんな俺でもコンビニの袋を下げて歩いていれば、深夜の住宅地で警官とすれ違っても何も言われないのだ。これは使えると思い、コンビニの袋は常備してゴミを漁り歩いた。その頃は漁るゴミも週刊誌やビニ本が主体だったので、手ぶらで徘徊して何冊か雑誌を拾うとコンビニの袋に入れて歩くというスタイルを取ったものである。

【愛すべき警官との接し方④】カップル、子連れを装えば怪しまれない

付き合っている彼女がいて、その彼女が理解を示してくれるのであれば、彼女と一緒にゴミを漁り歩くというのも警官に怪しまれない手ではある。「恋人同士がロマンティックな気分にひたりたくて夜道をデートする」ぐらいは別に変わったことでも何でもないからだ。警官もそれほど野暮ではないのか、ときたま「このへんは痴漢が出ますから注意下さい」と親切に声をかけてくれることさえもある。しかし、連れの女が未成年の、それも中

学生風だったりすると多少ニュアンスが違ってくるので注意が必要だ。

また、これは俺もやったことがないが、家がサザエさん一家のような大家族なら、兄貴のガキを借りて背中にくくりつけてゴミを漁り歩くのもいいかも知れない。警官が近づいてきても、ガキをあやしながら聞こえよがしに「ほ〜ら〇〇ちゃん、おまわりさんでちゅよ〜、悪いひとをやっつけてくれる正義の味方でちゅね〜」とやれば、警官も悪い気はしないだろう。あとは「いやあ、夜泣きされちゃって」なんて言っておけば、自然にやりすごせるはずだ。

【愛すべき警官との接し方⑤】警官を見て逃げると追いかけられる

夜道で遠くからやってくる警官を見て、突然歩いている方向を変えたり、来た道を走って逃げたりすると、絶対に追いかけられる。昔、バイト先で知り合った元犯罪者によれば、警官というのは「自分たちを見て逃げる奴らも、その逆に必要以上に近づいてくるような奴も、同様に怪しいと思え」と教育を受けているそうだ。「必要以上に避けてもいけないし、近寄りすぎてもいけない」これが警官との正しい距離のとり方だというのだ。

まああ、あまり気にしすぎてもいけない。シカトするわけでもなく、嫌がるわけでもなく、空気のように考えてやり過ごせばいいということだろう。

【愛すべき警官との接し方⑥】警官に悪口を言ってはいけない

彼らが悪口に敏感なのは万人の知るところである。
疑うなら、四車線以上ある広い道を隔てた向こうがわの歩道にいる警官に、声を出さずに大きく口をあけて「バ～カ」と言ってみるがいい。警官は口の開き具合でこちらが何を言ったかを即座に理解して、「この野郎、今何て言った‼」とすっ飛んでくるだろう。正義のヒト、悪事や悪意に敏感な警官とはそういうものである。
夜道でもそれは同じで、警官を見て突然大声で「おれは犬が嫌いだぞー！」などと意味不明のことを叫んだりしてはいけない。ついでだから、ここで警官に対する禁句集をあげておこう。
以下に紹介するような言葉は、どれもまじめに働く警察官の皆さんに対して極めて失礼な言葉であり、人間としても絶対に許せない発言である。おまわりさんが大好きな私は、例をあげるためとはいえ、書いていてもあまりの憤りに体が震えたぐらいである。こんなことを思ったり口に出したりするような恩知らずのクソどもは、正義と民主主義の名のもとにひとり残らず百叩きのうえに●器をえぐって硫酸●浣腸●死刑にしてもあきたりないと考えるのは私だけではあるまい。

＊絶対に警官に言ってはいけない発言例

「馬鹿」「阿呆」「チン●ス野郎」「犬●生の分際で」「たかが公僕の分際で」「俺の税金で食ってるくせに」「中学出てんのか？」「回るぐらいなら犬でもできるぞ」「要はイ

バリてえだけなんだろう?」「偉そうにすんなよ」「お前だってマ●コ見りゃあ●起するくせに」「税金泥棒」「自衛隊の方が強いんだろう」「あんたイカ臭いぞ、俺の税金でフーゾク行くなよ」「三億円事件未解決」「グリコ森永事件ではいいようにコケにされたくせに」「けちな自転車泥棒ばかり捕まえて、犯人検挙のパーセンテージを上げようっていうさもしい根性が気にくわねえ」「オレ、区会議員の○○とはけ●の穴を掘●合う仲なんだぜ」「婦警さん、あんた、いいカラダしてるねえ、だけどちょっとオリ●ノ臭いぜ！フロぐらい入ろうや」「いくら払えば見逃してくれるんだ」「あんた、あたしとやりたいんでしょう?」「わかったよ、そこの便所でシャクってやるよ。だけどこれっきりにしてくれよ」「くっくっくっ、あんたのカアちゃんはよかったぜえええええええ！」

おまわりさんを否定する奴は、もし自分の身に何かあっても絶対におまわりさんを頼るなよな。俺は何かあったらすぐに警官を思いっきり頼るつもりだから警官の悪口なんて絶対に言うつもりはないね。俺も見かけは一応、善良な一般小市民だしね。

【愛すべき警官との接し方⑦】警官は政治家などの権力者に弱い

つまりは、「議員や政治家などの権力者になってから悠々とゴミ漁りを楽しもう」という遠大な計画である。よく言われることだが「警察は泥棒を追いかけるけど、泥棒も国会議員レベルの大きな盗人になると、警察は追いかけるどころか、家の前に門番を張りつけ

て寝ずの番をして守ってくれる」という事実がある。そういう強い立場になれば派出所の警官の巡回など何も怖くないだろう。ただ、議員にまでなった人間が、わざわざゴミ漁りを楽しもうなどと思うかどうかはわからないけどな。

おまわりさんありがとう

秘技　警官対策

「おまわりさんは正義の味方だ。おまさりさんはみんなよい人。おまわりさんは僕達を悪い奴らから守ってくれる。おまわりさんに感謝しよう。おまわりさんありがとう」これが村崎百郎の数ある鬼畜技の中でも、最も卑怯で気色が悪く、なおかつ効果の高い「警官対策」のためのマントラである。

本来ならば秘伝なのだが、ここで特別に公開しよう。公開したからといって効き目が失われるものでもないし、読んだ奴が即座に真似のできる代物でもない。ただこの技の発想は他の多くのことにも応用がきくので、イロイロとナニかをやりたい人間にとって、本書はこの部分だけでもモトがとれるだろう。

それでは、俺がこの技を思いついた経緯から説明しよう。

おまわりさんへの愛に溺れる

俺は若くて殺気立っていた頃、自分の憎悪を制御しきれなくて、しばしば警察にもやっ

かいをかけた（前科のつくレベルのものではないが）。そうした経験から、連中とまともに関わるのは時間の無駄以外の何物でもないことに気づいた俺は、ひたすら連中と関わらなくて済む方法はないものかと考え続けた。「連中と関わらないためには連中のことをよく知らねばならない」そう思って俺は、妄想神経を何度となく無数に飛ばし、のべにして数10万人以上の警官の体に「侵入」した（妄想だよ）。

俺の妄想神経はいやらしく伸びて、ズボンの裾から足をはい上がり、●器をなでて●門から体内に潜入し、内臓や血管を通ってその人間の脳へとたどり着く（妄想だからね）。そしてそこから多くの情報を引き抜くのだ。彼らの発想、彼らの思考、彼らの理想、彼らの欲望、彼らの夢、彼らの信条、彼らの使命感、彼らの正義、彼らの愛情、彼らの悪意……さらに「侵入」をくり返していくうちに、彼らを理解するのに最も手っ取り早いのは、「彼らを愛することである」という真実にたどり着いた。笑わないで読んでほしい。「愛」などという感情は、鬼畜にとっては単なる道具程度の存在なのだ。どうでもいい感情だからこそ、嫌いな奴やおぞましいと思う者に対しても簡単に「愛」をくれてやれるのだ。「愛」がないのが鬼畜ではない。「愛」を何のこだわりもなく簡単に利用することができるからこそ鬼畜なのだ。

俺は一時的に発狂状態で警官への愛に溺れた。何度も何度も何度も彼らの姿を思い浮かべては欲情し、射●した。現在の警官ばかりでなく過去と未来へ妄想神経を伸ばし、時空を超えて全ての警官と愛しあった。正常位ばかりではない。四十八手はもちろ

ん、様々な変●性欲もほぼ全てのシチュエーションを妄想した。妄想の中で俺は多くの老若男女になりかわり、彼らの愛撫を受け、彼らの責めを受けた。もちろん性的な拷問も数多く体験した。「見逃してやるから一発やらせな」「ここでずいぶん男をくわえて稼いでるんだろうが」「何てシマリのいいけ●の穴なんだ！　たまんねえな」「ぶってくれ、この鞭でおもいきり、俺の背中を」「俺に小便をかけてくれ、お前の糞を肛●から直接食わせてくれ」――。ホ●あり、ロリあり、サドあり、マゾあり、ス●トロあり、近親●姦、獣●ありである。彼らの極太ぺ●スが女だったり少年だったりする俺のア●スを深々と無理やり貫いてゆくさまを、苦痛と快楽のはざまからただ眺めていた。容疑者を逮捕する喜びも、犯人に逃げられる悔しさも、組織の中の息苦しさも、市民に「オイコラ」と偉そうに声をかける喜びも、地元暴力団と癒着する快楽も、みんな妄想の中でリアルに体験した。歴史の中で人知れず行われた警官のおぞましい不正行為、犯罪行為も全て体験した。わけても、正義の名のもとに共産党員をおおっぴらに拷問で殺せる特高警察の快楽は、筆舌に尽くしがたいほど甘美なものだった。……ああ、こんな素敵なヒトたちのことを、いままでよく知らなかったなんて、本当に自分が恥ずかしい。おまわりさん、本当にごめんなさい。

　そんな素直な謝罪のことばが自然に出てくるほど、俺は彼らを愛し尽くした。これでいい。愛とは理解することだ。彼らを理解できれば彼らへの対策も浮かぶ。彼らに愛され責められ、さんざん犯された身体の火照りを感じつつ、息を整えながら俺は長く伸ばした妄

するには、根性なしの一般小市民を演じるのが一番なのだ。

ただ、それは深いレベルから演じられなくては効果がない。警官へ不快感を抱いているようであれば、それは彼らに会ったときに確実に彼らに伝わり、彼らに自分の存在を意識させてしまうだろう。そこで冒頭のマントラなのだ。あれを日に何度も心の中で唱えるがいい。俺はさらに、朝起きたら「みんなが今日一日楽しく幸せに過ごせますように」と世の中の平和を祈っている。そうでもしなければ、俺は普段抱えている膨大な憎悪ですぐにも我が身を焼きつくしてしまうだろう。俺には鬼畜として「なるべくこの世に長くとどまって、悪意と憎悪をできるだけ大量にばらまき続ける」というくだらない使命があるので、そんなかったるいこともするのである（しかし、めんどくせえなあ）。

卑屈で臆病で権威に弱く、官憲にヘイコラするみじめな一般小市民の感情を完璧に演じきるためには、さらに人格を分裂させることをすすめる。自分の人格を分裂させて使い分けると「演じている」という意識もなくなり、その人格になりきれるので便利だ。たとえば、すでにお気づきの方も多いかと思うが、この「村崎百郎」というのは、鬼畜行為を行うときに工員Aに降りてくる最も狂暴な人格のひとつである。工員Aは幼い頃からすでにひとり遊びの中で自分の人格を4つに分けて、それぞれを対話させたり、身体を預けたりという遊びをしながら自分が壊れていくのを楽しんでいた。成長しきってしまった大人では難しいだろうが、自己催眠と自己暗示で何とかなるかもしれないので、やりたい奴は勝手にやってみるのがよかろう（俺は無責任だ）。

想神経を上空で成層圏まで踊らせた。それは他人が見たら●門から無限に伸びたサナダムシのダンスように気色の悪いものだろう（あくまで妄想だってば！）。

愛のマントラ

こうしてつかんだ警官対策が、冒頭のマントラである。あれを何度も唱えながら、常日頃からおまわりさんに心からの尊敬と感謝の念を持ち、自分のまわりにやわらかな雰囲気を作るのだ。この意味がおわかりだろうか？　あくまで日常生活では、徹底的に「ひ弱で善良で気の小さい無害な一般小市民」を演じろということだ。多くの警官に侵入して分かったのは、彼ら全体の無意識に蓄積された経験値には莫大なものがあるということだ。彼らの視界から無色透明になるには、彼らの職業的な鋭いカンをごまかせないと何をやっても無駄である。「証拠さえなければいいんだろう」と考えるのはオウムのような馬鹿どもだけで、姑息な証拠隠滅はかえって彼らの職業的カンを刺激させるだけなのだ。

「どこから見てもヤ●ザ」という格好をしている連中は、ある意味で正直で親切な人間である。彼らはわざわざ自分から「俺は何か悪いことをやったりやろうとしている人間だ」と名乗っているのに等しいからだ。鬼畜はそんな正直な真似などしない。鬼畜は目立たない格好をして小市民の中に潜む。おまわりさんに守ってもらう立場にまわるのだ。悪意を消せ。殺気を見せるな。つまらないプライドなんか犬にくれてやれ。心の奥で笑いながら臆病者を演じよう。くり返し書くが、警官に「あ、こいつは怪しい」と思われないように

こうして完璧な擬態を作れば、警官に不審訊問されても「いつもご苦労様です」という余裕の挨拶が自然に口をついて出るようになる。いや、それ以前に不審訊問もされなくなる。俺は東京でゴミを漁り続けて16年になるが、ゴミ漁りの最中に不審訊問されたことは始めた頃に何度かあるだけで、ここ10数年は全くないのだ（悪霊、邪霊の御加護を感じるね）。ゴミをやっているとき以外でも自転車に乗っているとき、何度も不審訊問を受けたことがあるが、俺は警官に愛を抱きながら礼儀正しく対応するので昔のように派出所に連行されることは全くなくなった。ときどき不審訊問を受けて警官と言い争いをしている若い奴を見かけるが、馬鹿の極みである。そんな時間があるならコップの底をナメてク●ニのおけいこをするか、一回でも多くセ●ズリをして、自分の人生を豊かで実り多い有意義なものにするべきなのだ。

ああ、それにしても、
馬鹿になるのは楽しいなあ。
俺は鬼畜でホントに馬鹿だ。
馬鹿で鬼畜なことが、こんなに楽しいなんて、
インテリさんにゃあ分かるめえなあ。
『ダスト・テスタメント』詩篇「阿呆の歌」より

まあ、とにかく、俺は昔からおまわりさんが大好きだし尊敬してるよ。あんなに責任が大きくて失敗の許されない大変な職業もないさ。よくいって当たり前、ちょっと失敗すると寄ってたかって批判される。ホントにワリが合わないよね。食うこととお●んこしか興味のないバカで無能なオレら小市民の生活を身体を張って守ってくれているんだから、おまわりさんに感謝の念を持たない奴がいたらそんな奴はもう、人間じゃないよ。犬だって恩は3年忘れないって言うぜ。おまわりさんありがとう。あなたたちが治安を守ってくれるおかげでボクらは枕を高くして眠れます。おまわりさんありがとう。あなたたちのおかげでボクは安心して部屋でア●ルオ●ニーが楽しめるんです。

思ってもいないことを平気で言えること
それが鬼畜の最低条件である
『ダスト・テスタメント』「鬼畜の章」より

上級者篇　霊的ゴミ漁り

霊的ゴミ漁りとは村崎百郎オリジナルの非科学的な魔術的ゴミ漁りの方法である。これは電波系の村崎ならではの気の●ったゴミ漁りで、その効果には科学的な根拠など全くないが村崎本人には絶大な効果がある。電波系でもない通常の人間にはまず無理だと思われるのでここは参考程度に読んでほしい。特に自分の精神の安定度に自信のない方には絶対にすすめられないので、よい子はくれぐれも真似をしないように。

霊的ゴミ漁り1　小便魔法円

深夜1時、人影もない住宅地の路上に立って俺は静かにゴミ漁りの儀式を始める。おもむろにち●ぽこを取り出して回転しながら放尿。事前にビールなどを飲んでおくと小便の出る量が多いのでよいだろう。「小便魔法円」などというといかにも貧弱で効果がなさそうだが、馬鹿にしてはいけない。小便は腐っても「体液」だ。一般に思われているほど汚くも不衛生でもないし、俺が20年かけて研究した「汚穢魔術」の実験では、「小便魔法円」は血液で魔法円を作るのとほぼ同様の効果がある。

「汚穢魔術」の魔法円は一般の魔術や魔女術のそれと違い、閉ざした円内に莫大な穢れのマイナスパワーを呼び込み、術者自身が汚穢にまみれてとことん穢れるという破壊的なものだ。それだけに危険も大きく、儀式中に自分の身体に憑依してくる無数の邪霊、凶霊を制御できなければその場で発●してしまうだろう。幸運なんだか不幸なんだかわからない

が、俺の体内には、10歳の頃に海で死にかけたときに入ってきた恐ろしく巨大で邪悪な存在が今も眠り続けているので、そのへんの悪霊程度が何体取り付こうがたいした変化はない。漆黒の闇に向かって薄墨をぶちまけるようなものだろう。

冬の凍てついた夜の路上でこの回転放尿をキメると、円形に白い湯気が闇の中に立ちのぼってとても幻想的だ。ニオイ立つ「小便魔法円」を描いたら、その円内を中心に外に向けて東京全域の広がりをイメージし、東京全域に散在する汚れや憎悪が全て時計と逆回りで大きく渦を巻きながら魔法円内へ集まって、その穢れが魔法円内の下から噴き上げて自分の身体の中に入ってゆくさまを克明にイメージする。体内に充分汚穢パワーがたまったら頃合いを見計らって北の空を仰ぎ、斜め45度、魔法円から10メートルぐらいの先の何もない空間に暗い鬼火をひとつ灯す。そこへ向けて東京の夜の闇に潜む大いなる汚穢神ダストグラマトン（別名テトラヘドロン・俺が勝手に作った地方神）に感謝と今夜のゴミ豊漁の祈りを捧げるのだ。

汚穢都市・東京の夜の闇の果ての、
最も深い汚穢の奥底に住まう、
全ての破壊と腐敗と穢れを支配する
偉大なる汚穢神テトラヘドロンよ。
今宵も汝のもたらす大いなる闇と穢れに感謝せん！

の家で電波がらみのスーパーバイオレントな猟奇殺人事件が起きたし、それ以外の場所でやったときもなぜか周囲で人死にゃ殺人事件など悲惨な出来事が頻発した。何の科学的根拠もないが、俺自身も儀式をするたびに当たり前のように周囲で悲劇が続くと、やっぱりこれはロクなもんじゃねえなと思うのだが、幸いなことに日本の刑法はそんな非科学的な妄想は相手にしない。実にありがたいことである。都合の悪いことはみんな「妄想」になっていただこう。

霊的ゴミ漁り2　暗闇の妄想電波スキャナー

小便魔法円の儀式をすませると俺はそのまま気を集中して近隣のゴミ捨て場をスキャンする。やり方は以下のようなものだ。

自分の体の中の妄想神経の約半分を、自分の脳の中心部、松果体のあるあたりに集中させて小さな玉を作る。作るというよりも妄想神経を小さく縮めて凝縮していく感じだ。時間にして約3分ぐらい。凝縮しながら、その一方で残り半分の妄想神経を体外に伸ばし、自分の体を取り巻く街をゆっくりと感じてゆく。街のイメージが頭の中に広がり、妄想神経で延長した自分の体が街の隅々まで行き渡ったと思った瞬間に、松果体にためた妄想神経球を一気に爆発させる。すると妄想神経は秒速千メートル以上のすごい速さであたりを円形に放射状に飛び散って拡がっていく（妄想神経は切れてもすぐまたどんどん伸びるので端末は使い捨て可能）。これで何かよさそうなものが引っかかるとその方角に脳の中で

憑依するときは、まず先に自分の身体から妄想神経を飛ばす。その際、俺は「趣味」で自分の家の便所の便器の中へ妄想神経を流して、下水道を伝って目標とする相手の家の便所の便器まで伸ばす。そこからでも部屋の中の相手に向けて憑依もできるが、わざと便器に潜み〝待ち〟の体制を取る。欲をいえば相手がうんこをしようと便座に腰かけ、●門を開いた瞬間がチャンスなのだ（別に小便でも構わないんだけれど）。その瞬間を狙って俺は便器の底から相手の肛●へ妄想神経を挿入する。これはよほど霊感の鋭い奴でもなければ挿入されたことには気がつかない。もちろん●門からでなくても相手の体内への潜入は充分可能なのだが、このへんはア●ルマニアとして「●門から」の潜入にこだわりたい。

相手の●門と妄想神経の接続を確認したら、俺は部屋で静かに横たわり自分の意識を集中させて妄想神経に乗せて運び、便器にまたがる相手の●門から体内へ潜入する。この感覚はすえた臭いがする肉質の狭い穴ぐらの中へ入っていく気分で、内臓内は誰のものも似たようなもので、美人だろうがブスだろうが大した違いは感じられない。脊髄を伝って相手の脳内にたどり着いたら、もう後は簡単だ。相手の脳から直接相手の考えていることや気にしていること、身のまわりのことなどをどんどん引き出していく。そのときには長くて場面の多い映画を超早回しにしたようなヴィジョンが見えるが、なにせ大量すぎていちいち憶えてはいられない。

うまく潜入できると相手の身体を内側から愛撫できたりして楽しめるので、この技はオ●ニーの技法としても非常に有効かつ刺激的なものだ。

（長いので以下省略）

などと気の●った祈りを捧げて俺は小便魔法円のなかで「スカベンジャー・ムラサキ」に変身するのだ（もともとこのスカベンジャーという言葉は、フィリピンのスモーキーマウンテンという所を中心に住む「ゴミを拾って生活をしている人々」のことを言うんだそうだ。「スカベンジャー」という語の持つ響きの中には、スカトロと便所を足したゴレンジャーのようなけがらわしいオモムキがあるので俺はとても気にいっている。誰かスカベンジャー・レッドやピンクなどの仲間を探して5人ぐらいで「スカベンジャー戦隊」を組織すれば、超巨大な合体ゴミロボットを操縦できるような気になるから楽しい）。

この儀式はちゃんと行うと授かるゴミの質も量もずいぶん違ったものになるので、俺にとっては非常に重要なものだ。もちろんゴミ漁りの終わりにも同じ場所に戻ってきて、同じ位置に小便魔法円を描き、汚穢神に本日の豊漁の結果報告をして感謝を捧げ、身体の中に集めた穢れや邪霊や凶霊を元の場所へ解放する儀式をしなくてはならない。

この儀式の効果は絶大なのだが、儀式中のある部分では大声を出さなくてはいけないし、他人に観られて集中力がそがれると失敗する恐れがあるので俺も最近はあまりやっていない。もちろん、こんな邪悪な儀式を続けていれば、そのまわりにひどいとばっちりがあるのも当然である。なぜかこうしたものは術をやった当の本人よりも、周囲に被害が及ぶものなのだ。俺が15年も前にひんぱんにこの儀式をやってた場所では、小便円のすぐ前

行員Aの封印された記憶と証言
電波のヴィジョンから——

ゴミ幻想　村崎百郎のスカベンジャー修行（妄想）

＊妄想記憶A

全く独学でゴミ漁りを学んだような村崎百郎だが、彼のイカれた脳内電波の調査によれば、彼にもゴミ漁りの師はいたようだ。それは、もちろん我々が住んでいるこの現実においてではない。村崎百郎の脳内を流れる別の現実、別の時間、別の空間での話である。

ご承知のように村崎百郎は別の次元の別の領域でいくつもの別の身体を持つ筋金入りの超キ●ガイだ。その中の世界のひとつで村崎百郎はかなり有望な若い「ゴミ修行者」だったらしく、ときどき鮮明でデタラメな記憶が彼の頭の中に流入してくるという。この話はその記憶の断片から構成された話である。

＊妄想記憶B

その世界ではゴミ漁りの達人は「スカベンジャー戦士」と呼ばれ、その中でもとりわけ魔術的でスゴ腕の持ち主は特別に「ゴミ呪術師」として下層貧民からの尊敬を集めていた。村崎のゴミ漁りを指導していたのは通称「ドンさん」と呼ばれていたホームレスのゴ

小さな光点が見える。これがお宝の在り所なのだ。

マトモに考えればこんなタワけた妄想に何の効果が？　と思われるだろうが、実に不思議なことに、この妄想スキャンで探した地点を集中的にゴミ漁りするとギャルのムンムンしたニオイつきの下着だの三和出版やミリオン出版のＳＭ専門誌などという、俺にとっては値千金のありがたいお宝にめぐり合えるのである。

妄想電波スキャンはこの他にもいくつかのヴァリエーションがあって、一本に集中した妄想神経を自分を中心に五芒星を描きながら少しずつ拡大していくやり方や、自転車を走らせながら妄想神経の光球を作り、部分的に前方のゴミをスキャンするなど、ゴミ漁りを進める最中に情況に応じて使い分けている。どの方法も頭の中で自分の欲しいものをイメージしてから行うのが成功のコツである。

霊的ゴミ漁り３　憑依・潜入

これは俺の妄想電波を使った霊的ゴミ漁りの中でも最もバカげていてそれでいて場合によってはかなりの効果がある技法だ。簡単に言えば、妄想神経を飛ばしながら幽体離脱して目標とする人物の意識の中に憑依＆潜入する試みである。

この場合、俺と潜入する人間との間の距離はあまり関係ないようだが、体質の問題なのか、相手の身体の穢　れ具合によるものなのか、簡単に憑依・潜入できる奴となかなか憑依・潜入できない奴がいるのが今後の課題である。

て数年たったある日、「おまえは、あのやさしい山へ行かねばならない」というドンさんの言葉で、スカベンジャー戦士への最も困難な試練が始まったのだ。

＊妄想記憶D

ゴミ修行の最終段階で、村崎は単独でトウキョウ・シティのゴミ聖地「夢の島」の奥地にときどき蜃気楼のように忽然と現われる幻の山「キリマンジャロ」へ登る。村崎はその山の中腹でひからびたヒョウの死体を発見するどころか、絶滅したはずのニホンオオカミと出会い、それと不思議な対話をした。ニホンオオカミは全身からすさまじい量の輝くオーラを放ち、村崎にこの世の神秘を言語とは思えない言語で語り、そこでふたりは奇声を発して、聖なる汚穢ダンスを朝まで踊り続けたのだった。これが「ダンス・ウィズ・ジャパニーズウルブズ」ということだが、映画化の予定はこちらの世界でもあちらの世界でも当然全くない。

　この体験を通して、村崎は「価値だの意味だのというのは全て関係性の問題であり、自分の存在が足元にころがる一片のゴミと全くの等価である」ということを言葉ではなく身体で実感したのだった。その瞬間村崎は輝く「世界の六尺ふんどし」が見えたような気になったが、たぶんそんなものはキ●ガイの妄想だろう。不思議と涙は出なかったが感激で脱糞と射精をしてズボンを汚し、やけくそで放尿しながら山を降りてきた村崎に向かってドンさんは「おまえは世界を止めたのだ」と語る。スカベンジャー戦士ムラサキとしての

ともあれ、このように自分の意識を相手の体内に潜入させ、相手の動向を探り、相手がゴミ集積所にゴミを出したなら、意識を体に戻してゴミを拾いに出かけて行く。憑依さえ完璧に行えれば回収率は9割以上だ。

と努めるのも、その選択はお前さんの自由だ。全ての道はお前の前にある。どんな道を進むのもお前の勝手だが、わしはお前には常々言っていたように『心ある道』を歩んでほしい。それが戦士の進むべき道なのだから……

「勝手なこと言ってんじゃねえ！」

絶叫して手紙を便器に叩きつけた村崎は、その後、夢の島のキリマンジャロへドンさんの死体を放り捨てた。ひからびてミイラになっているであろうドンさんのムクロの上には今日も2月の雪が静かに降り積もる。村崎は愛用の自転車にレイ・ブラッドベリの短編から取った「キリマンジャロ・マシーン」という名前をつけて今夜も東京の夜を徘徊している。

＊妄想記憶E

その世界の村崎が結局どんな道を選んだかなんてことは、この世界の村崎にも、工員Aにもわからない。ただ、彼がどんな道を選ぼうが、たいした違いはなかっただろう。しょせんはたかがゴミ漁りの話なのだから。

晴れた日にはゴミを想え、雨の夜にはゴミを想え、
そして、自分が捨てたゴミたちが眠る「夢の島」を想え。

ミ呪術師で、彼の弟子の中にはその世界で出世してすでに『スカベンジャーと私』、『スカベンジャーの体験』、『スカベンジャーに成る』などの妄想著書のある著名なホームレスのオヤジもいた。いつも大きなカスタネットを腰からぶら下げたそいつは、他人から「カルロス・カスタネット」と呼ばれて愛されていたようである。

＊妄想記憶C

どういう経緯で弟子になったのかは、電波が伝わってこないのでわからないが、ドンさんはいつも村崎に知者になるための心得や戦士としての心構えを延々と説いていたようだ。スカベンジャー戦士になるための修行は奇怪なうえに苛酷で、女の下着を着たまま戒厳令下の東京を徘徊したり、ゴミと一緒に朝まで路上にころがったり、ホコ天でのストリーキング、肥溜めへのダイビングなど、どれを取ってもマトモなものは何ひとつなく、わけてもヒドかったのが酒による低俗なトリップ体験だった。いったいどこで拾ったのかわからないような酒をいくつもメチャクチャに混ぜたモノを大量に飲まされ、悪酔いした村崎は、そのたびに空を飛んだりもぐらになったようなってはおおいに暴れたという。村崎自身、前後不覚になるまで酔うこととゴミを漁ることがどう結びつくのかサッパリわからなかったが、ともかくそんな修行を続けたおかげで都合17回中毒し、そのうち2回は生死の間をさまよったというから御苦労サマなことだ。スカベンジャー戦士としての輝かしい未来が約束されていたとはいえ、あまりにムゴイ修行である。そして修行を続け

第8章　百郎ゴミ日誌

夜の果てへの旅

新しい世界がひらけた感動的な瞬間であった。

　ドンさんはさらにチョーシこいて「ゴミと自分が存在として全く等価であることに気づいたおまえは、これでもう、女のパンティから猫の糞までどんなゴミでも宝石を扱うように大切に拾えるだろう。人の心の深い闇へと続く夜の中を歩むがいい。光り輝くお宝ゴミを探すのだ。盟友がお前を導いてくれるだろう。ただしスカベンジャー戦士としての修行はまだまだこれからだ……」などともったいつけて偉そうに語ったが、それを聞いた村崎は「今までさんざん偉そうにあれこれヒトに指図して、妙なモノを飲ませて何度もコロしかけておきながら『これでゴミを拾えるだろう』という言いぐさはいったい何だァ？　コイてんじゃねえぞ、このチ●カス野郎があ！」と激怒して、その場でドンさんを殴り●してしまう。ゴミも人間の命も等価だと実感した村崎には、もはや師であるドンさんを●すことには何の抵抗もなかった。村崎はドンさんを●しても「燃えるゴミ」をひとつ増やした程度の感想しか持てなかったという。実はこの「己の師をゴミのように殴り●す」ことこそが本当のスカベンジャー呪術師の最後の秘儀伝授だったのだが、村崎がそれを知ったのは彼がいつもその中を趣味で覗く、公園の女子便所の汚物入れにはさんであったドンさんの書き置きを読んでからだった。

「おめでとう。この世の全てがゴミであることを身体と心で認識したお前はもう立派なスカベンジャー戦士だ。あとはお前の心がけ次第。『全てがゴミならどうでもいいや』と投げやりになるのも、『全てがゴミだからこそ自分のまわりの存在を等しく大切に愛そう』

はじめに

俺は今後も最低のゲス根性と悪意を持って人知れずゴミを漁り続け、メディア上に恐怖と憎悪をばらまいてこの国の文化を下品のどん底に叩き落としてやるつもりでいるので、場所や個人を特定するような詳しい住所、名前などは一切書けないが、ここに最近の俺のゴミ漁りぶりをランダムに綴ってみるとしょう。全てが実話なので心して読むがいい。

都内に住む読者諸君は「ひょっとして自分の近くにこのキ●ガイ（俺）が？」と思われるだろう。なあに、心配することはない。全国津々浦々どこの街にも、村崎百郎はいて、日夜お前らのどうでもいいプライバシーを漁り歩いているのだ。いいか、よく聞け、今さらあせってももう遅いんだよ！　お前らの取るに足らない秘めごとを秘かに漁り知って、笑っているゲス野郎がお前らの回りには確実にいるんだよ。

さて、日誌の公開にあたり、俺の自宅付近の事情を説明しよう。俺は都心から少し西へ離れた住宅街の、○○区と○○区の境目あたりの、見てくれだけはキレイなチャチいコーポに住んでいる。このあたりは新宿に近いせいもあって、マンションやアパートが数多く建ち並び、学生や若い独身の勤め人を中心に、海外から出稼ぎにきている若い外国人まで、さまざまな連中ががでたらめに暮らしている、まるで野ツボのような街だ。

他所から入ってきた礼儀をわきまえない若い奴らが多いせいか、ここでは回収日前夜のゴミ捨てが常識になりつつある。それは町内会のおかみさん達にとっては腹にすえかねる問題なんだろうが、夜ごとのゴミ漁りを楽しんでいる俺には大歓迎の情況だ。全く、この

『ダスト・テスタメント』「詩篇96」より

午前1時。銭湯帰りに自転車でいつものコースを流す。今夜も1件ぐらい引っ越しゴミがあるかもしれないと期待しながら川下方面のマンション&コーポ密集地へ向かう。期待というか、予感は見事に的中し、2丁目の「ミラノ」にて女性モノの引っ越しゴミを発見。どうやら10数メートル離れたアパートの若い女が引っ越しのようだ。解体して紐でくくったカラーボックスや電気スタンドに混じって、下着ゴミの期待できそうな洋服が詰まったゴミ袋もすでに5つ出ている。こういうときはセーターやジャンパーのような上着以外の白っぽいものがまじったゴミ袋を最初にゲットすべきで、なかでも一番下着が入っていそうなゴミ袋をとりあえず2つつかんで自宅に戻った。ゴミ袋が半透明になったおかげで本当に助かる。ガードルやパンスト、経血のあとのついた生理用ショーツ、ブラジャーなどが出てきて超ラッキー。

さらに2往復して残りのめぼしいゴミ袋をゲット。文房具類のゴミの中にも使えそうなものがたくさんがあったが、中から「自律神経失調症」の診断書と複数の病院の診察券、そして大量の処方薬のシートが出てきて驚いた。この女は二浪ながらC大学の法学部を出ている才媛なんだが、浪人している頃からこの病気に悩んでいたようだ。俺は全くわからないが、受験勉強はストレスがたまりそうだからなあ。

そして、なぜか彼氏の運転免許のコピーや未使用のコンドーム、破られた彼氏の写真、そして彼女自身の写真も数点出てきた。これはたまらん。写真に写っていたのはよく近くのコンビニで見かける長身で脚のすらりとしたハクいねーちゃんだったのだ。

第8章

百郎ゴミ日誌
夜の果てへの旅

れている。こんなアナーキーな集積所こそ注目のしがいがあるというものだ。

オーブントースターや扇風機など、引っ越しゴミ臭いものが散乱。こういう場合は文房具類の入ったゴミ袋にお宝が入っていることが多い。全体をざっとチェックしてから、やや小さめのゴミ袋の中にＣＤが何枚か入っているのを確認して袋ごとゲット。ついでに服の入ったメスのゴミ袋も１個ゲット。さらに同じ場所から服ゴミを２個拾って、いったん自宅へ持ち帰る。その後さらに西へ行き、川添いのアパート「リバー・フェニックス」のゴミ置き場からビデオテープがぎっしり詰まった紙袋をゲット（残念なことに、とんねるずのＴＶ番組の録画テープだった）。

午前３時、川沿いの道で、どう見ても中坊風の男女４人組が乗った車に練馬への道を聞かれる。とんでもない連中だったが、礼儀正しくたずねてきたので丁寧に道を教えてやった。

彼らは一方通行を堂々と逆行していったが、そんなことは俺の知ったこっちゃない。

午前４時、帰宅してゴミを調べると、ＣＤは半分がカラヤンやアバドなどの指揮のクラシックで、もう半分はブルーハーツやドリカムだった。状態もキレイだったし、これなら中古ＣＤ屋でも売れるだろう。普段の俺なら絶対に聴きもしないブルーハーツをＣＤラジカセ（これも拾ったもの）でかけながら残りのゴミをチェック。文房具類のゴミから判断して、どうやら20代の若夫婦のゴミだったようだ。服はシャツやブラウス、セーターなど、上着が多く、下着類は少なかった。ただ、通販でよく売っているような、アニマルプ

街のゴミ集積所ときたら、どこでも曜日に関係なく、いつも誰かがコンビニのポリ袋に燃えるものと燃えないものの分別もろくにしないで捨てていやがるからホントうれしいぜ。それを夜中に猫が爪でひっかいて、あたりにゴミをまき散らかす。歌舞伎町の路上に散らかったゴミが風に吹き上げられて、それがそのまま溜まったような腐った汚穢の眠るところ——俺は、そんな汚れた街がヘドが出そうなくらい大好きだよ。この街でゴミを漁れば、ア●ルセ●クスのしすぎで少々ユルんで形の崩れた女の●門をていねいに舐め上げているような、そんな恥知らずで心地好い夢がいつだって見れるのさ。

いつも漁りに回るなじみのゴミ集積所は毛並みのよい猫のきん玉みたいにいとおしい。だから、俺は良質のゴミが多数出るゴミ集積所には、秘かに「パリ」とか「ミラノ」とか「ニューヨーク」なんていう行ったこともないおシャレな都市の名前をつけて呼んでいる。ホントに気に入ったところには「ひとみ」とか「よしこ」とか、女の名前をつけている。逆に、全く使えない役立たずのゴミ集積所には「新潟３区」だの「北海道３区」だの「東京４区」だのという、住んでいるやつらがみんな腐っていそうな有名腐敗選挙区の名前をつけて遊んでいる。もちろん鼻が曲がりそうな強烈な悪意を込めて。

平成７年〇月〇日
自律神経失調女の引っ越しゴミ

世田谷区&目黒区へ出張ゴミ漁り

某ビデオメーカーの取材で世田谷区と目黒区のゴミを漁る。前にもやったことがあるのでおおよその見当はついていたが、世田谷区の住宅街の連中は上品なせいか、回収日の前夜のゴミ出しがほとんどない。俺が回ったあたりは本当に腹が立つぐらい路上に何も落ちていないのである。立ち小便さえされたことのないようなチリひとつ落ちていない路上。おのれ、何というマナーのよい区なのだろう。「俺はこんな上品な連中が住んでいるような街には頼まれたって絶対に引っ越してきてやるもんか。畜生！　世田谷区なんか大嫌いだ！　いつか憎悪と恐怖と最低をしこたまばらまいて、この街を下品のどん底に叩き落としてやるから待ってろよ！」……などと怒りに燃えながらムチャクチャな捨て台詞を残して隣の目黒区に入ったとたん、たちまち冗談みたいに視界にゴミの山があふれ出したのには思いっきり笑っちゃったぜ。目黒区にはマナーの悪いクズどもが数多く住んでいるようだ。いいじゃねえか、俺は「好きです目黒区」だ。

結果は夜半に目黒区某所でミセスの派手な赤いパンティを1枚ゲット。とりあえずダストハンターの面目躍如ってとこだ。

平成7年○月○日
パンティの降る夜

今夜はなぜか服ゴミが多い。ハイソな連中が住んでいる東の高台付近からはクリーニン

へえ～、そうかあ。あのネエちゃん、きれーな顔して自律神経やられてたのか。「女の自立」もタイヘンだねえ……などとヘタなシャレを思いつきつつ、人間にとっての「勉学・労働と健康」の問題を多少マジに考えながら、拾ってきた下着のニオイを楽しみ、同時にチ●ポをしみじみしごいた。そういえば俺の工場でも、機械に挟まれて足首や指をなくした奴がいるし、健康って大切だよなあ。チ●ポコを心地好くしごく、この指がなくなったらエラいことだ。俺はこれまでオ●ニーに限らず、五感と電波の受信を通していろいろなことを感じながら生きてきて、本当に楽しかった。これからも、もっともっと感じていきたい。体は大切にしよう。「健康で長生きの鬼畜」ってのは社会の迷惑になりそうでいいな。

平成7年○月○日 燃えないゴミの日前夜

フロ上がりに妄想電波でだいたいの場所をスキャンしてから自転車で西へ向かう。夜風が頰に優しく闇がねっとりとからんでくるような、こんな夜は大漁の予感……自宅から2分ほどの白いマンション「アンジェラ」の道路に面したゴミ集積所はいつも住人のゴミでメチャクチャだ。なんつーか、若い連中のゴミはパワーが違うな。このチャチいマンションは以前からお宝が出まくりで、見逃せない好物件のひとつ。今夜もゴミ袋がテンコ盛り、明日は燃えないゴミの日だというのに雑誌などの燃えるゴミもおかまいなしに捨てら

グに出して戻ってきた状態の透明の袋に入ったままのゴミが高級ブランドの紙袋に入って捨てられていた。金持ちってのは服を捨てるときにクリーニングしてから捨てる習慣でもあるのかね？　午前4時まで3時間あまり徘徊して、人妻やOL、大学生の4人のパンティを合計12枚と、イイ匂いのしみ付いたストッキングを25枚も拾う。

他にも自宅から自転車で10分ほどの場所に住むピチピチ美人女子高校生（名門私立〇〇〇高校2年）の日記と友人同士の手紙を30通（郵便局経由のもあれば、校内で手渡しする複雑に折り畳んだタイプのもあった。どれも他愛のない話ばかりでチョーつまんねーの。こんな話、電波で済ませろと言いたいね）、パンティ3枚、ストッキング5枚、参考書2冊、ナマ写真3枚、友人のデータノート（コレがすげえんだ！）、他文房具、テスト類多数……なんていうのが拾えたが、俺はコギャルとか女子高生のような小便臭いガキには全く興味がないもんで、拾ってもあまりうれしくない。やっぱり女●肉ってのは多少歳をくって腐りかけてからが旬だよなあ。

ゴミのチェックを終えて、朝方のオナ●ニーも済ませたというのに、なぜか目が冴えている。仕方がないので、眠くなるまで拾ってきた高校生の歴史や英語のテスト問題を解く。鎌倉幕府がどーしたこーしたの歴史のテストはクイズみたいで面白いが、英語はじぇんじぇんわかりましぇ～ん。みるみる眠くなって夢の国へ行ったのはたぶん午前5時半。

平成7年〇月〇日

リント柄の男女ペアのTバックとビキニブリーフが出てきて笑えた。買ってはみたものの、あまりに馬鹿ばかしくて捨ててしまったんだろう。それほどはいたあとがないので、そのうち気が向いたら俺がはいて使ってやろう。

平成7年○月○日

深夜の路上写真展

午前3時、愛人の家からの帰り道。いかにも写真専門学校の生徒の卒業記念制作作品といった感じの写真のパネルが、10枚あまり積み重ねられて放置されているのに遭遇。見ると新宿高層ビル街だとか、友人の笑顔などド退屈な写真ばかりで、確かにこれなら捨てたくなるわなと納得。こんなへボい写真を撮る奴にカメラマンは到底無理なんじゃねえかとも思った。しかし、誰にも見られずにこのまま夢の島へ行ってしまうのも可哀相なので、せめてゴミ回収車が来るまで通行人に見てもらえるようにと一枚ずつ路上に並べる。ちょっとした路上写真展だ。朝になって捨てた奴が見たらきっと泣いて喜んでくれることだろう。たまによいことをするのもいいもんだなあと思いながら帰途を急ぐと、比較的新しい『デラべっぴん』や『ＰＡＷ』などのエロ雑誌の束をゲット。やっぱり、よいことをするとよいことが起こるもんだねえ。

平成7年○月○日

今宵の不思議な偶然

家を出る前に本棚から先週拾った『鏡の中の少女』という文庫本が落ちてきた。俺の本棚は何でもムチャクチャに詰め込んであふれているので、それ自体は何の不思議もないが、拾ってきた女子高生のゴミの中に、なぜかその『鏡の中の少女』の読書感想文があって驚いた。拒食症の悲惨な話らしく、女のコが「無謀なダイエットはやめようとおもいました」と書いていたのがなんかカワイくてねえ……。

平成7年○月○日
ホームレスのゴミ漁り

ホームレスのゴミ漁りを見つけて、後学のためにその後をつける。彼らのテクはなかなか見るべきモノがある。ゴミ袋の口を丁寧に開けて、中を物色したらまた閉める。決してゴミ捨て場をそれ以上汚さない。これはなかなか大切なことだ。

平成7年○月○日
俺にはゲームで遊んでいるヒマなどない

セガのメガドライブ（サターンではない）を1セット拾うがソフトがないので破棄。だいたい俺には日本を下品のドン底に叩き落とさなければならないという大きな使命がある。ゲームごときにはまっているヒマなどないのだ。悪魔の使者というのも、結構スト

イックでツライもんだねえ。好きでやってるだけなんだけどさ。

平成7年○月○日
パンティをはいて出かけたら

不覚にも警察の捜査網の中に入ってしまう。そのときは幸いゴミ漁りの最中ではなかったので、警官に呼び止められて職務質問されても全然かまわなかったが、ここ2週間ばかり洗濯をしてなくて、はくブリーフがなくなり、ジャージの下はこないだ拾った女子大生の水玉パンティだった（綿100％）。こんないいシュミを見られた日にゃあ、どんな言いわけも聞いちゃもらえないことは確実なので、借りてきた猫のように大人しく振る舞う。まあ、おまわりさんもいちいち不審訊問した奴のズボンを下ろしたりはしないから、それほど心配する必要などなかったのだが、人間には「ものごとを円滑に進めたい」という欲求とともに、「取り返しのつかないことをしてみたい」という欲求もまた存在している。そして、こんなときに限って、「おまわりさんの目の前でズボンを下ろして、はいているパンティを見てもらいたい！」などという、およそ通常では考えられない破壊的な衝動に強くかられるものなのだ。つくづく人間（俺は鬼畜だが）ってやつは複雑で難しいよな……。そういうわけで、実はけっこう危なかったのだ。Tシャツの後ろにスケて見えるブラジャーまでつけてなくて本当によかった。

平成7年○月○日
自転車がパンクした

西の方面へゴミ漁りに出かけたが自転車の後輪がいきなりバースト。調べてみるとタイヤが完全に擦り減ってチューブがむき出しになっていた。この前取り替えてから一年も経っていなかったような気がするが、それだけひんぱんにゴミ漁りで回ったということなんだろう。拾ったＣＤやらマンガやらを売って、モトはまあまあ取ってるから、まあいいか。アシで回るゴミ漁りも情緒があってたまにはいい。家に戻る道すがらＣＤ－ＲＯＭ付きのパソコン雑誌『インターネット』を3冊拾う（ＣＤ未使用）。最近こういうの多いんだよな。ダチのニコラス啓司にでもくれてやろう。

平成7年○月○日
外人ギャルの下着ゴミを待ちながら

東の地区にある良質のゴミ集積所「エミリー」は、いつも定期的に『マリクレール』（フランス版）や『ｉｄ』、『ローリングストーン』、『タイム』なんていう海外の雑誌がある程度まとめて捨てられているので重宝している。そこのアパートには日本の某有名輸入レコード屋で働く若い外人（たぶん白人）の女が住んでいるってワケさ。拾った給与明細でわかったんだけどレコード屋ってけっこう時給安いんだぜ。それでも店内の海外雑誌は割引きで買えるみたいでうらやましいね。勤務時間のローテーション表まで拾ったか

ら、今度彼女の顔を見に店へ行こうと思っている。外人のアソコのニオイは日本人の女と違って非常に味わい深いものがあるので、俺は彼女の下着ゴミにもすごーく期待してるが、残念なことにまだストッキング1枚拾えない状態だ。たぶん給料が安いから擦り切れるまで大事に使ってるんだろうな。そういうパンティは洗濯していても実にいい味とニオイが残っているもんでベリーグッドだよ。ああ、彼女のパンティが捨てられるのが待ちきれねえ！　チリ紙交換のマネをして「下着交換屋」でも始めようかね。「あなたの家のご不要なニオイ・オリ●ノ・経●付きパンティを新品のパンティと交換いたします。ガードル、ストッキング、ブラジャーなども大歓迎です。顔と年齢は問いません、この機会に古い下着を処分して、身も心も、そしてあそこもスッキリしませんか」なんて大声で住宅地を回れば大繁盛するんじゃねえかな？　集まった下着もブスとババアの分だけブルセラショップで売れば一石二鳥の日赤医療センターだ！　などという下らないシャレと妄想はさておいて、実際のところ、彼女は超右翼な（適当）俺が常日頃激しく憎んでいる敵国米英の女なんだけど、パンティを拾ってソレをオカズに一発抜いたら、まんざら赤の他人のような気がしなくなるに違いない。そういう面では俺もまだまだスイートだ。「深夜の住宅地で人知れず行われる国際親善」――政治家や官僚どもにゃあ、わからん世界だろう。
　しかし、そのゴミ集積所のすぐそばには、午前4時半頃から家の窓越しに近所の「猫のひと」を集めて、食い物を振る舞う気前のよいババアさんがいて、こいつがちょっとジャマ。今日も朝方通りかかったら「猫のひと」（『夜を徘徊する奴ら』参照）が10人以上も

いるモンで驚いちまった。俺にとってのホームレスな「ネコのひと」は、ゴミ漁りの仲間で、ゴミ捨て場の司祭みたいなもんだからいいんだけどさ。

平成7年○月○日
今日拾わなかったゴミ

北の地区でむき出しに捨てられていた写真を貼ったままのアルバム。中を開くとバアさんやジイさんの記念写真ばかりで辛気臭せえことこのうえない。たぶん持ち主のバアさんは死んじまったんだろうな。念がこもって持ってられねえよ。こういう有名でも何でもないジイさんやバアさんの人生って何だろうね。死んでしまえば持ち物も思い出も全部処分されて、その存在さえもみんなの記憶からどんどん消えていくんだろうな。「いや、死んだ人は人の心の中に生きてるんだ」と言う奴がいるかもしれないが、バアさんを憶えている奴らもみんな死んじゃったら誰も思い出してくれねえよ。そういう点ではゴミも人もあんまり変わらねえな。死んだり、捨てられてしまえばそれでオシマイ。10年前の今日、自分が捨てたゴミのことを憶えている奴はいるか？　そんなもん俺だって思い出せねえよ。

平成7年○月○日
フィリピーナの下着

自宅アパートのゴミ置き場から、またまたフィリピーナの派手な下着セットを大量ゲッ

ト。今度は黒やピンクばかりじゃなくて、紫や緑の下着がある。パンティもＴバックでかぐわしいニオイがムンムン。なんか話がウマすぎて「新手の美人局じゃねえか？」と思ったくらいだ。後で怖いお兄さんが「さきほどの下着の集金です」なんて訪ねて来るんじゃねえだろな。が、それは俺の杞憂にすぎなかった。きっとこれは都市の闇に巣食う邪霊や凶霊、悪魔のみなさんが日頃の俺の悪行の数々を感心に思って授けてくれた恵みなんだろう。いやあ、鬼畜やっててホントによかったなあ。今後も反省することなく隠れてコソコソと下品蛮行を行うぞー！　部屋へ戻り頭からＴバックをかぶって、フィリピーナを無理やり●す雄々しい日本兵やステキな商社マンをイメージしながら悦に入って、気分は植民地支配の帝国主義的鬼畜オ●ニーだ。いやあ全くトンデモナイ妄想だ。だけど俺も醜悪な日本人の一味なもんで、やめたくてもやめられねえんだよ。むしろ、考えまいとすればするほど電波も妄想も強くなる。くっくっくっ、遺憾だねえ、全く遺憾だよ。でも謝らなくてもいいんだよな、この件に関しちゃあ。俺は今後も政府の対応を完全に見習うぜ。

平成7年○月○日
ウチの近所にゃホ●がいる

　自宅からひとつ離れたゴミ集積所で『Ｇ—ＭＥＮ』や『さぶ』などのホ●モ雑誌や海外ホ●写真集のエグイのを拾う。これで半年で４回目ぐらいだ。ホ●なんか、いまじゃあ別に珍しくもないが、こういう雑誌を定期的に拾うことで「家の近所にホ●がいるんだ」と

いうことが、にわかに現実味を帯びてくるから面白い。「そうか、この近所にはホ●がいるんだなあ」と、少しうれしいような複雑な気分。しかし海外のホ●雑誌はすごいな。フニ●マラとはいえ、あいつらの太くて長いサオを見てるとなんだかけつの穴がムズムズしてくるぜ。案外ホ●雑誌を捨てている奴も、ホ●雑誌をむき出しで無造作に捨てることで自分の存在を主張し、仲間を探しているのかもしれない。いまのところ俺はホ●じゃないが、やりたいと思う対象は女に限定しているわけではないぜ。男なら色白で唇の赤くて線の細いタイプの中学生が理想かな。ときどき、殴り倒して無理やり●したくなるような奴が無防備に街を歩いてるんで困るよ。

平成7年○月○日
留学生の捨てたウォークマン

南の住宅街で録音機能付きのウォークマンとビデオテープ10本、スナップ写真の束などを拾う。ウォークマンはどこも壊れていなかった。気前のいい奴だ。

家へ帰ってウォークマンに入っていたテープを再生すると、たどたどしくてメチャクチャなとんでもねえ日本語が流れ出した。どうやら、これは韓国人の日本語学習用のテープらしい。ビデオテープも再生してみるとハングル文字の字幕入りのディズニー映画や『フォレスト・ガンプ』がある。写真のスナップは家族4人で東京ディズニーランドへ行ったときのもの。エロビデオは美里真理が1本と、あとは全て朝岡美嶺モノだった。そ

の他、わけのわからん韓国映画の入ったビデオがあったが、舞台が貧しそうな農村だったので、辛気臭くて見るのをやめた。ただでさえ貧乏なのに、さらに貧乏が伝染りそうだからだ。

関係ないけど、映画や演劇なんかの表現メディアの中には「貧乏を描く＝リアリズム」と勘違いしている馬鹿もまだまだ棲息しているようだが、「金があってあって、退屈でしゃあねえ」という金持ちのリアリズムだって当然あるだろうし、俺はどっちかというとそういう醜悪で下品なモンを見てみてえな。清貧かなんか知らねえが、カッコつけたビンボーなんか見たくも何ともねえよ。

平成7年○月○日
自転車が壊れるまでゴミを運ぶ

自転車の調子が悪いと思ったら前輪のスポークが10本も折れていた。おととい大量にエロ本を拾って、何度も箱ごと載せて運んだせいかもしれない。修理費に3千円。今後、重いゴミを拾って運ぶときは気をつけようっと。

平成7年○月○日
ゴミ友達とゴミュニケーション

暮れも押し迫る12月下旬、北の地区のマンション「マリアンヌ」のゴミ置き場から女性

ファッション雑誌を超大量ゲット。全部家に持ち帰るまで5往復した。俺にはさほど用のない物件だが、近所にファッション関係の仕事をしている女の友人がいるもんで、そいつのために拾ってやったのだ。これだけ持っていけば当分退屈しないだろう。この友人からは、けっこう妙な連中を紹介してもらうなど、ずいぶん世話になっているので持ちつ持たれつというわけだ。ちなみに彼女も以前から家具などの実用ゴミを拾っては使っているゴミ娘で、学生時代には中型のアンティークな木のテーブルを大学の近くで拾い、友達とふたりで私鉄の沿線をはるばる7駅も歩いて持ち帰ったという強者である。

　彼女によれば、女のコふたりでテーブルを運んでいるのがよほど珍しかったのか、工事現場を通りかかったら作業員のおっちゃんたちがみんなして仕事の手を止めて不思議そうな顔をして見ていたらしいし、途中で疲れて商店街のまん中で自動販売機の前にテーブルを置いて、そこでジュースを飲んでいたら通行人がみんな口をあけて何事かと驚いていたということだ。ふた昔前なら、寺山修司の市街劇と思われたかもな。とにかく、こういう情熱はスカベンジャー・ムラサキとしても見習いたいものだ。俺も持ち帰れなくて悔しい思いをしたゴミというのは今までもズイブンあったからなあ。

　しかし、ゴミ友達のネットワークを作るというのはなかなかよいアイデアだぜ。少し離れたところの友人と連絡を取り合い「今日、近所に小型テレビの出物があったけど拾っておく?」「ありがとう。明日取りにいくから頼むよ。そうそう、昨日ホ●雑誌拾ったからそのときついでに持っていくよ。今度、ステレオのアンプがあれば頼むね」「オーケー、

こっちもこの前拾ったブルセラ・ビデオを渡すよ。俺はロリじゃねえから駄目だけど、あんたなら充分抜けるぜ」などというやりとりをして、資源を有効利用するのだ。実際、俺もダチのニコラス啓司なんかとは、そういうゴミのやりとりをしている。セ●クスの趣向にしても、俺はSM&ア●ルマニアで啓司はロ●コンなので、エロ本やエロビデオは拾ったらお互いの趣味のモノを回しあっている。何て、汚らわしくも麗しい友情なんだろう。

「ゴミが育む友情」――そういうのもなんだかいいねえ。

平成8年○月○日
TV局OLのゴミ

西の方へ自転車で15分の「チャウチャウ墓場」(以前チャウチャウの大きいのの死体があったのでそう呼んでいる)から某テレビ局に勤めるOLの情報ゴミを大量ゲット。給与明細見て思ったけど、テレビ局っていっても若い連中は結構ビンボーなんだな。この女、25才なんだけどフロなしのアパートに住んでやがんの。ゴミの中には近所のフロ屋のおばさんと並んで写したスナップ写真があって微笑ましかったぜ。庶民的で気立てのよさそうなまあまあの美人。ゴミ袋からは、なぜか書きあげて出さなかった手紙が大量に出てきた。どうやら日記代わりに書いているようだ。友人や片思いの彼に宛ててその日にあったことを連綿と書いている。悲しかったこと、くやしかったこと、辛かったこと……それらを数えていったら全部で8対2ぐらいの割合いで、楽しいことよりも苦しいことの方が多

く書かれていた。仕事や日常なんて、どこだって誰だって、だいたいそんなもんだろう。出されなかった手紙はどれも思いっきり愚痴っぽかったけど、そういう手紙を出さずに捨てたことから考えて、たぶん彼女は現実の生活の中では、言いたいことの3分の1も言えずにただじっと耐えているタイプなんだろうな。そんなんじゃストレスもたまるさ。多少太りぎみになってエステでダイエットしているのもそのせいなんだろう。ディズニーランドで撮った片想いの彼と一緒のスナップ写真を捨てていたのは、新しい恋でもしているせいなのだろうか？

誰でも、いつかは何かをあきらめなくてはいけない——そんな人生の節目に捨てられたようなゴミだった。

平成8年○月○日
W大生の下着姿の全身写真

すぐ近所のゴミ集積所から北海道出身のW大学3年生の女のコのゴミをゲット。この娘は英語が得意で、バベルの翻訳講座なんかもやっていて、アメリカ留学を目指してがんばっている真面目ちゃんなんだけど、パンティの他にエステで写した背骨の曲がりを調べる下着姿の全身写真（ちなみに撮影日入り）を破りもせずに捨ててくれたんで俺はますます好感を持っちゃったよ。写真を見ると、胸のふくらみもほとんどねえし、白いパンティとブラも学生らしくてさわやかだねえ。どーしてこんな写真、無造作に捨てるんだか理解

に苦しむね。無意識では見てもらいたがってるのかな？　これらは留学が決まりその準備のためのゴミだったようだ。人のゴミを漁っておいてこんなことを言うのもなんだが、アメリカへ行ってこんなゴミの出し方してると近所の変質者に●されるぞ！

平成8年○月○日
百郎、怒りの小便制裁

北の住宅街を遠くまで自転車で流していると、家の周囲に塀の上から下まで、それこそ10センチ刻みの間隔でくまなく置かれた猫よけのペットボトルだらけの家を見つけた。よっぽど家のそばで猫に糞小便をたれ流されるのが嫌なんだろうな。「自分の家の敷地内さえキレイならそれでいい」という小市民根性まる出しの発想が泣けるねえ。これは「鬼は外」と同様、問題の根本的な解決を目的とせず、ただただ自分の家の平安のみを願うという極めて利己的な発想である。そんなに猫が嫌なら、目につく猫をかたっぱしから●して塀に並べておいたらどうだ。どうせ、そんな根性もねえんだろう。汚いモノを無責任に排除して、てめえだけキレイに暮らそうなんてフテエ野郎だ。猫の小便の方が、お前んちの卑しい根性よりも数万倍は清いぞ。俺は無数に並んだペットボトルを見ているうちに無性に腹が立って、たまらず正面の門のまん中に立ち、ち●ぽこを出して力強く小便をかましてやった。くっくっくっ、これからは猫に代わってこの俺が、お前んちに臭え小便をたれ流しに来てやるぜえ。ついでに、俺が世間を代表して、責任を持ってうんと強烈に

呪ってやる。そのうち気が向いたら（都合よく便意をもよおしたら）、くせえ糞もくれてやるからありがたく思えよ。このバ〜〜〜〜〜カ！

などと、ガラにもなくよいことをしたせいか、帰り道で『S&Mスナイパー』や『ビザールマガジン』を14冊も拾った。夜がくれたご褒美かもね。

平成8年○月○日
おたく少女のゴミ

近所のアニメおたく女のゴミを朝方に大量ゲット。コミックスや同人誌が箱で3つ。古本屋に売ればそこそこカネになるはずなのに、何で捨てちゃうんだろう？　もっとも、今さら『うる星やつら』モノなんかは店のほうでも買っちゃくれねえだろうけどな。そういえば、3年ぐらい前に、南の地区でラムちゃんのコスプレのビキニを拾ったことがある。それは白い水着にトラじまの布を縫い付けたものだったんだけどニオイもあんまりよくなかったし、持ち主の顔が俺のタイプじゃなかったので（写真も同時ゲット）すぐに捨ててしまった。

同時にこの女のコの服や下着もゲット。小さな花柄の木綿のパンティや、いかにも体育の授業で使っていたような使い込んだスポーツブラが幼い感じがして愛らしかった。けど、俺はロリじゃないんでさほどうれしくもない。たぶん卒業ゴミなんだろな。

平成8年○月○日
裏ビデオを大量入荷

午後７時。女性誌がある程度たまったので、デザイナーの友人の家へ持っていく。そのときに彼女のマンションのゴミ置き場が目にとまった。少し小さめのダンボール箱がガムテープでしっかりと密閉されて置いてある。この地区は明日は燃えないゴミの日だ！　ピンときた俺はダンボール箱に手をかけて小さくゆすってみた。カタカタとプラスチックの感触。長年の経験からしてこれはビデオテープに違いない。それも、こんなに厳重にガムテープを巻いているのは中味が恥ずかしいモノである可能性が非常に高い！　俺は小躍りして友人の部屋に箱を持ち込んで開けた。中はやっぱりビデオテープで、それもケースが紙製のバッタ屋でよく売っているようなわけのわからん銘柄ばかり、タイトル部分には数字だけ印刷された小さなラベルが貼られている。やった！　これは絶対に裏ビデオだ！

俺は狂喜して、嫌がる友人の部屋で、テープを片っ端から再生させて見た。ケダモノじみた洋モノの裏ビデオが15本、日本の流出モノの裏ビデオが８本、市販のエロビデオが８本、新東宝の昔のピンク映画が１本（港雄一先生御出演作品）、ゴルフの講座が１本という豪華な詰め合わせセットだった。こいつは春先からツイてるねえ。

友人の話によれば、ビデオを捨てたのはマンションの住人ではなく、隣のアパートのＤＯＫＡＴＡな奴ではないかということだ。なるほどゴミ置き場には、ナントカ建設の黄色いドカヘルも捨ててあったな。今どき金髪女のドドメ色のま●こに執着する下品な性欲な

んて、よっぽどパワーレンジャーな奴でないと持てねえよなあ。

平成8年○月○日
フォークギターと松葉杖

北の地区のマンションのゴミ集積所「プラハ」でフォークギターと松葉杖を同時に拾う。どちらも使いようによっては傷ついた若者の支えになる代物だ。そんな共通点を思いついてうれしくなってしまい、俺は夜の路上で小さく笑った。

ちなみにこのギター、持ち帰って弾こうと思って弦を強く絞ったら、ボディの弦止めが音を立てて割れやがった。こんなんじゃ、何も支えられねえよ。

平成8年○月○日
おまわりさんにシカトされた？

西の丘の上のマンション「スカンジナビア」でゴルフクラブ（ドライバー）を拾った。これで思いっきり人のアタマをぶっ飛ばせばさぞかし気持ちがいいだろうなあと思い、自転車に乗って片手でクラブをブンブン回しながら南の住宅密集地へ向かう。途中、狭い道で出会い頭に自転車に乗った警官とすれ違ったが、不思議なことに呼び止められなかった。しかも、あとで気がついたのだが、俺は無灯火で走っていたのだ。あのおまわりさんは、髪をふり乱してゴルフクラブをブン回しながら無灯火で自転車に乗っていた男をどう

して不審に思わなかったのだろう？　冷静に考えれば考えるほど職務怠慢としか思えない話である。こんなズサンな巡回で街の平和は守れるのだろうか？　俺は不安を感じて、一瞬、管轄の警察署長に抗議の投書をしてやろうかとまで思ったものだ。ウソみたいだけど実話なんだぜ、これは。こんな怪しい男を無視しなけりゃならないくらいの緊急事態でも起こっていたのかね？（浅草の警察なんて俺が普通に歩いているだけでも「オマエ何やってんだァ！」って呼び止めて不審訊問するんだぞ。それはそれで失礼だけどな）

そのあとも気をとりなおしてゴミ漁りを続け、他に、南の地区のアパート「硫黄島」で『ａｎａｎ』５冊と『モノマガジン』２冊を拾う。『モノマガジン』はアロマテラピーの特集部分がよかったので保存に回す。

平成８年〇月〇日
深夜に犬の散歩をする謎の夫婦

午前2時半、西の地区の川沿いの道を行く。最近この時間にここを通ると決まってすれ違う犬の散歩をする30代後半の夫婦がいるんだが、こいつらはいったいどういう連中なんだろう？　格好はお揃いのジャージにウィンドブレーカー。別にゴミをやっているんでもなく、ＳＭの露出プレイをやるというわけでもなさそうだ。だけど午前2時半という時間帯は、絶対にカタギの連中が犬連れで散歩する時間じゃねえぞ。お前ら夫婦で吸血鬼かあ？　俺は不安でたまんねえよ。

マンション「サヴァンナ」のゴミ集積所で携帯用マッサージ器を拾う。その帰り道、コンビニの横の路上でテレカを拾った。まだ20度数ぐらい残っている。どーだい。こんなふうに、ゴミ集積所以外の路上にも気を配ってお宝を見逃さないのがホンモノのスカベンジャーってもんだよな。ヘッヘッヘッ。

平成8年〇月〇日
持ち帰ったら男物！

絶対にメスの衣類ゴミだと確信して持ち帰ったゴミ袋が男モノだったので強いショックを受ける。ゴミ漁り歴16年のこの俺がこんな失態をやらかすなんて……しばらくは立ち直れないかも知れない。拾ってきたゴミ袋をあけたらカルバン・クラインの白いブリーフが20枚もゾロゾロ出てきやがったのだ。畜生！　〇〇〇〇新宿店勤務の佐藤〇〇！　野郎の分際で小さな水玉模様のシャツなんか着るんじゃねえ！　今度まぎらわしいゴミ捨てたらお前のアパートの郵便受けに溢れるほど犬のウンコをプレゼントするぞ！　ああ、腹が立つ。このゴミが出た場所は西の地区のマンションのゴミ集積所「みちよ」なんだが、ここからは何度もＯＡ機器の会社に勤務する小柄なチアキちゃんの70Ａのブラジャーや可憐な白いパンティや友人とのスナップ写真を拾っていたので、今度も女モノだと思ってろくに調べずに持ち帰ったのが大きな間違いだった。やれやれ、最近ちょっと雑誌にゴミものの連載持ったりしてチョーシこいてたからバチが当たったのかねえ。

男物の衣料も、自分が着られるようないい上着ならまあうれしいが、さすがに野郎の使ったブリーフははく気になれない。あと、俺は体がでかいので、ナカナカ合うのがねえんだよ。去年の秋には南の地区のアパート「モロッコ」でイラン人のでかいシャツやジャケットとか拾ったんで着てたけどな。連中けっこういいモン着てて、それを気前よく捨てるんだ。ありがたいもんだねえ。しかし、それにしても、いっぺんにブリーフを20枚も捨てる事情って何だろね？

平成8年○月○日
村崎が紫色のジャンパーを拾う

西地区のアパートのゴミ集積所「セリーヌ」で朝方に趣味の悪い紫色のジャンパーを拾う。これはＭＡ—１とかいう型のやつだな。少し小さめだったがムラサキの俺にはぴったりの色だ。着させてもらうぞ。ポケットを調べると、３週間ぐらい前の上野から１２０円区間のＪＲの切符が一枚出てきた。たぶんキセルでもしたんだろう。上野……くっくっくっ、こんなヒヒノケツ色のジャンバーを着て歩くにはうってつけの街じゃねえか。今度は俺が着てこの街を下品のドン底に落としてやるよ。

同じ場所からビニール袋に入ったロ●ータ専門誌とブルセラ・ビデオを3本拾った。本はともかく、燃えるゴミの日にビデオテープはイカンなあ（俺はウレシイんだけど）。これもロリ●ンマニアの友人、ニコラス啓司にあげよう。奴からはこないだ洋モノのド迫力

ア●ルセ●クス・ビデオを2本もらったからなあ。

平成8年○月○日
見落としがちなゴミ漁りのアナ場、コンビニ前

ゴミ集積所以外で俺が注目している場所はコンビニの外に設置されたゴミ箱だ。注意して見ていると、ときどき信じられないモノが入っていてけっこう面白い。家庭のゴミを捨てていく奴も多いが、マメに漁ればその日のスポーツ新聞やマンガ週刊誌、月遅れのエロ本などが確実に拾える。

以前、青梅街道沿いの某コンビニのゴミ箱から妙になまぐさいマ●汁のたっぷり染みたヒモの束を拾って驚いたことがある。結び目もいくつか残っていて、SMプレイの亀甲縛り系のシバリに使用されたヒモであることは確実だった。今日はそんなことを、行きつけのコンビニのゴミ箱に飾りのたくさん付いた縄のれんが捨ててあるのを見て唐突に思い出した。

平成8年○月○日
2階のマゾがエロ本を処分

アパートのゴミ集積所に2階のマ●野郎が大量のエロ本を放出した。昨年春にこいつがエロ本を処分したときは気づくのが遅くて、布袋に入っていた本は全て雨でびしょ濡れに

なってしまい、とても悔しい思いをしたものだ。今回はポリ袋に入っていたし、発見が早かったので、非常によい状態で回収できた。ゴミも癌並みに早期発見が大切だというわけだ。

ポリ袋3個を即ゲットして袋の中を調べたら、出るわ出るわ女王様モノやマ●、足フェチ、ＳＭの専門誌や写真集がその数合計80冊以上。たまげたよ。よくこんなに買うもんだなあと感心しながら、拾ったエロ本を便所の本棚に並べる。こういうエロモノはクソでもしながら読むのが一番だ。

同じそいつのゴミ袋の底の方から全て名前入りの給与明細や、ガスや水道、電話料金の請求書や、カード会社からの督促状がふたつかみも堂々と出てくる。いやあ、こいつは全く豪快な●ゾ野郎である。まあ、真性マ●なんだから心のどこかで常に「うんと恥ずかしいことをしてみたい」という気持ちがあっての行動なんだろうな。軽く見積っても10万円分以上のエロ本をタダで入手できたんだから、まあ他人の性格やら趣味趣向をとやかく言えた筋合いじゃないがな。

その他、ＳＭクラブのホームメイドの女王様＆マ●男モノのエロビデオも一緒に出てきたので、夜更けに3本ほど鑑賞するが●ゾ気のあまりない俺にはド退屈な代物だった。そろそろ2階のマ●野郎の趣味には付き合いきれねえなと考えはじめた俺は、今度は誰か『お尻倶楽部』のバックナンバーを全巻揃いで捨ててくれるような気前のいいア●ルマニアがアパートに引っ越してこないかな、などとムシのいいことばかり考えながらＴＶをつ

けっ放しにして寝入ってしまった。
明け方、可愛い女のコとどこか遠い浜辺にある水族館を見に行く楽しい夢を見た。

平成8年〇月〇日
後日談：2階のマ●が引っ越していっちまった

エロ本の大量整理をしたと思ったら2階のマ●野郎がアパートを引っ越してしまった。これでこのアパートに残る変態は俺ぐらいになってしまったわけだ。いやあ、今まで2階にマ●が住んでいるなんて正直言ってキモチ悪かったんだけど、いなくなってみると淋しいもんだねえ。もう女王様系SM雑誌やビデオが拾えないと思うと残念でならない。この次に入る奴が若くてキレイな女のコか、ア●ルマニアの変態ならホントにいいね。
ところで、問題はその後だ。引っ越しの後に掃除業者が来て奴の部屋のメンテナスをしていったんだが、バスルームの掃除で一階の俺の部屋の便所へ大量の水が漏れてきやがったからたまらない。せっかく拾って集めた雑誌や本がビショビショに濡れてしまった。
便所に大量に本を持ち込んでいた俺も俺だが、モトを考えれば引っ越していったマ●野郎が悪い。おのれ、どうしてくれよう。とりあえず引っ越し先は突きとめたぜ。

平成8年〇月〇日
公園にホームレスが入居

どうやら近所の小さな公園にホームレスがふたりほど住みついたようだ。彼らは園内のまん中のベンチの横にダンボールやら新聞紙やらの「お宝」を山と積み上げて、その上にわりと新しい緑色のシートを被せて領土を主張している。さして大きくもないベンチの上が寝床代わりで、見るからに窮屈そうだ。こんな小さな公園に住まなけりゃならないぐらいなんだから、あまり強い連中ではないんだろう。「動く歩道」の一件で新宿駅を追われてやってきたのかもしれない。やれやれ、しょうがねえな。とりあえず、この付近の食えるゴミは見つけても拾わずにおこう。それが俺のホームレスへの、精一杯の福祉活動だ。それでも食料類やダンボールや新聞類は彼らに譲って妥協するが、オンナの下着やエロ本は俺も彼らの命がけのゴミ漁りを邪魔しなければないほど生活に困っちゃいないからな。そ容赦しねえぞ。「先に見つけて持ち帰ったモン勝ち」なのはゴミ漁り業界の常識だぜ。

平成8年〇月〇日
小さな失敗

拾い上げた紙袋のずっしりと重い手応えに「この重さはスケベ写真集系の重さだ」などと早合点して持ち帰る前に、中身は確認した方がいい。密閉していても中身は各種チラシのカタマリであることはたまにある。

十六夜の月がおぼろに霞むうららかな春の宵

平成8年○月○日
月光に輝く便器

西地区最低最悪のゴミ集積所「新潟三区」を通りかかったら、月の光に照らされてあたりに異臭を放ちながら輝く洋式便器に遭遇。それもうず高く積み上げられたゴミの山の頂上にモニュメントのようにフタを開けたまま置かれている。近寄るとホントにウンコ臭くて、ついさっきまで使っていたような便器なのだ。あたりには家の取り壊しは1軒もない。こんな見事な月夜に突然、洋式便器を捨てる奴の事情とメンタリティっていうのはいったい何なんだろう？　「ルナティック」のひと言で済まされるのか？　俺は何だか無性に可笑しくなって腹を抱えて笑った。俺の住む街にはお似合いのゴミだ、案外こんなのが俺にとっての「聖櫃（アーク）」なのかもしれない。

平成8年○月○日
ゴミ漁り指導

新宿の喫茶店で映画監督の松村克弥氏にダストハンティングについてレクチャーした。氏の監督作品『オールナイトロング』（大映Vシネマ）の3弾目のモチーフにゴミ漁りがあるのだという。そういえば「近所の女のゴミを漁り続けて欲情する無知で下品な工員」なんていうのは、いかにも一般大衆が思い描きそうな定番の変態像だねえ。

この映画で少しでもゴミ漁りが盛んになるといいな。俺は無責任にそう思った。

平成8年○月○日
ホームレスが消えた

日曜の朝、近所の公園まで散歩したら、公園に築かれたゴミの山と、住み着いていたホームレスの姿がきれいさっぱり消えていた。なるほどね、「ゴミは回収されなければならない」というのは都市行政の鉄則だ。おおかた近隣住民からの訴えで追い立てでも食らったんだろう。ホームレスの住んでいたベンチのあたりはウソみたいに整然とキレイに片付けられていた。野良猫を一匹も見かけない夜の散歩は味気ないものだ——。そんな気分になった朝の散歩だった。

平成8年○月○日
猫のムクロに小便儀礼

深夜、西地区の路上で車に跳ね飛ばされた三毛猫の死骸を見つけた。口から流れていた血はまだ生乾きで、身体も少し暖かかったが猫は完全に息絶えていた。頭上には十六夜の月がこうこうと照り輝いていて、確かに死ぬにはいい夜なのかもしれなかった。路肩まで猫を運んで、しばらくそのそばに立ってどうしようかと迷ったが自分のキャラクターを考えてムクロの上に小便をイキオイよくかけて、死んだバアちゃんに習った法華経を唱えて帰ってきた。「墓に唾をかけろ」ではなく「ムクロに小便をかけろ」といったところだ。

猫の霊が怒って俺のもとへやってきたら、首の骨が折れるまで抱きしめて頬ずりしてやるさ。

その帰り道で考えた。いつか俺も死ぬなら夜の路上がいいな。願わくば月の大きな夜にゴミ漁りの途中で野たれ死にだ。そこへ街中の路地裏から無数の猫がやってきて、俺のムクロに小便をひっかけるんだ。「末期の水は猫の小便」ってわけさ。汚穢にまみれてゴミ回収車に放り込まれ、夢の島へ運ばれて行くのが鬼畜にはお似合いの最期だな。俺は夢の島に捨てられてゴミと一緒に静かに腐るよ。いつか、俺の腐臭が海からの風に乗ってあんたらの食卓まで届いたら、腹の中にたまっている汚い反吐を思いっきり吐き出してくれ。

今にして思うと、あのエロ話も立派な「ゴミ」だった。ゴミは有形無形でいたるところにころがっているもんだ。工場長を見ながら「俺も歳をくったら若い連中に偉そうに、タメにならないエロ話を語れるオヤジになりたいもんだ」と思ったものだが、現在の俺はかなりいいセンいってるんじゃないだろうか？
「若者にしょーもないエロ話を語るオヤジ」はマトモな連中からみれば「ゴミのごとき存在」である。身も心もゴミにならなけりゃ、いいゴミは拾えないとは限らないが、俺自身はこの世を腐敗させるために「さらに臭いゴミ」を目指していこうと思う。そして、本書を執筆しはじめたときには「形のあるゴミ」ばかりに気をとられていたが、書いているうちに、この世にはゴミ以前のゴミも、定まった形を持たないモノガタリのようなゴミもあることに気が付いた。今後はそうした「ゴミ集積所に出されないゴミ」も漁っていくつもりである。
本書の刊行にあたっては、データハウス社長の鵜野義嗣氏をはじめ、東京公司の青山正明氏、山田高志氏、吉永嘉明氏、浦上太郎氏、本文レイアウトのニコラス・N・啓司氏と装幀の浅生ハルミン氏、イラストの宮西計三氏など、多くの方々に大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。ほんとうにありがとうございました。
一九九六年七月七日　村崎百郎

あとがき

もう定年でいなくなってしまったが、休憩時間に工場長がしてくれるしょーもないエロ話が大好きだった。劣悪な労働条件の下での苛酷な肉体労働の合間には、何も考えずに聞いて笑えるエロ話こそが、ささくれた感情を癒すのに有効なのだ。

「いいか、オレの若い頃は給料なんてもらったその日に酒くらって女買ってあらかた使っちまったモンよ。江戸っ子は宵越しの金は持たねえンだ！　カネなんかチビチビしみったれて使ってられっか！」

「ホラ、よく見とけよ、いまこっちがわに歩いてくる女、ああいうのはまたがっただけでガキができちまうから要注意だ。ああ、もう顔みりゃそういうのは一発でワカる」

「オメエら覚えとけ、ああいうババア（痩せてて上品な社長の奥さん）に限ってアレが死ぬほど好きでしつこいンだ。社長の野郎、いまだにあのババアに夜毎きん玉ニギられてるモンだから、いくら儲けても女遊びひとつできやしねえ」

「あの顔は好きモンだぞ〜。ああいう女は尺●しても、こっちが出した汁の最後の一滴までグイグイ吸い上げて飲んじまうんだ。吸い付いたら離れない、全くたまんねえよな」

根拠も何もあったものではない。工場長は思いつくままに、とことん下品で女性の人権なんかまるで無視のエロ話をポンポンと調子よく矢継ぎ早に語ってくれた。フェミニストが聞いたら憤死しそうなヒドい話ばかりだったが、俺は無責任に笑いながら楽しく聞いていた。

追記：ネタの重複を避けて、本書には意図的に雑誌『ＧＯＮ！』に連載の「隣の美女の出すゴミ」に登場する荻野目ユキコ（仮名）の物語は一切挿入しなかった。そういうわけで本書はＡ・Ｉに捧ぐ。貴女がいなければ、この本にはこんなにも魂は入らなかったろう。

村崎百郎（むらさき・ひゃくろう）
61年シベリア生まれ。中卒。
80年に上京。凶悪で暴力的な性格が災いし、陰惨な傷害事件をくり返しながら多くの工場や工事現場を点々とする。現在は工員兼鬼畜ライター。
生まれつき神や悪魔の声が頭の中に直接聞こえてくるという「電波系」であり、その体質を利用して、「妄想神経」と呼ぶ透明無形の神経繊維を体外に無限に伸ばして、他人の体に潜入&憑依をしたり、路上のゴミを探査したりと、いつ精神病院からスカウトがきても不思議ではない状態のキ●ガイ技を多数会得している。
95年より「すかしきった日本の文化を下品のドン底に叩き堕とす」ために「鬼畜系」を名乗り、この世の腐敗に加速をかけようと、「卑怯&卑劣」をモットーに日本一ゲスで下品なライター活動をはじめる。（この活動に関する同志&奴隷&喜び組&敵対する「正義の味方」は常時募集中）
主な執筆雑誌は『危ない1号』（データハウス）、『GON!』（ミリオン出版）、『イマーゴ』（青土社）など。共著に『ジ・オウム』（太田出版）、近刊予定に『鬼畜系』（太田出版）、『電波系』（太田出版／根本　敬と共著）などがある。

鬼畜のススメ
著者　村崎百郎

発行者　森園みるく
有限会社　ミルキーワールド
スキャニング　株式会社　エレキテル　電子化代行スキャンPRO事業部
新表紙デザイン　電子書籍出版代行サービス
付録表紙デザイン　森園みるく
表紙デザイン　浅生ハルミン
表紙カバー写真　山田伊久磨
本文デザイン　ニコラス啓司
イラスト　宮西計三

編集　校正　小山繭子
校正　SARU
協力　矢崎雅之



Presented by 東京公司

発行／データハウス

ISBN4-88718-398-4
C0036 P1300E
定価 1300円（本体1262円）



Presented by 東京公司

発行／データハウス

俺は人間なんて、どいつもこいつもヘドが出るくらい大嫌いなんだよ。ゴミを拾うのだって、考えてみりゃあ、俺の嫌いな「人間どもが捨てたもの」だから拾う気になるんだろうな。そうでなくても、俺は汚いものや醜いものやハ虫類や病原菌みたいに、たいていの人間どもが忌み嫌うものにはほとんど無条件で好感を持っている。つまりは「人間性を捨てた鬼畜な俺が、人間どもの捨てたゴミを拾う」ってわけさ。ゴミ同士の麗しい友情？いかにも安っぽくてハエのたかりそうなクッセエ物語じゃねーか。笑っちゃうぜ、全くよォ。村崎百郎

ゲ

特別付録

ス





特別付録　目次

◆会田誠

◆後迫直樹

◆エミ・エレオノーラ

◆尾崎未央

◆春日武彦

◆香山リカ

◆木村重樹

◆京極夏彦

◆黒田有南

◆小谷真理

◆多田遠志

◆巽孝之

◆都築響一

◆中原昌也

◆萩尾望都

◆藤本由香里

◆宮西計三

◆根本敬


私の夫は
ある日
突然
殺された
1
森園 みるく

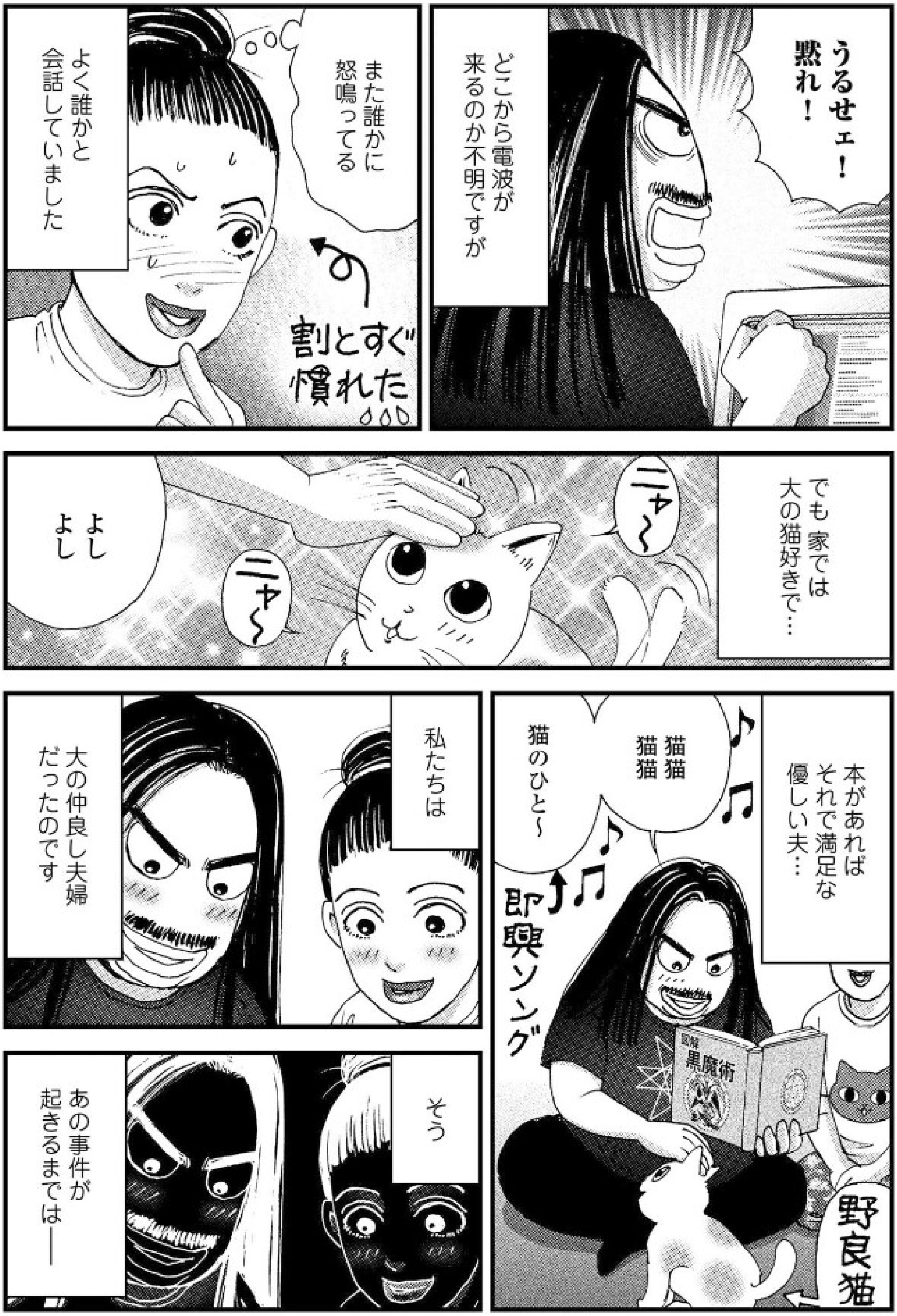

アラ還！
漫画家の森園みるくです
デビュー36年目！
私の夫は〈鬼畜ライター〉の村崎百郎です
体重100kg超！
元空手部黒帯！
1990年代後半に「鬼畜系」とか「電波系」という言葉が流行したのですが
夫は自らを「鬼畜系」「電波系」と名乗り
本や小説を書いたり色んな雑誌やネットで仕事をしていました
社会派がゆく
維新編
唐沢俊一
村崎百郎
一緒に住むようになってからは
俺が原作書くよ！
私の漫画の原作も書いてくれていました


取材とかイベントとかマスコミに出る時はこんな格好で…
夫は常にこんなことを言ってました
黒頭巾
黒マント
俺は世界一ゲスで下品で最低な鬼畜だ！
日本を下品のどん底に叩き落としてやるぜえぇぇぇ！
ゴゴゴ
俺は幻聴や幻覚を絶え間なく受信する電波体質だ！
趣味は他人のゴミ漁りでゴミ漁り歴20年以上！
ゴゴゴ
夫が鬼畜かどうか…はともかく電波体質と言うのは本当のようで…
趣味がゴミ漁り…てのも本当ですが
何ィ！



2010年7月某日
午後3時半
くかー
くかー
くかー
昔から睡眠障害のケがあった私は…
漫画家になって3日徹夜して1日以上寝たりしてたせいか
その症状が慢性化して
ぱちっ
ほぼ毎日のように長く起き続けて10時間以上寝るという生活でした
ん〜〜〜っ
ふわぁ〜〜
この日も10時間以上── 正確には14時間くらい寝て
起きたのは午後3時半過ぎでした
カタ カタ カタ カタ カタ
ん？


しょ…
食事に行くけど…
カタ
カタ
カタ
……
……
カタ
カタ
カタ
夫はかなり焦ってる様子でとても怖い雰囲気だったので
……
カタ
カタ
私は1人で食事に行くことにしました
…いつもなら
締め切り迫ってても食事に行くって言うのにな——
森園
私たちは常に一緒に外食してたので
今日どこ行く?
そーだなー
私は少しだけ不思議に感じました
なんで今日に限って…



うるせェ！黙れ！
どこから電波が来るのか不明ですが
また誰かに怒鳴ってる
よく誰かと会話していました
割とすぐ慣れた
でも家では大の猫好きで…
ニャ～
ニャ～
よしよし
本があればそれで満足な優しい夫…
猫猫猫猫猫のひと～
即興ソング
図解 黒魔術
野良猫
私たちは
大の仲良し夫婦だったのです
そう
あの事件が起きるまでは――

現在、色んな漫画配信サイトで配信中です。
宜しければ「私の夫はある日突然殺された　森園みるく」で
検索よろしくお願い致します。


カタ カタ カタ カタ カタ カタ
仕事してる…
その時 夫は 私の漫画の 原作を書いて いました
カタ カタ
確か… 私が起きるまでに 原作を書くって 言ってたけど…
カタ カタ
げ
…原作 出来た…?
カタ
小声
もうとっくに 締め切り 過ぎてるのに…
カタ カタ カタ カタ カタ
…今… やってる…
カタ カタ

す。一緒にお仕事をされていたりするので、そういったお話から村崎百郎さんという人の実像やその時代が見えて来れば面白いかなと思います。

それでは、最初に矢崎さんから自己紹介をお願いします。

矢崎「『危ない28号』（データハウス）という書籍の中で村崎百郎さんの担当をさせていただきました矢崎雅之と申します。あとは森園先生と村崎さんのお二人とプライベートな関係でお付き合いさせていただいています」

森園「漫画の担当もしてもらっていたよね？」

矢崎「あっ、そうですね！　森園先生の漫画も担当させていただきました。色々な意味で濃い関係で仲良くしてもらっています」

マンタム「時系列をはっきりさせたいのですけど、いつごろからお仕事を一緒にされていたんですか？」

矢崎「（村崎さんと）編集として仕事を初めてしたのが１９９９年くらいだと思います」

森園「そんなに遅い時期だった？」

矢崎「『危ない28号』（季刊誌として98年〜99年まで刊行）です」

森園「あれ？　もっと早い時期じゃなかったっけ？」

矢崎「森園先生は僕のことを相当古い編集担当だと思い込み過ぎで、編集もまだパシリくらいの時期だったんです（笑）」

萬「『危ない1号』（データハウス）が１９９５年らしいので……」

諸事情により、ここまでしか
お見せ出来ず済みません。



宜しければ是非続きをご覧下さい。
［森園みるく　私の夫はある日突然殺された］→［検索］

森園「担当してもらったのは『まんがグリム童話 クレオパトラ 氷の微笑』（※漫画：森園みるく 原作：村崎百郎）とかですよね。3年もやったんだよね」

萬「えー！ 3年もですか⁉ すごい！（汗）」

マンタム「それは長いですよね。では、大雑把に時代背景をまとめると、このメンバーでは萬さんが一番最初に（編集を）されて、一番古い時代から知っているということですね」

森園「矢崎さんだとばかり思っていました（笑）」

矢崎「だから、今日はそれは違うと言いにきたのです（汗）」

■「終末デカダンス的時代に敏感なアンテナで反応したのが村崎百郎」（マンタム）

萬「（FEEL YOUNGを指しながら）これが村崎さんと私の初仕事ですね」

森園「このころって、時代的にはどうなんですか？」

マンタム「モロに世紀末ですよね。結局、村崎さんの鬼畜であるとか、お下劣、お下品、あるいはゴスロリなんかもそうですし、そういった終末デカダンス的な時代が世紀末に押し寄せていたと。その時代に、敏感なアンテナで反応したのが村崎百郎さんではないかという感じなんですけれども、実際、読者の感覚はどうだったのか気になったのですが……」

◆村崎百郎　元担当者座談会

２０１９年10月28日
東京都千代田区九段北　株式会社「シュークリーム」会議室にて収録

司会：マンタム（造形家・古物商）
ゲスト：萬眞理子（株式会社シュークリーム　代表取締役）
ゲスト：清末弓乃（フリー　編集者）
ゲスト：矢崎雅之（株式会社データハウス　編集者）
著者：森園みるく（漫画家）
（※敬称略）

マンタム「本日は村崎百郎さんに関しての座談会になるんですが、まず出席者の紹介から入りたいと思います。皆さまそれぞれ村崎百郎さんとつながりのある編集者さんたちで

マンタム「当時のエピソードを教えてください」
森園「なに言っても怒らないから（笑）」
萬「私が村崎さんの言葉で一番覚えているのは、一年の中で6月くらいになると『特攻隊のお兄さんが叫ぶ声がうるさくて寝られない』と……」
森園「（笑）」
萬「そこら中に響いているそうで……」
森園「なんか、春も『すごくうるさい』って言っていたし……あと、夏にもお盆が近づくと村崎は発狂していましたよ。『うるせぇぇぇぇぇ！』とか言って怒鳴っていましたよ（笑）」
萬「漫画の原作の中でも、登場人物が『うるさい！　うるさい！』とか。小さいころから幻聴が聴こえるという設定で『うるせぇぇぇぇ！』から始まる漫画とかもありますし」
マンタム「なるほど」
萬「あとはドッペルゲンガー、自分のドッペルゲンガーのことを仰っていましたね」
森園「えっ⁉　その話は知らないよ…」
萬「それと、自分が殺されるみたいなことを……」
森園「あっ、それはけっこう何人かの関係者が聞いていますよ。でも、私はドッペルゲンガーの話ってよく覚えてなくて。そんな話をしていたんですね」

森園「『危ない28号』のころだと思ってたー！」
矢崎「そうです。自分は『危ない28号』からなので……」
森園「次に古いのは？　萬さん？」
マンタム「萬さんです」
萬「女性向け漫画専門の編集プロダクション『シュークリーム』の代表取締役をやっております萬眞理子と申します。私の方は雑誌『FEEL』（祥伝社）で森園みるくさんとお仕事を始めて、その後『FEEL YOUNG』（同）を創ったのですけれども、その『FEEL YOUNG』で1998年と1999年に村崎百郎さんに原作をお願いして、森園さんに作画をしていただきました」
森園「あれ？　村崎さん原作の作品を萬さんに担当してもらったのってそんな古いっけ？」
萬「はい。1998年の2月、3月ごろですね。（本を見せながら）これがそうですね。『DIEGO 頭の中の自由』（※漫画：森園みるく　原作：村崎百郎）ですね」
森園「懐かしいー！」
マンタム「では、次の方、自己紹介をお願いします」
清末「私は、ぶんか社で2000年から2004年まで森園さんと村崎さんの担当をしておりました。2004年で会社を辞めましたので、現在はフリーで編集をやっております、清末弓乃と申します」

森園「それはいろんな人から聞きました（笑）。私の担当さんだけではなくて、漫画家さんも付き合わされたとか」

萬「付き合わされたというか、愛想がいいというか、けっこう喋ってくれて、こちらも面白かった！」

■「目線が何万メートルも後ろに突きぬけていて……」（矢崎雅之）

森園「人によるんだけど、気に入っちゃうと電話を切らないからね」

萬「（村崎さんは）ずっと喋ってらっしゃいましたよね」

森園「矢崎さんなら一番わかるでしょ？」

矢崎「いやぁ、（話すと）長かったですよ。でも、話がとにかく面白い！あと、こんなこと言っていいのか分からないのですが……」

森園「言っていいよー！」

矢崎「とにかく紳士的でこちらに対する気遣いもあるんですけど、僕の方を見ているはずなのに目線が後ろに突き抜けている気配がある。何万メートルも後ろの方を……僕が透明になっているみたいな！」

（一同爆笑）

森園「あれ、不思議ですよね！　相手の目を見ているんだけど、見てないんですよ」

萬「今、思うと、すごく現代っぽい原作だったんですよね。ほんとに最近、無差別殺人が多いじゃないですか？」

森園「そういうキ●ガイの漫画だったのね？　やっぱり（笑）」

萬「サイコパスとかも今は随分と言葉が浸透していますけど……１９９８年というと、当時はまだまだちょっと違うんですよね。だから、今、思うと先取りした作品だったんですよ。それで、当時の読者にはやっぱりちょっとキツ過ぎというか、先取りし過ぎですね。幻聴とか幻覚とか。そういったことを『電波系』という言葉でまとめたのは、その後だと思うので……」

森園「そうか、ただ、この時点では本には書いているわけよ。本人はね」

萬「そうです。今、思えば、非常に青年誌っぽい感じでしたね」

マンタム「僕は、村崎さんのことを実はよく知らなかったんですが、知り合いにゴスロリの女の子がいて、彼女が（村崎さんを）すごく好きで話を聞かされていて。なんだか同じような時代に同じような感覚、体験はしているような気がするんですよ。村崎さんは魔術に走っていきますけども、そのころは僕も魔術に非常に興味を持って調べていました。村崎さんにとって、魔術はそういう電波的なものを担保するためというか、何とか形にしたいという気持ちがあったのかも。そういう感覚はよくわかりますね」

■「村崎さんは『たぶん、僕は畳の上では死ねない』と」（萬眞理子）

ん⁉』みたいな（笑）」
一同「そうなんだよねー‼（笑）」
萬「だって、1999年には、私は何歳？　と常に考えていました」
一同「そうなんだよねー‼（笑）」
マンタム「そういったことが常識のようにきていましたよね。当時、時代が変わってほしいという期待もあったと思うんですよ。コンピュータの2000年危機なども騒がれていたし。いろいろな価値観が一斉に集約していって『危ない28号』がまさに世紀末の2000年に終わる。その後、村崎さんはどう変化していったのかを知りたいですね」

■「森園ブランドを守り続けようとした人」（清末弓乃）

清末「私は2000年に、初めて本を創刊する前の増刊で（村崎さんと森園さん）お二人に初めて会ったんです」
森園「えっ？　創刊？　なんの創刊なの？」
清末『ほんとうに怖い童話』（ぶんか社）です。
森園「あっ⁉　そうなんだー！」
清末「私は村崎さんをまったく知らなかったんですよ。サブカルにも疎いし……だから、みなさんがお話している村崎さん像じゃなくて、私は常識的な村崎さんの人柄しか知らな

マンタム「自分で自分を見てしまうんでしょ？　それって」
萬「自分を見てしまったそうなので、村崎さんは『たぶん、僕は畳の上では死ねない』みたいなことを」
マンタム「ドッペルゲンガーはね。自分で自分を見たら終わってしまうんですよ」
森園「他の人が自分を見るのもありますけどね」
マンタム「いや、それはまた違います！」
萬「村崎さんの場合、ご自分でご自分を見た」
森園「あれとまったく同じとなると……それは……自分で間違いないか（笑）」
（一同爆笑）
森園「それって、最初からそんな話をしていたわけではないですよね」
萬「うーん……時系列でどういう順番で聞いたかは覚えてないんですけど。いつも三人で会って漫画の打ち合わせをしていたじゃないですか。それで、森園さんがトイレに行ったときや席を外された時とかは村崎さんと喋っているから。そういうときだった思うのですけど。あ、あと私が電話すると森園先生は寝てらっしゃることが多かったので……（笑）」
（一同爆笑）
萬「そうすると村崎さんが対応してくださるんですけど、そこで電波のお話を聞いたりとか」

森園「じゃあ、危ない話は知らなかったのね…」
清末「（村崎さんは）割と原作（の進捗）が遅かったじゃないですか？」
森園「そうだよねー！　萬さんも知っていると思うけど、遅いなんてもんじゃない！（笑）」
萬「森園さん自体も遅かったですよねー（笑）」
森園「ちっ！　違うっ！　違うよ！　原作が遅いから私も遅くなるんだってー！（笑）」
清末「でも、森園さんは『下書きを何日』とか進捗を計算できるんですよ。村崎さんは本当に『降りてこないとダメ！』というタイプなんですね。ただ、電話で打ち合わせをしているときは『なんでダメかという理由を聞くと、家事をしていると分断されてなかなか集中できないんですよ』と、いつも家事のせいにしていました（笑）」
（一同爆笑）
萬「（村崎さんは）お料理が上手でしたもんね」
清末「あと、打ち合わせでご自宅に伺った時、物干しに例のマントとか全部干してあって『こういうの自分で洗濯するんだー！』って驚きました。とにかく、優しい人でした」
マンタム「原作はどんな感じでしたか？」
清末「その雑誌は実話とか童話とかをベースにしてオリジナルを作るというのがコンセプトだったんですよ。最初は単発的にやっていました。一度、三部作で『魔性の愛〜メディア〜（ぶんか社）』（漫画：森園みるく　原作：村崎百郎）の原作を書いていただいて」

萬「あれは、オーラか背後霊を見ているんですよ（笑）」
マンタム「村崎さんが執筆に参加していた書籍『危ない28号』の話を聞かせてもらえますか？」
矢崎「ケミカル、ハッキング、サブカルなど、世の中にある危険なサブカルチャーをすべて集めたような書籍でした」
森園「何巻ありましたっけ？」
矢崎「第5巻まで出版されましたので全部で5冊です」
森園「村崎さんは毎号、書いていましたっけ？」
矢崎「そのはずです。原稿だけの場合と、森園先生の漫画（鬼畜街エピソード1／ケツの戦慄）の原作をされている場合がありました。ある事件の影響がありまして……最後の第5巻で休刊になりました」
森園「私のその漫画は連載一回目だったのに休刊！　で、その第5巻は何年だっけ？」
矢崎「1999年から2000年にかけてでした」
マンタム「本当に、ちょうど時代の遷り変わりですよね。まさに、世紀末がターニングポイントだったと思うんですよ」
森園「いろんな意味でね。特にネットかなぁ？」
マンタム「けっこう、みんながナニかが起こると思い込んでいたし、やはり、ここにいる世代の方はノストラダムスを若いときに読んでしまっていて『いや！もう、くるんじゃ

来、お付き合いが再開していろいろな話を聞いて、村崎さんってそんな人だったんだと知りました」

森園「でも、締め切りで苦労したでしょ？」

清末「しましたよー！（笑）」

（一同爆笑）

清末「そのお陰で、いつも始発でお宅に行って、原稿をとって、そのまま近くのファミレスで写植を貼って、そのまま印刷会社に突っ込んでという感じでした」

マンタム「お疲れ様です！（笑）」

■「村崎が『自分はどんなに因業な人間か』と根本さんに何時間も」（森園みるく）

萬「そういえば『鬼畜のススメ――世の中を下品のどん底に叩き堕とせ‼』（データハウス）は何年ですか？」

森園「1996年くらいで（村崎の）最初の単行本になるんですよ」

マンタム「『ガロ』（青林堂）っていつでしたっけ？」

森園「『ガロ』（1993年10月号）はデビューっていうか、根本さんが（村崎さんを）誌面で紹介したのが1993年ですね」

マンタム「だから、けっこう一気にいったんだよね」

いのです」

森園「そうだったんだ」

清末「ただ、初めてお会いしたときに、村崎さんは例の『頭巾』をかぶっていました。だから、まったく知らなくてパッと見たら、お二人の姿がとても面白かったのを覚えています」

森園「普通、頭巾かぶって現れる人いないからなー！（笑）」

清末「そのときに『ギャランティはこのくらいしか出せませんが、本を創刊して部数が伸びたら上げます』と言ったんですよ。そしたら森園さんは『あっ、大丈夫です』と快く了解されたのですが、村崎さんが『森園ブランドを守るためには、この金額ではダメだ』と言われました」

森園「そうなんだー」

清末「『この人、頭巾かぶっているけどすごいなー！』と思いました（笑）」

（一同爆笑）

清末「村崎さんとお仕事をして。一貫して感じられたのは『この人は、ただの原作者ではなく、森園ブランドを守り続けようとしている人なんだな』と思いましたね」

森園「危ない話はなかった？」

清末「萬さんが仰っていたような危ない話は……村崎さんが亡くなってから森園さんよりお聞きしただけで『えええー!?』という感じです」

マンタム「そこが大きかったたね」

萬「けっこう、ペヨトル工房で村崎さんが編集長みたいな感じで本を丸々一冊作って、そのときに根本さんとか自分の会いたかった人と仕事をしたことが大きかったというか……」

森園「それがきっかけで根本さんがやられちゃったわけですよ。延々、村崎が何時間も『自分がどんなに因業な人間か』というのを話して、根本さんがすごく喜んでしまって『これはすごい』とか言って。『えっ？　そんな中学生のころから◯◯してたんかー⁉』とか、話はどこまで本当だか知らないけどね（笑）。それで『ガロ』の特集で根本さんが取り上げたというような流れがありますね」

マンタム「当時、ゴス系のお姉さんたちが血かなんかを瓶に詰めて首飾りにしていたり、タイの『死体博物館』が一部で有名になったり、死体写真が流行ったりいたり。その流れに、村崎さんはひとつの傾向として『鬼畜』『お下劣』みたいな方向性をもたせたんですよね」

森園「あと、その直前に青山正明さんが編集長として創刊した『危ない1号』（データハウス）があるわけよ。あの本がそういう鬼畜・悪趣味的なものを全部ひっくるめて紹介したわけじゃないですか。その中のライターの一人が村崎さんだったわけで、そこからの流れで『鬼畜のススメ』が出たわけで」

萬「『危ない1号』の第1巻はドラッグ特集でしたね」

森園「『魔性の愛～メディア～（ぶんか社）』も先取りしているよね、コンピュータを埋め込む話だとか…」

清末「この三部作が面白くて『シリーズみたいなものはどうなのかな？』と、お二人にお話をしたんですよね。それで『クレオパトラ 氷の微笑』というクレオパトラの歴史をベースにした、大富豪の令嬢の話なんですけど、これがアクションあり、時代の時事的な社会問題ありで、シリーズ化して人気もすごくあって。それが２００１年からですね」

森園「なるほど、２０００年代になるのかぁ」

清末「それで２００４年ぐらいの始めまで続いていて、シーザーが出てくる直前に打ち切りみたいな」

萬「えっ⁉　シーザーが出てこなかったの⁉」

森園「シーザーが出てきて終わった、みたいな」

清末「私たちの編集部が他の編集部に吸収されたのです。それで私たちの本は続くのですが『その本新しいのコンセプトは読み切りに』となり、当時、副編集長でしたが、会社の中でその権限を使えず、お二人になんと言っていいのか謝るに謝りきれず、その年の暮れに体調を悪くして退職したのです」

森園「それで担当が変わったんですよね。辞めたら病気が治った、みたいな！（笑）」

清末「だから、それが私のひとつの後悔です。それでフリーになって交流もなくなり、村崎さんが亡くなったことを知ったときは衝撃で、その後、森園さんにお手紙を出して以

のとき、もう相当な文章を発表していましたからね。だって、データハウスでもすでにいっぱい書いていましたでしょ?」

矢崎「『危ない1号』シリーズになりますね。ドラッグ特集とか」

マンタム「ドラッグというと、ちょうど、1980年代後半くらいからパンク・ムーブメントが変化し始めてコアパン(ハードコアパンク)になっていくじゃないですか? そのころ、僕はそれに絡んでいたんだけれども、ベーシックなものからどんどん外れ、周りはどんどんジャンキー化していくんですね。それまでのドラッグについての言い方はおかしいけど『明るいイメージ』がありましたね」

萬「そうそう、カッコいいみたいな!」

森園「なんか、アメリカン・ハッピーな感じだったよね!」

マンタム「1970年代の初期くらいはマリファナだのLSDだのコカインだのは、そんなに暗いイメージじゃなかったんだよね。ある時期からヤッチャン(暴力団)が仕切るようになったり、団地妻が覚せい剤に汚染されていくって話が広がっていったりして、段々と『危ないモノ』のテリトリーに入ってくる。あのころから、麻薬のイメージが変わって手に入りにくくもなるんですよ」

萬「急に厳しくなるんですよね」

森園「1980年代ですよね!」

萬「そこからバブルのころかな?」

森園「まず、根本さんが紹介してくれて、そこから青山正明さんといろいろあり、いろんなことを書いて」

萬「まさに鬼畜ブームとか電波系と言われたのは1996年から2000年前くらい？」

森園「そうですね、1990年代後半になりますね。それに類する本がガーッと出て。悪趣味ブームもあったでしょ？　『ユリイカ』（青土社1995年4月臨時増刊号 総特集・悪趣味大全）とか」

萬「『赤ちゃん泥棒』は？（※電波兄弟の赤ちゃん泥棒／木村重樹との共著・河出書房新社）」

森園「それは、もっと後です。あれは「スタジオ・ボイス」（INFASパブリケーションズ）あたりで連載していたやつでしょ？　いろいろな有名人のお宅に行って赤ちゃんを抱くみたいな。わけのわからない企画です（笑）」

マンタム「そうそう、ペヨトル工房（『夜想』『銀星倶楽部』などを発行していた出版社）を主宰した今野裕一さんが絡み始めるからね」

森園「今野さんは村崎のペヨトル工房時代の上司だから。もともとは編集者だしね」

マンタム「そうすると、（村崎さんが）今野さんに憧れて上京してきて、ペヨトル工房で働きだして……みたいな流れになりますね」

森園「まぁ、ペヨトル工房にバイトで入り、今野さんに憧れて編集から出発して、根本さんと知り合い、青山さんと知り合い、世に出たわけですね」

ゴミ拾いインタビュー

マンタム

■ゴミと古物商

村崎さんのゴミ拾いの話に始まってくるわけだけど、その流れで言うと、そのころから僕たち古道具の世界でもゴミを拾うのはわりと主流な古物の仕入れ先でした。

それはその頃に鎌倉や逗子、葉山辺りのかつての高級別荘地などがあった地域で粗大ゴミ回収があったのですが、それがむちゃくちゃいいモノが出るんですよ。それで、効率がいいからという事で駆け出しの古道具屋さんやフリマに出ているような人達が夜中に拾いに行くようになり、それらを都内のフリーマーケットや骨董市で売ると結構いい値段で売れるわけです。そのお客さんには都内でお店を出している古道具屋さんや骨董屋さんもいて独自な市場として成立したんですね。

それは当時とても効率の良い商いでもあったわけです。

■浮浪者とゴミ

森園「青山さんはドラッグの先導者で『危ない薬』（データハウス）という本もすごく売れましたからね」

矢崎「ものすごく売れたとまでは言えるか分かりませんが、一定ジャンルとしてはそこそこ売れました。一定ジャンルにおいては有名であり、あのころはドラッグのバイブルだったんですよね。そうした意味では、その後のデータハウスのドラッグ系書籍への影響力は絶大なものでした」

■「この人が、あの狂った文章を書いている人なのか……」（森園みるく）

森園「私の中では『危ない薬』があって『危ない1号』創刊号のドラッグ特集があって、そこに書いていた村崎さんという書き手が面白いと思っていたら、ちょうど同じ時期に『ユリイカ』の悪趣味大全が出て、そこに書いてある文章も狂っていておかしいと思って、それで知ったわけなんですよね」

萬「（村崎さんとは）仕事で知り合ったんですよね？」

森園「違う、違いますよ。……あっ、仕事といえば仕事かなぁ？　そのころ、村崎が福居ショウジンさんという変わった映画監督と仲良しだったんですよ。それで、福居さんの映画の上演会でトークショーがあって、私が村崎さんのファンだったのでそこで知り合って『この人が、あの狂った文章を書いている人なのか……』みたいなのが始まりですね。そ

と持ちかけました。
そうしたら、それを（古物商的に）覚えられるじゃないですか。
慣れてくればウチで買い取るまでもなく他のお店でも買ってくれるようになるかもしれない。
法律的にはダメといえばダメなものだけど、その頃は持ってきてもゴミで出された壊れたラジカセやラジオくらいだし、まあ、いいかと考えたんです。それが彼らの生活の助けになるならって。
でもちょっとした人助けだと考えた事が彼等のコミュニティの間で一気に広がってしまったんですよ。
それまでは空缶拾ったり段ボールを集めてコツコツお金に変える労力から考えれば圧倒的に効率が良かったんですね。
そして彼らは（古物商的に）目が利くようになるんですよ。
一度日本刀を持ち込んできた浮浪者がいて流石にそれはそれが出たというゴミ捨て場に一緒に行って捨てた家を探しだしご本人から買い取ると言うかたちを取りましたがそんな事もあったんです。

■迷惑防止条例とゴミ

マンタム「バブルまで少しかぶっていますね。バブルに入ってくるとコアパンがすべて締め出されて、結局、みんなバンドをやりたいから危険なことを控えてしまうのね。そういうのが下敷きになっているような気がする」

森園「１９８０年代のライブハウスに行くとナニが起こるかわからないドキドキする感じがあった。だから、私は漫画でデビューしたけど音楽が好きだから、ライブハウスに行っていつのまにか物を壊して帰るみたいなのがありましたよね」

マンタム「ドラッグに関しても、ジャンキーに憧れているんだよね。憧れている者たちがなんでもかんでも口に入れてしまう。そういう状況が普通にあったからね」

矢崎「カッコよかったですよね（笑）」

マンタム「そう、当時は『カッコいい』と思っちゃっていたからね」

萬「なんでもアリでしたよね、バブルが崩壊するあたりまで、なんでもかんでも許される時代でしたからね」

森園「今はそういう意味では規制どころではなくて、なんだか生きづらい時代ですよね」

「作品に使うのにちょうどいい！」みたいな感じで……　医大のゴミなので普通のゴミじゃないですからね。
それで、最終的には（医大側に）バレてしまい、（ゴミ捨て場に）「この人に注意」といった旨の文と痩せこけて髪の長い幽霊みたいな似顔絵が描かれた紙が貼ってあって「なんじゃこりゃ？と思ってよく見たら自分のことだった!?」みたいな事を仰ってましたね。

■ゴミと所有者

今は逆に、法的にゴミ拾いが厳しくなっているというのもあり、あからさまにゴミ捨て場などでガチャガチャできないですし、また、相変わらず持っていく人もいますけど、それは捨てる人達と、話して許可をもらっていたりしますよね。持ち主やゴミ捨て場の管理をしている人達に話をして「これ、もらえますか？」的なことを踏まえています。犯罪になるからそれを教えたんですよ。そんなことで彼らが捕まってしまうのは可哀相だし、基本的に話せばいいんだということです。一部ですが地域の人たちと仲良くなり、ゴミの片づけを手伝うような状況にもなってきて面白かったですよね。

そうした中、２０００年初頭あたりからそういった地域でも徐々に（粗大ゴミ回収を）やめてしまい、粗大ゴミが集まる場所がなくなってしまいました。そうすると、地元の街だけでゴミを拾うのが効率が悪いことも含め、徐々にゴミ拾いで商売をしていた人達が撤退し始めたんです。

そのころ、上野公園あたりに浮浪者が集まり始め、村化するんです。

それまでは社会的な生活能力が低い一部の限られた人たちが他に出来る事がなく公園に住み着いていたのですがバブル崩壊あたりから一般の人、要するにバブル崩壊で借金を作って逃げてくる人、職を失った、そういう人たちが浮浪者になって潜り込んできたのです。そういう人達はしたたかでそう言う状況でもなにか要領よくやっていこうとするんですよ。

そういう人たちも含めてまだ普通に仕事も出来るような人達が一定時期公園で骨董市を開催している僕ら（古物商）に「仕事をくれ」と言うんです。

元々公園に住み着いていてほぼ生活能力のない弱いおじさん達が僕らに気を使ってテントの周りを掃除してくれたりした事があってなんとなくお礼がわりにワンカップ差し入れたりあんぱん一緒に食べたりしていたのでまあこちらとしては困っている人を助けるのはやぶさかではない、でも、現実的には身なりも悪く、古物の事は知らないし、しゃべることにも慣れていない人達に古物商としての仕事を手伝ってもらうのは難しかったのです。

そこで「それだったらゴミでも拾ってくれればよい。なんでもいいから買おうじゃないか」

まるで違うけどなんらかの選択眼のようなものはもしかすると村崎さんと価値観を共有出来ているのかもしれない。

そうなら面白いなと勝手に思っているのですが。

村崎さんの場合、プライベートとして価値のある資料的なゴミということになるのですが、僕たちにとっては資源として価値のあるゴミということになるのかと思います。そこで、目的は別としても、時代の中である意味シンクロしていたようにも思えますね。

その後浮浪者とゴミの関係は、犯罪に近い行為もあったためそれなりに問題化してきて、だんだんと収まってはきましたが未だに拾っている人達はいますね。

例えば、アーティスト系の人たちもゴミを拾って作品にすることはありますよね。現在はゴミを拾うのは迷惑防止条例によって規制されている行為であり、実際、持っていくのはよくないことなんです。ゴミを拾って持ち去る行為が迷惑防止条例に抵触するようになったのは2000年初頭あたりではないかと思うのですが、ゴミを拾うことの行為そのものが一般化したみたいな部分は面白いと思いますね。

■ゴミと人形作家

15年以上前の話ですが、僕の知り合いの人形作家さんで高名な方なんですが、その人は深夜医大のゴミ捨て場から色々な、ものを持ち去るんですよ。

かとは違うと思うのです。
世間の矢面に立って確信的に偽悪をまっとうしようと志す村崎さんのような「青鬼」は、いつの時代でも少数者／単独者です。それは時代やブームという言葉では本当は語り切れない、精神の孤独なあり方なんだと思っています。

後迫直樹（ぶんか社　まんがグリム童話編集部　編集長）

「村崎百郎さんに会いにいった日」

村崎百郎さんにご挨拶に伺った日、僕はちょっと緊張していた。
出版社に入社する前、学校を出てアルバイトをしながら毎日、サブカル漬けの毎日を送っていた。当時、サブカルであること、サブカルを語ることは、ひとつのモテツールだったと思っている。2000年当時、サブカルがメインになりつつある中、ひとつのファッションみたいになってしまったとき、それに乗っかってトレンドサブカルを楽しんでいたのが自分だった。そんな自分をいきなり殴りつけられたようなインパクトを感じたのが『GON！』に掲載されていた村崎さんのコラムだった。隣の美女のゴミ拾いといった企画で、わ、くだらなーい！　でもこれ好きかも⁉　そう、変態になりたくてもなれない凡人が気分を楽しめる良記事だったのだ。
ご挨拶当日、そんな昔の思い出を反芻しながら、森園＆村崎邸に向かっていた。当時、森園みるくさんの担当になり、原作を担当していた村崎さんと連載の作品の打ち合わせの

■時代とゴミ

ここでは、村崎さんの時代とナニが変わったのかという話だと思うんですよ。鬼畜というものを扱うときに、僕らもその時期に、お下劣な組織を作ったりだとか、文章を書きまくって「この社会はなんや！　クソや！」みたいなことをやっているのは村崎さんだけではなかったということなんです。

僕は村崎さんを直接は知らなかったけど、それでも僕の周囲の女の子が死体的なモノが好きだったりとか、そういうモノに興味をもっていたりとか、僕もそういうモノが面白いと思うのは、村崎さん個人じゃない、村崎さんのいた時代の電波を受けたからだと思うんです。

そういったものが変化しながら生き残っているのではないかなと。

ゴミ拾いなんかは結局仕事みたいな事になったけどそれでも異常な行為ではなくなってしまった、今でも浮浪者の中では立派な生活手段一つとして日常化しているわけです。

村崎さんのゴミ拾いというのは、今ならストーキング行為として扱われるだろうけどそれは基本的に恋愛の成れの果ての姿だったりもする、今はそう言う目的でゴミを拾えばストーカーだけどそれを商品として見るかどうかはそれを拾ってしまう人間とそれを欲しがる人や業者が居るかどうかによるわけです。

そこで新たな価値が発生すればそれは商品として回収されていくわけだし視点と目的は

基本ダークサイド寄りなのに、いっぺんでおふたりの信頼しあう関係性が伝わってくる。とってもいい、このふたりの雰囲気。

そして、打ち合わせをしていて気づいたのが、村崎さんがとてもオープンなこと。思ったことをきちんと伝えてくれて、自分の意見も押しつけがましくなく、フラットに話してくださる。さりげなく森園さんを気づかい、編集のことも気にかけてくれるバランス感覚。村崎さんはほんとうに大人な方なんだな、いろんなことを体験されてきて今のスタンスがあるのだなと思って、なんとなく勇気をもらった気持ちになったことを覚えている。打ち合わせを終えて会社に戻りながら、作品づくりのともし火が胸の奥にじわじわと発火したことを感じていた。

それから、しばらくして。村崎さんは帰らぬ人となった。あの日、打ち合わせた連載作品は、古いハリウッドのスキャンダルを下敷きにした連載で原作はまだ上がっていなかった。最近、ネットフリックスで、「ハリウッド」というドラマの第1シーズンが配信されているのを視聴したのだが、枕営業あり、同性愛あり、スキャンダラスに満ちたハリウッドが描かれている。そのとき、すぐに浮かんできたのが、村崎さんの頭の中にあったストーリーは、どんなものだったんだろう？　ということだ。村崎さんにきちんとお会いしたのは、たった一回ではあるけれど、僕はこれから人生を送っていく中、いろんな拍子に村崎さんのことを思い出していくのだと思う。そのとき感じた気持ちを思い出しながら。

電子版『鬼畜のススメ』特別付録
コメント一覧

◆あ行

会田誠（美術家）

僕は子供会で「泣いた赤鬼」の人形劇をやらされた縁で、この童話が妙に好きになりました。

ポイントはやはりあの偽悪を体現した「青鬼」なのです。ああいう風に生きたい、生きねばならない——そんな思いが今でも僕の心のどこかに深く根を張っています。

僕は90年代の「鬼畜ブーム」と、その中心にいた村崎百郎さんのことを、同時代的に詳しく知っていたわけではありません（一度だけ雑誌で対談させてもらいましたが）。

僕は昔も今も「美術村」に篭りがちで、世間の風にはあまり当たらない性分なので。そんなわけで、僕の村崎さんの理解は「あの良き「青鬼」をまっとうした人」というものになります。

だいたい「鬼畜ブーム」と言ったって、そりゃ読者はたくさんいたでしょうけれど、鬼畜そのものに（外面的であれ）なろうとした人が、当時どれほどいたでしょうか。そういう意味で、みんなで髪を伸ばしてパンタロン履いて葉っぱをキメていたヒッピーブームと

沢山お話した。
物知りで、面白くて、心優しく、紳士で、いつまでも話していられるような人だった。
本当に話が面白い人だった。爆笑したり感動したり、そして
いつも、隣には奥様みるくさんの笑顔があり、本当に幸せだった！
私は時に、酔っぱらって村崎さんの本を否定した。
彼は、ダメ出しを受け止められる珍しい人だった。
村崎さんは、私の様には人を否定しない人。人を憎まない人。

あの、暑い日の記憶を、いつか脳内のゴミ置き場に捨てられるだろうか。
村崎さんは、そのゴミを待っているかもしれない。
生きるとはどんなこと？
ゴミを捨て続ける断捨離？

私がいつか死んだら話の続きを。
ご冥福をお祈りします。

尾崎未央（ライター、記者。共著に『村崎百郎の本』）

約束があったからだ。過去にイベントで村崎さんを見たときは覆面をされていた。果たして今日は覆面を着用されているのだろうか？

最寄り駅を出てたどり着いたお宅の表札は、瞳のところにビー玉が使われたネコの形をしたもので、これは猫好きの森園さんのセンスなのか、意外と村崎さんが買ってきたものなのか？　本能で、これは村崎さんが買ってきたはずと断定した瞬間、緊張が一気にほころんでいった。村崎さんって、いったいどんな方なんだろう。はやる好奇心を抑えながらチャイムを押した。

村崎さんは黒いスウェットの短パンと黒いＴシャツで出迎えてくれた。長い髪は束ねられていた。覆面はしていなかった。

「どうもー、今、モリゾノ、ヨガやっているんでしばらくお待ちください」。

室内は、無造作に積まれたたくさんの書物、ポスターやちらしのたぐい、不思議なオブジェなどでごちゃごちゃしているけど、それがとてもカッコよくって、いっぺんでこのお宅に魅了されてしまった。いつもはデザイナーズブランドでキメている森園さんがタイダイＴシャツにスパッツを合わせた姿で「ウシロサコさーん、おひさしぶりー」と階段を降りてきて、そのタイミングで村崎さんが、最近、健康のために飲んでいるという玉ねぎの皮を煮出したお茶をおすすめしてくれて——。

ああ、なんだろう、この感じ。ダークさなんてかけらもない。すべてが明るくて、ほがらかな幸せに満ちている。置いてあるオブジェだって、散乱している書物のテーマだって

春日武彦（精神科医）

「電波喫茶の頃」

シベリア生まれの村崎氏にも、ペヨトル工房の黒田氏にも、わたしは一度もお会いしたことがないし仕事上での遭遇もない（森園さんとは新宿でお会いしている）。表面的には、村崎氏が自称電波系で、当方が精神科医だったことくらいが近接点ではないだろうか。

ただしわたしとしては、一方的に親近感を抱いていた。物書きとしてデビューして間もない頃、雑誌関連でやたらに心理テストが流行ったことがある。イエス・ノーで分岐する設問がいくつもあり、それを辿っていくと「あなたは信長タイプ。我が道を行くユニークな存在だけど、アンチも多いから気をつけましょう」みたいな託宣にたどりつく。そういった愚にもつかないものを頻繁に作成していた時期があるのだ。

そんなくだらない仕事をしていたのは、自分が思い通りの本を出せるようになるための布石と考えていたからで、今になって振り返ってみて、その発想が正しかったのかどうかはよく分からない。

しかしさすがに自己嫌悪に駆られ、雑誌『宝島30』に心理テストの作り方、そしてそれがいかにテキトーかを（懺悔半分に）書き綴って区切りをつけた。それが四半世紀前のこ

エミ・エレオノーラ（ミュージシャン、音楽芸者、舞台女優（蜷川幸雄、寺山修司作品などに多数出演）

著書に『DRAG』（森園みるく漫画の原作）や映画『プリシラ』ノベライズ、CDブック『何て素敵！』など。日本のオルタナティブ・ロックの先駆的バンド[デミセミクエーバー]の歌姫として知られる）

村崎さんは死んでも、お星様になったり千の風になったりしない。
天国にも地獄にもいない。
あの暑い日の、そのまま、私の脳内に棲みついたようなイメージがつきまとう。

脳内の感情や記憶を司る部位があるなら、脳の「ゴミ置き場」もあるだろう。
古くなった記憶や感情がゴミになり、都合良く捨てられる場所。
そこで私の「情念ノート」を彼は広げ、なあんだ、エミさんも綺麗ごとばっか言って、かなりエグいじゃん、とか笑ってるのかも。

村崎さんに、「エミさんは電波です。」と言われたことがある。
無心に曲を書いたり、即興演奏で冴えてたりする時、自分でもそう思うことがある。
村崎さんは、死んだらみんなの脳に指令する電波になる、というイメージもある。
なにか、小鬼のように、未だこの世に、皆の脳内に、生きている気がする。

モラルや良識とは何なのか。アートや表現と犯罪や社会性との境い目は何なのか。自分と他人との境界はどこにあるのか。村崎百郎氏が身を挺して投げかけた永遠の課題に、まだ私たちは答えを出せていない。それどころか、思考停止に陥ることで、問題からますます目を背けようとはするばかりなのではないか。今こそもう一度、考えたい。目をそらさずに。

木村重樹（a.k.a.ニコラス啓司／編集者／文筆家）

「メイキング・オブ・『鬼畜のススメ』」

本書『鬼畜のススメ』は、村崎百郎なる〝もの書き〟の初単行本にして唯一無二の単著に相当する［＊1］。刊行されたのは1996年7月。発行元は（村崎氏を看板ライターに起用し、いわゆる〝悪趣味・鬼畜系ブーム〟を牽引する雑誌『危ない1号』を手がけていた）データハウス。なんと四半世紀近くも昔の本である。

村崎氏の人となりや鬼畜系ブームの概要などは、ここであらためて説明する必要もなかろうが、90年代初頭に（最初は根本敬氏の因果者探訪ルポの異能キャラのひとりとして）登場し、異常なテンションで悪罵と汚穢と品性下劣を撒き散らす独特の文章を記すサブカル・ライターとして注目を集めるようになった彼は、まさに〝時の人〟だった。

本書が刊行された前年＝1995年の春には、彼の寄稿文も掲載された『ユリイカ／特集：悪趣味大全』［青土社］が出版されたかと思えば、B級カルチャー誌『GON!』

華々しく東京五輪開催が喧伝され、「海外でも競技場のゴミを自分で持ち帰る」スゴいニッポン人たちがこぞって訪日外国人のおもてなしをするぞ！　…と大震災など災害復興も完遂せぬのに躁状態に陥っていた２０２０年、夏。まさかの疫病パンデミックで世界中が大混乱に陥るなんて誰が予想したであろうか。

しかも今回のコロナ禍は「人との触れ合い、会話、コミュニケーション、グローバル化」などなど、21世紀以降とにかく「是」とされた行動を全て否定し人を引き籠らせる病。そんな渦中、ゴミから物語を聞き取る「妄想力」を高らかに謳い、徹頭徹尾「やりたくないことをしない」個人の自由を掲げた村崎百郎氏の単著『鬼畜のススメ』が没後10年の命日、電子版復刻されるめでたさと言ったらない。初刊行から24年、ゴミの分別・管理すらやかましくなった昨今でもこの書の行間からほとばしるエネルギーに何ら変わりはないだろう。リアルに会えない、行けないなら妄想電波の触手を伸ばせばいつでもどこでもジャックイン！　ゴミに限らずどんなものからも人の思い、感情は読み取れるのだ。本書に時折差し挟まれる叙情的な部分は幾年をまたいでも人の心を打つ。熱量と狂気と詩情、新たな読者にぜひ届いてほしい。

それにしてもゴミ埋め立て地だった「夢の島」が東京五輪の競技会場と化し、延期となった開会式予定は没後11年目の命日と同じ２０２１年7月23日…肉体の死後も「忘れさせないぜぇえ！」の声が聞こえてくる…。

根本敬氏との共著『電波系』［太田出版］の単行本を編集したのは、ほかでもないわたくしであり、また村崎氏は村崎氏で、ペヨトル工房を退社後、友人数名と編プロを立ちあげた当方に「青山さんを編集長にした雑誌が、今度データハウスから出るのだけれど（なにせ青山さんは好不調の波が激しく、予定通りに作業が進まないので）編集実務を手伝わないか？」と仕事を振ってくれたのである。実際『危ない1号』第1巻の奥付クレジットには〝編集協力＝黒田一郎（村崎氏の本名）〟とあったものが、第2巻の奥付だと〝編集協力＝黒田一郎・木村重樹〟となっている。

そんなこんなで、同誌の第2巻と第3巻の編集作業を、そこそこ手伝った……ような気がする。いや、第2巻「特集：キ印良品」の目次を再度確認してみたところ、「ボディアート」と「デジタルネットワーク」の章は（構成・編集から原稿執筆まで）ほぼまるごと担当していた。ちなみに執筆者名は、いずれも〝ニコラス啓司〟というふざけたペンネームだ。

＊

長々とした前置きになったが、初版＝データハウス版の『鬼畜のススメ』の本文デザインの項にある〝ニコラス啓司〟というのは、当時のわたくしが暫定的に使っていたペンネームのひとつにすぎなかった。

余談ながら、なぜ同書の本文デザインを（デザイナーではない、一介の編集者たる）当方が担当したのかというと……ひとつには（これまた担当者である青山氏の管理能力の欠

とで、ちょうど村崎氏が書き手として毒々しい活動を展開し始めた時期と重なる。鬼畜なゲス発言を装いつつ、おぞましい本音をぶちまけてみせる氏の姿勢に、共感めいたものを覚えていたわけだ。

当方は性善説なんておよそ信じておらず、といって性悪説よりはむしろ人の心の奥はグロテスクであるとする〈性グロテスク説〉を勝手に唱えているのだけれど、そのあたりは村崎氏も賛同してくださるのではないかと思う。

そういえば『宝島30』へ寄稿をした前後、中目黒に電波喫茶というのがあると知った。根本敬氏の文章で得た情報だったかもしれない。そこで編集者と一緒にくだんの店を訪れてみたが、すでに女性の名物店主（電波と陰謀論とを結びつけた生々しいビラを店の中にも外にも貼りまくっていた）は精神科へ無理矢理入院させられた直後だった。扉には鍵が掛かっていた。あのときの虚脱感と村崎氏の死における無念さではおよそ比較になどならないけれど、うっすらと漂う独特の寂しさにはちょっと似た所もあったような気がする。

もしも村崎氏が今も生きて活躍していたら、顔を合わせる機会はあっただろうか。あまりにも「わざとらしい」組み合わせになってしまいかねないと、氏があえて機会を拒みそうにも思えるのである。そしてわたしが拗ねる。そんな場面をつい妄想してしまうのも、村崎氏の存在感の確かさゆえであろう。

香山リカ（精神科医）

を担当したのが、かの異能の編集者・青山正明氏であったことは、あらためて強調しておきたい。
というのも村崎氏の原稿は——媒体の性格や内容にもよるけれど——編集段階である程度の原稿整理を経て世に出たもの（例：『電波系』『電波兄弟の赤ちゃん泥棒』）と、必ずしもそうではないもの（例：『GON！』の連載や『危ない28号』の記事）があり、本書はその前者の典型だったからである。独特の冗長さもまた村崎氏の文章の持ち味ではあったが、青山氏はそれをある程度刈り込み整理することで原稿のクオリティとリーダビリティを上げていた。
こと『鬼畜のススメ』に関しては、『危ない1号』第1巻に掲載された「ダスト・ハンティング＝霊的ゴミ漁り」や、これまた当時の『GON！』で連載中だった「村崎百郎の勝手に清掃局　隣の美女が出すゴミ」を筆頭にした、いくつかの〝ゴミ漁り〟原稿がすでに存在したにもかかわらず、それらを再録・加筆して単行本化するという安易な道を選ばず、ほぼ全面的に原稿を書き下ろさせたのは、ほかならぬ青山氏のこだわりだった。

＊

そしてまた、データハウス版の本書に巻かれていた〝帯〟［＊2］の文句には、「腐りきった世の中をひたすら手前勝手に下品にゲスに生き抜くテクニック&思想」とあったように、本書は〝ゲスい思想書〟であると同時に〝テクニック＝指南＝実用書〟としての側面も存在したことも、ついでに触れておこう。要するに「〝ゴミ漁り〟を一種のファンタ

［ミリオン出版］での連載もスタートし、夏には（前述の）『危ない1号』が新創刊され、合計10万部近くを売り上げるなどのプチ・ブレイク状態。〝村崎百郎といえばゴミ漁り〟というイメージと共に、ライターとしての評判がウナギのぼりに高まってゆく時期だった。そうした一連の余波を受け、満を持して刊行されたのが本書なのである。

ちなみに本書がデータハウスから刊行されたのは、ひとえに『危ない1号』の初代編集長をつとめた故・青山正明氏のおかげだ。同誌の看板ライターだった彼の著作を、みすみす他の版元に譲るのも癪だったのだろう。「ウチ（データハウス）から本を出しましょうよ、ムラサキさん！」という青山氏の熱烈なプッシュによって彼がその気になった風景が、おぼろげに想起される（実際、同書の奥付には〝編集：東京公司〟と、そっけないクレジットが1行あるだけだが、この〝東京公司〟とは、当時の青山氏が代表をつとめた編プロのことである）。

＊

わたくし（木村）と村崎氏との馴れ初めや関係については、彼の死後に追悼出版された『村崎百郎の本』［アスペクト］に「電波兄弟〝弟〟からの弔辞」という文章を寄せているので、詳しい話はそちらに譲るが、ごく簡単にかいつまめば、ペヨトル工房という（マイナーでマニアックな出版やイベント運営などを扱う）編集事務所のスタッフとして机を並べ、以後、彼がメディアデビューする前後には、公私共々さまざまなサポートをし合う仲だった。

のだが、結局のところ、それらが実現をみることはなかった。

＊2：さらにオリジナル版の帯には〝20世紀末最高最悪のゲス本がついにお目見え！〟というキャッチコピーが記され、折り返しの部分には〝ゲ〟と〝ス〟の文字が（表2／表3サイドにそれぞれ）記されるという仕掛けがあった。そういえば〝鬼畜〟とか〝悪趣味〟に比べて影の薄いフレーズではあるが、〝ゲス〟というワードも初期・村崎百郎を解読する重要キーワードであったことを、最後に記しておく。

京極夏彦（小説家）

「あの日の鬼畜」

「俺のことわかる？」

その電話がかかってきたのは、僕が小説家としてデビューして三年目くらいのことだった。

「キョーゴクだよね？　俺さ、ムラサキ。覚えてないかなあ？　高校のさ、一年先輩で、空手部の」

いや、覚えてますと答えた。

お世辞なんかではなく、覚えていた。

僕は三年間ずっと美術部に籍を置いていた。当然だが、美術部と空手部は部活の上での交流はない。そのうえ美術部は母校における文科系部活の雄であり、運動部各部とは予算

如によって）刊行スケジュールがみるみる逼迫し、通常の制作手順……すなわち「外部デザイナーによる本文フォーマット設計→印刷所が原稿データを割付→著者と編集部による文字校正」という段取りを踏んでは到底刊行予定日に間に合わないという裏事情があったからだった。

1996年当時、Macで操作できるDTPソフトこそリリースされていたものの、商業出版の現場で当然のようにそれが活用されるのは、その数年後ぐらいの話だ。かたや当方は、たまたま当時所属していた編プロで簡易なDTP作業などを手がけていたため……プロのデザイナーからみれば甚だ拙い版組ではあれ、栄えある村崎氏のデビュー作を手伝わせていただく栄誉にあずかった次第である。

＊

時計の針を1996年の初夏に巻き戻してみよう……。西新宿は角筈交差点近くのマンションにあった、東京公司の事務所で本書の見本誌を手にした村崎氏から電話連絡を受けた当方は、初台のロイヤルホストで彼と合流。できたてホヤホヤの『鬼畜のススメ』を目の前に興奮気味の村崎氏を労うと同時に、献本先やプロモーションの相談をしたのだろうか？　とにかくファミレスで長時間、彼とささやかな慰労会をしたことだけ、記憶の片隅に残っている。

かたや、本書の内容については（なにせ手伝ったのは本文デザインだけなので）それを云々できる立場ではない。むしろ本書の企画を発案し、章立てや構成から文章の整理まで

して一年目くらいだったか、ある業界関係者が、京極さんの高校の先輩だと言い張ってる男がいるんだけど、と言っていた。僕は心当たりがなかったのだが、その人はどうやら僕の手袋を見て確信したらしい。ならば口から出任せではないだろう。僕はずっと手袋をしているし、ずっと手袋をしている人は、まあそんなにいないと思うし。気になったのでその人は誰なのか尋いたのだが、危ないから知らない方がいいと言われたのだった。何だよ、危ないって。いや。

そうか。ムラサキ先輩が、村崎百郎だったのか。

もちろん存じ上げております。が、あの、恐れ入りました、的なことを言ったと思う。

「読んでくれてたんだ。あのさ、俺も京極の小説読んだ。まあさ、高校在学中から気になってはいたんだけど、著者近影見て、たぶん間違いないと思ってさ。それで読んでみたんだけど」

良かったよと、村崎百郎先輩は言った。

僕の書いた通俗娯楽小説を、あの村崎百郎が読んでくれたというのだ。しかも、お世辞かもしれないけれど褒めてくれたのである。僕は気づいていなかったものの旧知の間柄ではあったわけで、だからお世辞なんだろうと思った。でも、あの村崎百郎がお世辞なんか言うだろうか。何か罠があるのじゃないか。僕が警戒しなかったかといえば嘘である。先輩は続けた。

「だから、まあちょっと話したくなってさ。知ってるだろうけど、俺、キ●ガイなんだよ

ジーとして（読んで〜追体験して）楽しむ」のみならず、そこに書かれている「〝ゴミ漁り〟を（軽犯罪幇助にならないギリギリの立場で）読者に促す」ような内容構成になっていたこと。これまた、青山氏独自の読者サービスの反映なのだが、ここを掘り下げてゆくと（村崎百郎論ならぬ）「青山正明論」になってしまうので、この程度にとどめておく。

またそうした〝実用書＝マニュアル〟という観点からいえば、同書の刊行に先駆けること3年前、1993年の夏に太田出版より刊行され、合計100万部以上を売りあげた〝時の書〟こと『完全自殺マニュアル』［鶴見済・著］の間接的な影響も、ないと言ったらウソになるだろう。しかしそれもこれも、90年代ニッポンという時代背景において待望され、熟成され、流布していった表現だった。

翻って2020年現在、いまどきの読者が本書から何を読み取るのかは未知数だが、〝伝説の鬼畜系ライター〟村崎百郎の主著がおしなべて絶版・品切状態が続いていたことを鑑みると、電子書籍とはいえ、彼の代表作が復刊されるのは慶事以外の何ものでもない。願わくば、末長く読み継がれてゆくことを切に願っている。［2015・5・17］

［脚注］

＊1：当時の村崎氏のプロフィール欄には、『鬼畜系』［太田出版］や『ダスト・テスタメント』［自由国民社］といったタイトルが近刊予定として告知されていた（そしてもちろん、これらは単なる彼の妄想ではなく、各版元で実際に出版企画が立ちあがっていた）

なものないじゃん。ないものは見えも聞こえもしないよな?」
それは、そうである。
「ないものは見えも聞こえもしない。だってないんだから。でも、そういうもんも見えたり聞こえたりすることはある。でも、ないもんはない。お前の小説、そういう小説じゃん。あのさ、ないものはないんだって、当たり前のこと中々書かないんだよ、みんな」
たしかに、僕の小説はそういう小説だ。
「ないもんが見えたり聞こえたりすんのはさ、クルってるからだって。俺がそうだから。でも、みんなそこを否定すんだよ。自分はクルってない、自分だけは正常だって言うんだよ。変な理屈つけて正統化するんだ。心霊だとかオカルトって、そういうもんでもあるんだよ。でもさ、おかしいだろ」
そう。人は誰でも狂気を呑んでいる。正常だの普通だのなんてものはない。歪んでいない人間なんかいないのだ。誰もが自らの暗部に目を瞑ったり耳を塞いだりしてなんとか社会と折り合いをつけているだけだ。それでも狂気は染み出してくる。染み出てしまったそれを、人は狂気と認めない。認めたくない。だから何だかんだと理屈をこねまわす。何もせずに蝕まれれば、堕ちる。
「認めろよ!　と言いたいんだよ。俺は」
村崎百郎はそう言った。
「俺は認めた。認めないと生きて行けなかったからな。でも、ほとんどの奴は認めねえ。

を巡って対立関係にあったりもしたわけで、まあそんなに仲良くする機会なんかはなかった。ただ対立しているとはいえケンカしていたわけではないし、子供でもないわけだから、生徒会執行部の予算会議以外ではまあ、普通に仲良く学生生活を送っていたのであるが。

とはいえ、学年が違うと、部活以外ではそうそう接点がない。ところが、美術部の先輩や同級生がムラサキ先輩と同じ下宿だったこともあり、また僕が懇意にしていた別の美術部先輩の親友が剣道部の主将で、その人物を通じて空手部主将であったムラサキ先輩のことは聞き知っていた。

そう、僕が知っているムラサキ先輩は、空手部の主将だった。胴着を身に着けて空手の型をキメている、中々の好男子だった。強面ではあったが野蛮ではなく、下宿における面白エピソードなんかも耳にしていた。空手は強かったのかもしれないが、怖い人ではなかった。

その空手部だったムラサキ先輩がなぜに突然電話をくれたのか。

「俺さ、村崎百郎なんだ。村崎百郎。知らないか?」

は?

それはそれで知っている。頭巾をかぶった巨漢。そして当代一の、鬼畜。

一瞬ちょっと待ってと思ったわけだが、すぐに僕の中で一本の線が繋がった。デビュー

村崎先輩は最後にこう言ってくれた。

「別に高校が同じだったからってわけじゃないけど、俺はお前を応援する。もっと書いてくれ」

なんだか、珍しくグッときてしまった。一時間半くらいの電話だった。

その後、村崎さんとは何度か会食し、うちにも二度ばかり来てくれた。対談も二度した。

電話も半年に一度くらいはかかってきたと思う。高校時代はほとんど言葉を交わすことはなかったのだけれど、いつのまにか個人的な相談ごとをされたりするようになった。でも、お互いに忙しくなって会う機会もなくなり、電話も途絶えた。それでも、直木賞の受賞パーティには来てくれた。あの、村崎百郎が、である。人が多過ぎて言葉を交わすことはできなかったけれど、あの覆面を見て、やっぱり珍しくグッときてしまった。

そのうちまた電話が来るだろうと思っていた。

でも、先輩は死んでしまった。

短いけれども長いつきあいの先輩は、いなくなってしまった。

そして僕は思い出すのだ。あの、最初の電話を。

村崎百郎は、鬼畜だ。でも、僕も鬼畜だ。いいや、みんな鬼畜だ。生きるということは、その、自分の中の鬼畜とどう添い遂げるかということなのだ。目隠ししたって鼻をつまんだって、己の中の鬼畜を駆逐することはできない。なら、認めた方がいい。「鬼畜の

ね」
　いや、それは知らない。知ってたってハイとは言いにくい。
　その後、村崎百郎は自分がいかにクルっているかを延々と語った。高校を卒業した後、どれだけヒドいことをしたか、そしてそこから抜け出すために何をしたか。精神世界もオカルトも、結局救いにはならなかったこと。そして行きつくところ、自分はやっぱりキ●ガイなんだと認めざるを得なくなったということ。
　僕はただ聞いた。本当か嘘かはわからない。ただ、僕を騙してもしようがない。本人の、自発的な告白なのである。僕なんかに否定する余地はない。普通なら、それは思い過ごしでしょうとか、自虐的になっちゃ駄目だよとか、イヤイヤあなたは正常だよとか、そういう上っ面をなでるようなことを言うものなのかもしれないが、あの村崎百郎を相手にしてそのような綺麗ごとは通じないだろう。そんな中身のない言葉はむしろ侮辱していることになるんじゃないか。それくらい、なんだか切実だった。
「でさ、そんな俺が京極の小説を読んだわけ。でね、ちょっとお礼が言いたい」
　は？
　わからなかった。
「あのさ、俺はね、神の声も悪魔の声も聞こえるよ。そこにないものも見えるし、それで暴力的になったりもする。鬼畜な考えにもなるし、非道な行いもする。それは犯罪になるかもしれない。でもさ、それは俺がキ●ガイだからなんだよ。そうだろ？　だって、そん

伯父は部屋にくると、しばらくおしゃべりをした。伯父を知る人の間では有名だが、彼は何時間でもしゃべり続けた。私はこれほどしゃべり続けられる人に出会ったことがない。

一言、

「伯父さん、妖怪っていると思う？」

などと聞こうものなら、

「妖怪……？　実はあなたのすぐ後ろにも……」

「えーっ」

「いや、今のは冗談だけど（目つきが冗談じゃなかったが）妖怪は人の暮らしの中にいつでも潜んでいるからね。人の心が普通の状態じゃないときにふっとあっちの世界に波長が合っちゃうと普段見えている物が違うように見えて……」

三時間、妖怪についてしゃべる。

伯父は人の一生の何倍もの「声」を吸収していたのだろう。鏡に囲まれた部屋の中で自分の姿が増え続けるように、伯父の頭の中の声は、しゃべればしゃべるほど増殖しているようだった。

子供の頃に海で溺れ、そのときから、伯父はずっと頭の中に「声」が流れ込んでくると話していた。自転車に乗っているとき、一緒にイタリアンレストランに入ってコーヒーを

どうしても自分がキ●ガイだと思いたくねえんだよ。気持ちはわかるさ。認めないで生きていけるならそれはそれでいいだろうよ。でも、そういう連中に限って、自分は特別だ、むしろ優れてると言って周りを蔑むんだよな。それだけじゃねえ、クルってると認めてる、いやクルってる俺なんかを遠ざけるわけよ。俺はクルってるからって。同じじゃないか？　お前らだってクルってないか。俺はそう言い続けてる。あれはクルってないんだ。だって、俺はキ●ガイだからさ。クルってる奴のたわごとにしか聞こえないんだよ。でも同じだと俺は思うのな。お前の小説は、おんなじだって書いてあった。俺にはそう読めた。みんなクルってて、それでもマトモなんだって、俺はそう読んだんだよね。それでうれしくなったわけ」

深読みですよ、と言った。そんな大したものじゃない。通俗娯楽小説である。

でも、通俗娯楽小説ではあるんだけれど、そういうことは書いた。先輩、ちゃんと読んでくれたんだと思うととてもありがたく感じた。お礼をいうのはこっちだ。

電話の最中、村崎百郎は何度も自分の言葉に激昂した。怒っているのではなく、たしかにクルっているように感じられた。でも、その言葉はピュアで、諂侮も忖度もなにもないものだった。村崎百郎は、本人が言うようにキ●ガイで鬼畜なのだろうけれど、とても理性的で優しい人に感じられた。

「そんなわけでさ、俺、なんだか自分のことが書かれてるような気もしてね。それは勘違いなんだろうけど、そう思えたところがうれしくて、まあお礼の電話なんだよ、これ」

時代は、ポスモダニズム隆盛期。アカデミズムの崇高な知性の持ち主たちがジャーナリズムの下界に降臨しポップカルチュアを語る、という奇矯なふるまいが徐々に浸透していたころのこと。SFジャーナリズムに巣食っていたオタクの私も、そのように降臨する天使たちの群れを仰ぎ見て、ポップカルチャーの下品さにそぐわない高邁さを讃える彼らがどんな踊りを見せるのか、興味津々だった。

ジャーナリズムには、そこで研鑽を積んだジモティー（地元民）のオタクも多い。天使たちの武器では、時としてドロドロとした沼地の全てを切り刻むことはむずかしいことも あった。逆に、天使に憧れ、見習うジモティーも多かったが、天界の技術を上手に使うのはこれまた至難の技であった。

つまり天使とジモティーは、ささっと混ざりあえそうに見えながら、なかなかうまくいかないのが実情だったのだ。

そんな中に登場した村崎さんの文体は、強烈そのものだった。多くのジモティーが理想としながらも上手にこなすのは至難の技とも言える、天使とジモティーの完全ハイブリッドだったのだ。

表層は、とてつもない口汚さが際立つジモティー口調。

が、その切れ味が素晴らしく精巧で、どこかで鍛錬した高邁な知性が垣間見えた。だから、けっして物知らずの阿呆が訳も分からずズバズバ言っているようには見えない。スパッと正鵠を射る、武道系のことばなのだ。

ススメ」というのは、悪いことをしろとか反社会的になれとか倫理に背けとか、そういうことじゃないのだ。
「認めろよ！」ということなんだ。なるほどなあ、と僕は考える。
そして、知らない番号の電話が来るたびにふと思うのだ。
もうこの世にいない村崎先輩の、聞こえるはずのない声が聞こえやしないかと。
「俺のこと、わかる？」
もちろん、わかります。

黒田ゆな（姪）

「伯父　村崎百郎のこと」

私は二〇一〇年四月、伯父が亡くなる数か月前に上京した。伯父との思い出は、そのときから始まる。

私は中野区の江古田に住み、伯父は自転車でたびたび訪ねてきた。黒い服を着て長い髪の毛にマスクをして大量の読まなくなった本を積んでやってきた。伯父には自宅と別に本専用のアパートがあり、そのアパートは、文字通り本があふれていた。その部屋に入った人は、床に積み上がった本の海を注意深く登っていかねばならなかった。子供が、ビニールプールにプラスチックのカラフルなボールを入れた「ボールの海」に埋もれながら遊んでいるが、あんな感じだ。

◆た行

多田遠志（ライター／司会業／「映画秘宝」等に執筆。共著に「村崎百郎の本」）

他人のゴミを漁るアナログハッキングから、下品な想像の羽根を無限に広げていく妄想プロファイリング…唯一無二の村崎ワールドの破壊力は今も健在だ。三角頭巾の心優しき鬼畜がドブの中からすくい上げ見せつける人間の本質、そこに投げかけられる著者の容赦なくまた優しい目線…。

本書で描かれているのは実はどんな過酷な生活にも救済を見出させる「闇のライフハック」術なのかもしれない。真偽がますます定かではなくなってきた今のコロナ禍後の日本で、より現実味を帯びて我々に迫ってくる内容の本だ。

巽孝之（慶應義塾大学教授・アメリカ文学専攻）

村崎百郎という稀有のライターが登場するより以前、私は黒田一郎という精力的な編集者と親しかった。

米国のコーネル大学大学院における三年ほどの留学から帰国したのが１９８７年４月。折しも北米で勃興し自ら加担することになったサイバーパンク運動の息吹を持ち帰ることになったので、帰国早々からおびただしいメディアから声がかかり、原稿を寄稿したりイ

飲んでいるとき、テレビを買ってくれると言って、初めての東京の夕暮れの中、電気屋さんへ一緒に行ったとき……電気屋さんへ向かう途中、細く平らな道の上に茜色が落ちて狭い空が街の上に覗き、むしょうに寂しくなってキリコの絵を思い浮かべていたあの時も、伯父は歩きながら常に、無数の「声」に襲われていたのだろう。

今、私は北海道に住んでいて近所にある広い公園のたくさんの木々のそばを通る。無数の葉がこちらを見ており、いつのまにか自分と葉が重なって、何億もの葉の一枚一枚から自分を見ている。大量のものに同時にいようとすると倒れそうになって、一瞬、自分が宇宙のすみずみまで行き渡ったような感覚に襲われる。伯父は、何重もの声が絶えず流れ込んでくる中を生き抜いたのだろう。

いつでも優しかった。十八歳の北海道から出てきた女の子が、東京での生活を安全に楽しめるように、たくさんの本を持って来てくれ、話を聞かせてくれた。伯父に会いたくなると彼の文章を読み返すが、読むたびに彼の世界は立ち昇り、気を抜くと取り込まれてしまいそうになる。だから私は、現実に伯父の本を読んでいるのか、伯父の声の中で生きているのか、時々わからなくなる。

小谷真理（SF&ファンタジー評論家）

村崎さんの鮮烈なデビューは、今でも覚えている。というか、〈ユリイカ〉に掲載された文章を初めて読んだ時のショックは、到底忘れられるようなものではない。

た。そうした騒音の渦中でいささか疲弊辟易していた、まさにその時期のことである、筆者の心に、黒田氏がいともすんなり入り込んで来たのは。その人なつっこさは、弟キャラとでも呼ぶべきか。ゆえに筆者の方も、黒田氏だけには油断して、ありとあらゆる愚痴をこぼしまくった。その時の愚痴は断じて口外しえない言説的なゴミでしかなく、会うたびごとにああ申し訳ないなぁと思っていたのだが、しかしまさにゴミ漁りこそが黒田転じて村崎氏のデビュー作におけるシグネチャー・スタイルを確立するに至るのだから、おそらく筆者の貢献も存外に大きかったのだろう。

そうした他者の心への巧みな侵入と同義を成すゴミ漁りが生まれながらの精神分析的能力によるものなのかサイコダイビングのようなものなのか、定かにはわからない。アメリカ文学史においては世紀転換期の自然主義時代にアプトン・シンクレアらのごとくスキャンダル暴露を作品の主要モチーフとする通称「ドブさらい文学者」（マックレイカー）が跳梁跋扈していた時期もあるから、そうしたスタンスをも連想させる。だが、さほどやすと分類できないのは、村崎百郎は何と言っても鬼畜電波系だということだ。それはかの小松左京が初期傑作長編にしてサイバーパンクの元祖とも言われる『継ぐのは誰か？』（１９６８年『ＳＦマガジン』連載）で活写した、コンピュータを介在させずとも電脳空間に生理的にアクセスできてしまう南米の「電波人類」（ホモ・エレクトリクス）を彷彿とさせる。そう、平井和正が自身の「ウルフガイ」シリーズの主人公・犬神明を名乗る人物「リアル犬神明」に出会ってしまったのと同様、筆者が一時親密な時間を過ごした黒田

こいつには、天使たちのお遊びのヌルさに、どタマに来たジモティーの気迫がある。だれだろう、これは？

ポモ系界隈の知的鍛錬の香りがあったにもかからず、文体の辛辣さは、筋金入りのジモティーっぽい。

肩書きは「工員」。シベリア云々の経歴は、きっとお遊び（嘘八百）。じゅうぶん知的で余裕があるこいつは、いったい、だれだ？　じきに正体が明かされて、驚きながらも、なるほど、と納得した。

実は、彼がデビューする前、魔術関連の同人サークルの集会で会っていたから。カバラや魔術関連の研究家として著名な秋端さんを師と仰いでいる、と彼は語っていた。

集会では、番兵みたいな格好で、常に秋端さんをガードしていた。

まあ、ヨアン・P・クリアーノの「秘儀」やウンベルト・エーコの『フーコーの振り子』みたいな話が絶えない分野なので、そんな私設警備員みたいな村崎さんの姿を見て、わかってるねぇと、微笑ましく思った。

何より、デモーニッシュな秋端さんに師事しているなら、村崎さんのバックグラウンドは、保証されたも同然じゃないの。

ある集会では、エルヴァイラみたいな森園みるくさんもいらしていて、黒ずくめの村崎さんと二人して、なんだか迫力満点のすごいゴシック・カップルぶりだった。あのスタイルが喪われたのは、壮絶に、哀しい。

萩尾望都（漫画家）

「新しい男」

森園みるくさんとは長い付き合いである。

彼女の描く一歩飛んだ世界観が好きで、作品を愛読している。本人は美人である。服のセンスも一歩飛んでて、それをおしゃれに着こなしている。そういうみるくさんとお会いするのはいつもワクワクする。みるくさんのご主人の村崎百郎さんとは、数回しかお会いしたことがない。ご挨拶したぐらいの距離感なので、ご本人についてはあまり詳しいことが話せない。

とても体躯のいいかたで、飄々と浮世離れした印象を受けた。思い出してみると、柔らかい空気があって、なんだか山寺の和尚さんが似合いそうな方だった。書くものやおっしゃってることは時々過激だけれど、ご自身の世の中に対するエネルギーをうまくいえずに持て余しているように思えた。素直な直球しか投げられない。それが時たま暴投になる。世間はあっと驚くがストライクが取れない。

彼が素直な人であるのは、森園みるくさんという快女と結婚したことでもそう思う。森園みるくさんという個性をちゃんとキャッチするには男として新しい男でなければならない。

新しい男とは何か。それは、パートナーに対して対等でいられることだ。人間には2種類ある。

ンタビューに応じたりといった日々が始まったのだが、そのうちの一つに、今は無きペヨトル工房があった。当初は『WAVE』や『銀星倶楽部』を仕切っていた木村重樹氏との仕事が中心だったのだけれども、やがてその後輩で黒田一郎と名乗る巨漢があとを引き継ぎ、私と小谷真理氏の新婚住居であった三田のマンションを頻繁に訪れるようになった。

しかし、初対面から永劫の別れとなる頃まで足掛け30年間、黒田氏に関しては、その風体に似合わず、一貫して礼儀正しかった印象しかない。現在では鬼畜電波系文化に大きな業績を残したことで記憶されるも、その態度は一貫して紳士的であった。具体的に彼ときちんと仕事をしたのはJ・G・バラードの代表作『クラッシュ』邦訳への解説寄稿だけだったような気がするが、主として翻訳のラインアップなどで相談に乗ったことは、数知れない。

編集者としての黒田氏は、ライター村崎としての獰猛な印象とは裏腹に、実に会話が楽しく、様々な示唆を喜んで受け入れてくれるところに特徴があり、こちらもいつしか心理的防衛機構が外れてしまい、普通の相手にはとても話さないような話題までまくし立てていたような気がする。1990年代初頭といえば、ウィリアム・ギブスンやラリー・マキャフリーが来日して脚光を浴び、まだまだサイバーパンクおよびそこから派生したアヴァン・ポップが北米文学の一つの先端を担い続ける雰囲気があったせいか、そうした流れを肯定するか否定するかで論争が起こり、時には論争とも言えないような罵詈雑言と誹謗中傷合戦が交わされ、出版業界内部に醜悪な足の引っ張り合いを散見することも増え

本を書きながら、お会いした時の印象は穏やかな方だった。知っている人はみんな「いい人だよ」と言っていた。しかしそれは著作とは裏腹に、というのともちょっと違う。うまく言えないが、『鬼畜のススメ』や『電波系』に書かれていることはある意味ほんとうなのだと思う。村崎さんはあまりにも巨大な悪は悪の形をしていないとおっしゃっていた。それも本当なのだと思う。不思議な人だった。たぶん私の理解を超えていた。だけどどこかで、人間の世界というか目に見えない世界というか、世の中のすべての事象を考えたら、絶対にそういう側面はあるよね、そこに反応してしまう人、反応せずにはいられない人、呼ばれてしまう人はいるよね、私にはわからないだけで、とも思えた。

村崎さんは黒魔術にも詳しかった。マンガにも詳しかった。村崎さんの原作で森園みるくさんが漫画を描いた『フィータスー人間未満ー』という本を編集者として作らせていただいたことがある。幼い頃から頭の中に声が聞こえ見えないものが見えるために人間としての感情を実感できなくなった主人公を中心に据えた傑作である。装丁が祖父江慎さんで、本物の蛇の皮が欲しいと言われ、浅草の北側を歩いて探した。蛇皮を売っている店をみつけて、ニシキヘビの皮を一匹丸ごと買った（一匹単位でないと売ってくれなかった）。そのニシキヘビの皮は、今でも私の家のどこかにある。

村崎さんが亡くなって、その蔵書を私が勤める明治大学で引き取らせていただいた。2014年に開館するはずだった明治大学・東京国際マンガミュージアム（仮称）はいまだに足踏み状態を続けているが、村崎さんの蔵書がみなさんの前にお目見えできる日が、あ

一郎、のちの村崎百郎はまさにサイバーパンクＳＦの電脳空間から生まれ落ちた最初で最後のリアル電波人類だったのではあるまいか。

村崎百郎は、たった一人で脱人類だった。彼を失なった現人類が混迷のさなかに突き落とされたのは、自然の摂理というほかない。

都築響一（編集者）

こんな本を書いたひとがいて、出した出版社がいて、買った読者がたくさんいたということが、いまでは信じがたい25年前……闇に向かってイケイケのエネルギーと、無秩序と不道徳をだれも止めなかった時代の空気感が痛々しく眩しい。

◆な行

中原昌也（音楽家／映画評論家／小説家／随筆家／画家／イラストレーター）

亡くなる前も10年くらい会ってなかったので、スッカリ忘れてた。

でも時々、思い出してみたくなる。獣じみた外見に反して、優し過ぎた男のことを。

◆は行

いる。彼ははギリギリのところで踵をかえし、それらを踏みにじる。美学だ！その冠として標榜するのが 鬼畜 なのではなかろうか。そこには従来の 勝利 もなければ 栄誉 も無い。因習、腐敗、瓦解する世界は芥のようである。程度は違えど親も子も、先生だって神様だって皆同じ、糞まみれの大地にへばりついて虱のように滋養を吸うことにきゅうきゅうとしているではないか。だから時には掻き落とされたり洗われたりもする訳だ。地口はさておき、鬼畜とは人間の問題だ。

本来、動植物の世界においては 変態 などというものは無いと言ってよい。只、便宜的に言葉を当て嵌めただけのことであって、日本語においては当字の誤りと言っていいほどだ。字面は病的な意味を強めてしまっている。生き物にとって学問などはどうでもいいのだ。哀しいかな人間は考える動物である。他の仲間たちのようにはゆかない。我々人間がどの様な姿形に生まれつこうが、どの様な考えを持つに至ったとしても、人は人で在りそれ以外ではない。優劣もない。社会と文化が振り分けをするだけだ。振り分けられたヒューマンビーンズは或処理をされ孤立化し知性は皮革のように捻れ汚され辱しめられ、まるで恥垢のように扱われる。文化はそれらを吸い上げているにもかかわらずだ（ＴＶを観ろ、出版を音楽を、なんたるおぞましさよ！）。この恥垢の絞りかすが 鬼畜 なのだ！と言いたくなる。この垢染み鞣された因習は時代を経ても変わり無く、むしろ地層のように堆積し石と成る。

百郎は、人類を煮詰める鍋の中で 刺殺 された！ 運命の綱はあらゆる偶然、不確定要素

威張る人間と威張らない人間だ。そして男の殆どが威張る人間に属する。それは身分制度や家父長制と男尊女卑の日本の長い社会の歴史の結果だ。なので男女平等では日本は世界114位という数字になって現れ、男女恋愛なんてなにさと腐女子はボーイズラブ小説に走るのである。

森園さんは得難い人とパートナーになれたが、相手にとってはもっと良かった。新しい男はその新しさのため、しばしば日本社会で阻害される。森園さんは、相手をまるごと受け止めた。

村崎百郎氏は良い人に巡り合ったのである。

と、私は二人を見てそう思うのであるが、さて、この見解は、合ってるだろうか？　森園さんの、ご主人への愛が伝わってきたので、ご主人の10回忌に、この一文を書かせていただきました。ご冥福をお祈りいたします。森園さんを、お守りください。

藤本由香里（漫画研究家／明治大学国際日本学部教授／元筑摩書房編集者）

「村崎百郎さんとニシキヘビ」

村崎さんが亡くなって10年になる。

あの日、ニュースで事件を知った時の衝撃は忘れられない。あれほどショックなことは人生であまりなかった。

村崎さんには何度かお会いしたことがある。この『鬼畜のススメ』や『電波系』などの

村崎百郎 みっつよっつのエピソード

新型コロナ渦中の3月頃体温37度5分が4日続いたら云々とよく言われていたがその度に村崎さんだったらどうするんだ、あの人は平熱きっと37度5分はあったぞと思ったものだ。

とにかく熱い男だった。

みずから「鬼畜」を名乗る村崎さんの前で口に出してはいけない言葉があった。幻の名盤解放同盟（根本湯浅船橋）はしばしば酒を飲むでもなく珈琲と水で村崎さんと5時間6時間と長話をしたものだが、村崎さんのいないところでよく3人「陰口」を言っていた。「村崎さんて本当は凄く良い人なんだよな」『そうなんだよ、良い人なんだよ！』「良い人だよね！あの人」

とはいえ90年代鬼畜・悪趣味カルチャーの牽引者たる村崎さんの発言、振る舞いは「鬼畜」として堂々たるものだった。

その村崎さんが弱いもの。赤ちゃん。そして、平やん。

平やんは異物として、村崎さんの作り込んだ分をハナから異物だからイベントで一緒になりどうしようもない下品な話をしていてもついつい持ち前の知性というものがその場では馬脚を現すような事になってしまうのだった。また、知的障害の平やんについつい気遣いのフォローをしてしまう「鬼畜」村崎百郎を見た。

エリック・クラプトンをブルースギターの神とあおいでも、白人が努力して身につけたテクニックと感覚で掴んだどす黒いセンスも、生まれつき黒人でしかもクロスロードで悪魔に魂を売ってギターの技を教わったというロバート・ジョンソンを前にしたらクラプトンも敵わない。

同じく生まれつき障害があり、しかも十字路で交通事故に遭いある種完成した平やんには「そこにいる異物」としては分が悪かった。

村崎百郎の鬼畜は努力に支えられていた部分も見逃せない。根にあるのは教師気質。とはいえ激しくとんでもなく業の深い人でもあった。

と、前置きが長くなりすぎたが未発表のエピソードを3本程紹介して復刻『鬼畜のすすめ』コメントとさせて頂きます。



①

と数年のうちには来るはずである。
こういう言い方を許してもらえるのならば、明治大学が拾わせていただいたお宝を、みなさまと共に楽しめる日が一日も早く来ることを心の底から願っている。

◆ま行

宮西計三（画家／ミュージシャン）

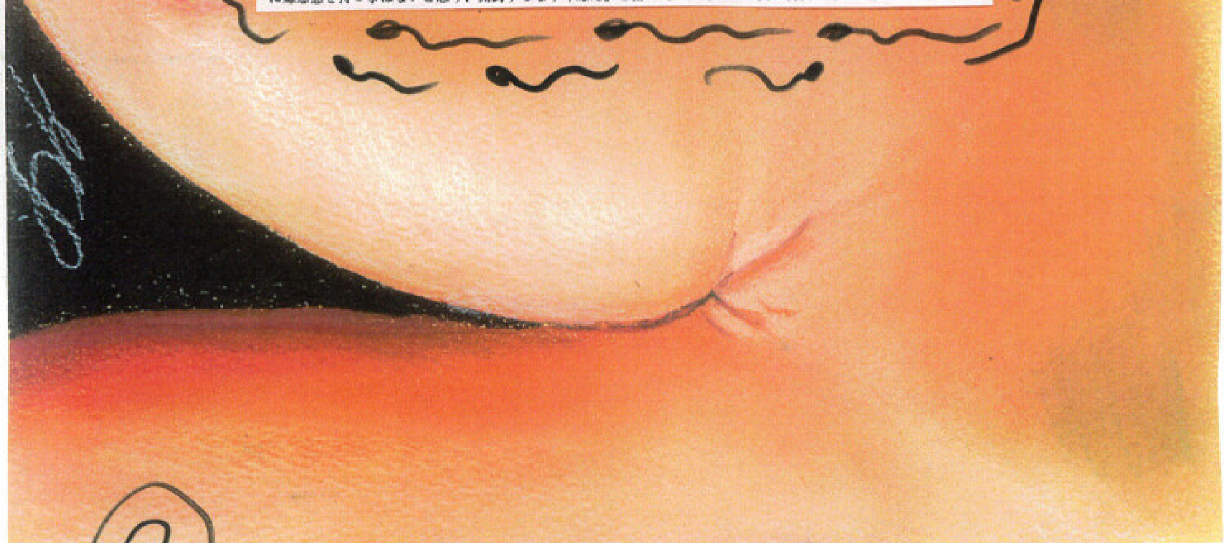
村崎 百郎

世に数多奇人変人あれど、彼は類い稀なる珍物といえるだろう。その奇行変態ぶりは、わたしより語るに相応しい御人にお任せするとして…はて、わたしに何が語り得よう。
そもそも鬼畜とは何ぞや？ 人が奇人なり変人なりと呼ばわれるはそのこだわるところの大にして強きが由し、言ってみればフェティシズムである。しかしその好みたるところファナティックであるが由しの自己顕示。その顕示をもってして快楽とする者たちである。言わば一般的変質者である。しかし百郎の場合はそんな変態とは違う。前者は異常であったとしても趣味嗜好なるものは、いわば美意識であってそれを常識と比較し、その差異を現象として楽しんでいるだけのことなのだ。現今、このような変態快楽は国民誰もが楽しむ娯楽となっている。
しかし後者百郎にあっては娯楽性など感じられない。むしろ犯罪にまで足を突っ込んで



エピソード2

96年、村崎さんの影響で「ゴミ」を俺の周りもやり出した。マディ上原の住むマンションに俺は直接見た事はないのだがマディ曰く「凄くイイ女」が住んでいた。よくマディが「とにかくイイんだよ」とニヤニヤしながら言っていた。その女がある日越して行った。そのマンションはちょっと変わっててドアがガラス戸で管理も緩かったので、女が越した後の部屋へ行ってみたら案の定鍵などかかってなかった。おまけに不用品は段ボールや袋に入れて放置したまま越して行った。下着くらい探せばあるんじゃないかとマディとふたり、女が残した不用品を全てチェックしたが、殆どいらない衣類で肝心のの下着はなかった。チェッとマディと俺は舌打ちした。尚、そのイイ女は結婚のための引越しで相手はある作家だった。舞台はマディのマンションからさる編集プロダクションが事務所とするマンションの一室へとかわる。その日、そこで村崎さんとの共著「電波系」の作業があったのだが俺がそこそこの時間遅刻してしまう。
その時間を村崎さんは制作のKさんと連れだってマンションのゴミ集積所で色々物色して来た収穫物を見せてくれたのだが、「根本さんこんなのが出てきましたよ」と村崎さんが差し出したのは、発売されて間もない「ガロ」で表紙が亀一郎とゴミで帽子を作る寿町の芸術家、宮間英二郎さんとのツーショット、背表紙にはさむくないかい／平やんの顔どアップという多くの人に不快を与えるビジュアルの号だったがその出たばかりの「ガロ」を捨てた部屋の住民を聞いたら何と、マディのマンションにいた女と作家の新婚家庭だった。村崎さんとKさんは定期的にこの夫妻のゴミを漁るというか調査しているという。マディのマンションの部屋の件を話すと村崎さんは「なーんだ、根本さん、その女の下着でも使用済みタンポンでも○○（作家の名）の精子が入ったコンドームでも欲しいものがあったら俺に言って下さい」とニコニコと爽やかな笑顔で言ってくれた。○○が「ガロ」のその号に嫌悪感を持つ事はないと思う、開封するなり「嫌だ」と捨てたのはそのイイ女の新妻の方だろう。



を紡いだ糸で綯われている。こうして仕立てられた経帷子をわたしたちは拒むことが出来ない。この構図を俯瞰してみれば、大鍋をかき回す手があるだろう……車座に火を囲む魔女の群れがあるだろう……火柱に黒々と影が踊るのを見るだろう！
死と浄化の灰がチカチカと漆黒の空に舞い躍り爆ぜるのを……！
シベリア寒気の匂い、オホーツクのトドの声、大地は何処までも果てしない……。
意外にも百郎は類い稀なる美しい児であった。いや、驚くにはあたらない。その美しさは野生の者たちのそれであるからだ。美貌の少年は他を魅了せずにはおかない。だが、自らはそれをけっして赦さない。そういう類いの顔というものがあるものだ。まるで知性も狂気も呑み込んだと言わんばかりの。或種の凶器！　これが百郎の 霊 の姿である。

十回忌
かさねたる十重の襁褓にくるまれた
甘き芳香ぞ
骨は花咲く

◆
根本敬（特殊漫画家／幻の名盤解放同盟／東京キララ社特殊顧問）

データ版「鬼畜のススメ」〜発売までの道のり〜

２０１９年4月のある日のこと。
出版社、データハウスの元編集者で、村崎百郎の元担当の矢崎雅之さんから「社長が村崎さんの『鬼畜のススメ』の版権を森園先生に譲ると言ってます」と連絡がありました。

データハウスの鵜野社長は、静岡県伊東市にある「まぼろし博覧会」「怪しい少年少女博物館」「猫の博物館」のオーナーで、現在「まぼろし博覧会」の人気アイドル「セーラちゃん」でもあります。

私は鵜野社長の計らいで、「まぼろし博覧会」の中に村崎百郎の再現部屋である「村崎百郎館」を作らせてもらう事になり、「村崎百郎館」は２０１４年5月に完成しました。
その経緯は付録冒頭の漫画に描いたので、ここでは割愛させてもらいますが、ともかく社長に版権・・・つまり出版権を譲り受けた事で、私は「鬼畜のススメ」を再出版しよう！と思い付きました。

村崎百郎の処女作単行本で唯一の単独著作でもある「鬼畜のススメ（１９９６年／デー



故郷のムラとマチで

村崎さんが主に小中学時代を過ごした辺境の地S村は同級生の何人かはお父さんがクマに喰い殺されてるようなところでエロ本の一冊も手に入らないから思春期の村崎さんはバスで2時間かけて近郊で最も栄えたI町（20余年前そこも過疎地の指定を受けている）へ歯の治療などの理由で学校休んで1日がかりで往復しその度にエロ本を目指しE書店へ向かいそこでエロ本から文学書まで可能な限り万引きをし手に入れたがとりわけ心が踊るエロ本を大事にかかえて墓場へ足を運んで誰もいないのを見計らい一発目、二発目のセンズリをかくのだった（三、四発目はバスの後部座席で）。わざわざいちいちの話だがそこのE書店の娘さんはおれの知人で村崎さんが万引きしたエロ本でセンズった墓があるのはE書店ご一家の菩提寺でもあった。最早確認のしようもないがいちいちわざわざの法則から正にエロ本を万引きしたE書店一家の墓石の前でかいていたとしても全く不思議はない。

因みにそのI町であるが武田泰淳「ひかりごけ」の主人公である厳冬の羅臼で船員二人の肉を喰らい生き延び事件が明るみに出た後道内を転々としたあの船長が最後に暮した終のすみかが実はあるのであった。万引き或いは墓場に向かう途中で村崎少年と船長がすれ違っていてもこれまた何の不思議もない。尚、I町で「ひかりごけ」の船長がひっそりと晩年を過ごしていた事を俺が突き止めた後間もなく村崎さんにあの事件がふりかかったのでこの件は伝えてないかもしれない。が、あの世があるとしたらきっと船長と会って村崎さんのことだから生き延びるためだったんだから仕方ないと慰労しているかと思う。

日本広いのにね

〈エピソード1〉

よく考えたら今まで漫画をデータ化した事はあっても文字の本をデータ化した事がないので当たり前なのですが・・・。

以前から個人で本を販売出来る Kindle の KDP には興味があったものの、自分１人で販売出来るようにするにはかなり時間がかかってしまう・・・というか販売出来るのか？そう思って不安になった私はさらに調べて、安心で早くて（私的に）最善と思われる方法・・・電子書籍出版の代行会社に任せる事にして、ようやく発売にこぎつける事が出来ました。

当初から色々アドバイスをして下さり、座談会の録音と文字起こしをして下さった矢崎雅之さん、企画のアドバイスをはじめ、煩雑な連絡や文字校正、台割り等の進行全般を担当して下さった編集の小山繭子さん、無理にお願いしたにも関わらず、文字校正を快く引き受けて下さったＳＡＲＵさん、本当に有難うございました。

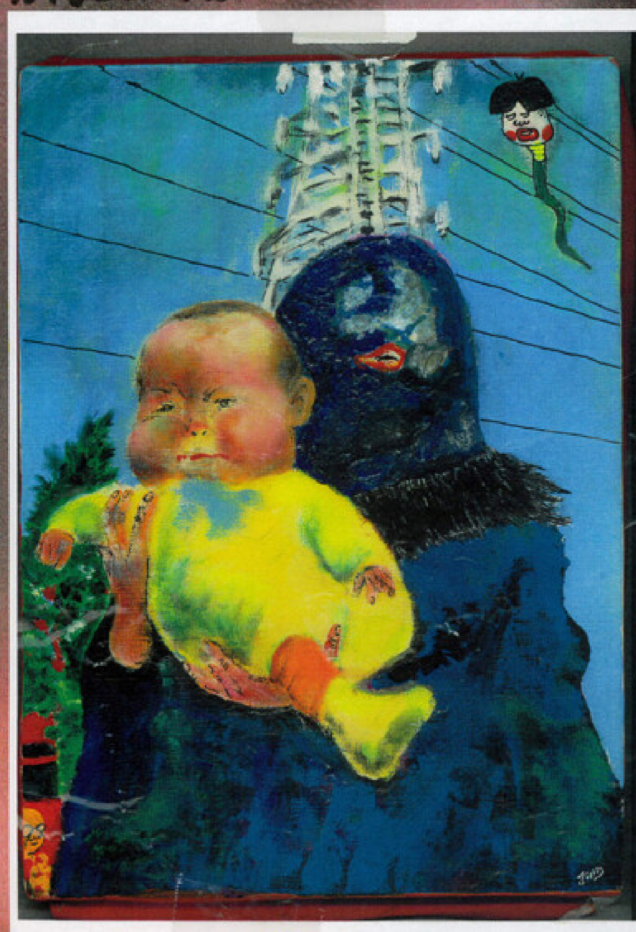
発売出来たのは皆さまのご協力があったからこそで、私１人ではとてもこの企画を進める事は出来なかったと思います。

そして、今回特典の付録のための座談会に協力して下さった皆さま、コメントを下さった皆さまに心から感謝いたします。

痛みはまぼろし情愛会にPart2

エピソード3

3年前。京浜島の鉄工所でゲルニカサイズの絵を描いていた頃の話。カメラマンのMさんが絵の前で10余人の日本人始め各国の男女を集めて全裸写真を撮る機会があった。Mさんはモデル達に次々と指示をだすのだが魔法使いの様に或いは催眠術



をかけるかの様に操り皆を半ばトランス状態にもって行く（かに俺には見えた。実際数人はそうだっただろう）と、Mさんの頭の中で一瞬閃いたらしく「根本さんの絵を何でもいいから下さい」と脇で眺めている俺に言ってきたのだが、見まわしても絵と言える絵はゲルニカサイズの壁と一体化しているそれしか見当たらない。

「何でもいいですから早く」とMさん。見渡せば1枚だけ当時横浜中華街のギャラリーソコソコで開催されていた村崎百郎展に出品した絵（赤ん坊を抱いた村崎さん）のコピーがあったのでやむなくそれを渡した。するとMさんがモデル達にコピーをかざして「この絵を見て感じた事を各々表現して下さい」と言うやバチバチとシャッターを切る。すると、先程から1番「入り込んでいる」感のあるAVにも出ているという小柄な女の子がボロボロと涙を流し出した。撮影終了後その子に何故涙を流したのか尋ねると理由はこうだった。

「頭巾を被ったひとが目に入ると何故か凄く無念な気持ちに囚われ、悲しくて悲しくてたまらない、とにかくそんな気持ちになって涙が止まらなくなってしまったんです」

その子は村崎百郎の事件も存在すら何も知らない。無論俺が何者かもわかってない真っさらな状態でこの撮影に参加していた。

しかし、村崎さんの写真でも黒田一郎の遺影でもなく俺の描いた下手くそな絵、しかもくしゃくしゃなコピーをかざされてそこを通じてあの世からその女の子に入り込むとはさすがだ。俺は若い頃の村崎さんが女のアパートを訪ねその女がほんの10㎝ドアを開けたがために思い切りこじ開けて中に入られその日から約5年間住まわれてしまったという話しを思い出してしまった。

「セーラちゃん」Twitter「セーラちゃん　まぼろし博覧会」で検索
https://twitter.com/maboroshimusume

YouTube「アムールみるくチャンネル」で検索
（「まぼろし博覧会」内「村崎百郎館」の完成工程動画が観られます）
https://www.youtube.com/user/1225MILKMILK

note「note milk 村崎百郎の言霊」で検索（村崎百郎の過去の文章が読めます）
https://note.com/kitiku

「村崎百郎非公式HP」で検索
http://murasaki100.com/index_00.html

「森園みるく公式HP」で検索
http://morizono.babymilk.jp/

★次号予告★

タハウス刊／定価１３００円）」は現在絶版になっていて、（実際の古本屋は分からないのですが）ネットの古本通販では４０００円前後という高い値段が付いていて、紙の本を出版するよりハードルが低そうな電子書籍にして、特典付録を付けて当時と同程度の値段で売ればイイかも！と考えたのです。

奇しくも２０２０年は村崎百郎の10回忌の年でもあり、命日の7月23日を電子書籍の発売日にしよう！

・・・と決めました。

そう決めた当時（２０１９年４月）発売まで一年以上あるし、全然余裕で出来るハズ！・・・と、年内は電子書籍の企画書（主に付録をどうするか）を作ったり、村崎と私の元担当編集者さんたちとの座談会をしたりして、実際に企画の現実化に向けての作業に入ったのは年が明けてしばらくしてからでした。

最初電子出版は簡単だろうと甘く考えていたのですが、それは大きな間違いで、本をスキャンして文字を Word 化する方法や KDP に関しても分からないことだらけで、色々調べていくうちに、いろんな種類の文字と図版のある紙の本を電子書籍（しかも KDP 専用にデータ化）にするのはかなり大変な事だと分かったのです。

情報は以下よりチェックよろしくお願い致します。

森園みるくFB

https://www.facebook.com/milk.morizono

森園みるくTwitter

https://twitter.com/noritakamilkmor

２０２０年　６月12日　森園みるく

※追記　２０２１年１月　その後色々あって KDP 以外の電子配信サイトから再出版する事になりました。

☆参考サイト

「まぼろし博覧会」で検索

http://maboroshi.pandora.nu/

「怪しい少年少女博物館」で検索

http://ayashii.pandora.nu/

「猫の博物館」で検索

http://nekohaku.pandora.nu/

今年秋頃「鬼畜のススメ」第二弾発売予定！

~内容~

村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！②

誕生編~中学生日記からサブカル芸術論まで~

対談

近代という膜が破れる時

京極夏彦＋村崎百郎

☆村崎百郎　未発表　文章＆詩　（中学生~40代）

☆村崎百郎　寄稿文セレクト集

☆村崎百郎　書き下ろし小説

○メリオ

&MORE

乞うご期待！